

イナイレ世界に転生し  
たら女子だったんです  
が

マルメロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生したらイナイレ世界で女の子になってました。

前世の記憶もほぼないし家庭環境も最悪ですが雷門サッカーで頑張ろうと思います。

# 目次

## F F編

プロローグ	1
円堂家の朝	16
尾刈斗中	25
ライトニンググジャベリン	37
フェイ・ルーン	51
V S 帝国学園	62
V S 帝国・決着	74
偽物の衣	85
伝説のイナズマイレブン	98
戦国伊賀島の忍者サッカー	111
未知なる強敵	125

覚醒する遺伝子	137
ペガサスが翔ぶ時	151
孤独な兎	164
焦燥の兎	177
慈愛	188
新たな必殺技を求めて	196
恐るべき神の力	209
聖戦の始まり	220
神の裁き	230
本当の想い	244
神の意地	255
聖戦・決着	266
脅威の侵略者編	

究極奥義	439
強さの価値	426
共鳴現象	414
反撃開始	399
強襲するジェミニストーム	386
総理警護の11人	369
動き始める物語	356
未来人の次は宇宙人	343
正しい歴史	330
豪炎寺夕香の覚悟	316
意外すぎる助っ人	305
時を越える羽花	293
サッカー部が消えた日	277

闇を晴らすように	456
不穏な動き	470
雪原のプリンス	478
エースストライカー	490
イプシロン	501
化身	515
菜花黄名子	527

## FF編

## プロローグ

単刀直入に言おう、転生した。

しかも女として。

前世の俺はどうやら事故にあつて死んだらしいがどうも記憶がはつきりしない。

というか大事なことは何一つとして覚えてない。自分の名前や両親、友人などなどだ。

そのくせ何故か好きだったアニメや漫画、ゲームなどの事はよく覚えている。

神様つてもんがいるなら1発ぶん殴つてやりたい。いやまあなにも覚えてないよりはマシかもだけど。

あ、もうひとつ覚えてる事がある。前世の俺、コミュ障陰キャだった。

とまあそんな俺がお世辞にも転生先がいい環境とは言えなかった。

一応両親は天川財閥という大企業の社長で俺も最初のうちはお金をかけて大事に育

てられた。

しかし俺が1歳の時に両親が交通事故で亡くなり状況が一変した。

まだ子供の俺に会社を継げる訳もなく会社の経営は親戚連中が引き継ぐ事になったのだが、俺が成長して会社を継がれるのを恐れたヤツらによって俺は徹底的に隔離されてしまった。

与えられたのは家の外れにある最低限生活できるような小さな庭付きの小屋と1人の従者だけだった。

幼稚園や学校に行くことも許されずただ小屋で過ごす日々。

唯一の救いは従者の高月玲奈たかつきれながとてつもなく可愛がつてくれたことだ。

勉強や家事などは一通り彼女から教わったし、月に1度ではあるが外出の許可もとつてきてくれた。

だが彼女も忙しいようで1日中俺についてはいらなかった。そこで彼女が俺に渡してくれたのがサッカーボール。自分がいない時はこのボールを自分だと思ってくれと。ぬいぐるみならまだわかるけどボールってどうなの？ と思ったのだがある日たまたまつけたテレビがその答えは教えてくれた。

そこに映っていたのは人間ではありえない身体能力でボールを捌き、強烈な威力のシュートを放つサッカー選手の姿。それを見て俺は確信した。ここは前世の俺も知っ

ているアニメの世界、すなわちイナズマイレブンの世界なんだと。

イナズマイレブンか、あんまり見たことないんだよな。



「本当によろしいのですか？ 羽花様」

大きめの旅行カバンに荷物を詰め荷造りする俺に従者の玲奈が聞いてきた。

「はい！ 私がここに居ても邪魔なだけですから」

俺がそう答えて、カバンに再び視線を落とすとため息をつきながらも玲奈も荷造りを手伝ってくれた。

今日、俺はこの家を出る。現在13歳、中学2年生にして家出をするわけだ。

といっても黙って出ていく訳では無い。親族連中には了承を得ている。俺が今後一切天川財閥と関わらないのならば高校卒業までの生活費を保証してくれるとの約束だ。

「羽花様、学校生活では最初が肝心です。くれぐれも失言のないように」

「わかつてますよ。私ももう13ですからそれくらいはできます」

「私の知り合いの家に住まわせて頂けるように頼んであります。家事の手伝いもしつか

りと、それと勉強も怠らないようにしてください」

「大丈夫です！ 玲奈は心配し過ぎですよ」

玲奈がこれから俺が転入する学校や住まわせてもらう家での注意事項を口うるさく言ってくるものだからつい強く言ってしまった。

彼女が心配するのもわかる。俺はこれまで学校に通った事がないし、外出だって数える程しかしていない。

俺が転生してきたことを知らない彼女にとってそんな世間知らずの少女に対し過保護になるのも当然といえれば当然だ。

「よし、これで最後ですね！」

俺は最後の荷物をカバンに詰め込み立ち上がる。引越しといっても元の荷物が少ないのでカバンひとつで収まってしまった。衣類一式と筆記用具、サッカー用具くらいだ。

「それでは行きましょうか、雷門中へ」

玲奈は車の鍵を手に持ち、笑みを浮かべながら俺にそう言った。





「いっ！が、雷門中…」

車から降り校門の前でそう呟く。

授業中だからか人影は見当たらない。

「それでは私は転入の手続きをしまいいります。羽花様はサッカー部をご覧になられては？」

玲奈が言ってくれたので俺はサッカー部を見に行くことにした。

まだ活動時間ではないので誰もいないだろうけど。

昔アニメを少し齧った程度の曖昧な原作知識を頼りにしばらく歩き、俺はサッカー部の看板が立ててある小さなボロ小屋を見つけた。

俺の顔が若干引き攣るのがわかった。

あまり期待はしていなかったがここまで汚いとは。

「サッカー部に何か用か？」

突然話しかけられ声が出た方を振り返る。

そこにはオレンジ色のバンダナが特徴的なサッカーボールを抱えた少年が立っていた。

間違いない、円堂守だ。

廃部寸前だった雷門を全国優勝まで導いた伝説のキャプテン。

イナズマイレブンをほとんど知らない俺でも覚えてるほどの超重要人物。

「あ、もしかして入部希望か!？」

言うやいなや円堂が目を輝かせて飛びついてきた。

「あ、はい一応」

あまりの勢いに少し仰け反りながらも俺はそう答える

「ホントか!? 俺、キャプテンの円堂守! 君は?」

「あまかわうか天川羽花です」

「天川か、よろしくな! 新しいマネージャーが入ってくれて皆も喜ぶよ!」

円堂の言葉を聞いてハツとする。そうか女子が入部希望って言ったならそう捉えるよな。

「あの、マネージャーじゃなくて選手として入部したいんですけど女子じゃダメですか?」

円堂は一瞬戸惑ったような顔をしたがすぐに笑顔に戻り

「そうなのか？ それなら大歓迎だよ！ サッカーするのに男も女も関係ないからな！」

「皆揃ったら紹介するからさ！ 部室の中で待つてくれよ！」

そう言うのと彼は扉を開け部室の中に案内してくれた。



「あ、天川羽花です！ よろしくお願いしまひゅ！」

：： 噓んだ。元からコミュ障な上に13年間ろくに人と話してのでもないのだが。

部室で待つこと数分、授業を終えた部員達が続々と集まり全員揃ったところで俺は自己紹介をしていた。

：： まあ盛大に噓んだ訳だが。

皆の反応は概ね良好で拍手で歓迎してくれた。

俺がプレイヤー志望だと聞いた時はさすがに驚いていたが。

「天川さん、ポジションはどこなの？」

「キーパー以外ならどこでも大丈夫です」

「校内で見た事ないけど転校生なのか？」

「はい、明日から転入の予定です」

部室内では現在俺への質問コーナーが開かれている。いや、質問攻めと言った方が正しいか。

てかこの人達やばすぎでしょ。初対面の俺にこれだけの質問を浴びせてくるのか。

これが陽キャか、と内心で感心してしまう。

「羽花さんもやっぱりサッカー好きなんですか？」

マネージャーの音無にいたってはもう下の名前です。俺にはとても真似出来ないな……

「好き……というか私にはサッカーしかないから、だからサッカー部に入ろうと思ったんです」

音無の質問に手に抱えたボールを見つめながら答える。

外出できず学校にも行けなかった俺は勉強するかボールを蹴る毎日だった。

「皆、質問はそれくらいにして練習しようぜ！ 天川のプレイも見てみたいしな！」

質問攻めを受けて疲弊している俺を見かねてか、ただサッカーがしたいだけかはわか

らないが円堂の一言で練習を始めることになった。

正直ありがたい、コミュニケーションにこの空間はキツすぎる。

俺の正式入部は明日のため、今日は体験入部という形で練習に参加することになった。

予備のユニフォームをマネージャーから受け取り、更衣室がないためトイレで着替える。

着替え終わりグラウンドに向かうと皆揃っており各々準備を進めていた。

「よおし皆！ 今日気分いい入れてくぞー！」

早速練習が始まった。オフENS側とディフェンス側に別れてのゲーム形式の練習だ。

ちなみに俺はオフENS側。

キックオフから始まり、強面のピンク髪が特徴の染岡を先頭にオフENS陣が攻め上がる。

俺も遅れないようにと後に続く。複数人でのサッカーは初めてなので内心では心臓バクバクだ。

「天川！」

ディフェンス2人にマークにつかれ突破は無理だと判断したのか染岡がバックパス

で俺にボールを移した。

トラップし周りを見渡すが全員にマークがついていてパスが出せない。それならばとボールを蹴り出しドリブルを開始する。

自慢じゃないがドリブルには少し自信がある。

「いかせないでヤンス！」

デイフェンスの栗松が止めに来たので右に行くと思せかけた左のフェイントでそれかわす。

そのままの勢いでゴール前に迫るが今度は壁山と影野の2人に阻まれてしまった。

「ここから先は通さないっス」

「アグレッッシブビート!!」

胸に手を当て鼓動を刻み、そのまま一気に加速し2人を抜き去る。

最終ラインを突破、つまりキーパーと1対1だ。

フリーの状態でシュートを放つ。

「ゴッドハンド!!」

円堂が右手に力を入れる。

すると黄金に輝く巨大な手が現れた。

「……………すげえ」

思わず見とれていているうちに、ゴッドハンドによって行く手を阻まれたボールはみるみる勢いを失い完全に停止した。

「いいシュートだ！ それにドリブルも凄かったぞ！」

キャプテンからの思わぬお褒めの言葉に思わず頬を赤らめる。

こういうところが主人公たる所以なのだろう。

「それじゃもう一本いくぞ!!」



「ふう・・・疲れたあ」

ベンチに腰掛けひと時の休息をとる。

1時間程練習に参加し、今は見学という形でみんなの練習を眺めている。

「これ飲むか？」

そう言ってスポドリを渡してくれたのはツンツンヘアが特徴のこのチームのエースストライカー豪炎寺だ。

「ありがとうございます」

お礼を言いつつ受け取りスポドリを口にする。

やはり運動の後の水分補給は格別だ。

ふと横に座った豪炎寺の足に目をやる。

「足の具合は大丈夫ですか？」

手当をし、包帯を巻いてある左足が目に入った。

「ああ、そこまで大事には至っていない。ただ、次の試合には出られそうもない……」

「次の試合って確か準決勝ですよね？」

「知ってるのか？」

「はい、雷門の試合は全部見てます。帝国学園との練習試合の時から」

帝国との試合を目撃したのは偶然だった。

月に1度の外出の際にたまたま雷門中の前を通りかかり、帝国と雷門の試合を見たのだ。

「あの時のゴッドハンドと円堂君の諦めない姿を見て、雷門でサッカーしたいって思ってたんです」

そんなふうには話していると手続きを終えた玲奈が戻ってきた。

「羽花様、私は先に車に戻ります。羽花様も早めにお戻りください」

そう言い残し玲奈は立ち去った。



「天川ってお嬢様なのか？」

隣の豪炎寺が驚いた様子で聞いてきた。

「あ、はいまあ一応。」

あまり堂々と答えるのも良くないと思ひ少し誤魔化す感じで答えた。  
もつとも今の俺をお嬢様と言つていいのかは疑問だが。

「それじゃあ私は行きます。明日からよろしくお願いします」

「ああ、こちらこそよろしく」

ペこりと頭を下げ、俺は少し早足で玲奈の待つ車に向かった。



「緊張しますか？ 羽花様」

「はは、少しだけしてるかもです」

必要な物の買い物を済ませ、俺たちはとある一軒家の前に来ていた。

玲奈の知り合い、つまりこれから俺がお世話になる家だ。

「やはり私も一緒にご挨拶した方が。」

「大丈夫です！ 子供じゃないんですから一人で行けます！」

まあ本音を言うと一緒に来て欲しいんだが、やはりこの年で保護者同伴は恥ずかしいのだ。

「では私はこれで。円堂様によりしく伝えておいてください」

「はい、玲奈今までありがとうございました」

そう言つて車に乗り込む玲奈を見送る。

車が見えなくなったのを確認し、背後の家の方に振り向く。

一般的な一軒家という感じで表札には円堂と書かれている。

気に止めてなかったがそういうえば偶然にもサッカー部の円堂守と同じ名字だ。

「もしかして…」

一瞬ある可能性が頭によぎるがただの偶然だろうと思ひ直す。

玄関先まで来たところで深呼吸。覚悟を決めてチャイムを押した。

数秒の静寂の後、ガチャという音と共にドアが開き40代くらいの女性が姿を現した。

「はじめまして、今日からお世話になる天川羽花です！ よろしくお願いします！」

よし、今度は嘸まなかったぞと安堵しながら頭を下げる。

「はじめまして、円堂温子です。よろしくね」

そう名乗った女性は優しく微笑み俺を家の中に案内してくれた。

「ちよつと待つててね。今息子を呼ぶから」

「守〜！ 降りてきなさい！」

リビングまで案内してくれたところで温子さんが2階にむかつて叫ぶ。

守つてまさか…

「なんだよ母ちゃん！ でかい声出してさあ」

聞き覚えのある声と共にオレンジ色のバンダナをつけた少年が降りてきた。

「言つたでしょ！ 今日から私の知り合いの子が住むつて！」

「あれっ今日だっけ？ まあいいや。俺、円堂守！ よろしく……」

そこまで言つたところで円堂と俺の目が合う

彼は目をぱちくりとさせている。

「ええええええええええ」

俺と円堂が驚きのあまり声を上げたのはほぼ同時だった。

## 円堂家の朝

カーテン越しに零れた太陽の光でうつすら目を開ける。

知らない天井に違和感を覚えて辺りを見渡すと、いかにも引越したばかりというように物の少ない部屋が目に入った。

そういえば昨日引越してきたんだった…

俺はまだ新しいベッドの上で昨日の出来事を思い出す。

手元の携帯を開くと時間は朝の6時ちょうど、少し早い気もしたが他にやる事もないので2階の自室を出てリビングに向かう。

「おはようございます」

「おはよう、昨日はよく眠れた?」

「はい、おかげさまで」

「よかった。ご飯まで時間あるから先に顔を洗ってきてくれる?」

リビングで朝食の準備をしている温子さんに声をかけ、洗面所へ顔を洗いに行く。円堂はまだ起きていないようだ。

洗面所で顔を洗い、ふと鏡に写った自分を見つめる。

肩より少し伸びた黒髪に透き通るような白い肌、自分で言うのもなんだがかなり美女だと思ふ。

身なりに気を使おうと思つたことはほとんどないのだが、玲奈がうるさく言うので最低限化粧水と乳液くらいは毎日使っている。もはや日課だ。

そんな日課を手早く終え、リビングに戻る。

いつの間にかいたのか円堂の父、広志さんが椅子に座り新聞を読んでいた。

「おはよう羽花ちゃん、早起きなんだね。うちの守にも見習つて欲しいよ」

広志さんが新聞から目を離し2階に視線をむける。どうやら円堂がねぼすけなのはいつもの事らしい。

「羽花ちゃん、悪いんだけど守を起こしてきてくれる？もう朝ご飯できちやうから」

「はい、それくらいお安い御用です」

住まわせてもらうのだからこれくらいは当然、と意気込んで2階にある円堂の部屋へと足を運ぶ。

部屋の前でトントンと2回ほどノックし返答を待つが反応はない。

もう一度ノックを試みるが結果は同じだ。

しょうがないのでドアを開けて部屋へと足を踏み入れる。

意外と綺麗、というのが最初に出た感想だった。物だらけの汚い部屋を想像していたので少し拍子抜けしてしまふ。

部屋の中を見渡すとほとんどがサッカー関連の雑誌やグッズで埋め尽くされていた。

円堂らしい部屋だと思いつつカーテンを開け日差しを入れる。

当の円堂はというとすやすやとまるで赤ん坊のように熟睡している。

「円堂君、起きてくださいー！」

声をかけてみるが起きる様子はない。

「起きてください、朝ご飯ですよー！」

今度は肩をゆすつてみるがやはり起きる気配もない。

これは何をしても起きそうにない。そう思える程に熟睡している。

俺はどうやったら起こせるか思考を巡らせある考えに至った。

さつきよりも強く肩をゆすつてみる。

「円堂君！朝ですよ、サッカーしましょうー！」

「サッカー!!!」

サッカー、という単語に反応したのか円堂が一瞬で飛び起きた。

「あれ？天川、サッカーは？」

まだ少し寝ぼけているのかキョロキョロと頭を振っている。

「とうか危ない：危うく俺の頭に激突するところだった。」

「おはようございませう、円堂君。朝ご飯できたみたいですよ」

「ん？そうかわかった」

まだ半開きの目を擦りながら円堂はとぼとぼ歩いて部屋を出る。

なんともまあ不安になる歩き方だ。フラフラしている。

そんなことを考えていると案の定階段から大きな音と共に彼の悲鳴が聞こえてきたのだった。



「大丈夫ですか？だいぶ激しく落ちてましたけど」

「ああ、これくらい平気だ！鍛えてるからな！」

朝食を食べ終え、俺と円堂は学校にむけて歩いていった。

現在時刻は7時15分、始業時間は8時30分だが円堂はいつも朝練をしているためこの時間になるみたいだ。

朝練するのはいいが自力で起きてもらいたいものだ：

しばらく歩くと前方に大きな鉄塔が見えてきた。

イナズマの飾りが特徴的だが光はまだ灯っていない。

「学校から少し離れるんですね」

「俺がいつも特訓してる場所があるんだ。天川もきつと気に入るぜ！」

長々と続く階段を登り終え、開けた場所に出た。前方に見える木には一般的なものの倍以上はある大きなタイヤが吊るされている。

近くには踏ん張った後だろうか、地面がえぐれている箇所がいくつもあった。

「なんですか？このタイヤ……」

「特訓に使うんだ。こうやってな」

そう言うのと彼はタイヤを掴み前方に押し出した。中に投げ出されたそれは勢い良く加速し襲いかかる。

横目で見てもかなりの迫力だが臆することなく彼は迫り来るタイヤを受け止めた。

「なんとというか……めちゃくちゃですね」

「そうか？でもこれが一番キーパー力がつくんだよ」

傍から見るとぶつ飛んでいるがこの特訓があの見事な必殺技に繋がったのだろう。彼の努力は周りの地面と傷ついたタイヤを見れば容易に想像できた。

「私もやってみていいですか？」



「え、いいけど大丈夫か？」

一応周囲を確認し、タイヤを力いっぱい押し出した。ギシギシと嫌な音を立てながら、タイヤが加速しむかってくる。

「ッ!？」

想像以上の迫力に思わずジャンプし5mほど後退してしまった。間近で見るとすごい迫力だ。

「すごいジャンプ力だな！豪炎寺にも負けてないんじゃないか？」

「ドリブルとジャンプ力には少し自信があるんです。こんな形で見せちゃったのは恥ずかしいですけど」

思わぬ形で披露してしまった自分の特技に頬をかき赤面する。

「そうだ！俺のお気に入り入りの場所を見せてやるよ！」

言い終わる前に彼は広場の奥にある階段を上っていった。

突然の提案に戸惑いつつも俺は彼の後に続いていくのだった。

「どうだ？すげえだろ！」

俺たちは稲妻町の象徴とも言える鉄塔の上నికిていた。  
眼下にはミニチュアサイズの稲妻町が広がっている。

「すごい……いい眺めですね」

「だろ!!ここ、俺のじいちゃんのお気に入り場所だったんだぜ!」

「おじいさん?」

「ああ、俺の部屋に写真があつただろ?あれ、俺のじいちゃんなんだ」

先程彼の部屋に入った時のことを思いだす。そういえば円堂によく似た人物の写真があつたはずだ。

「俺のじいちゃん、すげえサッカー選手だったんだぜ!ほら、これじいちゃんの特訓ノートなんだ!」

円堂がカバンから1冊のノートを取り出した。随分古いもののように所々黄ばんでいる。

「というか……」

「これ、読めるんですか?」

何かの暗号と見まごう程の字の汚さに思わず声が出てしまった。

「ああ、こことか見てくれよ!ゴッドハンドの極意が書いてあるんだぜ!」

彼が指さしたページに目をやるがダメだ。1文字も読めない……

「じいちゃん、俺が生まれる前に死んじやったんだ。だからこのノートは天国からじいちゃんが届けてくれたって思ってる」

「このノートによると、じいちゃんはサッカーで悩んだらここに来てたんだってさ。だから俺も何かあつた時はここに來ることにしてるんだ」

俺たちは鉄塔の景色を眺めながら会話を続けた。

正直凄いと思う。おじいさんという目標を追いかけ、必死に努力する彼が……

「天川はなんでサッカーを始めたんだ？」

唐突な円堂の何気ない質問に言葉が詰まる。

俺がサッカーを始めた理由……。玲奈が手渡してくれた物がたまたまサッカーボールだったから……。転生した先がたまたまサッカーアニメのイナズマイレブンの世界だったから……。どれも薄い。隣の彼に比べると圧倒的に。

「サッカーが好きだからです。単純ですよ」

ゆえに今思いつくもつとも無難な回答を選んだ。少なくとも彼に自慢げに発言できるような理由を俺は持ち合わせていない。

「そっか、やっぱ楽しいよな！サッカーは！」

無邪気笑う彼に俺も微笑みを返す。朝日に照らされた街並みが、今だけは少し眩しく

感じた。

「さて、そろそろ学校に行くか。遅刻したら大変だからな」

彼はハシゴに手をかけると1段ずつ降り始めた。ある程度降りたのを確認し、俺もゆっくりと地面を目指す。

無事降り終えたところで近くにあった時計を確認する。8時10分、ここから学校まではそう遠くないので十分間に合うだろう。

「そっさいえげ」

円堂が何か思い出したように口を開いた。

「天川転入生だから早く行かなくていいのか？」

「あ、」

それから数分後、俺と円堂は息を切らしながら職員室に駆け込むのだった。

## 尾刈斗中

「あ、天川羽花です！よろしくお願いしまひゅー！」

…はい噛みました。転校初日で遅刻からの自己紹介失敗のコンボを決めてしまった…

これで自己紹介1勝2敗、先が思いやられますよまったく…

「ふふ、それでは天川さんはあそこの空いてる席に座ってください」

先生に指定された席に着席する。とうるか今笑ったよね？

「お、隣の席か！よろしくな！」

幸か不幸か俺は円堂と同じクラスになった。そして席も隣だ。運命的な何かを感じますねこれは。

ちなみに同じクラスには豪炎寺や木野もいる。少なくともボツチは回避できそうだ。

そしてホームルームが終わり、俺はそそくさと教室から退散しようとするが即座に他の生徒に囲まれてしまった。

こうなることをあらかじめ予想していたので避難しようとしたのだが、しょうがない

ので甘んじて受け入れよう：質問責めという名の拷問を。

「なあ天川、入部届けまだ出してないよな？出しに行こうぜ！」

神様かあなたは！先程円堂と同じクラスになったのは幸か不幸かと言ったが訂正しよう。100%幸である。

さすがキャプテン、頼りになる！

と、心の中で勝手に一喜一憂しつつ円堂と共に入部届けを出しに行く。

職員室にいた顧問の冬海先生に入部届けを差し出すと少し気だるそうな顔をしたものの受け取ってもらえた。

この顧問はどうにもやる気が感じられない。どっかの誰かとは大違いだ。

まあ俺としてはそっちの方が助かる。これで顧問まで陽キャだったら部活内の空気に耐えられないだろう。

挨拶をし、職員室を出る。今から戻れば授業時間ギリギリなので捕まることはないだろう。



・・・甘かった、天川だけに。

1 限目が終わるや否や女子を中心に俺の席に集まってきた。それはもうたくさん。そして前の学校はどこなのか、好きなものはあるのか、男連中に至っては彼氏はいるのかとこれでもかと質問を浴びせてきた。それも授業が終わる度に毎回だ。

途中円堂と木野がフオローに入ってくれなかつたら完全にお陀仏だった：

そして今は昼休み、教室で俺、円堂、豪炎寺、木野で机をくつつけ弁当を食べている。俺のは当然、円堂と同じ温子さんお手製のだ。

「あー早く練習してー」

「まだ5、6限があるのにこの調子で大丈夫なんですか？」

「円堂君はいつもこんな感じだから…」

「次の授業は体育だ、少しは発散になるだろ」

円堂はずつとこんな調子なのだが日常茶飯事なのか2人は慣れている様子だった。ほんとにサッカーしか頭にないのか：

「そういえば円堂君と羽花ちゃんお弁当箱一緒だね」

「よく見たら中身も同じじゃないか？」

「ん？言つてなかつたか？天川、昨日から俺ん家に住んでんだよ」

「「え!?!」」

なんでサラッと暴露してんのこの人…俺まで一緒に驚いてしまった。

別に隠したかった訳ではないのでいいのだが。

「一緒に住んでるってこと？」

「おう、今日は天川が朝起こしてくれなかったら危なくなつてさ！」

「だから今朝2人揃って遅刻してきたのか……」

寄り道さえしなければ間に合っていたのだが黙っておこう。話がさらにややこしくなってしまう。

というか自分の寝坊話をよく自慢げに話せるよね……

その日の放課後、俺は初めての部活に参加していた。

と言つても練習ではなくミーティングだ。フットボールフロンティア地区予選準決勝の相手が決まったようなのだ。

「準決勝の相手は尾刈斗中に決まりました。なんでも対戦相手の秋葉名戸学園を7―0でくだしたみたいですよ」

「結構な点差だな。相手の秋葉名戸学園ってのはどんなチームなんだ？」

「フットボールフロンティア出場校のうち、最弱のチームと言われているみたいです」

尾刈斗中……以前雷門が練習試合をしたチームだ。その時は雷門が勝利したのだが。



「ま、尾刈斗には勝ってるし大丈夫だろ」

「大量得点といっても相手は最弱のチームでやんすしね」

勝利したことのある相手だけに楽観的な声上がるが油断はできない。

いくら最弱のチーム相手とはいえ7点もの差をつけるのは難しい。それだけ尾刈斗中がパワーアップしているということだ。それに…

「だけど、今回は豪炎寺がいないんだ」

そう、円堂が言ったように今回は豪炎寺が出られない。前回の試合で負った怪我がまだ治っていないからだ。

今の雷門の攻撃の要は間違いなく豪炎寺だ。その彼が不在となると点を取るのはいくらも難しいだろう。

「へ、だったら俺のドラゴンクラッシュで点を取るまでだ。いつまでも豪炎寺に頼ってばかりじゃいられないぜ！」

前回の試合では染岡のシュートは止められていたはず。そのリベンジも兼ねてだろう、やる気満々のようだ。

「染岡の言う通りだ！豪炎寺がいなくなつて勝てるつてことを証明してやろうぜ！」

「「おう!!」」

「よし、早速イナビカリ修練場で特訓だ！」



あれからいつたいどれ程の時間が経つただろう。

実際にはせいぜい2、3時間くらいだとは思いますが、体感には無限とも思える時間が流れた。

自身から発せられる言葉にならない嗚咽はどこからともなく聞こえてくる皆の悲鳴によってかき消さる。

感覚はとうの昔に薄れていた。

何度も心が折れそうになったが足を止めることはしなかった。いや、正確にはできなかった。足を止めてしまったら死が訪れるとわかっていたからだ。

「ビーーーーー」

終わりを告げるブザーが鳴り響き、皆がいつせいに足を止めその場で膝から崩れ落ちるように倒れる。

「はあ、はあ、おわった…」

地面に倒れ伏せ、肩で息をする。

ホントにシヤレにならない。少しでも油断したら余裕で死ぬる。

「大丈夫か？初めてでいきなり無茶すぎたな」

「え、円堂くん：毎日こんな特訓してるんですか？」

「この前夏美がここを見つけてくれて、それから毎日やってるぜ」

さすがの円堂でもきついらしい、息が乱れている。それでも立って歩けるだけの力が残ってるのはさすがだ。

「というかこれ毎日やってるのか…」

「ほら、部屋戻ろうぜ！後は俺たちだけだぞ」

周りを見渡すと皆はずでに部屋に戻ったのか残っているのは俺と円堂だけだった。

立ち上がろうと体を起こそうとしたが足に力が入らずそのまま転んでしまう。

「ヤバい、思った以上に疲弊しているようだ。」

「なんだ立てないのか？しょうがないな、よつと」

「え!?ちよ、円堂くん!？」

いきなり体を抱えられ、そのままおんぶされた。

さすがにこれは恥ずかしい。中学生にもなっておんぶとは…

「立てないんだろ？嫌かもしれないけどちよつと我慢してくれよ」

「い、嫌とかじゃなくて恥ずかしくて…それに私重いですよ?」

「大丈夫だって、部屋に着く前に降ろすからさ。ていうか全然重くないぞ?」

しようがない、どうせ動けないのは事実なのだから潔くおぶられることにした。外に出ると夕日で空は赤く染っていた。

彼が1歩踏み出す度に生じる揺れが、疲れた体には心地よくてついウトウトしてしまう。

次第に瞼が重くなり、俺はそのまま眠りに落ちてしまった。



「…川、天川！」

その声にパチリと目が覚める。

体を起こすと円堂が立っていた。ん？寝ぼけて意識がはつきりしない。

「円堂くん？あれ…ここは？」

「お前の部屋だぞ？それより晩ごはんできたってさ。早く降りてこいよ！」

そう言つて部屋を出ていった円堂をボーッと見送り、辺りを見渡すと確かに俺の部屋だった。

…そうか、円堂におぶられたまま寝ちやつたのか。

家まで運んでもらうなんて申し訳ないことをしてしまった。

あれ？てことはつまり…

…やめておこう、家までずつとおぶられてたなんて想像しただけでだいぶ恥ずかしい。

羞恥心を押し殺し着替えを済ませてリビングに向かう。すでに晚ごはんの準備は整っており、後は食べるだけといった様子だ。

「あの、円堂くん。一応聞くんですけどもしかして私ずつとおんぶしてもらってました？」

「ああ、気持ちよさそうに寝てたから起こすのも悪いと思ってさ。天川の荷物は部屋に置いていたから」

「やっぱりか…おそらくサッカー部の皆にも見られてるだろう。明日どんな顔して行けばいいのかな。」

「白米を口に頬張りながら思考を巡らす。いつそ何食わぬ顔で行った方がいいのだろうか？」

「というか…」

「そんなくだらないことを考えていると温子さんが口を開いた。」

「あなた達まだ苗字で呼びあつてるの？せつかく一緒に住んでるんだから名前と呼んだ

「らしいのに」

「あ、確かにそうか…よし、これからは羽花って呼んでいいか？」

…何が起こった？呼び方ってこんな簡単に変えられるものなの？

「あ、うん。じゃあよろしくお願いします。ま、守くん」

何とか返答するがこれではまるで恋する乙女だ。いくら女子に転生したとはいえ、男として最低限のものは捨てたくない。

「よし、じゃあ食うぞ羽花！尾刈斗戦にむけて明日もイナビカリ修練場で特訓だからな！力を付けておけよ！」

◆◆◆  
そんな俺の葛藤を他所に円堂は目の前の食事を一気に胃袋に掻き込むのであった。

◆◆◆  
尾刈斗中との試合当日、俺たちは試合会場の尾刈斗中学校の前に来ていた。

門から見える校内には何故か霧が立ち込めており、不気味な雰囲気醸し出している。

「な、なんか気味が悪いっすね。ほんとにここで試合するんすか？」

「いかにも、て感じだね」

グラウンドの方に目をやるとすでに尾刈斗の選手達は準備を開始していた。こちらでも遅れないようにアップを開始する。

『フットボールフロンティア地区予選準決勝、雷門中对尾刈斗中！もうまもなく始まるうとしています！』

今回のフォーメーションはこのような形だ

F W 染岡、松野

M F 半田、少林寺、穴戸、風丸

D F 土門、壁山、影野、栗松

G K 円堂

控え 豪炎寺、眼鏡、羽花

普段D Fの風丸が中盤まで上がり、松野が豪炎寺のポジションに入っている。

豪炎寺がいない分、速攻で攻めるために風丸を中盤まで上げる作戦だ。

ちなみに俺はベンチ、後半に流れを変えるための秘密兵器扱いなのだが自分にそこまでの力があるとは思えない。

キックオフは相手からだ。

ひとまずボールを奪って流れを作りたいところだが。

「……」

審判の笛が鳴り響き、試合が始まった。尾刈斗がキャプテン幽谷を中心に速攻で上がってくる。

「君たち雷門に敗北してから、俺たちはゴーストロックに頼らない戦術を考えた！そして、これがその答えだ！」

D Fを残した全員で攻めてくる尾刈斗。前回とは打って変わって攻撃的なスタイルに対応出来ず、裏をつかれ抜かれてしまった。

『尾刈斗いきなりの速攻！雷門対応できない！幽谷、キーパーの円堂と1対1だ！』

「来い！ゴールは割らせない！」

「くらえ、これが俺のマボロシショットだ!!」

ボールに靈魂のようなものが集まり、青白く光りだす。幽谷がそれを蹴りこみ、シュートとなって円堂に襲いかかる。

「止める！熱血パンチ!!」

円堂が気合いを込めた拳でシュートを防ごうとするがボールは何故か円堂の拳に触れることなくそのまま雷門ゴールに突き刺さった。



## ライトニングジャベリン

『ゴオオオルツ！なんだ今のシュートは!?ボールがすり抜けたように見えました！尾刈斗中先制です！』

「なんですか今のシュート…?」

「円堂君があんなに簡単に決められるなんて…」

マネージャー陣から戸惑いの声が上がった。それもそうだが、今まで雷門の守護神として活躍してきた円堂があっさりゴールを決められてしまったのだから。

フィールド上の選手達も何が起こったか理解出来ずに困惑しながら棒立ちしている。

「豪炎寺君、今のつて…」

「…円堂のセーブは完璧だったはずだ。当たっていれば間違いなく止めていた」

「本当にボールが消えたつてことですか?」

「おそらくな、信じられないが…」

雷門ボールで試合再開。しかしいきなりの失点に動揺してか思うように攻められない。それでもなんとかゴール前までボールを繋ぎ、チャンスを作り出した。

「行け！染岡！」

半田から染岡へのラストパスが通った。完全にフリーだ。

「染岡決めろ！」

「ドラゴンクラッシュシュ!!」

染岡渾身のシュート。威力は特訓の成果もあつて上がっている。だが…

「かげつかみ!!」

地面から黒い手が現れてドラゴンクラッシュを迎え撃つ。一瞬の拮抗のシュートの威力は完全に停止した。

「なっ!?!」

『キーパーの鈍!!ドラゴンクラッシュを防ぎました!!』

キーパーがさかさずボールを蹴りあげそのまま前線の幽谷にパスが通る…と思われるが。

「させるか!」

風丸が持ち前のスピードでこれをカット。

そしてそのままドリブルで攻め上がる。

「疾風ダッシュ!!少林!」

「はい!染岡さん!」

風丸から少林、そして染岡へパスが通る。

「よし、今度こそ！ドラゴン…ッ!？」

シュートチャンスと思われたが尾刈斗のデイフェンス2人にボールを弾かれてしまった。

「豪炎寺がない今、君達のシュートで警戒すべきはドラゴンクラッシュ…悪いけど染岡は徹底的にマークさせてもらおうよ」

まずい…確かに豪炎寺がないとファイアトルネード、イナズマ落とし、イナズマ1号といった主力のシュート技が使えない。唯一シュート技を持つ染岡は2人がかりでマークされてしまっている。

「幽谷!」

「さあ、これでトドメだ!」

ゴール前で幽谷にボールが渡ってしまった。そのまま栗松を抜き去り円堂と1対1だ。

『これは!?!1点目と同じ状況だ!!キーパー円堂止められるのか!』

「来い!これ以上ゴールは割らせない!」

「無駄だよ!マボロシショット!」

「ゴッドハンド!!」

黄金に輝く右手、現時点での円堂の最強技がマボロシショットの行く手を阻む。しか

し

「くっ!!そんな!!」

マボロシショットはゴッドハンドをもすり抜けそのまま雷門ゴールに入ってしまった。  
た。

…ん? 待つて…ゴールに入った?

それになんでわざわざ栗松を抜いてからシュートしたんだ? 無敵のシュートならボールを持ったらずにシュートを撃てばいい話だ。もしかして…

『決まっちゃったアア!!ゴッドハンド破れる!!これで点差は2-0!!』

「ビーーーーー」

…ここで前半終了。結局雷門は何も出来ずに前半を終えてしまった…



「クソ!何か打つ手はないのか!?!」

「やめろ染岡!まだ後半がある。そのエネルギーは試合に向けるんだ」

ベンチで水の入ったボトルを叩きつけた染岡を風丸がたしなめる。

だが風丸…いや全員表情は暗い。円堂もグローブをじっと眺めて黙ってしまったてい

る

「とにかく、マボロシショットを打たれたら止めるのは無理だと思った方がいい。複数人で幽谷をマークするんだ」

「でも、点をとれなきや勝てない…やつぱり豪炎寺がいないと」

「それなら、後半から天川さんに出てもらったら？見たところ尾刈斗はこちらを相当研究してるみたいだけど、天川さんのことは知らないはずよ」

「そうだな、上手くいけば流れをこっちに戻せるかもしれない」

凜とした声で夏美が提案し、豪炎寺もそれを肯定した。

「でも、私にそんな力があるとは…」

「それに…マボロシショットの攻略法を見つけたんじゃないか？」

豪炎寺のその言葉に全員が俺の方を凝視する。

「あ、もしかしたらっただけでそんなに自信がある訳じゃないんですけど…」

そこまで期待されても手で視線を遮るようにする。

本当にただの憶測にすぎないからだ。

「よし、後半からは穴戸と羽花を交代だ！マボロシショットは絶対に俺が止めて見せる！だから皆は何がなんでもゴールを奪ってくれ！」

「「おう!!」」



『さあ、後半戦始まります！果たして勝つのは尾刈斗か？雷門か？』

後半、染岡のキックオフで試合再開。だがいきなりボールを奪われてしまった。

「行くぞ！3点目を決めて試合を終わらせる！」

いきなりの速攻。だけどそれは予測できた。

『おっと今大会初出場の天川！いきなり幽谷へのパスをカット!!』

「いぞ！行け羽花！」

ゴール目掛けてドリブルを開始するがすぐにディフェンスに囲まれてしまった。

しかし兎の様に天高く跳躍し、マークを振り切る。そしてそのまま空中でパスを通す。

「染岡君！」

俺の予想外のプレイに不意をつかれて染岡のマークは外れている。チャンスだ。

「今度こそ決めてやる！ドラゴンクラッツツツシュ!!」

「かげつかみ!!」

しかしこのシュートもキーパーに阻まれてしまった。

「ちくしょう！」

「お前にこの技は破れない！幽谷！」

キーパーから前線の幽谷へロングスロー。まずい、皆攻め上がっているのでこのカウンターへは対応できない。

「通さないっス!!」

「通してもらおう！マジック!!」

幽谷が突如出現した布で自身を包むと一瞬のうちに消えてしまった。そして壁山の背後に再び現れた。

「まだだ、壁山を抜き去ってからシュートする。やっぱり…」

「これで終わりだ！マボロシショット!!」

「今度こそ！ゴッドハンド！」

青白く光るボールがゴールへと飛んでいく。

それはまたしても円堂のゴッドハンドをすり抜けゴールへと迫っていく。

だがそのボールがゴールに突き刺さることはなかった。なぜなら

「ハッ!!」

俺がゴール前まで下がってシュートを蹴り返したからだ。だがボールの勢いを完全に殺すことはできずボールはコースを変えポストの横を通り抜けた。

『防いだ！天川、なんとマボロシショットを防ぎました！』

「すっげえ！羽花、どうやって防いだんだ？」

「えっと、なんとなく勘であのショットは1回しかすり抜けられないのかなって思つて。ほら、何回でもすり抜けられるならわざわざディフェンスを突破しなくてもボールを持つたらずくにシユートを撃てばいいじゃないですか。それにゴールネットはすり抜けてませんでしたから。」

「なるほど、そういうことか！」

「それならなんとかなるかもしれないでやんスね！」

尾刈斗のコーナーキックで試合再開。幽谷へボールが渡る。

「さっきのはまぐれだ！今度こそ、マボロシショット!!」

「ゴッドハンド!!」

ボールはゴッドハンドをすり抜ける。しかし円堂はその瞬間身を翻して

「熱血パンチ!!」

アツパーの要領でシユートを弾いてみせた。

『止めた！円堂、マボロシショットを止めました！』

「さすが円堂だ！」

「すごいスキャプテン！」



「へへ、羽花のおかげだ。よし、反撃行くぞ！」

円堂がマボロシショットを止めたことでチームの士気が上がる。

反対に尾刈斗はマボロシショットを止められたことで動揺を隠せないでいる。チャンスだ。

「守君！」

「おう！」

円堂からのパスを受け取り前進する。デイフェンスの2人がボールを奪いに来るが「アグレッシブビート!!」

大柄なデイフェンス2人を吹っ飛ばす。今度は顔色の悪い小柄なデイフェンダーが立ち塞がるがそれをヒールリフトでボールを跳ねあげ躲す。

「染岡く…!?!」

パスをしようとするがすかさずコースを塞がれた。染岡だけじゃない、全てのコースが塞がれている。

どうする？撃つか？いや、ドラゴンクラッシュでも破れなかった技を俺が敗れるわけがない。止められるのが関の山だ。どうしたら…

と、その瞬間背後から声が聞こえた。

「羽花、行くぞ!!」

「ええ!？」

『なんと、キーパーの円堂!ここまで上がっていた!』

「ど、どうすれば?」

「とにかくシュートだ!俺を信じてくれ!」

く、やぶれかぶれだ。

ボールを真上に蹴りあげそれと同時に天高く跳躍。オーバーヘッドで蹴り落とすとボールがイナズマを纏い激しく回転する。それを円堂と共にツインシュート。イナズマを纏った槍と化したボールは勢い良く尾刈斗ゴールへと突き進む。

「いっつけえええ!!」

「かげつかみ!!」

鉈が出現させた影の手が槍とぶつかり合う。だが一瞬の拮抗もなく槍が突き破り、そのまま鉈ごとゴールへねじ込んだ。

『ゴオオオオオオルツツ!!円堂と天川の連携シュートが炸裂!!雷門が1点を返しました!!』

「イナズマを纏い電光石火で突き進む槍…ライトニングジャベリンと命名させていただきます!」

眼鏡が勝手に名前をつけてるがまあいいか…

「というか咄嗟に撃ったがよく決まったものだ。」

「やったな羽花！」

「うわ、守君重いですよ！」

喜びのあまり興奮したかのように抱きついてくる円堂。マジで重いからどいて欲しいのだが…

「やったな2人共！」

「すごい必殺技でした！」

いつの間にか皆集まって喜びあっている。まあこういうのも悪くないかな…

「よし皆、ここから一気に逆転だ!!」

「「おう!!」」

『1点を返して勢いづいた雷門！怒涛の反撃だ！』

「アグレッッシブビート!!風丸君！」

「疾風ダツシュ!!染岡、決めろ！」

「ドラゴンクラッシュ!!」

力任せではなくゴールの隅を狙ったコントロール重視のシュート。不意をつかれた鈍は反応するもののおと一步届かなかった。

『ゴオオオオオール!!ドラゴンクラッシュが決まった！雷門同点です！』

「く、2度も負けてたまるか！勝つのは俺たちだ！」

残り時間が少ない中必死に上がってくる尾刈斗。凄まじい気迫だ。

「幽谷！」

「パスは通させないっス！」

彼へのパスを警戒してマークする壁山と影野。しかしボールは幽谷の頭上を大きく越えて逆サイドの月村へ。

「フアントムシュート!!」

「ゴッドハンド!!」

月村が蹴ることによっていくつにも別れたシュートを円堂が金色の右手でがっちりキャッチ。尾刈斗陣営から落胆の声が上がる。

「これが最後のチャンスだ！全員上がれ！」

前線にボールを蹴り上げ自らも攻め上がる円堂。後半アディショナルタイム、正真正銘ラストスパートだ。

「天川！上がれ！」

半田からのパスを受け、ゴール目指して駆け上がる。しかし尾刈斗も負けじと必死に守ってくる。

「染岡君！」

ゴール前の染岡にパス。そのままシュート体勢だ。

「ドラゴンクラッシュ!!」

「入れさせない! かげつか!?!」

しかしこのシュートはゴールに向かうことなく誰もいないところへと進路を変えた。

『なんと、染岡の放ったシュートはゴールを大きく外れ…ああ!?!そこに円堂と天川が駆

け込んでいる!』

「行くぞ、羽花!!」

「はい!!」

染岡からのパスをダイレクトで天にあげ撃ち落とす。そしてそのままツインシュート。

「ライトニングジャベリン!!」

「な!?! かげつかみツツうわあああああ」

『ゴオオオオオオオール!! ライトニングジャベリンが決まった!! 雷門逆転です!! そしてここで試合終了のホイッスル!! 勝ったのは雷門だ!!』

「やった! 勝ったぞおお!!」

みんなが円堂に駆け寄っていく。ベンチではマネージャーが手を取り合って喜んでいる。豪炎寺はほっと胸を撫で下ろしているようだ。

「ありがとう！勝てたのは羽花のおかげだ！」

「え？いや私はそんな大したことは…」

「何言ってるんだ、お前がああのシュートの秘密を暴かなきゃ勝てなかったろ。それに見事なシュートだった！俺のドラゴンクラッシュも負けてられないぜ！」

「よし皆、羽花を胴上げだ！」

「え？ちよつとま…うわあああああ!?」

その瞬間、俺の体は宙を舞った。

試合の結果は3-2。こうして、俺の雷門での初試合は無事勝利で終わったのだ。た。

## フエイ・ルーン

「冬海先生！あなたのそのような教師は学校を去りなさい！これは理事長の言葉と違ってもらって結構です！」

人差し指を突きつけクビを宣告する雷門夏未。

その相手は雷門中サッカー部顧問の冬海。あろうことか遠征で使用するバスに細工をしていたのだ。

なんと彼は帝国学園のスパイで雷門を帝国との決勝戦に出場させないように命令されていた。

やる気のない人だとは思っていたがここまでクズだったとは…

「クビですか、そりゃあいい。いい加減こんなどこで教師をやるのも飽きてきたところですよ。」

悪びれる様子もなく言い放つ冬海。そして直後、とんでもないことを口にする。

「しかしこの雷門中に入り込んだ帝国のスパイが私だけとは思わないことだ。ねえ？…土門くん？」

そう言い残し冬海は立ち去って行く。

そして今度は土門に皆の視線が集中する。

とんだ置き土産を残していつてくれたものだ。

「円堂…皆…冬海の言う通りだよ、ごめん…！」

「おい待てよ土門！」

空気に耐えきれなくなり走り去ってしまう土門。その後を円堂と秋が追いかける。大人数で行つても逆効果だろうとここは2人に任せることになった。



その後、円堂達に連れ戻された土門が経緯の説明と謝罪をしてくれた。土門は雷門の情報を帝国に流していただけで直接的な被害は出ていないこと、夏美に冬海のことを密告していたこと、なにより円堂の言葉により彼は正式に雷門イレブンに迎えられた。

ただしここで新たな問題が発生する。

「あの、ちよつといいですか？」

「どうした、羽花？」

「フットボールフロンティアの大会規約書によると、監督のいないチームは試合に参加できないみたいですよ」



そこまで言うとは皆固まってしまった。数秒の静寂の後、部室内に叫び声が響いた。

「「えええええっ!?!」」

「おい夏美、知ってたか?」

「と、当然よ!だからあなた達はすぐに代わりの監督を探しなさい!これは理事長の言葉と思ってもらってかまわないわ!」

顔を真っ赤にして無茶なことを言い出す夏美。

「こうなったら早く新監督を探すんだ!こんなことでフットボールフロンティアを諦めてたまるか!」

「でも帝国と戦うためにはサッカーに詳しい人じゃないと…」

「円堂、雷々軒の親父はどうだ?秘伝書のことでも知っていた。ということは」

「それだよ豪炎寺!皆今すぐ頼みに行こうぜ!」

意気揚々と雷々軒に向かう円堂。そう簡単にいくとは思えないが今はそれしか手はない。

「帰れ!仕事の邪魔だ!」

案の定断られてしまった。それもそうだ、いきなり中学生の団体がやってきて監督を

やってくれと頼んでも断るに決まってる。

「そこをなんとか！おじさん、じいちゃん知り合いなんですよ？秘伝書のことも知ってた。サッカー、詳しいんじゃないんですか？」

「前にも言ったはずだ。イナズマイレブンは災いをもたらすと。恐ろしいことになるぞ」

「でも俺たちここまで来たんだ！引き下がるなんてできない！」

円堂の目をじっと見つめる店主。そしてメニュー表を叩きつけた。

「注文しないなら帰れ！」

「だったらラーメン一丁！」

「あいよ」

慣れた手つきでラーメンを作り始める店主。ふと横の円堂を見るとポケットを探ってみる顔が青ざめている。

「サイフ…：部室の中だ」

「大丈夫だよ！カギはちゃんと閉めて来たから！」

…絶対そこじゃないと思う。

「あ、私サイフ持ってますよ。立て替えておきましょうか？」

「助かるぜ羽花!…あ、俺今300円しか小遣いなかった…」

「金を払わないやつは出てけ!!?」

結局俺以外追い出されてしまった。

とうかかなんで俺が食べることになってるの?

「あのキーパーのボウズ、ゴッドハンドを使えるぞ」

端の席に座っていた男性がふと口を開いた。

「お詳しいんですね」

「なに、雷門の試合は欠かさずチェックしてるだけさ。嬢ちゃんも前回の尾刈斗戦、見事な活躍だったな」

不意に褒められ思わず赤面して俯く。知らない人に褒められるのはなんとも変な感じだ。

「ほらよ、ラーメンお待ち」

「…いただきます」

目の前に置かれたラーメンを一口すすする。転生してから初めてラーメンを食べたのもあるがすごく美味しい。

「…お前は俺を勧誘しないのか?」

「嫌がつてる人を無理やり説得する趣味はありませんから」

「アイツらの目は本気だった。本気でサッカーに情熱を注いでいる。だが、お前からはそれを感じない。お前はなんのためにサッカーをしている?」

店主からの問いかけに俺は一瞬手を止めるもすぐに麵をすすりだす。

食べ終えると同時にお金を置いて席を立つ。

「ご馳走様でした。美味しかったです」

一言言つて戸に手をかける。

「うちのキャプテンの必殺技、ゴッドハンドの他にもありますよ。諦めの悪さです」

ニコツと笑い急いで店を出た。



沈みゆく夕日を背に俺はボールを蹴り続けた。

現在時刻は18時、本来ならば帰らなければならぬが今日はそんな気分になれなかった。

円堂には持っていた携帯で自主練をするから遅くなると連絡してあるので大丈夫だろう。

決定力を上げるためにシュート練習をしたいと言ったら俺も付き合うぜと言つてき

だが今日は一人で練習したいと伝えると渋々了承してくれた。

河川敷にあるサッカーコート内のゴールには俺が蹴ったボールが数個入ったままになっっている。

(なんでこんなにイライラしているんだろう)

決定力を上げたいというのは言い訳で本当はこのイライラをボールにぶつけているだけだ。

さっきの店主の言葉が頭の中にこびりついて離れない。

「お前はなんのためにサッカーをしている?」

…そんなのわからない。ただサッカーをするしかなかった。

「お前は玉蹴りに興じていればいい。元々不要な人間だ。動き回られるより余程マシだろう」

俺を引き取った親戚連中の言葉を思い出す。

「不要な人間」

…やめろ

「お前も両親と一緒に死ねばよかった。そうすれば簡単に会社を手に入れることが出来たのに」

…そんなのわかってる。言われなくても。

「早く死んでくれないかしら？この役立たず」

「やめろ!!」

怒号と共にシュートを放つがゴールを大きく外れあらぬ方向に飛んでしまった。

何やってるんだろう…あんな過去早く忘れたいのに…

「このボール、君のだろ？」

ふと話しかけられ声が出た方向を見る。

そこには緑色の髪をツインテールのようにした少年？が立っていた。脇にはさつき俺が蹴ったボールを抱えている。

「はい、ボールは大切にしないとダメだよ？」

「ありがとうございます」

少年からボールを受け取る。外国の人だろうか？見慣れない服装をしている。

「僕はフェイ。フェイ・ルーン、よろしく」

ニコツと陽気に笑う少年。突然の自己紹介に戸惑ったが俺も言葉を返す。

「あ、私は天川…」

「知ってる。天川羽花だろ？君のプレイは見させてもらったよ」

そう言う少年…フェイは近くにあったボールを足に乗せリフティングを始めた。

「フェイさん、尾刈斗中との試合見ててくれたんですか？」

「フェイでいいよ。雷門の試合に興味があつてさ。この前初めて見たけどいいね！サツカーへの熱さを感じたよ」

そこまで言うとりフティングをやめて、ボールを手に持ち彼は続けた。

「ねえ、僕と1対1で勝負しようよ。君がオフセンスで僕がディフェンス。シュートを決めたら君の勝ち。決められる前にボールを奪ったら僕の勝ちだ」

「君はドリブルが得意なんだろ？と微笑み問いかけるフェイ。だが今はとてもそんな気にはなれない。

「ごめんなさい。今はそんな気分じゃないんです」

「1回だけでいいからさ、ね！」

「…わかりました。1回だけなら」

フェイの気迫に押され渋々了承する。こうなったら早く終わらせよう。

「よし、いつでもいいよ」

フェイが位置についたのを確認してドリブルを始める。そのままフェイに接近し

「アグレッシブ…ツツツ！」

必殺技で一気に抜こうとしたがいつの間にか足元のボールが無くなっていた。

ぎよつとし前を向くとフェイの姿もどこにもなかった。

「こっちだよ」

声を聞いて後ろに振り向くとボールを足元に携えたフェイが立っていた。

「…いつのまに」

動きが全く見えなかった。なんてスピードだろう、俺とは明らかにレベルが違う。

「次は僕がオフエンスだ！いいだろ？」

フェイの問いかけにコクリと頷く。さっきのがまぐれではなかったとしたらドリブルも…

向かってくるフェイにこちらからも接近しボールを奪おうとする。しかしその瞬間、フェイは天に向かつて高く高く跳躍し、俺の頭上を飛び越えた。

そのまま着地した彼は再度ボールと共に2回、3回と跳躍。最後に満月を背景にオーバーヘッドキック。

「バウンサーラビット!!」

地面に叩きつけられたボールはものすごい速度とバウンドでゴールに突き刺さった。

「ふう、やっぱりゴールを決めると楽しいね！」

「…完敗だ。まさかここまで圧倒的にやられるとは。」

「フェイ、あなたはいつたい…」

「僕は明日もここにいる、またサッカーしようね！」



何者なんですか？と聞く前にフエイは去って行ってしまった。  
俺はその背中をただぼーっと眺めることしかできなかった。

## V S 帝国学園

「皆、新監督だ！」

「響木正剛だ。よろしく頼む」

フエイと出会った次の日の放課後、円堂が新監督を連れてきた。雷々軒の店主、響さんだ。

練習にいないと思ったたら昨日の今日でまた勧誘してたのか…それで成功しちゃうのが恐ろしいところだが。

「決勝戦は目前だ！お前ら全員鍛えてやる！」

「「おう!!」」

そうしてイナビカリ修練場に向かう俺たち。すでに何回もあそこで練習してるが未だに慣れない。生命の危機を感じることは少なくなつたが毎回ヘトヘトになってしま

う。  
さて、今回は無事に出てこられるのやら…



日も完全に沈み、辺りを照らすのは街灯の明かりのみとなった。

フェイは近くに設置してある時計に目をやる。現在時刻は21時、中学生ならばとつくに帰らなければならぬ時間だ。

直後、鈍い音と共に河川敷のグラウンドに砂煙が巻き起こる。そこにはボロボロで倒れ伏す羽花の姿があった。

「羽花、今日はこの辺にしておこう。」

「でももう少し…もう少しでなにか掴めそうなんです…」

彼女が練習しているのはフェイの必殺技、バウンサーラビット。すでに100回は挑戦しているが1度も成功していない。

オマケに技の性質上、失敗すると高所から落下して全身を強打してしまう為体への負担は相当なものだ。

ただ、挑戦する度に確かに精度は上がっている。さっきの1回もだいぶ成功に近づいているはずだ。

この短時間でここまで、と驚くと共に関心する。

フェイ自身もここまで早く形にはならなかった。いくらお手本がいるとはいえ、この速度は驚異的だ。

尾狩斗戦でも、円堂との連携技を一発で成功させていたことを思い出す。

「バウンサーラビット!!」

ボールと共に何度も跳躍する羽花、そして最高地点に到達すると月を背景にオーバーヘッドキック。勢いよく地面に叩きつけられたボールは何度もバウンドを繰り返してゴールに突き刺さった。

「できた…フェイ、どうですか?」

「ああ、完璧だよ。まさかこんなにもすぐに成功させるなんて…」

その言葉を聞き地面に崩れる羽花。

彼女に特訓して欲しいと言われ、特訓を始めてまだ3時間だ。それなのにも関わらず、もう成功させてしまった。凄まじい才能だ。

無論、フェイが放つバウンサーラビットと比べると威力はかなり落ちるが、それでも十分通用するだろう。

(羽花、君はやっぱり…)



帝国学園との試合当日、俺たちは各々着替えを終え、アップに取り掛かっていた。皆気合い十分といった感じだ。

ただ円堂だけはどこか浮かない顔をしている。

一番楽しみにしていると思っていたので意外だった。

他のメンバーは緊張こそしているもの的大丈夫そうだ。穴戸に至っては壁山にイタズラなんかしている。呑気なものだ。

穴戸のくすぐりに耐えきれなかった壁山が真上にボールを蹴りあげてしまった。するとガシヤンと音が聞こえ、天井から穴戸の近くになにか落ちてきた。

「……これ、ボルトじゃないか!」

「危ねえな、穴戸に当たってたらどうすんだ。帝国はちゃんと整備してるのか?」  
悪態をつきながらも穴戸を起こす染岡。

その横で円堂がボルトを拾い上げる。

「なんでこんなものが……」

審判に促され、両チームが整列した。

すると帝国のキャプテン、鬼道が円堂になにやら耳打ちをしているのが見えた。

円堂は一瞬驚いたような顔をしたがすぐに力強く頷いた。そしてポジションに着く前に俺たちに声をかけた。

「ホイッスルが鳴ったらすぐにセンターサークルから離れてくれ」

「な!? それじゃみすみす敵にチャンスをやるといふもんじゃないやねえか!」

「ああ、だけど俺は鬼道を信じる。だから頼む!」

「ち、わかったよ。お前がそこまで言うなら」

反発した染岡だったが渋々了承した。それを皮切りに全員が納得したところでポジションにつく。

センターサークルから離れる…意図はわからないが円堂が言うならきつと意味があるのだろう。

F W 豪炎寺、染岡

M F 少林寺、松野、羽花、半田

D F 栗松、壁山、土門、風丸

G K 円堂

控え 眼鏡、影野、穴戸

今日のポジションはこんな感じだ。

「ピーーーーー」

試合開始のホイッスルが鳴った。

俺たちは全員言われた通りにセンターサークルから離れる。

すると轟音と共に巨大な鉄骨がセンターサークルに落ちてきた。

しかもそれに続いて何本もだ。当たっていれば重症になるのはもちろん、最悪死人が出ていただろう。

驚きのあまり動くことができない両チームの選手達。そんな中唯一動いたのは、鬼道。彼は鉄骨が落下したのを見るとすぐにフィールドの外に出ていつてしまった。その後を帝国の選手数名と円堂、響監督が追いかける。

…というかほんとにびっくりした。思わず腰が抜けてしまいその場に座り込む。

帝国の監督、影山のやり方は冬海の一件である程度理解していたつもりだったがまさかここまでやるとは思わなかった。

「大丈夫か？ それにしてもすごかったな」

「ふえっ？」

「お前、あの鉄骨が降ってきた瞬間すごい勢いでこっちに飛んできたんだぞ」

座り込んでいる俺を見かねて手を差し伸べてくれた風丸の言葉で周りを見る。

俺が今いるところの隣には土門や壁山がいた。

どうやらびっくりしすぎて無意識にディフェンスラインまでジャンプしてしまったらしい。

顔がみるみる赤くなっていくのがわかった。

「むしろよく平然としてられますよね」

「驚きはしたけどな」

数分後、鬼道達が帰ってきた。首謀者である影山は鬼瓦という刑事に連れていかれたらしい。

帝国側は試合を棄権すると申し出たそうだが円堂がこれを拒否。まあこれはチーム全員わかっていたことなのでとやかく言う者はいない。

そしてグラウンドの修復も終わり両チームが再びポジションについた。

今度こそ試合開始だ。

まず仕掛けたのは雷門。

豪炎寺がドリブルで切り込んでいく。帝国のディフェンス2人のスライディングをかわして染岡にパス。

「ドラゴン…!!」

「トルネード!!」

染岡と豪炎寺の連携シュートが放たれた。炎を纏った龍が帝国ゴールに迫る。

しかし帝国のキーパー源田は余裕の表情だ。

「パワーシールド!!」



源田が地面を叩きつけると同時にシールドが発生。ドラゴントルネードが弾かれてしまった。

「パワーシールドには、どんなシユートも通用しない！鬼道！」

源田がボールを大きく蹴り上げ鬼道にパス。

そしてあつという間にマークについた少林寺と松野をかわしてしまった。

そこからボールを高く打ち上げた。

『すごいテクニックだ鬼道有人！そしてゴール前には佐久間、寺門、洞面。これはデスゾーンの体勢か!!』

「いけ!!」

「デスゾーン!!」

空中で回転する3人の中心にあるボールに紫のオーラが込められ、同時にそれを蹴りだした。

紫色のボールは凄まじい勢いでゴールに向かっていく。

「来い！ゴッドハンド!!」

円堂の身体から気が放たれ、それは手の形へと変化する。だけど気のせいだろうか、いつもよりオーラが弱々しい気がする。

ゴッドハンドとデスゾーンがぶつかり合う。最初は拮抗していた両者だが徐々に

ゴッドハンドにヒビが入り、そして完全に砕けてしまった。だが円堂は辛うじてそれを弾く。しかしその先には鬼道がいた、そしてそのままダイレクトシュート。体勢が崩れていた円堂は反応出来ず、そのままゴールに突き刺さった。

『ゴオオオル！円堂が弾いたボールに鬼道が食らいついた！帝国先取点です！』

俺たちは目を見開いていた。点を取られたこともそうだがゴッドハンドが破られた。しかも以前は止められたシュートにだ。

当の本人も何が起きたか理解できていないようだ。呆然としている。

雷門ボールで試合再開。染岡からのパスを受けた俺が帝国ゴールに迫る。

だが帝国の巨漢デیفフェンス、大野に阻まれた。

「行かせるか！アースクエイカー！」

巨体から繰り出される衝撃波をジャンプで大野ごとかわし、そのままかかと落としで染岡にパス。

「ドラゴンクラッシュ！！」

「パワーシールド！！」

染岡のシュート。だがこれも源田に弾かれてしまった。

だがボールの行先にはすでに豪炎寺が走り込んでいる。

「ファイアトルネード！！」

「何度やっても同じだ！パワーシールド!!」

不意をついた2連続シュート。しかしこれも通じなかった。

ボールはタッチラインを割りフィールドの外へ、帝国スローインだ。と、ここで

「天川！豪炎寺！」

豪炎寺と共に響監督に呼ばれた。急いでベンチに向かう。

「敵は豪炎寺と染岡を特に警戒している。マークが集中するだろう。豪炎寺、お前が囮になって天川に繋ぐんだ」

なるほど、確かに現時点では俺に対するマークはそこまで厳しくない。少なくともフォワードの2人よりは動きやすいはずだ。だから豪炎寺を囮にし、空いたスペースを俺が使うというわけか。

辺見のスローインで試合再開。ボールは鬼道に渡り、そして上空に蹴りあげる。さらにそこに寺門が合わせる。

「百裂ショット!!」

両足交互に何度もボールに打ち付け、最後に蹴り落とす寺門。

俺はそれを確認すると前線に走り出す。円堂ならあれくらい止められる。そこからカウンターを狙えば源田からも点を取れるかもしれない。

「熱血パンチ!!」

がしかし予想に反し、円堂が弾き損なった。幸いにもボールはポストに当たり得点にはならなかった。やはりなにかおかしい。いつもの円堂なら止められていたはずだ。

鬼道のコーナーキック、それに佐久間がヘディングで合わせる。だがこれは円堂の正面だ；が、キャッチし損ねて前に落としてしまった。風丸が慌ててそれを前線に蹴りあげる。なんとかピンチは凌いだが：

だが今日の円堂はおかしい、いつもならあんなミスを連発するようなことはないのだが。

考えているうちにボールは中盤の松野へそしてさらに前線に蹴りあげる。

「豪炎寺！」

それに反応する豪炎寺。その直前、一瞬俺にアイコンタクト。なるほど、それなら：ファイアトルネードの体勢でボールまで飛び上がる豪炎寺。しかし帝国のマークがついている。すると彼はシュートするのではなくさらに上にボールを蹴りあげる。

『なんと、豪炎寺さらに上空にボールを蹴りあげた！これでは誰も：ああ!?!天川がとつた！なんとという跳躍だ!』

もはや誰も届かない高度まで上がってしまったボール、しかしこれに俺が一気に跳躍し食らいつく。そしてそのままゴール前に着地、帝国もこれはさすがに読めなかったの

かディフェンスはいない。

すかさずボールと共に跳躍し、月を背景にオーバーヘッド。

「バウンサーラビット!!」

「なに?! ツッパワーシールド!!」

これにも反応してきた源田。だが咄嗟に使ったためシールドに込められたパワーが十分ではない。徐々にシールドがひび割れそしてついに完全に突き破った。

『ゴオオオオオオ!! 天川のバウンサーラビットが決まった!! 雷門同点です!』

ふう…とりあえずこれで同点だ。後は円堂がシュートを止めてくれるかどうか。

俺は試合再開に備えるために自分のポジションに戻っていった。

## V S 帝国・決着

…やられた。

得点が表示された電光掲示板を見上げる。視線を戻すと同点に追いついたことを歓喜する雷門イレブンの姿。

その中心には帝国が誇るキングオブゴールキーパー源田からゴールを奪った少女、川羽花がいた。

彼女の身体能力の高さは尾狩斗戦で見せた動きでわかっていった。

ジャンプ力とドリブルだけでなく自分をも上回るだろうと。

しかし、個人での決定力はなかったはずだ。少なくとも尾狩斗戦ではそうだった。単独でのシュートを撃たずにフォワードへパスしていたのが証拠だ。

気をつけるべきは円堂との連携シュートのみ。後はフォワードへのマークを徹底すれば大丈夫だと。

鬼道はそう考えていた。だが、現実は違った。同点という現状がそれを物語っている。

認識を変えなければならぬ…ともすれば豪炎寺や円堂以上にやっかいな存在にな

る可能性がある。

「あの技を使うか…」



『さあ、前半も残り時間はわずか！このまま同点で終わるのか！』

点を取られて警戒を強めたのか、俺へのマークが激しくなっていた。おかげで思うようにパスを受けることができない。

次第に帝国がボールを保持している時間が長くなり、雷門は防戦一方になっている。

帝国のディフェンスからフォワード、そして鬼道へとボールが繋がっていく。

「いくぞー！これがゴッドハンドを破るために編み出した必殺技！」

鬼道が指笛を吹くと同時に地面から数体のペンギンが出現。彼のシユートと共に前進した。

そしてその先には寺門と佐久間。彼らが同時に鬼道のシユートに蹴りを入れる。

「皇帝ペンギン!!」

「2号!!」

3人がかりで放たれたシユートはペンギンと共に雷門ゴールへ迫る。

「勝負だ、鬼道！ゴッドハンド!!」

円堂が右手を掲げ、ゴッドハンドの構えをとる。

黄金に輝く右手とペンギンの力を得たボールが激突する。しかしペンギン達がゴッドハンドの指に突き刺さり、そのまま押し込んだ。

ついにゴッドハンドが跡形もなく碎けてしまい、円堂ごとゴールにねじ込まれた。

『ゴオオル!!鉄壁を誇るゴッドハンドを打ち破つたのは、帝国の新たな必殺シユートだ!』

これでまた1点差。1点目のような奇襲はもう通じないだろう。そうなるとあの源田から点をとるのはかなり難しくなる。

試合が再開するが、依然帝国のペース。ろくにボールを奪うこともできず完全に翻弄されてしまっている。

「鬼道さん!」

辺見から鬼道へとパスが通る。そしてその横を走り抜ける寺門と佐久間。

「追加点を入れて試合を終わらせる!皇帝ペンギン:ツツツ!」

「だアアアア!!」

ペンギンを呼び出し、再び皇帝ペンギン2号を発動しようとする鬼道。しかしそこに豪炎寺が蹴りを入れる。



双方の蹴りがボールを間に衝突。少しの拮抗の後に豪炎寺が競り勝ち、鬼道は後方へと吹き飛ばされた。

『なんと、フォワードの豪炎寺が皇帝ペンギン2号を阻止！帝国得点ならず！』

そしてここで前半終了を告げるホイッスルが鳴り響いた。

お互いの選手がベンチに戻る中、鬼道は足を痛めたのか右足を引きづっている。

「サンキューー！豪炎寺！」

「……」

円堂が豪炎寺に礼を言うも彼は答えることなく円堂を一瞥し、ベンチへ戻って行った。

「円堂どうしたんだ？」

「影山になにか言われたのか？」

「……いいえ」

ハーフタイム、円堂の不調を感じ取った風丸や響監督が声をかける。

ふとベンチの隅でなにやら考えている木野が目に入る。恐らく円堂の事だろうがどこか様子がおかしい。もしかして…

「木野さん」

「あ、羽花ちゃん…どうしたの？」

木野の横に腰掛け、声をかける。相当考え込んでいたのか反応がワンテンポ遅れていた。下手な詮索はせずに単刀直入に問いかける。

「守君の事、なにか知ってるんじゃないですか？」

驚いた様子で目を見開く木野。どうやら当たりのようだ。

「なんで？」

「人の表情を見て何を考えているのか読むのが得意だけです。大丈夫、誰にも言いませんから」

安心させようと笑顔を作ってみるがどうだろうか？数秒の沈黙の後、木野がゆっくりと口を開いた。

要約すると鬼道と音無は兄妹であり、小さい頃に両親を無くし別々の家に引き取られた。しかし音無と暮らしたい鬼道は父親と約束をしたらしい。3年間フットボールフロンティアで優勝し続ければ音無を引き取ると。その話を円堂は試合前に影山に聞かされていたそうだ。

「なるほど…守君はそのことを気にして」

「うん、自分達が勝てば音無さん達の邪魔をしようと考えてるんだと思う」

そうか、確かに円堂の性格ならそう思っても仕方ないと思う。だが鬼道からしたらそんな勝利は真つ平御免だろう。

だけど、これは2人の問題だ。俺が首を突っ込んでみてもどうにもならない。

フィールドから審判の試合再開を促す声が聞こえた。選手達がそれぞれポジションについていく。

「ありがとうございます。少しスッキリしました」

そう木野に言い残し、俺も自分のポジションへと向かった。

帝国ボールで試合再開、いきなり鬼道がドリブルで攻め上がってくる。

「行かせない！」

彼を止めようと立ち塞がるがヒールリフトで俺の頭上にボールを上げられてしまった。だがそれは想定内だ。

すぐさま飛び上がり頭上にあつたボールを胸トラップ。だが胸にボールが触れた瞬間、音を立てながら弾かれてしまった。

「な…スピーン!?!」

「ふ、さすがにそれくらいは読んでくると思っていたさ」

俺の胸元から離れたボールは鬼道の足元へ。そして彼はボールを大きく蹴り上げる。

「いくぞー！デスゾーン開始」

ボール目掛けて飛び上がる3人、そして回転と共に同時にボールを蹴り出す。

「デスゾーン!!」

放たれたシュートに円堂がゴッドハンドの姿勢をとる。と、その時

「うおおおおおおお!!」

なんと土門がデスゾーンを顔面で受け止めた。弾かれたボールは外へ。そして土門は倒れ伏している。

「土門…なんて無茶を！」

「デスゾーンはこうでもしないと止められない。…円堂、俺は雷門イレブンになれたかな？」

「当たり前だ！お前は俺達の仲間だ！」

そのまま担架で運ばれていく土門。そして交代で影野が入る。

「円堂!!」

「え?ぐわああ!!」

すると突然炎を纏ったシュートが円堂のどてつばらに直撃した。蹴ったのは当然豪炎寺だ。数mぶつ飛ばされた円堂はすぐに起き上がることができない。

「俺のサッカーにかける情熱を全て注ぎ込んだボールだ！フィールドの外で何があったかは関係ない。ホイッスルが鳴ったら、試合に集中しろ！」

そのまま立ち去る豪炎寺。かなりの荒療治だがどうやら円堂には効いたようだ。表情から迷いが消えている。

『帝国のコーナーキックで試合再開！ボールは鬼道から佐久間、そして再び鬼道へ！』  
「ツインブースト!!」

鬼道と佐久間の連携シュートが円堂を襲う。すると円堂は目にも止まらぬ連続パンチをシュートに叩き込んだ。

「まさに…爆裂パンチ！」

「それでこそ円堂だ！」

円堂が弾いたボールが俺の元へ落ちてくる。ジャンプしてそれを空中でトラップし、着地と共にドリブルを開始する。

止めに来た洞面をボールごと回転することかわす。いわゆるマルセイユルーレットでやつだ。

「行かせない！キラースライド!!」

「アグレッッシブビート!!」

成神の必殺技をこちらと同じく必殺技で弾き飛ばす。

残るはキーパー源田のみ。だが彼のパワーシールドをどう破るか…

「羽花…こつちだ！」

振り向くといつの間にか円堂がゴール前まで上がってきた。よし、それならあれが使える。

ボールを大きく蹴り上げ、跳躍し蹴り落とす。そうしてイナズマを纏ったボールを円堂と共にシュート。

「ライトニングジャベリン!!」

「パワーシールド!!」

すぐさまシールドを展開する源田。シュートは弾かれないもののシールドを突き破れないでいた。すると

「ファイアトルネード!!」

普段よりかなり低く回転した豪炎寺が拮抗していたシュートに蹴りを入れた。

「パワーシールドは衝撃波で出来た壁！弱点は薄さだ！遠くからのシュートは跳ね返せても至近距離から押し込めば……ぶち抜ける！」

豪炎寺の言葉通りパワーシールドに徐々に亀裂が入り、そして完全に崩れ去った。

2対2、同点だ。

『さあ残り時間もわずか！お互い譲らない攻防が続く！果たして勝利の女神はどちらに微笑むのか!』

ボールを持った鬼道が穴戸と半田を抜き去った。そしてその前には寺門と佐久間。

「皇帝ペンギン!!」

「2号!!」

ペンギンと共に進むシュート、それに2人が同時に蹴りを合わせる。

「このシュートだけは絶対に止めてみせる!!」

対する円堂もものすごい気迫だ。今までで一番のオーラを感じる。そしてそのオーラから渾身のゴツドハンドが繰り出された。

「ゴツドハンド!!」

しかし徐々に押されていく円堂、すると

「だつたら…これでどうだあ!!」

『なんと円堂！両手でのゴツドハンドだアアア!!』

両手で使用することによりパワーが上がったゴツドハンドと皇帝ペンギン2号のぶつかり合い。あまりのパワーに砂煙が巻き起こる。

そしてそれが晴れると…両手でボールをがっちりキャッチした円堂の姿があった。

「いくぞ、みんな!!」

円堂が前線にボールを蹴り出した自らも攻め上がる。

すぐに俺に対し2人のマークがつくがそれを振り切るようにまだ誰も届かない位置にあるボールまで跳躍し、逆サイドの風丸にパスを出した。

「円堂が止めたこのボールは!!」

「絶対に!!」

「ゴール前まで、繋いでみせる!!」

風丸の疾風ダツシユ、少林寺の竜巻旋風、半田のジグザグスパークと必殺技の連発で帝国を翻弄し、ゴール前の豪炎寺にラストパス。

壁山を踏み台に飛び上がる豪炎寺、イナズマ落とした。だが今までと違うのが『なんと！壁山の背後から円堂が！これはイナズマ1号か!?』

そう、豪炎寺だけでなく円堂も飛び上がりそしてそのままシュート。

「イナズマ1号落とし!!」

今までにない強烈な落雷を纏ったシュートがゴールに降り注ぐ。

「フルパワーシュート!!」

パワーシュートを明らかに超えた量のシュートを展開する源田。しかしイナズマ1号落としには通用しなかった。

「いつけええええ!!」

フルパワーシュートを破り、シュートがゴールに突き刺さった。そしてここで試合終了のホイッスルが鳴り響く。

雷門の全員が頭上に目線を上げる。

得点板には3対2と確かに表示されていた。



## 偽物の衣

全ての始まりはあの事故からだった。

俺と父と母、そして運転手である使用人を乗せた車が信号無視で飛び出してきたトラックと激突した。

車は大破、父と運転手は即死、赤ん坊だった俺を抱いていた母も救急車で搬送中に亡くなったらしい。

そんな中何故か俺だけが全くの無傷だったらしい。普通に考えればありえない事だ。いくら母に抱かれていたとはいえ、トラックと衝突して傷一つないなど。

目撃者によると、トラックと車が衝突した際に緑色の光が辺りを包んだらしいが真偽はわからない。

そうして親戚に引き取られた俺を待っていたのは文字通りの地獄だった。

暴力、暴言は当たり前。食事抜きにされたのも1度や2度ではない。玲奈がいてくれなかったら俺は間違いなく死んでいたと思う。

「お前は不要な人間だ。生かしてもらってるだけありがたく思え」

「なぜお前だけ生き残った。バケモノめ」

「早く死ねばいいのに、役立たず」

不要な人間、役立たたず、死ねばいい、バケモノ

全て本当のことだ。誰も自分を必要となんてしていない。

そんな時、あることがきっかけで前世の記憶が戻った。あれは叔父に殴られた時だったか：記憶が戻ったといってもごく一部、だが俺はそれに縋った。

天川羽花の人生は偽物で、本当は幸せに生きていたはずだと思わせてくれる。

この死にたくなるような人生にも意味を持たせてくれたような気がしたから：

その日から『私』は『俺』になった。



何も聞こえない静かな自室で目を覚ます。

：昔の夢を見ていたようだ。

気分は最悪だったが、何とか起き上がり携帯で時間を確認する。

8時30分、今日は木野達と11時に待ち合わせをしているので十分間に合う時間だ。ちなみに今日の部活は休み、昨日の帝国戦で疲れてるだろうからという監督の配慮

だ。

ベッドから抜け出し身体を伸ばす。

着替えようとクローゼットを開ける。そこにはジャージとユニフォームが入っているだけだった。

そういえば唯一持っている私服は洗濯中だったか：我ながら女子力の欠けらもない。

どうしようかと悩んだが結局ジャージに着替えた。

今日は部の備品の買い出しを手伝うだけなので問題ないだろう。

どうせジャージに着替えるなら少し練習してから行くことにしようか。

俺はそそくさと身支度を整えて、目的地に向かった。



俺が練習を終えて集合場所である商店街の喫茶店に到着したのは待ち合わせ15分前のことだった。既に木野、音無、夏美が集まっている。

「あ、羽花ちゃんこっちだよ！」

俺に気付いた木野が手を振って声をかけてきたので空いている席に座ると全員がこっちをじっと見てきた。

「えっと…なにか？」

「あなた、なんでジャージなの？」

ああ、そういうことか。3人共可愛らしい服で身を包んでいる。そんな中1人だけジャージの俺は浮いてるのだろう。

「もしかして羽花さん、私服持っていないんじゃない？」

「いやいや、さすがにそんなわけ…」

「あはは、実は1着だけ持ってるんですけど洗濯中でして」

頬を掻きながらそう言うのと全員が信じられないような物を見たような顔をして絶句した。

「…予定変更よ。先にあなたの服を買いに行きましょう」

「ふえ？」

「いいですね！私コーディネート得意なんですよ！」

うーん、正直服なんて今持ってるので十分な気がするがしやうがない。どうやら断ることはできないようなので黙ってついていくか。

すると夏美が携帯を取り出し誰かに電話をかけて車を出すように指示した。

「あの…夏美さん？どこに向かうつもりなんですか？」

「シヨツピングモールよ。こんな商店街の服で私が満足すると思つて？」

恐る恐る尋ねると彼女は堂々と答えた。俺が考えてたより本気なようだ。

「シヨツピングモールなんて久しぶりです！」

「私も。楽しみね！」

2人も乗り気なようだ。出費がかさむのは勘弁して欲しいものだが…

数分後、雷門家の自家用車が到着した。

昔ながらの商店街には場違いに感じる黒い高級車だ。

「さあ、乗つてちょうだい」

「こんな高そうな車に乗つてもいいのかな？」

「さ、さあ？」

「おじやましませーす！」

あまりの高級感におどおどしている俺達をよそに音無が楽しそうに乗り込んでしまった。

それに続いてゆつくりと後部座席に乗り込んだ。甘いバラのような香りが車内を漂っている。夏美の趣味だろうか？

「それでは出発いたします。皆様、シートベルトはしっかりと」

運転席の執事さんがそう言うと言わんと車が走り始めた。乗り心地も快適だ。

「そういえば…羽花さん、キャプテンと一緒に住んでるんですね？どこまで進んだんですか？」

「はえ？」

音無の唐突すぎる質問に思わず間拔けな声が出してしまった。というかなんて知ってるんだ…

「あ、もしかしてもうキスくらいはしてます？」

「し、してないです！私と守君はそんな関係じゃないです！というかなんて知って…」

そこまで言っただけでハッとされた。このことを知ってるのはサッカー部では豪炎寺と木野だけだ。無口な豪炎寺が喋るとは思えないし…

隣の木野を見ると目を逸らして窓の外をじっと眺めている。が、額に変な汗をかいているのがバレバレだ。

「木野さん、もしかして…」

「ごめんなさい…！音無さんの勢いに負けちゃって」

観念したのか両手をぱちんと合わせ謝罪してくる木野。別にそこまで怒ってないのでもいいのだが。

「その話、詳しく聞かせてもらえるかしら？」

助手席からの強烈な視線を感じ取り、目を向けると微笑みつつもまるで蛇のように鋭くしつかりとこちらを睨んでいる夏美がいた。というかものすごく怖いんですが…

「あ、えつと雷門さんこれは…」

「ふふ、冗談。知ってたわ。これでも理事長の娘よ。転入手続きの書類くらいチエツクしてるもの」

あの目はマジだったと思うけど…口に出すとどうなるかわかったもんじやないから言わないでおこう。

そんな感じで談笑していると、30分くらいでショッピングモールに到着した。さすが東京なだけあって大きな店舗だ。ファッション系のお店も充実していて、1フロアがまるまるレディースファッションのエリアなようだ。

「あの…さすがに多くないですか？」

入口近くにあった店舗に入るなり、服を選んでくるから待っているよう言われて10分少々。3人が山積みの服を持って戻ってきた。それ前見えてるのかな？

「あら、これでも少ないくらいよ」

「羽花ちゃん可愛いからなんでも似合いそうでつい…」

「ささ、早く試着しましょう！」

音無に腕を引かれやや強引に試着室に連行された。そして次々と差し出される服を

順に試着していく。彼女らが持ってきたのはどれも女の子らしいワンピースやカットソー、ミニスカートなどだ。

「私には可愛すぎる気がするんですけど…」

「そんなことはないですよ！すごく似合ってます！」

「うん！可愛い！」

「あなたはもう少し自分に自信を持ちなさい」

小一時間ほど着せ替え人形にされてようやく試着が終わった。いつの間にか服の山は2つに分かれている。どうやら気に入ったものとそうでないものを選別していたようだ。

「わあ！このコーデすごく可愛いですよ！どうですか？」

今着ているのは白いブラウスにレースがあしらわれた膝丈ほどのスカート。胸元には赤く細いリボンが結ばれている。

「うん、いいわね。店員さん今着ているのどこつちにある服、全部いただけますか？支払いはこのカードでお願いします」

そう言いながら夏美が左手で山積みの服を指さし、もう片方でカードを差し出した。

「え？いや私はこの服だけでいいですけど…：ていうか自分で払いますよ？」

「大丈夫、お父様の許可はさつきとったわ。その代わり、全国大会では絶対に活躍するこ



と。これは理事長の言葉でもあるわ」

そういう問題じゃ…と店員さんが畳んでいる服の山をチラッと見る。これ全部でいくらなんだろうか。高級店じゃないとはいえこれだけの数なら数万円はくだらないと思っただけ…

「帝国戦での活躍のご褒美と思ってもらえばいいわ。今後の活躍への期待も込めてね」  
「そんな…私なんて大したことないですよ。守君や豪炎寺君の方がずっと…」

右手を左右に振って否定する。皇帝ペンギン2号を止めてみせた円堂やパワーシールドを攻略した豪炎寺の方が遥かに活躍していた。俺なんてまだまだだ。

「さあ、次は靴を見に行くわよ。その後はアクセサリーね」

「おー!!」

そう言つて夏美と音無は次の店舗へと向かってしまった。

「羽花ちゃん…大変ね」

「あはは、でも楽しいですよこういうの」

そんな2人の背中を俺と木野は急いで追いかけるのだった。



一通り買い物を終えた帰りの車内、買い物疲れか夏美以外の3人は後部座席でぐっすり眠っている。

その中でも真ん中に座ってる少女：天川羽花を夏美はじつと見つめていた。

羽花が転入する前日、夏美は羽花の従者から彼女の生い立ちを聞いた。

日本でも指折りの大企業、天川財閥の令嬢であること。幼い頃に両親を亡くし、親族に引き取られたこと。その親族から酷い仕打ちを受けていたこと。

そんな生い立ちからか羽花は異常に自己肯定感が低い、と夏美は感じた。

彼女のサッカーの実力は本物だ。それは今までの2試合ではつきりわかってることだった。勉強も編入時の試験で満点近い点数を出しているし、容姿だってそこの男なら一瞬振り向いてしまうほど整っている。

にも関わらず褒めても自分なんてと否定されてしまう。

謙遜しているわけではない、本心からそう思っているようだった。

夏美はそんな羽花に自分を重ねていた。彼女も幼い頃に母を亡くしている。だから羽花の気持ちもわかっているつもりだ。だが決定的に違うのは夏美には父親がおり、愛情をたっぷり注がれて育った。親の愛をまともに受けたことのない羽花とはそこが明

らかに違う。

だからこそ夏美は羽花を助けたいと考えた。理事長代理として、そして何より仲間――友として。

（他人のためににかしたいなんて思ったのは生まれて初めてね…：円堂君のが移ったのかしら…）

クスツと笑い夏美は自身に影響を与えたであろう人物の顔を思い出すのだった。



ガタン、というか揺れで目を覚ます。

まだ眠い目を擦りながら窓の外に目をやると、見慣れた光景が広がっていた。

「さあ、着いたわよ起きて」

いつの間にか円堂家の前に到着していたらしい。服を買ってもらった上に家の前まで送ってくれるなんて至れり尽くせりだ。両隣には既に木野と音無の姿はなかった。どうやら先に降りたらしい。

「ごめんなさい。私寝ちゃってて」

「いいえ。それよりほら、荷物降ろすの手伝ってちょうだい」

手渡された大量の紙袋を抱えて車を降りる。服だけでなく靴やアクセサリーもあるため両手でも持ちきれない程だ。一旦部屋にそれらを置いてから、車の前に戻る。

「今日はありがとうございます。お金はちよつとずつ返すので」

「別にいいわよ。何度も言うようだけど、あなたには期待してるの。試合の結果で返してくれればいいわ。それと…」

そう言うとき夏美はピンクのリボンが結ばれた小さな小包を取り出した。

「これ、私と木野さん、音無さんからのプレゼント。さっきのお店で買っておいたの」  
いつの間に…全然気づかなかつた。「開けてみて」と言われ、リボンを解き中身を取り出す。それは白いうさぎの飾りがついたヘアピンだった。

「あなたに似合うと思って、みんなで選んだの。どうかしら？」

「ありがとうございます。でも、私に似合うかな…」

「はあ、あなたってホントに自分に自信がないのね…もつと堂々としてればいいのに」  
やれやれとため息をこぼす夏美。その時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「あれ？2人でなにやってんだ？」

振り返るとボールを抱えた円堂がいた。全身泥だらけのところを見るに特訓してきた後のようだ。

「あなた、休みだつていうのに特訓してきたの？まったく…相変わらずのサッカー馬鹿

ね」

「へへ、昨日の帝国との試合スゲー熱かったからさ。なんかじつとしてられなくて」  
円堂らしいというかなんというか……まあ俺も今朝練習してたからあんまり人のこと  
言えないんだが。

「それより円堂君？天川さんになにか言うことがあるんじゃないかしら？」

夏美がそう言うのと円堂は俺の方に視線をやる。多分、服のことを褒めろってことなの  
だろうが円堂がそこに気づくかどうか。

「あ、そうか！特訓、羽花も誘えばよかった！ごめん！」

拳を手のひらにポンと置き、自信満々に答えた。

そのあまりに的外れな答えに、俺達は揃ってズッコケるのであった。

## 伝説のイナズマイレブン

「悪いな2人共。手伝ってもらって」

帝国戦から2日、地区大会優勝記念の祝勝会が雷々軒を貸し切って行われた。

「これくらい当然ですよ！な、羽花」

「はい、たくさんご馳走になりましたし」

会もお開きになりみんなが帰宅した後、俺と円堂は片付けを手伝っていた。

その時ガラガラと音をたて、店の引き戸が開いた。

「すみませんねえ、今日はもう……浮島!？」

入ってきたのは放浪者風の男性だった。

「雷門中が帝国学園を倒したって聞いてな、なんだかお前の顔が見たくなつたんだ」

「そうか。こいつがそのサッカー部のキャプテン、円堂守だ」

「円堂……!?まさか大介さんの……」

なんだか響監督と親しそうだ。会話の内容から察するに響監督の元チームメイト、もしくは近しい関係なのだろうか？

「監督、もしかしてこの人」

「ああ、イナズマイレブンの1人だ」

円堂も気づいていたようで響監督に尋ねた。どうやら当たりのようだ。すると円堂が瞳を輝かせて浮島さんに飛びつくように話しかけた。

「俺、じいちゃんとイナズマイレブンの話を知ってからずっと憧れてたんです！伝説のイナズマイレブンにー！」

「…知ってるのか？イナズマイレブンの悲劇は」

「もちろんです。だけどイナズマイレブンが強かったことに変わりはない！あんな事故さえなければもつともつと勝ち続けたはずです！俺達も強くなりたいんです！イナズマイレブンみたいー！」

ものすごい勢いで喋る円堂とは対照的に浮島さんの表情は暗い。長い髪と髭でほとんど見えないがそれでもわかるくらいだ。

「…やつぱり来るんじゃないかなかったな」

ぼつりと静かにつぶやくと浮島さんは店を出ていってしまった。

「え？おじさん、待ってよー！」

「守君!?!片付けがまだ…」

それを追いかけるように円堂も飛び出していってしまった。

「悪いな天川、俺も少し出てくる」

少し考え込んだ後、そう言い残して響監督も出ていってしまった。…いやだから片付けがまだ終わってないんだけどなあ…」

振り向くとそこにはシンクに溜まった大量の皿と食べかすで汚れた机と床。

俺はため息をつくとそれらを1つずつ片付け始めた。



それから1週間程経った日曜日、俺達は雷門中ではなく河川敷のグラウンドにいた。「楽しみだなーみんな、今日は胸を借りる気持ちで行くぞー！」

「おう!!」

今日は元イナズマイレブンのOBとの練習試合。あの時店を飛び出した円堂が浮島さんを説得して決めたらしい。

だからって片付けを放り出して飛び出すのはやめて欲しいものだ。

そして試合が始まった。…のだがOBのプレーは拍子抜けもいところだった。みんな高齢なうえ40年のブランクがあるので仕方ないとは思いますがまずやる気が無かった。

しかしそれを見かねた響監督の一喝で彼らのプレーが変わった。



「天川！」

染岡からのパスを受け取る。だがすぐに囲まれてしまった。さっきまでとは段違いのスピードだ。

「ブレードアタック!!」

ジャンプで飛び越えようした瞬間、衝撃波で弾き飛ばされてしまった。それを繰り出したのはバトラーさん。夏美の執事の人だ。

そしてボールは浮島さんへ、彼はボールを高く蹴り上げると、フォワードの備流田さんと共に落ちてきたボールを天に蹴りこんだ。

「ビルダアア!!」

「おう!!」

ボールを最高点で同時に蹴ると炎を纏った鳥となりゴールへ襲いかかる。円堂は反応こそしたものの届かずにゴールを許してしまった。

「今の…審判さん、タイムお願いします!」

審判に頼み込み、タイムをとった円堂を囲むように集まる。大介さんノートによるとさっきの技は炎の風見鶏というらしい。相変わらず読めないので円堂に翻訳してもらってるが。

「今日はお手本がいるんだ。絶対マスターしようぜ!」

「で、誰がやるの?」

「えっと…この技はスピードがビューン、ジャンプ力がビヨーンか」

「相変わらずの宇宙語ですね…」

字が汚いのは仕方ないにしても語彙力はもうちょっと何とかならなかったのだろうか?

「スピードとジャンプか、陸上部の出番だな」

「ああ、この技は風丸が適任だな」

風丸が名乗りでると全員が納得したように頷いた。スピードで彼に勝てる人はこのチームにはいないだろう。

「あと一人…ジャンプ力といえば羽花だな」

「へ? 私ですか?」

突然の指名に戸惑う。というか俺より豪炎寺の方が適任だと思っただけれど。

「いいんじゃないか? ジャンプ力で天川に適う奴はいないだろ」

「…わかりました、やってみます」

豪炎寺の援護射撃をくらい、しようがないなと了承した。

そして試合再開、何度も試してみるがなかなかタイミングが合わずに上手いかな

い。

「浮島、もう一度見せてやるか」

「ああ、すっかりとな」

そんな俺達を見かねてかもう一度炎の風見鶏が撃ち込まれた。円堂がゴッドハンドで応戦するが徐々にひび割れて崩れてしまった。

「風丸くん、わかりましたか？」

「いや、どうすれば成功するんだ……」

もう一度見てもタイミングの合わせ方がわからない。ゴッドハンドを破るだけあつて難易度もかなりのものだ。

「この技の鍵は2人の距離だよ！」

ふとゴールの方から声が聞こえた。その主は影野、彼は俺と風丸の方に歩いてくると語りだした。

「2人がボールを中心に同じ距離、同じスピードで合わせなきゃダメなんだ」

「なるほど！」

「そういう事だったんですね」

「よく気づいたな、影野!!」

確か今までは距離とスピードが微妙にズレていた。だからタイミングを合わせるこ

とが出来なかったのか。

「よし、頼んだぜ！風丸、羽花！」

「おう！／＼はい！」

影野のアドバイスを受けてもう一度試してみること。

ボールを宙に浮かすとそこを中心に接近する。今度は距離、スピード共に完璧だ。そうして同時にボールを蹴り上げ、風丸が上、俺が下からオーバーヘッドで蹴り込む。

「炎の風見鶏!!」

炎に身を包んだ鳥は響監督の横をすり抜け、ゴールに突き刺さった。

「やった、できたぞー！」

「はい、やりましたねー！」

ハイタッチして喜びあう俺達、そして試合は雷門の勝利で幕を閉じた。

「さあみんな！次は全国大会だ！」

「「おう！」」



「炎の風見鶏!!」

OBとの試合から俺達は連日、炎の風見鶏の練習をしていた。特訓の成果もあってだいぶ精度は高まってきている。

するとグラウンドの横に見覚えのある黒塗りの高級車が停まった。雷門家の車だ。

しかし中から出てきたのは夏美ではなくメガネをかけた中年の男性。夏美のお父さん、つまり雷門中の理事長だ。

「ねえ、あのおじさん誰？」

「この学校の理事長さん、つまり雷門さんのお父さんですよ」

隣にいた土門が聞いてきた。どうやら理事長の顔を見たことがないらしい。俺は転入する際に顔を合わせたけど転入生全員がそうではないのか。

「おいおい、理事長の顔知らねえのか？」

「そんなこと言っても俺転校生だし」

「天川は知ってたじゃねえか」

「う、痛いところ突いてくるね…」

染岡と土門の不毛なやり取りを横目に理事長の方に視線をむける。見た目は怖そうに見えるが結構気さくでいい人だ。少し円堂に似ているかもしれない。

「理事長の要望で部室を見に行くことになった。夏美からある程度話は聞いていた様子で、新しい部室を用意すると提案してくれた。」

「俺、このままでいい」

「1年生組が歓喜の声をあげる中、口を開いたのはやはり円堂。そんな彼の発言にみんな賛同し、結局今の部室を使い続けることになった。」

「ではお父様、私から一つお願いが。天川さんも入部したことだし、そろそろ女子用の更衣室が必要かと。彼女、毎日トイレで着替えてるんですよ」

「そうなのか…確かにそれは必要かもしれないな。よし、早速手配しよう」

「え？ 私は別にトイレでも…それに私のためだけにそんなことしてもらおう訳には…」

「何言ってるの！ 女の子がいつまでもそんなところで着替えるなんてダメよ！ それに私達も使うからあなただけってことはないわ。受け入れなさい！」

「あ、はい…ありがとうございます」

夏美のあまりの剣幕に怖気付いてしまった。やはり彼女は怒らせてはいけけないな。まあ俺のためにしてくれるのは嬉しいけど。

その後、練習を再開したが何故か炎の風見鶏が決まらなくなってしまった。さつきまでは10回中10回全部決まっていたのに…

よく見ると風丸の動きがどこかぎこちない。体調でも悪いのだろうか？

「風丸くん、大丈夫ですか？」

「ああ、すまない。次は決めるよ」

しかし、この日は結局1度も成功することはなかった。

◆◆◆

次の日の朝、俺と円堂は朝練に向かうために河川敷を歩いていた。

まだ朝日が登りつていないような時間なので歩いているのは俺達だけだ。

「あれは…」

円堂がなにか見つけたのか視線を落とす。そちらを見ると風丸と昨日彼と話していた陸上部の後輩がいた。

「陸上部に戻ってきてください！また一緒に走りましょう！」

近づいてみるとそんな声が聞こえてきた。

「風丸、陸上部に戻って欲しいって言われてたのか…」

「それで昨日様子がおかしかったんですね」

昨日の風丸の不調の原因はこれなようだ。サッカー部と陸上部の板挟みで悩んでい

たのだ。

「風丸君が陸上部に戻るって言ったら、守君はどうするんですか？」

「あいつがそう決めたなら俺はそれを尊重するよ、仲間だからな」

「でも、本当はサッカー部に残って欲しいんですよね？」

「へへ、まあな」

円堂が少しカッコつけ気味に言ったのでからかってみただが普通に返されてしまった。本当に純粹というかまっすぐだ。

そんな間に話が終わったのは風丸の後輩が俺達の隣を通り過ぎていった。円堂が挨拶したが返答はない。

「聞いちゃった」

「円堂、天川……」

「ごめんなさい、盗み聞きするつもりはなかったんですけど」

そう言つて手に持っていたボールの上に座つた円堂の隣に腰掛ける。

「あいつ、宮坂つていうんだ」

「あの1年に悪いことしちゃつたかな」

「いや、悪いのは俺さ」

自虐的に笑う風丸。そんな彼を見て、円堂が言葉を紡ぐ。



「俺さ、お前はもうサッカーのメンバーのつもりだった。でもそうか、助っ人で頼んだんだよな」

「お前のめちやくちやな練習と、熱さに惹かれてな」

「あの時はさ、必死だったからさ」

「最初は本当に助っ人のつもりだった。でもいつの間にかいつもサッカーのこと考える。なんて言うかさ、楽しいんだよ」

「戻るのか？」

「わからない。どっちを選んでも、もう片方を裏切るみたいでさ」

前に聞いた話だと彼らは幼馴染らしい。だから余計に迷ってるのだろう、俺が口を挟める問題じゃない。なので思ってることだけ言うことにした。

「凄いですね風丸君は。サッカー部と陸上部、両方から必要とされてて」

「ボソ……俺とは大違い」

「え？」

「とにかく、決めるのは風丸君です。私はそれを尊重します。でもみんな風丸君に残って欲しいって思ってますよ。もちろん私も」

「羽花の言う通りだ。お前の決めた答えが正解だって俺は信じてる。だから納得できるまでいっぱい考えとけ」

「円堂、天川……ありがとう」

これで正解なのかはわからない。だけどこれで少しでも迷いが吹っ切れてくれたらいいな。

「なあ、まだ少し時間あるよな！炎の風見鶏を見せてくれよ！今度は止めてみせる！」

「ふ、相変わらずだな。やるか、天川！」

「はい！」

朝の光がくつきりと見えてきた頃、河川敷のグラウンドに炎鳥の鳴き声が響き渡った。

## 戦国伊賀島の忍者サツカ

いつも通り練習に励んでいた時、理事長が事故にあったという知らせを聞いて、俺は夏美、円堂、木野と共に病院に足を運んでいた。

バトラーさんの話によると、理事長はフットボールフロンティアの会場の下見に行つた帰りに事故にあったそうだ。同乗していた関係者の中でも一番の重症らしい。

「雷門さん、大丈夫ですか？」

「ええ……大丈夫よ……大丈夫」

夏美の手をそつと握り、声をかける。

大丈夫とは言うものの彼女の声は震えている。目に涙を浮かべていて、見ているのも辛いほどに弱々しいその姿は、いつもの彼女には程遠いものだった。

「お前、お父さんについててやれよ。その方がいいと思うんだ」

「ついててあげて。お父さんが目を覚ました時に最初に夏美さんの顔を見せてあげて」

円堂の発言に木野も同意した。言葉にはしなかったが俺も同じ考えだ。

「守君、私もう少しここにいていいですか？先に練習に戻つててください」

「羽花……わかった！夏美のこと頼んだぞ！」

そう言い残して練習に戻る円堂と木野。

こんな状態の夏美を残して練習には参加できない。彼女にはお世話になりっぱなしだし、少しくらい役に立たなければ。

「大丈夫ですよ。理事長はきつと元気になります」

「でも……もしも万が一のことがあったら私……ひとりぼっちに……」

……そうか、彼女は母親がいないのか。だから余計に不安なんだろう。父親である理事長まで亡くなってしまったらと気が気でないのだ。

だったら俺にできることは……

「——天川さん!？」

気がついたら俺は夏美を抱きしめていた。今の俺にできることはこれだけだ。

「大丈夫ですよ。ひとりぼっちなんかじゃない。私も守君達もついてますから。」

こんなことで夏美の不安を払拭することなどできないだろう。自分の不甲斐なさにどうしようもなく腹が立つ。だけどせめて、少しでも元気になってくれれば……

「……ありがとう、ちよつとだけ落ち着いてきたわ。あなたも練習に戻って。明日から全国大会よ、初戦敗退なんてしたら承知しないからね」

「でも……」

「いいから。これは理事長の……いえ、私からのお願い」

「…わかりました。でも、なにかあったらすぐに言ってくださいね?」  
 そう言い残して病院を後にする。しかし、練習に戻っても父親の一大事に体を震わせている夏美の姿が頭から離れなかった。



『さあ、フットボールフロンティア全国大会1回戦! 雷門中学 v s 戦国伊賀島中学! まもなくキックオフです!』

いよいよ全国大会の日がやってきた。初戦の相手は戦国伊賀島というチームで、なんでも忍者サッカーをするらしい。

練習中に霧隠という選手が乱入してきて、風丸とスピード対決をしていたがほぼ互角。さすが全国大会に出てくるだけあって手強そうな相手だ。

F W 豪炎寺、染岡

M F 少林寺、羽花、松野、半田

D F 風丸、壁山、土門、栗松

G K 円堂

控え 影野、穴戸、眼鏡

今日のフォーメーションはこんな感じ。前回の帝国戦と同じだ。

雷門ボールでキックオフ。染岡がボールを持って攻めあがり、半田にパスを出す、  
これを霧隠がカット。

さつきも見たがやはりスピードは相当なもので一気に雷門陣内に切り込む。

「残像!!」

風丸がマークにつくと霧隠が分身のようなものを出現させた。そのまま攪乱された  
風丸を抜き去る。

そしてシュートを放つがこれは円堂の真正面だった。

「羽花!」

「はい!半田君!」

円堂からのボールを受け取り、それを半田にパス。

「伊賀島流蹴球戦術、鶴翼の陣!!」

掛け声と共に伊賀島の選手によって半田と豪炎寺が囲まれてしまった。そして身動  
きが取れなくなったところだ

「四股踏み!!」

2人のデイフェンダーの必殺技によってボールを弾かれた。それを相手のキーパー  
が抑える。

それから伊賀島の意表を突くサッカーに翻弄されてしまい、思うように攻められない時間が続いた。

「ドラゴン…!!」

「トルネード!!」

なんとかゴール前にボールを繋ぎ放たれた必殺シュート。炎を纏った龍が伊賀島ゴールを襲う。

「つむじ!!」

伊賀島のキーパーが発生させた竜巻にシュートの威力が完全に殺され、上空に投げ出された。そしてすかさずそれをキャッチ。

「分身フェイント!!」

パスを受けた小柄なミッドフィールダーからボールを奪おうとするが、3人に分身した彼に惑わされ、突破されてしまった。

ボールは霧隠へ、その前に再び風丸が立ち塞がる。

「お前なんかに取りられるかよ!」

「絶対に止める!」

2人のボールの奪い合いは熾烈を極めた。そして

「俺の勝ちだ!」

勝ったのは霧隠、そのまま雷門ゴールへ前進していく。そのスピードに誰も追いつけないままゴール前で円堂とIvsIの状況になってしまった。

「くらえ！つちだるま!!」

霧隠が放ったグラウンダー製のシュートはみるみる土を巻き込み、ゆきだるまのように巨大化していった。そして指でなにか切るような動作をしたかと思うと土が崩壊して中のボールが姿を表した。

「熱血パンチ!!」

ぶつかり合う拳とシュート。だか徐々に円堂の拳が押し負け始め、そして弾かれてしまった。

『ゴオオオオオルツ!!先取点は戦国伊賀島だ!!』

「くっそおー!」

地面に転がるボールを見つめながら悔しがる円堂。無理もないだろう、今のは恐らくゴッドハンドなら止められたはずだ。だが予備動作が必要なため発動が間に合わずに点を決められてしまったのだ。

「大丈夫ですか?守君…」

「ああ、ツツ…!」

倒れている円堂に駆け寄り手を差し伸べる。すると彼は顔を歪めて苦しそうな表情



をした。

「……もしかして右手を？」

「大丈夫だ！まだ戦える！」

どうやらさつききのシュートに倒された時に嫌な倒れ方をしたらしい。右手の甲が真つ赤に腫れ上がっている。

だが雷門のキーパーは彼だけだ。故に交代することもできない、ならせめて応急処置だけでもしておくべきだろう。

大丈夫だと思うが一応肩を貸して彼をベンチまで送り届ける。そして木野と音無に手短に説明した後、フィールドへと駆け足で戻った。

『おっと、円堂負傷でしょうか？手当が終わるまで雷門はキーパー不在の10人で戦うようだ！』

守りを固めるために俺もディフェンスに入り、5バックの体制で試合再開。この好機を逃すまいと戦国伊賀島はディフェンス2人とキーパーを除いた全員で攻めてくる。

そして撃ち出される幾つものシュートはまるで嵐のようにゴールに襲いかかってくる。

それをディフェンスのみんなが体を張って文字通りの肉壁となり守り抜く。

「いつも円堂にはゴールを守ってもらってるんだ！」

「だから今は俺達が守る番だ！」

「その通りでやんす！」

「みんな…」

だが無常にもシュートの嵐は続く。弾かれたボールは天に投げ出され、それを柳生十兵衛のような格好のフォワードが確保した。彼は3人に分裂するとそれぞれ左右と下からシュートする。

「分身シュート!!」

まずい…：ディフェンスのみんなは体制が崩れてフォローに入れない上にキーパーもいない状況。万事休すかと思われたがそこに壁山が立ち塞がる。

「絶対決めさせないっす！ザ・ウォール!!」

彼の背後に巨大な壁が現れる。それに激突したシュートは段々威力が殺されていき、完全に静止した。

『止めたぞ壁山、まるでそそり立つ壁のようなディフェンスだ!』

「凄いです！壁山君！」

「へへ、頼むっす天川さん！」

チャンスだ。相手はほとんど全員が攻撃参加している弊害で守備が手薄になっている。そこを狙えば…

壁山からのパスをトラップしようとしたその時、目の前を黒い影が通り過ぎた。

「…え？」

「まだだ、俺が決める！」

影の正体は霧隠だった。壁山からのパスをカットした彼はそのままゴールに迫る。

ダメだ、追いつけない…、だったら一か八か…！

霧隠に向かってありつたけの速度で前進、進む度に分身が作り出される。そして接近したところで矢を射抜くが如く速さのスライディングでボールを奪い取る。

「ワンダートラップ!!」

何が起こったのか理解できないのか彼は目をぱちくりさせている。

それを他所に手薄なゴールに向かってぐんぐん前進する。ほとんどの選手が上がっていたので待ち構えるのは2人の巨漢ディフェンダーのみだ。

「しこぶ…!!?」

「アグレッッシブビート!!」

必殺技が発動される前に高速で突破する。あまりの勢いに弾かれた彼らは追いつくこともできない。

そしてあつという間にペナルティエリア内に侵入する。

「これだけは決めてみせる！」

うさぎのように何度も跳躍し、月を背景にオーバーヘッド。

「バウンサーラビット!!」

撃ち出されたボールは地面を幾度となくバウンドする。そのトリッキーな動きは相手キーパーの反応を許さずそのままゴールに突き刺さった。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!天川の必殺シュートで雷門同点!そしてここで前半終了です!』



「ナイスシュート!羽花!」

「ありがとうございます。それより怪我の方は?」

ハーフタイム、円堂の怪我の具合になり彼の元へ駆け寄った。みんな同じ考えだったようで円堂を囲み、円ができている。

「大丈夫だ、後半は1点も入れさせないぜ!」

どうやら大事には至っていないようで安心した。だが無理をさせる訳にもいかない。このチームのキーパーは彼だけなのだから。

「よしみんな、円堂を全力でカバーするぞ!」

「「おう!!」」

風丸の言葉に全員が賛同するように声をあげた。すると響監督がベンチから腰をあげて俺達の方を向いた。

「後半の作戦を伝える。まず天川はそのままディフェンスに入れ。相手の攻撃の芽を摘むんだ」

「はい!」

「そして風丸、お前は攻撃のチャンスがあれば積極的に天川と共に前に出る」

「わかりました!」

「敵は炎の風見鶏を知らない。豪炎寺と染岡は囷になるくらいの気持ちでいろ。だが決定的な場面があれば迷わず狙うんだ」

「はい!!」

そうしていると後半開始が審判から言い渡され、俺達はそれぞれのポジションについた。そして戦国伊賀島ボールで試合再開。

「伊賀島流蹴球戦術、偃月の陣!!」

いきなりの伊賀島の速攻、選手達が扇形のようなフォーメーションになったと思うと土煙を巻き上げながらものすごい勢いで突っ込んできた。

あまりの激しさに誰も止めることができず悉く吹き飛ばされてしまった。そして

ゴール前で霧隠が砂塵の中から姿を現す。

「うおおおお！」

風丸が突撃していくが残像で躲されてしまった。円堂とI vs I、さつきと同じ状況だ。

「もらった！つちだるま!!」

「ゴツドハンド!!」

円堂のゴツドハンドが発動。黄金の手によってシュートは勢いを失っていき、そして彼の手の中に収まった。

「なに!？」

そして前線へパンツキックをあげるが…

「まだだ！俺の力を見せてやる！」

霧隠にカットされてしまった。くそ、ここからじゃフォローが間に合わない。

円堂もパンツキックの位置から戻っていない、今シュートされたら…

相手もそれをわかっているのか必殺技ではなく普通のシュートを放った。無人のゴールにボールが迫る、が

ゴールの前を一人の影が横切った。風丸だ、足元にはしつかりボールがキープされている。

『なんと風丸がその名の通り風のような速さでゴールを阻止！これはスーパープレイだ！』

そのままボールを前線に運ぶ風丸。それを霧隠が追っていった。

「このままじゃ終わらせない！」

「ああ、勝負だ！」

肩をぶつけ合い、激しくボールを奪い合う2人。その勝負は相手のペナルティエリア付近まで続き、そして決着を見た。

「お前の足じゃ、俺を振り切れない！」

「足が早いだけじゃダメなんだよ！サッカーは！」

風丸が不意打ち気味に静止したと思うと霧隠の頭上にボールを蹴りあげた。反応できないう彼をそのまま抜き去る。

「いくぞ！天川！」

「はい！」

風丸が蹴り上げたボールを2人同時のタイミングで蹴り出し、そして上空でシュート放つ。

「炎の風見鶏!!」

炎を纏った鳥の前に相手のキーパーは為す術なくシュートはゴールに突き刺さった。





## 未知なる強敵

帝国学園が10—0で完敗した。

俺達がその知らせを聞いたのは2回戦にむけてイナビカリ修練場で特訓している時だった。音無が修練場に酷く慌てた様子で入ってきたので事情を聞くと。

「帝国学園が…10—0で…世宇子中に完敗しました…」

それを聞いて驚きの声をあげる一同。

「ガセじゃないのか!？」

「あの帝国が…1点も取れないなんて…」

あの帝国が…世宇子中っていうと特別推薦枠?で参加が認められた学校だったはずだ。帝国が一番の強敵だと思ってたけどまさかそんな伏兵が潜んでいたとは。

「そんなわけないだろ!あいつらが負けるなんて…鬼道がいるんだぞ!」

珍しく取り乱した様子で音無に詰め寄る円堂。一番帝国との再戦を楽しみにしていたのは彼だ。まだ現実を受け止められていないのだろう。

「…お兄ちゃん、試合には出なかつたんです。うちの試合で怪我してたから…大事をとって控えに回って。そしたら相手が圧倒的で…お兄ちゃんが傷をおして出ようとし

た時にはもう……」

……今の雷門と帝国は恐らくほぼ互角、その帝国がそこまで大敗したということは……

「今の私達では、世宇子には勝てない……」

頭の中で考えていたつもりだったが思わず口に出てしまっていたらしい。全員の視線がこちらに集まる。

「羽花！何言つて……俺、鬼道のところ行つてくる！」

「おい、円堂！」

俺達の静止を振り切り、円堂が飛び出して行つてしまった。恐らく向かった先は帝国学園だろう。

「とにかく練習に戻ろう。ここで考えていても仕方ない」

豪炎寺の言葉で練習を再開するがやはりみんな動揺が隠せないように集中できていなかった。



「世宇子……そんなに強いチームなんだね」

沈みかけた夕陽を浴びて、茜色に染まった顔でフェイが呟いた。

この時間ならいるかもしれない、そんな期待を見透かしていたかのように彼は河川敷の土手に腰掛けていた。まるで俺を待っていたかのように。

「フェイ、私を強くしてください！今のままじゃ、世宇子には勝てない！」

俺がここに来た目的はそれだ。世宇子に勝つためには普通に特訓していても無理だ。だからこそ彼の力を借りることに決めた。

頭を下げて必死に懇願する。みんなの役に立てる力が欲しい。でないとなまた…

それを聞いて一瞬口元が緩んだと思うと、彼は微笑みを浮かべた。

「もちろん！僕も君とサッカーがしたかったんだ！」

その答えに俺が唇をほころばせると「ただし」と彼は続けた。

「僕の特訓は厳しいよ。覚悟してね」

「はい！望むところですよ！」

そうして始まったフェイとの特訓。内容自体はとてもシンプルでフェイからボールを奪い、そして奪われないようにドリブルするだけ。だけどこれがものすごく難しい。

そもそも彼のスピードや技術は俺とは比べ物にならない程高く、ついていくことすらできないので体力をどんどん削られてしまう。特訓を始めて1時間経つ頃には俺は立ち上がるのできない程に消耗していた。

「ハア…ハア…全然ついていけない！」

「まだ始めたばかりだし、焦らないでいこうよ」

フエイはそう言うがさすがにここまで自分のサッカーが通じないと焦らずにはいられない。肩で息をする俺とは対照的に彼はほとんど息を切らしていない。

それが俺達の実力差を物語っていた。

すると、炎が燃え盛るような轟音が鳴り響いた。音のした方を見ると3人の人影があつた。あれは…豪炎寺と鬼道、そして音無、どういう組み合わせだ？

音無が豪炎寺になにか話したと思うと彼は鬼道と共にグラウンドの方に降りてくる。その時、俺と目が合った。

「天川、一人で何してるんだ？特訓か？」

「あ、はい特訓を…え？一人？」

辺りを見渡すといつの間にかフエイの姿が消えていた。さっきまでここにいたはずなのに…

「誰かいたのか？まあいい、少し場所借りるぞ」

そう言うのと彼らはパス交換…いや、もはやシュートじみたボールを何度も蹴りあつていた。

「鬼道そんなに悔しいか！」

「悔しいさ！世宇子中を、俺は倒したい！」

そんな2人を俺と音無は土手に腰掛けて眺めていた。

「羽花さん、止めなくていいんですか？」

「多分止めても無駄ですよ。それに…止めない方がいいかもしれません」

思いつくのは帝国戦、いつもの調子が出せなかった円堂に豪炎寺がファイアトルネードをぶち込んだ。

恐らくあれが彼なりの説教なのだろう。ならば止めるのは余計なお世話だ。

「自分から負けを認めるのか！鬼道！」

豪炎寺がファイアトルネードを放つと、それは鬼道の顔面すれすれを通り過ぎた。シユートによって土手にクレーターを作られ、ボールが破裂してしまった。

「一つだけ方法がある。お前は円堂を、正面からしか見たことがないだろ。あいつに背中を任せる気はないか？」

なるほど、彼が言いたいことがわかった。でもそんなこと、本当にできるのだろうか

…？



次の日、練習の前に部室でミーティングが行われた。

「みんな！全国大会2回戦の相手は千羽山中だ！」

「彼らは無限の壁と呼ばれる鉄壁のディフェンスを誇っています。全国大会まで1点も許してません」

部室内の空気が静まり返る。全国大会まで無失点なんて相当強力なディフェンスだと予想できる。2回戦も甘くはなさそうだ。

「わかった！その無限の壁って鉄壁のディフェンスを破ればいいんだな！」

「そんな簡単に言われても…」

円堂のその発言に破れないから鉄壁なのだろうとみんな苦笑する。まあらしいといえばらしいけど。珍しく豪炎寺も笑ってる。

「鉄壁って鉄の壁だろ？」

「意味はそうですね」

「なら、こっちはダイヤモンドの攻めをすればいいんだ！」

「…は…？」

意味不明すぎる…というか

「衝撃に対する硬度だったら鉄の方が上なので、多分ダイヤモンドの方が先に砕けますよ」

あららと円堂がずっこけた。まずいこと言っちゃったかな…

「と、とにかく特訓だ！無限の壁なんてぶち破ってやろうぜ！」

「「おおおおー？」」

そんなこんなで練習が始まったのだが、なにか様子が変わった。タイミングがバラバラというか、パスも繋がらなければ壁山はヘディングを失敗していたし、染岡と豪炎寺のドラゴントルネードも何回撃っても成功しなかった。

別にみんながなまってるわけじゃない、むしろ個人個人のレベルは格段に上がってるように見える。他の人たちも原因がわからず困惑している。

「一体どうなってるの…」

結局今日の練習でまともに連携が決まることはなかった。

そしてその後、俺は理事長室で夏美の手伝いをしている。理事長が入院している間にかなり書類が溜まっているようで、机の上には大量の山ができていた。

夏美がそれを確認し、俺が判子を押す。単純作業だがこれだけの量があるとさすがにきつい。

「ごめんなさい、手伝ってもらっちゃって」

「いいえ、これくらい大丈夫ですよ」

なにせ夏美には服を買ってもらった借りがある。あれいくらしたんだろうか…多分相当タダ働きしないと返せないと思う。

「ねえ、天川さん」

「はい?」

夏美の方を見るとさつきまでとは違い真剣な表情。そのまま彼女は続けた。

「あなたは どうして サッカー をしているの?」

動かしていた手を止めて夏美を見つめる。今、俺の表情は険しくなっているだろう、がすぐに笑顔に切り替えて答える。

「サッカーが好きだからですよ」

当たり障りのない回答。それを聞いた彼女はなにか考え込んで

「私はあなたの事情を知ってる…だから隠さなくていいのよ」

思いもよらぬ言葉を口にした。知ってる? なんで? どこで聞いて…

「あなたが転校してくる前日に従者の女性が教えてくれたわ」

「ツツツ! お願い! そのことはみんなには言わないで!」

知られてしまったらみんな俺を軽蔑するに決まってる。やっと見つけた居場所…絶対に失いたくない。そのためにも知られるわけには…

「みんなに言うつもりはないわ。その代わり、あなたの本心を教えて」

「本心…」

「あなたはなぜ、サッカーをするの?」



「……サッカーは私の全て……私からサッカーをとつたら、もう何も残らない。だから私は……」

そう、サッカーこそ俺の存在意義。サッカーをしている俺をみんなは必要としてくれる。だからそこに好きとか嫌いとか、そんな感情はない。

それを聞くと、夏美は立ち上がり、扉の方に向かった。

「ちよつと職員室に行つてくるわね。仕事はだいぶ片付いたわ、ありがとう。もう遅いし先に帰つてて」

そして扉を半分だけ開けるとこちらにふりむいて呟いた。

「でも、あなたは楽しそうにサッカーをしてると、私は思つてたんだけどな」

そう言い残すと少し悲しそうに微笑みながら、夏美は部屋を出ていった。



俺が理事長室から出る頃には辺りはすっかり暗くなつていて、校舎の光も職員室以外灯つていかなかった。

校門の方に歩いていると体育館の方から光が零れているのが見えた。あつちは……イナビカリ修練場？

気になって中に入ってみると、そこで1人特訓をしてる人物がいた。

「染岡君?」

「おお、天川か。こんな時間にどうした?」

「染岡君こそ、こんな時間まで特訓を?もう19時半ですよ」

練習は2時間前に終わつたはず、てことはそれからずっと特訓していたということになる。

「ああ。俺、このままじゃダメなんだ。帝国戦も戦国伊賀島戦も、ゴールを決められなかった」

そう言つてシュートを放つが、枠の外に飛び出してしまった。それを見て染岡は強く歯ぎしりする。

「俺も豪炎寺やお前みたいに1人で点を決められるようにならなきゃならないんだ。」

「私? 私なんてそんな大したものでは…」

「謙遜するなよ。とにかく、俺はもつと強くならなきゃならないんだ!」

何度もシュートを撃つ染岡だが明らかに集中力を欠いている。その証拠にシュートはゴールに収まらずあらゆる方向に飛んでいつている。

「くそ!なんで上手くないかねえんだ!」

∴彼のシュートが豪炎寺にパワーで劣っているのは間違つていないと思う。実際、

ファイアトルネードとドラゴンクラッシュでは前者の方が強力だ。でも、染岡は染岡で豪炎寺にない長所を持っている。

「あの、無理に一人でゴールを決めなくてもいいんじゃないですか？」

「え？」

「だって、サッカーは一人でやるものですよ？確かに染岡君はシュート力では豪炎寺君に敵わないかもしれませんが、パスの精度やシュートの速度は染岡君の方が上だと思います」

そう、尾狩斗戦がわかりやすいが彼のシュートは速度が速い。ゆえにゴール隅を狙ったシュートやシュートに見せかけたパスなら、彼の右に出る者はこのチームにいないのだ。

「シュートの速度か…確かにパワーに集中しすぎて思いつかなかった」

「無理に豪炎寺君を越えようとしなくても、染岡君は十分強力なストライカーだと思えますよ」

「ふ、お前円堂と同じようなこと言うな」

「守君と？」

「ああ、前に円堂に言われたんだ。豪炎寺になろうとするな。お前は染岡竜吾だ、お前にはお前のサッカーがあるってな」

なるほど、円堂が言いそうなことだ。彼にそういうことをやらせたら下手したら日本一だと思う。

「ありがとな、お前のおかげでなにか掴めた気がする」

「いえ、別に大したことは…」

そう言った時、染岡がこつちにボールを投げ渡してきた。

「少し付き合え、お前のシユートも参考にしたいしな」

「私なんかで良ければ喜んで」

その日、俺と染岡の秘密の特訓は夜更けになるまで続いた。

## 覚醒する遺伝子

しばらくの時間が経ち、2回戦当日がやってきた。相変わらず連携は取れていないが、個々人の力は格段に上がってる。後は今日来るはずの彼に期待しよう。

「そろそろ試合を始めませんか？」

審判の人が試合を始めるよう催促してくるが、響監督は聞く耳を持たない。彼を待つてゐるからだ。

当然、事情を知らないみんなは猛反発している。唯一円堂だけが監督の言うことならと信じて待機している。

その瞬間、観客席からどよめきの声が聞こえてきた。どうやら間に合ったようだ。

遅れてフィールドに入ってきたのは青色のマントにゴーグル、雷門ユニフォームを身に纏った鬼道だった。

「うそおおお!?」

『鬼道です！間違いません、帝国のキャプテン鬼道有人です！』

実況と味方ベンチからも驚きの声があがる。

大会規定上では試合前までに転入手続きをしていればチームの移籍は可能だ。実況からもその説明が入った。

「このままでは引き下がれない！世宇子には必ずリベンジする！」

「鬼道！わかってたぜ！お前があのまま諦めるわけないって！」

「なんて執念だ…」

そして鬼道を入れてのフォーメーションが発表された。

F W 豪炎寺、染岡

M F 半田、羽花、鬼道、松野

D F 風丸、壁山、土門、栗松

G K 円堂

控え 少林寺、宍戸、影野、眼鏡

鬼道が入ったことで中盤の層が厚くなり、攻撃力が上がった。さて、無限の壁とやらを破れるかどうか…

雷門ボールでキックオフ、そのまま速攻で攻め上がるが

「染岡！」

「…！弱い」

半田から染岡へのパスは通らずカットされてしまった。やはり連携が噛み合ってい

ない。

それからボールは奪えるものの、パスが通らず攻めあぐねる時間が続いた。

「ワンダートラップ!! 染岡君!」

必殺技でボールを奪うも、このパスも通らずカットされてしまった。

「ランボールラン!!」

千羽山の必殺技でどんどん自陣に入り込まれてしまった。壁山が間一髪でボールを弾くが、その先にはFWが待ち構えていた。

「シャインドライブ!!」

ボールが眩い光で包まれ、円堂がたまらず目を瞑る。そしてシュートはゴールへと吸い込まれていった。

痛恨の失点。この試合、1点勝負になる可能性が高いのでなるべく先取点はこちらがとりたいところだったが…

すると鬼道が俺達を集め、指示を出し始めた。

「栗松、お前はいつもより2歩後ろを守れ」

「そして松野、豪炎寺にパスを出す時は3歩、染岡には2歩半、いつもより前に出せ。」

その指示に一瞬困惑する2人だったが、すぐに飲み込みポジションに戻った。

そして試合が再開されるが、鬼道の指示で格段に連携を取りやすくなった。さっきの

2人以外にも即興で指示を出し、見事にゲームメイクしてみせた。

「豪炎寺君！」

「天川、3秒待て！…今だ！」

「は、はい！」

今度はスムーズにパスが通った。そしてボールは豪炎寺から松野、そして染岡へ。

「2歩半先！」

「ドンピシャだ…！ドラゴンクラッシュシュ!!」

今試合初のシュートが放たれた。龍の力が込められたシュートが千羽山ゴールを襲うが

「まき割りチョップ!!」

このシュートはキーパーによってフィールドの外に弾かれてしまった。しかし、今までバラバラだったチームの力を一つにした攻撃に士気が高まる。

「鬼道！やっぱりお前は天才ゲームメーカーだな！」

「ふ、今のがゲームメイクと言えるのならな」

「え？」

「お前たちは自分の力に気づいていないんだ。キックや走力、どれをとつても格段にレベルアップしている。だがそれには個人差があり、当然いつものようにやっているはず



レが生じる。俺はそのズレを修正しただけだ」

だけって……まだ試合開始から10分くらいしか経ってない。それなのにそれを見抜いて全員分修正するなんて……さすが元帝国キャプテン、天才ゲームメーカー鬼道有人は伊達じゃないってことか。

雷門ボールで試合再開。フリーの染岡にボールが渡った。

「ドラゴン……!!」

「トルネード!!」

雷門のストライカー2人により放たれる、ドラゴンクラッシュより数段上のパワーを持つシュート。同点かと思われたが

「『無限の壁!!』」

キーパーとディフェンダー2人によって千羽山ゴール前に何重もの岩の壁が現れ、いとも簡単にドラゴントルネードを止めてしまった。これが噂の無限の壁か……

ここで前半終了のホイッスルが鳴った。両チームの選手がグラウンドの外に出る。1点ビハインドな上シュートを止められた雷門の面々は浮かない表情、対照的に千羽山の選手は余裕そうな顔つきでそれぞれベンチに戻った。

「後半は天川をフォワードに上げて3トップでいこう」

「3トップ?」

「ああ、無限の壁の弱点は3人による連携技だという点だ。天川、ゴール前でボールを持ったらシュートを撃たずになるべくキープし続けてくれ。そうしてかき乱せば相手のディフェンスも崩れるはずだ」

ハーフタイム、鬼道がみんなを集めて後半の作戦を説明しだした。  
そして俺の方に視線を向ける。

「できるか？」

「自信はないですけど…わかりました、やってみます」

つまりこの作戦は俺がいかにボールをキープできるかにかかっているってことか。  
正直自信はない…けど、やるしかない。

ちやうどホイッスルが聞こえてきた。俺達はそれぞれコートを入れ替え、ポジションについた。

そして千羽山のキックオフで試合再開。鬼道が相手のフォワードにチャージをかけると彼はすぐにパスを出した。それを豪炎寺がカットする。

「天川！」

早速ボールが渡ってきた。ペナルティエリア内めがけて前進する。

「せーの！かごめ、かごめ、かーごめかごめ」

するとディフェンスの3人が俺を囲み、ぐるぐると歩きだした。

「え？」

「今だ！」

「ツツツ……！」

ゆつくりとした動きが一変、同時に突っ込んできた。それをギリギリのところでもボールと共にバク転してかわす。イナビカリ修練場とフェイの特訓のおかげでかなり身軽に動けるようになってきた。

そのままペナルティエリア内に侵入、ただしシュートは撃たずにキープに徹する。相手ディフェンスの内2人は無限の壁のためにゴール前にいるのでボールをキープするのはそれほど難しくない。いつまでもシュートを撃たない俺に痺れを切らして5番のディフェンダーが飛び出してきた。

（かかった！）

「今だ天川！逆サイドにパスだ！」

鬼道の合図で逆サイドにボールを放り込む、そこに走り込んでいるのは豪炎寺と壁山。イナズマ落としての体勢だ。

豪炎寺が壁山を踏み台に天高く飛び上がりオーバーヘッド。電気を纏ったシュート進んでいく。

5番は引き付けてあるから無限の壁は使えない。しかし…

「無限の壁!!」

なんと他のデیفエンダーが5番のポジションに入り無限の壁を発動、イナズマ落としが止められてしまった。作戦失敗、まさか他の選手でも発動できるなんて…

「炎の風見鶏!!」

今度は風丸と共にシュートを放つがこれも無限の壁に阻まれてしまった。これでもダメか、となると後はイナズマー号とライトニングジャベリンくらいしか…

「天川、豪炎寺、頼みがある」

鬼道に話しかけられ、俺と豪炎寺が歩みを止める。そして話を聞き終わると同時に相槌を打ってポジションに戻った。

相手のキーパーからのパスを鬼道がカットした。それを合図に俺と豪炎寺が走り出す。

「行くぞー! 皇帝ペンギン…!!」

「2号!!」

帝国の必殺技、皇帝ペンギン2号だ。鬼道が蹴り出したボールに俺と豪炎寺が同時に蹴りを入れて加速させる。5匹のペンギンがボールと共にゴールへ飛んでいく。

「無限の壁!!」

壁とペンギンが激突、しかしさしものペンギンも何重にも連なった壁には敵わず消し飛ばされてしまった。

「皇帝ペンギン2号でも破れないなんて…」

「どうすれば……！・円堂！」

鬼道の声で円堂が上がってきた。そして松野からのバックパスを受けて

「イナズマー1号!!」

シュートを放つが、これも無限の壁に阻まれて弾き返された。いや、まだだ…

「守君！」

「おう！行くぞ！」

「ライトニングジャベリン!!」

弾かれたボールを空中で拾うとすぐさままたき落とし、円堂と共にツインシュート

「無限の壁!!」

だがこれも壁を破るには至らず再び弾かれる、するとそこに壁山が走り込んできた。

「キャプテン、豪炎寺さん！」

「よし、行くぞ！」

「「イナズマー1号落とし!!」」

現時点での雷門の最強シュート、それも2連続で撃ち込んだ後なのでスキもできるだ

ろう。決まった、誰もがそう思ったが無限の壁に突っ込んだボールは弾かれ、ピッチの外に出てしまった。

『止めたぞ千羽山！これが無限の壁の威力、鉄壁のデイフェンスなのか!』

ライトニングジャベリンも炎の風見鶏も通用しない、当然バウンサーラビットも防がれてしまうだろう。さらにはイナズマー1号落としや皇帝ペンギン2号も止めてしまうなんて、もう打つ手がない。試合時間も後5分くらいしか残っていないのに…

みんなも同じ考えなのか下をむいて俯いている。無限の壁を破るのは不可能だ、と。「おい、みんなどうしたんだ？まさか諦めたなんて言うんじゃないだろうな？まだ試合は終わっていないんだぞ！栗松、風丸、羽花！」

「でも、無限の壁を破れないんじゃないや…」

「やっぱり新必殺技が必要なんだよ」

円堂がいつも通りみんなを鼓舞するが今回ばかりは難しいかもしれない、そう思っていた矢先

「必殺技ならある！俺達の必殺技は炎の風見鶏でも、イナズマー1号落としてもない！俺達の必殺技は最後まで諦めない気持ちだ！」

諦めない、気持ちか…

「帝国と戦った時からずっとそうだった！諦めなかったからここまで来れたんだろ！俺

は諦めない！諦めたらそこで終わりなんだ！そんなの俺達のサッカーじゃないだろ！やろうぜ、俺達のサッカーを！」

その言葉を聞いた瞬間、全身に雷が走ったような衝撃を感じた。この感じ、覚えがある。初めてゴットハンドを見た時と同じ：

「円堂！」

「キャプテン！」

彼の言葉に今まで消沈していたチームの雰囲気ガラッと変わった。さっきまでの暗いムードとは正反対、チーム全体にバフがかかったような感覚に襲われる。

「よし、残り5分！全力でいくぞ！」

「「おう！」」

円堂も上がり正真正銘の全員攻撃、細かくパスを繋いではシュートを撃つがやはり千羽山の守りは硬い。鬼道にボールが渡るがさっき俺がくらった技で囲まれてしまった。

「鬼道！」

その時、円堂が鬼道の方へ声をあげて走り出した。それを見た鬼道はボールを空中へと蹴りあげる。するとそこに黒い雷雲が発生したかと思うとイナズマを纏い落下してくる。それを円堂、鬼道、豪炎寺が同時に蹴り飛ばす。

「「無限の壁！」」

放たれたシュートは正面から無限の壁を破壊し、ゴールに突き刺さった。数秒の静寂、そして我に返った実況が叫んだ。

『無限の壁が破られたああ！千羽山ついに失点！無失点記録が途絶えたぞ！』

…すごい。それしか言葉が出てこなかった。さつきまで諦めムードだったはずが円堂の言葉で全員が奮起、見たことも無い、それこそ次元の違う威力の必殺技でゴールを奪ってしまった。自然に口元が緩む。身体そこから熱い何かが湧き上がってくるのを感じた。力がみなぎるような、そんな感覚。

「私だって、やってやるんだ…」



千羽山ボールで試合再開。1点取られたとはいえ、千羽山イレブンは諦めていなかった。慎重にパスを回そうと一旦後ろにボールを下げる。が、それに彼らが触れることはなかった。一筋の光がボールを掠め取っていったからだ。

「羽花？」

ボールを足元に収め、羽花は微笑する。それに反応するように、彼女の身体から黄緑色のオーラが発せられた。次の瞬間、彼らの視界から羽花の姿が消え失せた。



「どこだ!？」

「消えた?」

千羽山イレブンからどよめきの声があがる。だが、彼女はすぐに姿を現した。そう、上から

「ストームゾーン!!」

着地した羽花の周囲にクレーターが出来あがる。そして彼女が手を振るうと突風が発生し、彼らを吹き飛ばした。

オーラを纏ったまま羽花が直進していく。さつきまでとは比べ物にならないスピード、パワーに怯む千羽山イレブンだが果敢にボールを奪おうとする。

「ハーヴェ…」

「うしろのしよう…」

「デコイリリース!!」

残ったデیفエンスが必殺技を放つ。

だが羽花が指を鳴らすと無数の分身が出現し、それら一人一人が超スピードで彼らをあつさり抜き去った。

その速度にデیفエンス陣は追うこともできない。

羽花がボールを天高く高く蹴り上げた。そして自らも跳躍すると、ボールに眩いばか

りの黄緑色の光を放つ月が重なる。それをオーバーヘッドで撃ち落とすと、月はいくつもの星屑となり地上に降り注ぐ。それは着地するや否やバウンドを繰り返し、やがて一つに融合し強力なシュートとなった。

「ムーンフォースラビット!!」

「無限の壁!!」

これ以上得点されまいと抵抗する壁。しかしその思い虚しく壁はたちまち崩れ去り、キーパー諸共シュートはゴールを撃ち抜いた。

そしてここで試合終了のホイッスルが鳴る。2対1、雷門の勝利でこの試合は幕を閉じた。

## ペガサスが翔ぶ時

「ハア…ハア…なんだったの…？今の…」

試合終了のホイッスルが鳴り響くとほぼ同時に疲労感がどつと襲いかかってきた。思わずその場に座り込み、さつき自分に起こった現象を振り返る。

突然黄緑色のオーラ？のようなものが湧き出したと思ったら身体が軽くなった。さらに相手の動きがスローモーシヨンのように遅く見えて、敵のディフェンスを容易にかわすことができた。

「すっげえぜ羽花！」

「へ？うわああ！」

後ろからの声に振り返ると円堂がいきなり突っ込んできた。その反動で俺は地面に転がる。

「なんだよ今の！全然動きが見えなかったぞ！」

「私にもなにがなんだか…」

周りを見るといつの間にかみんなが集まってきていた。

「すげえじゃねえか！新必殺技か！」

「いつの間にあんな技使えるようになってたんすか？」

口々に喜びの声をあげるみんな。だが俺はまだ理解が追いついていないので呆然としていた。

まあでも、役に立てたならそれでいいかな。

「鬼道君達のシユートも凄かったですよ。咄嗟にあんな連携技を編み出すなんて」

「ふ、それが雷門の面白いところだ。いつどのタイミグで進化するのか想像もできない」  
鬼道に話を振ると彼はクールに笑みを浮かべて答えた。彼が手を差し伸べてくれたので、それを掴み立ち上がる。

「さあみんな！次は準決勝だ！気合い入れていくぞ！」

「「おう!!」」



「あいつが例の奴か。そんなに凄そうには見えなかったが」

フットボールフロンティアスタジアムの観客席でフィールドを見下ろす4人の少年少女がいた。

見下ろす先には勝利を喜ぶ雷門イレブンの姿。それを見て少年の内の一人、白とオレンジの髪を首周りに巻いた髪型が特徴の男が口を開く。

「あんな奴、わざわざ見に来る価値があつたのか？」

「ガロつたらほんと短気ね。可愛いじゃない、一生懸命で」

「それにまだ完全に力に目覚めてはいないようだしね、決めつけるのは早計じゃないかな？」

「ああ!? てめえら喧嘩売ってんのか!」

ガロと呼ばれた少年の言葉を、ピンク色の髪をした少女と眼鏡をかけた少年が鼻で笑うように否定する。言葉の端々に荒々しさを感させた前者とは違い、上品さが垣間見れる口調だ。

「楽しみね、あの子がどんな風に成長するのか。ねえギリス？」

「だけど、彼女がいくら成長しようと君の輝きには敵わないよ。メイア」

「まあ、ギリスつたら」

「うっせえなバカツプルが! 今ここでぶっ潰してやろうか!」

突然人目もはばからずイチャつきだしたメイアとギリスに、ガロの怒りは頂点に達していた。彼の殺気が2人に向けられる。すると白髪にゴーグルをかけた少年がなだめるように話し始めた。

「やめなよ3人共、他のお客さんに迷惑だよ?」

「あんたは黙ってる、SARU!」

「へえ…」

笑顔のまま、目だけは鋭い視線を向けるSARU。その雰囲気は飲まれ、3人は黙ってしまった。

「俺が悪かった…すまん」

「わかればいいんだよ、ガロ」

「それで、彼は上手くやってるいるのかい?」

「記憶まで消すことはなかったんじゃないの?」

メイアが首を傾げるとSARUはフフッと笑った。

「彼は嘘をつける奴じゃない。ああするのが一番だよ。それに今のところは順調みたいだからね」

眼下の少女を見下ろし、SARUは再び不気味に笑うのだった。



2回戦を突破し、俺達は準決勝へ向けて練習に励んでいた。みんな気合十分、連携の

ズレも鬼道によって修正されて今は見る影もない。その時、フィールドの外に見知らぬ人がいるのに気付いた。見学だろうか？なにをすることもなくこちらをただ眺めている。

その時、円堂が弾いたボールが彼の元に転がっていった。彼はそれを拾うといきなりドリブルでコートの中に入ってきた。動揺する栗松と半田をいとも簡単に抜き去り、ゴール前で円堂と対峙する。

「スピニングシュート!!」

逆立ちしたと思ったら駒のように回転しボールを蹴り出す少年。それに対して円堂は手のひらを天に掲げた。

「ゴッドハンド!!」

必殺技同士の衝突、勝ったのはゴッドハンドだ。

「君の勝ちだね、素晴らしい技だ。アメリカの仲間にも見せてやりたいよ」

「アメリカでサッカーやってるのか？」

「ああ、ジュニアチームの代表候補にも選ばれたんだ」

「聞いたことがある。将来代表入りが確実だろうと言われている天才日本人プレイヤーがいると」

「なんだかすごい人らしい。確かにドリブルのテクニクも見事だったしシュートもゴッドハンドと競り合えるくらい強力だった。」

「みんな何してるの?」

遅れて木野と土門が来た。すると突然少年は木野に抱きついてしまった。

「お、おいお前!」

「久しぶりだね、秋。俺だよ」

「…一之瀬くん?」

どうやら一ノ瀬は木野と土門のアメリカ時代の友人らしい、交通事故で亡くなったことになっていたが実は生きていたのだ。

そしてグラウンドでは鬼道と互角の勝負をする一之瀬。

「鬼道と互角…いやそれ以上とはな」

「凄いですね一之瀬くん」

「お前もやってみたらどうだ?」

「うーん、鬼道君でも取れないとなると私には難しいかもです」

日本でも有数のプレイヤーである鬼道でも取れないとなると俺では無理だと思う。あ、でも千羽山戦のあれを使えたらいけるかも?

「よおし、今度は俺とPK対決だ!」

そう言つてゴール前に立つ円堂。それから1時間以上も対決を続けている。勝負はほぼ互角で両者負けず嫌いなのでなかなか終わらなかつた。





「母ちゃん、今日友達来るんだ。夕飯いっぱい作って！」

「ちよつと守!?!どこ行くの?」

「特訓!明日までにトライベガス完成させるんだ、夕飯までには戻る!」

帰るなりそう言い残して円堂は飛び出してしまった。残された温子さんはため息をこぼしている。ちなみにトライベガスというのは円堂が一之瀬と土門と一緒に練習しているシュート技。一ノ瀬が明日にはアメリカに帰るというので絶対に完成させると張り切ってるのだ。

「まったく、あの子ったら…」

「あはは、アメリカからすごい上手い選手が来ててテンション上がってるんだと思います。私も手伝いますから」

「そう?いつも悪いわね。じゃあ買い出しお願いしますようかしら」

買い物メモを受け取り私は近くのスーパーへと向かう。すると道中、見知った人物と遭遇した。

「雷門さん?」

「あら 天川さん？こんなところで何してるの？」

「私は夕飯のおつかいです。雷門さんは？」

「お父様のお見舞いに行つて、帰りにスーパーに寄ろうと思つてたの」

へえ、お嬢様でもスーパーとか行くのか。ちよつと意外だな。

「雷門さんがスーパーなんて、何かあつたんですか？」

「お父様が事故にあつて、考えたの。いつまでも人に頼つてはいられないつて。だからまずは自分で夕飯を作れるようにしようと思つたの」

彼女なりに色々考えてるらしい。すごく立派だと思ふ。

「良かったらご一緒していいかしら？スーパーつて初めてだからよくわからなくて」

「もちろんです。2人の方が楽しいですし」

数分後、スーパーに到着した。

「ところでなにを作るか決まつてるんですか？」

「いいえ、まだ何も」

まあ初心者ならカレーとかが無難なところだろう。切つて煮るだけだから簡単だし。

「それなら私にも出来そうね」

そう伝えると喜んで了承してくれた。自分が買うものだけササツとカゴに入れて夏の買いものに付き合う。

「ところでカレーってどうやって作るの？色々な種類のスパイスを混ぜ合わせると聞いたことがあるけど」

「え？いや普通はルーを使って作るんじゃないですか？さすがにスパイスの調査からはプロでもないことやらないと思います」

「ルー…ってなに？」

ああ、これは思ったより大変そうだな。その後も野菜をダンボールごと買おうとしたり、肉の鮮度を確認するとか言って包装を破ろうとしたりしてたけど何とか買いい物を終えて店から出ることができた。

「ありがとう、早速帰って作ってみるわ」

「どういたしまして、でも作る時は誰かと一緒に作った方が…」

「どうして？」

「いえ、大したことじゃないんですけど…ほら、やっぱり誰かと料理した方が楽しいじゃないですか！」

「それもそうね、考えてみるわ」

この人に1人で料理させたらまずい。下手したらボヤ騒ぎになりかねない…バトラーさん、頑張れ。

「じゃあ、私は帰りますね。また明日、学校で」

「ええ、また明日」

夏美と別れて1人夜道を歩く。歩き慣れている道のはずなのに今日はなんだか寂しく感じた。



次の日、円堂達はトライベガサスの練習に励んでいた。だが、中々完成しない。この技は3人が交差することでその1点にパワーを集中させ放つ技らしいのだが、その交差する位置を合わせるのに苦戦しているみたいだ。

すると突然木野が前に出た。

「木野さん？」

「私が目印になる。3人が1点で交差できるようにポイントに立つわ」

「でも、失敗したら怪我どころじゃ…」

「大丈夫、円堂君達を信じてるから」

「秋…よし、頼んだ」

でも、もしも万が一失敗したら…こういうのは適材適所だ。失敗しても怪我をする可能性が低いのは…

「それなら私が目印になります」

「羽花ちゃん!？」

私の提案に驚く木野。すると鬼道が淡々と口を開いた。

「確かに、天川なら仮に失敗したとしてもかわすのは容易だろう。リスクを減らすという点では適任かもしれない」

「でも…」

「大丈夫ですよ、それに絶対成功するんですよ?」

「ああ、必ず決めてみせる!」

結局俺がポイントに立つことになった。普段からイナビカリ修練場で鍛えてるから多少怪我することはあっても大事にはならないだろうし、それに

(私なら怪我したところで別にいいからなあ…)

考えているうちに3人が迫ってきた。身構えるとほとんど同時のタイミングで俺の横を通過し、そして彼らが交わったところからは青い炎が吹き出していた。それはすぐにペガサスと形になり、上空に舞い上がる。そして円堂達も飛び上がり同時にボールを押し出した。

「「トライペガサス!!」」

どうやら成功したようだ。シュートは勢いを失うことなく無人のゴールに突き刺

さった。

「できたよ！一之瀬！」

「ああ、やったな円堂、土門！」

抱き合つて喜びあう3人。時計を見ると一之瀬がアメリカに帰る時間の30分ほど前、本当にギリギリの完成だった。

「羽花、ありがとう！トライベガスが完成したのはお前のおかげだ！」

「いえ、私はただ立ってただけですよ。でも、成功してよかったです」

「度胸あるね。天川羽花、覚えておくよ」

そう言い残すと彼はアメリカに帰っていった。

そして夕方、雷門グラウンドで俺達は空を見上げていた。

「あの飛行機かな？」

「多分ね」

「一之瀬！また一緒にサッカーやろうぜ！」

「うん、やろう！」

空に叫んだ円堂の言葉に返答が帰ってきた。一之瀬の声そっくりだ。……ん？

「俺、こんなに熱くなったのは初めてだ！だから帰れない、もう少しここにいる！」

なんと一之瀬の雷門加入が決まった。物凄い行動力だ。だけど彼みたいなプレイ

ヤーが加わってくれるのは心強い。

「みなさーん、次の対戦相手が決まりました！」

「音無さん？」

その時、息を切らしながら音無が走ってきた。そして一瞬豪炎寺に目を向けたと思  
うと続けた。

「次の対戦相手は……木戸川清修です！」

それを聞いた瞬間、みんなの視線が豪炎寺に集まった。彼は驚いた顔をしたが、すぐ  
にどこか悲しげな顔をして俯いてしまった。

## 孤独な兎

目が覚めると私は何も無い真つ暗な空間にいた。

辺りを見回すも、目に入るのは暗闇のみ。

すると突然白い人影のようなものが現れた。体格から見て男性、高校生くらいだろうか？影は光を放ち、佇んでいる。

『いつまで俺のフリを続けるつもり？』

どこからともなく聞こえてきた。恐らく影の声だろう。

「…!?…だって、私には…」天川羽花”には何も無いから」

『俺だった時の記憶なんて殆どないんだろ？ならそこまでこだわる必要はないんじゃない？』

何となく影の正体がわかった。あれは、私だ。昔の、この世界に来る前の。

『君は何がしたいんだ？』

その言葉が頭に響く。何がしたい？私は…：わからない。昔からずっとそうだ。好きな食べ物も、趣味も、音楽も何もかもわからない。だから雷門に来た。ここなら自分を見つけられるかもしれない、そう思って…



「わからないよ、私は空っぽだから…」

『空っぽ……ね』

「でも雷門で守君と、皆とサッカーをして楽しかった。皆が私を必要としてくれるのが嬉しかった」

…  
そう、雷門で初めて私は独りじゃないと実感できた。何かを楽しんでいると思えた。だけど

「だからこそ、それを失うのが怖い…また独りぼつちに返るのが、堪らなく怖い…」  
『……』

「だから私は強くなkachやいけない。皆の役に立って、必要とされて……独りに戻らないように…その為にあなたが必要な。空っぽの私を埋めてくれるあなたが」

影は何も言わず、ただ私の言葉を聞いていた。しばらく沈黙が続く、そして影はこう言ってきた。

『君は何もわかってないよ』

「え……？」

『彼らは君のことを必要だなんて思っていない』

「…ツツ!?…そんなことない、皆私を必要だなんて思ってくれてる!」

影の言葉に私の心がささくれ立った。必要と思っていない?そんなことない…そんな

こと、あつていいはずがない…

『フフ、ごめんね。別に怒らせるつもりはないんだ…。君はまるで兎だね。独りだと寂しくて何もできない、可哀想な兎』

怒らせるつもりはないと言っておいてその言葉は嫌に挑発的だった。私はそいつを睨みつけた。

「結局、何が言いたいの？」

『君は大事なことを見落としてる。それに気づかない限り、君は永遠に孤独だろうね』

「見落としてる…？」

『ああ、とても単純で簡単なことさ。最も今の君では見つけるのは難しいかな？』

言ってる意味がわからず困惑する私をよそに彼は言葉を紡ぎ続ける。

『俺が答えを教えてもいいんだけど、多分それじゃ意味が無い。これは君自身で解決すべき問題だからね。俺は所詮、傍観者にすぎないんだよ』

『まあヒントくらいは出してもいいかな。もつと彼らの言葉に耳を傾けるといい。そうすれば自ずと答えは出るはずだよ』

ペラペラとまるで台本でも読んでいるかのように語る彼の言葉を、私はただ黙って聞いているしかなかった。すると辺りに、私を呼ぶ声が響いた。この声は…：…守君？

『おっと、王子様のお迎えのようだ。フフ、目覚めのキスでもしてくるのかな？…冗談

だよ、そんな顔しないでくれ』

自分でもどんな顔をしているかわからないが彼の反応から察するにいい顔ではないだろう。ここに鏡がなくてよかった。

『それじゃあまたね。答えが見つかることを祈ってるよ』

その言葉と共に私の視界は白に包まれ、次に目を開けるとそこには見慣れた天井と人物が写っていた。

「羽花、大丈夫か？うなされたみたいだけど」

「守君……？はい、大丈夫です。少し悪い夢を見ていたみたいです」

「そうか？ならいいけど。朝ごはん出来たつてさ、早く降りてこいよ」

こうして起こされるのは初めてかもしれない。いつも決まって俺が円堂を起こしていたから。

部屋から出ていく彼の後ろ姿を眺めながら、俺はさっきの夢で聞いた言葉を思い出していた。

「俺は……私は……必要なのかな……」

その呟きは誰の耳に入ることなく、やがて消えていった。



「よし、ダイレクトで裏に繋いでシュートだ！」

鬼道の号令で皆が一斉に動き出す。やはり彼がいると練習の幅も広がるのでより実践的な練習ができるようになっていた。

鬼道が後ろの一之瀬にパスを出すと、彼はそれをダイレクトで前線に蹴り出した。それを染岡がダイレクトでシュート、逆をつかれた円堂だったがなんとか切り返し、ボールを弾いた。弾かれたボールははるか上に飛び上がった。

よし、あれなら取れる。目を閉じて身体に意識を集中し、精神を統一する。段々身体が熱を帯びてくるのを実感し、目を開けると俺の身体は黄緑色のオーラを纏っていた。

力いっぱい踏ん張り跳躍すると、俺は普段では絶対に届き得ない高さまで飛び上がり、ボールを足に収める。そして一度着地するとボールを蹴りあげ再び跳躍する。ボールは黄緑色の光を放つ月と重なり、そして一体化した。

「ムーンフォースラビット!!」

それをオーバーヘッドで蹴り落とすと、いくつもの星屑へと姿を変え降り注ぐ。それらは何回も地面で跳躍した後、一つの強力なシュートとなった。

「ゴッドハンド!!」

必殺技同士の衝突。ゴッドハンドがシュートを捉えるも徐々にひび割れ、次の瞬間に

砕け散りシュートはゴールに突き刺さった。

「くっそお！ やっぱすげえな羽花は！」

「その前のダイレクトもバツチリでしたね、一之瀬君」

「やっぱりすごいや、一之瀬のボールコントロールは」

「サンキュー！」

千羽山戦の時の感覚をだいぶ掴めてきた。これなら十分に実践で使えるはずだ。

「ちよつと聞いてくれるかしら？」

休憩中、夏美が皆に声をかけた。視線が集まるのを確認した彼女は手に持った紙を見ながら口を開いた。

「準決勝の結果が届いたわ。決勝進出は…世宇子中よ」

「やはり出てきたか」

「鬼道、決勝でもう一度世宇子中と戦うんだろ？ 準決勝は絶対に負けられないぞ！」

「ああ、もちろんだ！」

世宇子中、やっぱり勝ち進んできたか。帝国を大差で下したチームだから不思議ではない。

「よし、皆！ 頑張ろうぜ！」

「「おう!!!」」



練習後、俺と円堂、豪炎寺、鬼道の4人は公園で作戦会議をしていた。

「相手はオフエンス重視で攻めてくるだろう、円堂は守備の確認を徹底してくれ」

「おう、デイフェンスは忙しくなりそうだな！」

「こちらの攻撃はカウンター主体になるだろうな。豪炎寺、天川、攻守の切り替えのタイミングに注意してくれ」

「はい」

「……ああ」

メモ帳片手に注意事項等を話す鬼道。彼の言葉に返事はしたものの豪炎寺はどこか元気の無い様子だった。彼は確か元々木戸川清修にいたはず、元チームメイトとは戦わずらいのだろう。

「よし、作戦会議は一旦休憩だ！来いよ！」

「円堂！どこへ行く気だ！」

そんな豪炎寺を見かねてか、円堂が急に走り出した。あの方向ってことは、駄菓子屋か……？

どうやら当たりだったようで彼は駄菓子屋の前で歩みを止めた。

「駄菓子屋？」

「なんだよ、来たことないのか？」

そう言つて中に入る円堂、俺もそれに続く。

「おばちゃん、こんちわ」

「お邪魔します」

「おや、サッカー少年にサッカー少女、いらっしやい」

この駄菓子屋には円堂に連れられて何度か来たことがある。今では店主のおばあさんに顔を覚えられるくらいになった。

「ええと、なんにしようかな」

子供達と一緒にお菓子を選ぶ円堂を眺めつつ、俺も適当なお菓子を見繕う。すると、店内に変な髪型をした3人の男達が入ってきた。

彼らは店に入るや否や、子供達の列に我が物顔で割り込んでしまった。

「お前ら、順番守れよな！」

「うっせえ！」

「3対1で俺達の勝ちい！みたいな」

「人数の問題じゃないだろ！」

「いいえ、人数の問題です」

「俺達は常に三位一体なんだよ」

何この人達……てか三位一体だったら結局一人分だろ。すると彼らは店内を覗き込んでいた豪炎寺を見つけると一齐に彼を睨みつけた。

「豪炎寺！」

「久しぶりだな、決勝戦から逃げたツンツン君！」

「この変な人達豪炎寺君の知り合いですか？付き合う人は選んだ方がいいですよ」

3人を指さして問いかけるが豪炎寺は黙ったまま答えなかつた。

「誰が変な人達だ！俺達は、武方勝！友！努！3人合わせて、武方三兄弟!!!」

ええ……、なんか変なポーズとってるしガチの変態じゃん。

「俺達は豪炎寺を超えたと証明するために来た！」

「そいつが決勝から逃げなければ、俺達は去年のフットボールフロンティアで優勝できただけぞ！そいつは逃げ出した！だからそいつを倒して証明する！豪炎寺なんかいなくて俺達は勝てるって！」

「ちょうど待てよ、豪炎寺はあの時……」

「いいんだ円堂、事実は変わらない」



そういうことか、けれど豪炎寺側にも事情がある。前に聞いたが豪炎寺はその日妹が事故にあつて決勝どころではなくなつてしまつたのだ。しかしそれを知らない彼らはずつと豪炎寺を恨んでいたというわけだ。

「さあ、勝負だ豪炎寺！」

「悪いがその気はない」

彼らの挑発など意を介さず豪炎寺はその場を去ろうとする。

「また逃げるのか、やっぱりお前は臆病者の卑怯者だ！」

その時3兄弟の一人、勝と名乗つた彼がカバンからボールを取り出し、豪炎寺に向けてシュートを放つた。しかしこれは円堂がギリギリのところで弾いた。

「もう我慢できない、その勝負俺が豪炎寺の代わりに受けてやる！」

「大体豪炎寺君一人相手に三人がかりで勝つて嬉しいですか？」

結局豪炎寺の代わりに円堂が勝負することになり、俺達は河川敷に移動した。

そして円堂がゴール前に、武方三兄弟がハーフラインに立つ。

「さあ、武方三兄弟の力、見せてあげましょうか!!」

そう言うのと彼らはいっせいにゴール前に前進、そして空中ボールを蹴り上げた。そして緑髪の努だっけ? が青い炎を足に纏わせて回転した。

あの動きはまさか…

「あれはフアイアトルネード!?」

「いや回転が逆だ!」

「これがフアイアトルネードを超えた俺達の必殺技! バックトルネード!!」

回転の勢いそのままにかかと落としてボールを蹴り落とした。青い炎を纏わせてボールがゴールへ向かう。

「爆裂パンチ!!」

対する円堂は拳を何度もシュートに打ち付ける。そしてトドメと言わんばかりの一撃で弾き返した。しかし

「バックトルネード!!」

なんと勝と友までもがバックトルネードを撃ってきた。当然止められるはずもなくそれらはゴールに突き刺さる。この人達サッカーのルール知らないの?

「はあい、ちよつとゴール奪ってみました。みたいな?」

「待てよ、3本同時なんて止められるわけないだろ!」

「落ち着いてください守君。彼らを見てください、とても頭が悪そうでしょう? きつとサッカーはボールを3つ使うと思いい込んでるんですよ、可哀想に…」

「誰の頭が悪いつて!!」

さすがに俺もイラツときてつい挑発してしまった。誰だつてチームメイトを侮辱さ

れば怒る。

「なんか今日口悪くないか羽花……」

「私だってチームメイトを馬鹿にされたら怒ります」

「なるほど、じゃあ一本なら止められるんだな？」

不敵な笑みを浮かべる三兄弟。もしかして秘策か何かがあるのか？

「ストップ、ストップだ！喧嘩はまずいぞ円堂！」

すると堤防の方から風丸や一ノ瀬、宍戸達が走ってきた。

「喧嘩ってなんの事だ？」

「だって勝負だとか、受けてたつとかすっごい喧嘩っぽかったじゃないですか!」

「サッカーの勝負だよ」

どうやらさっきの武方三兄弟とのやりとりを喧嘩だと勘違いしてたみたいだ。する

と堤防沿いの道路に見慣れた黒い車が停車した。

「ほんと、人騒がせな人達ね。ま、いつもの事だけど」

降りてきたのは当然、夏美だ。

「なんかギャラリーも増えてきたみたいだし、そろそろ見せてやるか」

「「武方三兄弟、最強の必殺技を!!」」

そう言うのと彼らは一斉に走り出し、勝がボールを蹴ったと思うとそれを努が上に蹴り

上げ、勝の肩を踏み台にジャンプした友が空中のボールをシュートした。

「トライアングルZ!!!」

そして最後に変なポーズを決める3人。しかしそのヘンテコな光景とは裏腹にシュートは物凄い威力でゴールを襲う。

「爆裂。パンチ!! ツツツ!!?ぐわあ!!」

ボールに拳をぶつける円堂だが一発目で吹き飛ばされ、顔面にめり込んだボールごとゴールへ押し込まれてしまった。

その威力に俺達全員は息を呑むほど驚いていた。：準決勝も一筋縄ではいかなそう  
だ。

## 焦燥の兎

準決勝当日、俺達はベンチに集まって作戦を練っていた。

とはいえ、ほとんど決まっているようなものだ。木戸川清修の特徴は武方三兄弟を中心とした攻撃的なサッカー。なのでこちらはカウンターを狙う、先日鬼道が言っていたのと同じだ。

「奴らのトライアングルZは厄介だが、三兄弟が揃わなければ撃つことはできない。ゴール前では特に注意してくれ。だが万が一の時は頼んだぞ円堂」

「ああ、この前は油断してたけど今日は入れさせないぜー」

三兄弟の必殺技、トライアングルZ：威力なら皇帝ペンギン2号やイナズマー号落としより上に見えた。あれを撃たれたらさすがの円堂でも止めるのは難しいだろう。

「よし、行つていー」

「はー」

響監督の号令でスタメンがフィールドに入り、それぞれポジションについた。

F W 豪炎寺、染岡

M F 一之瀬、鬼道、羽花、松野

D F 風丸、壁山、土門、栗松

G K 円堂

控え 半田、少林寺、宍戸、影野、眼鏡

そういえば一之瀬が加入したことによりベンチメンバー含めて16人になった。準決勝まで人数足りてなかったのもどうかと思うけど…

「今日は逃げなかつたみたいじゃん？ ツンツン君」

「…俺はサッカーから逃げたりはしない」

「どうだか？ まあいい、どの道勝つのは俺達だ！ みたいなの？」

三兄弟は性懲りも無く豪炎寺を煽っている。まったく…彼にそういった挑発は効かないとわからないのかな？

ビーーーー!!

試合開始のホイッスルが鳴り響いた、するといきなり三兄弟が仕掛けてきた。

「な!？」

「マックス、天川！ 中央を塞げ！」

鬼道の指示でドリブルのコースに立ち塞がるが、あと一歩間に合わずパスを許してしまった。

「努！」

空中に上げられたボールに三兄弟の内、緑髪の努が青い炎を足に纏わせながら回転し接近する。

「バックトルネード!!」

かかと落としにより放たれたシュートはゴール前の円堂めがけて飛んでいく。…あのシュート、前とは威力が……!?

「守君、気を付けて！」

「おう！爆裂パンチ!!」

ボールに叩きつけられる無数の拳、前はこれで弾けていた。しかし…今回はシュートの勢いが落ちる気配がない。

「ぐ、前とは威力が……!?!?ぐわあああ！」

「「よつしやあああああ!!」」

ゴール…。バックトルネードが爆裂パンチを打ち破りゴールネットを揺らしてしまった。

『ゴオオオオル!!木戸川清修、開始早々先取点を取ったあああ!!』

「どうなってるんだ…この前のバックトルネードとは桁が違う」

「なあに言っちゃっての？本番前に本気だすわけないじゃん、みたいな？」

「この前はデモンストレーションにすぎませんよ」

「これでわかったか？」

「俺達の力!!」

…なるほど、この前は手加減してたつてわけね。円堂もゴットハンドを使ってなかったから本気ではないとはいえ、この失点は痛い。後あいつらの喋り方ムカつく!

雷門ボールで試合再開、しかし先取点を取つて勢い付いた木戸川清修の猛攻に防戦一方な時間が続く。

「バックトルネード!!」

再び放たれるバックトルネード、対する円堂はパンチではなく手のひらを掲げ、黄金の手を作り出す。

「ゴッドハンド!!」

衝突の末、ゴッドハンドが危なげなく勝利した。これには武方三兄弟も悔しそうな表情を浮かべている。

「よし、反撃だ!羽花!」

「はい!」

飛んできたボールを胸トラップで収める。チャンスだ、三兄弟に流され他の選手達も上がつてきている。俺は意識を集中する、内に眠る力を引き出すかのように精神を統



一。すると俺を囲うように黄緑色のオーラが……………現れなかった……………  
「……………え？」

予想外の出来事に思わず間拔けな声が漏れる。そうしてもたついている間に敵ディフェンスに囲まれてしまった。

「ハリケーンアロー!!」

「……………!?きやあああ!」

必殺技をまともにくらってしまい宙に投げ出された。受身を取ることもできず、背中から落下する。

「ツツツ……………!?なんで…」

ボールを奪われた事実よりもオーラを纏えなかったことに驚愕する。…練習では一回も失敗しなかったのになんでこんな時に……………!?

背中の痛みには耐えながら起き上がり、ゴールに目線移すと敵のシュートを円堂が弾いていた。俺が奪われたせいでシュート許してしまったようだ。

「……………もう一度」

依然として木戸川清修のペースは続く。特に武方三兄弟は守りなど捨てたとわんばかりの勢いだ。

「オラオラ行くぜえ!」

どうやら木戸川清修は武方三兄弟以外でシュートを打つ気はないらしい、だから俺はそこを突いた。

「ワンダートラップ!!」

努からボールを奪うとすぐに勝が取り返しに来た。

「この前は随分好き放題言ってくれたじゃん?」

「それはこつちのセリフです。とにかく、あなた達には負けません」

強めの言葉を交わすと俺達は衝突した。

「アグレッシブビート!!」

勝を抜き去り弾き飛ばす、攻撃力は凄いが守備力はそうでもないようだ。そのまま意識を集中し、再度オーラを出すのを試みる。…が

「…………ツツツ……………なんで出ないの……!」

さつきと同じくやはりオーラは出ず、ただ無防備に突っ立ってるだけに終わってしまった。そんな隙だらけな状態を見逃してもらえないはずもなく、スライディングでボールはゴールラインの外に出されてしまった。

そもそもあのオーラはなんなのか?そこからわからずじまいだ。だがあの力があれば木戸川清修や世宇子にも勝てる、みんなの役に立てると思っていた。しかし実際はどうだ?力は満足に引き出せず逆にみんなの足を引っ張っている。

「ダメだ……このままじゃ……ダメなんだ……」

「天川？大丈夫か？」

ハツとして振り返るとそこには鬼道がいた。彼は怪訝そうな顔つきでこちらを見ている。

「ごめんなさい、ちよつと考え事してて」

「ならいいが、豪炎寺と染岡には伝えたがお前達にはトライペガサスを撃つための囷になつてもらいたい。試合が再開したらすぐに上がつてくれ」

「はい、わかりました」

ダメだ、今は試合に集中しないと……。雷門ボールのゴールキックで試合再開、円堂がボールを土門に預けるとチャンスとみた三兄弟がすぐに奪いに来る。

そのタイミングで俺達3人は前線に駆け上がる、そして敵選手がこちらに気を取られた隙に土門は一之瀬にパスし、自らも円堂と攻め上がる。

3人が走りながら交差すると、その地点にエネルギーが集中しそれは天翔るペガサスへと姿を変えた。

「「トライペガサス!!」」

3人によつて放たれたシュートは巨大なペガサスと共に木戸川清修のゴールへと襲いかかる。

「ひいひい！」

その迫力に相手キーパーは動くことができず、ゴールネットが激しく揺れた。

『なんとキーパー円堂も加わった攻撃で雷門が同点に追いついた！』

同点ゴール、ベンチメンバー含め全員が歓喜の声をあげる。反対に相手はトライペガサスの威力とゴールを許してしまった事実で落胆と驚愕の表情を浮かべている。

「ただ俺は素直に喜べずにいた。この試合、まともに貢献できていない。このままじゃダメだ。」

「どうする……？」

「どうしたら……？」

「天川、行ったぞ！」

思考を巡らせている内に試合が再開していたようだ。鬼道の言葉で我に返った時には既に武方三兄弟に抜かれた後だった。

「……しまった!？」

「試合中に考え事なんて余裕じゃん？」

「すぐに後を追うがだいぶ距離を離されていたので追いつくことができない。」

「すると彼らの前に壁山が立ち塞がった。」

「通さないっす！ザ・ウォール!!」

文字通り壁となり三兄弟を吹き飛ばす。そしてボールは彼の足元へ。

「壁山君！ボールを私に！」

「は、はいっす！」

「…!?待て、天川！」

鬼道の声が聞こえた気がしたが今の俺には届いていなかった。頭の中にあるのはみんなの役に立たないといけない——それだけだ。

ボールを受け取りそのままがむしゃらにドリブルで相手を抜き去る。1人、2人、3人、だがゴールを目の前にしたところでパンダナをつけたディフェンダーに阻まれてしまった。

「行かせるか！スピニングカット!!」

彼が足を振るうと目の前に衝撃波の壁が発生し、俺は弾き飛ばされてしまった。

またボールを奪われた…。まだだ…。こんなままで終わる訳にはいかない。私は皆に必要だと思ってもらうためにも…。こんな所で終わる訳にはいかないんだ！

奪われたボールはすぐに前線に送られる。だがそれを空中でパスカット、そしてそのままオーラを出すことを試みるが…

「クツツソ…！なんで!?なんで…できないの…!?」

再びボールを奪われる。そしてそのボールは武方三兄弟へ。

「そろそろ見せてやろうか！」

「僕達三兄弟最強の！」

「必殺技を！」

攻撃がダメならせめて守備で……その一心で必死に走り、何とかゴール前にたどり着いた。

「三兄弟をフリーにするな！ マックス、天川、土門でそれぞれ当たれ！」

「私が止める！」

「な……！？ 天川、待て！」

無我夢中に三兄弟に突っ込むが、3対1で勝てるわけもなくあっさりパスを回され突破を許してしまった。

「へ、自分からチャンスをくれるなんていい心がけじゃん？」

フリーになった勝から友、そして努へとパスがダイレクトで繋がる。その過程でボールにはオレンジのパワーが蓄積され友がシュートを放つ頃に強力なエネルギーの塊になつていた。

「「トライアングルZ!!」」

最後の決めポーズと共にシュートは加速する。

「ゴッドハンド!!」

円堂の右手から出る黄金の手がシュートを遮る…が、徐々に円堂が裏に下がっている。堪らず左手も使う彼だったがそれでもなおシュートのパワーが上。そして耐えきれなくなりゴッドハンドが碎けると、彼はシュートごとゴールへねじ込まれた。

「そんな……私のせいだ…」

私はその光景を自責の念に駆られながら、ただ眺めていることしかできなかつた。

## 慈愛

『ゴオオオオオルツツ！武方三兄弟の大技がゴッドハンドを粉砕！木戸川清修勝ち越しだア！ここで前半終了、雷門は後半で巻き返すことができるのか！』

ハーフタイム、2点目をとって意気揚々とベンチに戻る木戸川清修イレブン。それとは正反対に雷門イレブンの表情は暗かった。点を入れられたのだから当たり前なのだが円堂はその中でも群を抜いて落ち込んでいる様子の羽花が気になっていた。

前半から彼女のプレーはどこかおかしかった。簡単に言えば独りよがりなプレーが多かったのだ。元々どちらかといえば個人技主体の選手ではあったが、今回の試合はそれがあまりにも目立っていた。加えていつもの彼女の様なプレーのキレも無かった。前回の千羽山戦以降練習で度々見せていた不思議な力も今日は発動しなかった。

「羽花、大丈夫か？どこか具合でも悪いのか？」

「……………大丈夫です……………ごめんなさい」

気になった彼は率直にそう問いかけた。ベンチに座って俯いている彼女はその間に数秒の間を開けて俯いたまま答えた。

明らかに普通ではない様子の彼女に疑問を抱くが、本人が大丈夫だと言っている以上



追求することもできない。

すると羽花の目の前に響木監督がやってきた。

「天川、後半は下がれ。少林寺と交代だ」

その言葉を聞いた瞬間、羽花はハッと顔をあげた。その表情は焦燥に駆り立てられているかのようだ。

「……！待ってください……私、まだやれます！」

「ダメだ、今のお前は冷静さを欠いている。そんな状態で試合を続けてもチームの足を引く張るだけだ」

言葉を濁すようなことはせず、事実だけを淡々と述べる響木監督。一応の抗議をしたものの羽花は聞き終えるとまた俯いてしまった。

「羽花、大丈夫だ！俺達がお前の分も戦うさ！」

羽花の肩に手を置き、励ます円堂。しかし彼女はその手を振り払ったと思うと両手を肩に回し、涙を流しながら震えてしまった。

「ああ……ごめん………なさい……ちゃんとやるから………役に………立ちますから………殴らないで………」

「………羽花!? どうした! 大丈夫か?」

まるで何かを怖がっているかのように顔を真っ青にして震える彼女を見て、ただ事

じゃないと察した円堂が声をかけるが、彼女はただごめんなさいと呟くばかりで返答はなかった。

異変に気づいたチームの面々が、彼女を中心に円を作った。皆心配そうな表情を浮かべているが、その中で夏未だけはなにか察したようだった。

「天川さん、しつかりして！大丈夫よ、ここにあなたを傷つける人はいないわ！」

「……どういふことだ？夏未」

「詳しいことは後で。とにかく天川さんを医務室に連れていくわ。円堂君、手を貸して」原因はわからないが過去の記憶がフラッシュバックしてしまったのだろう、と夏未は推測する。担いだ肩が彼女には嫌に重く感じた。夏未が非力なものもあるが、今の羽花は体に力が入っていない状態だった。なんとか医務室までたどり着き、ベットに羽花を寝かせる。

「夏未、羽花のことなにか知ってるのか？」

いつもは鈍い円堂だが、さすがに今回は勘づいたようだ。夏未は少し考えた後、もう隠すことはできないと判断した。

「ええ、本当は口止めされていたのだけれど……こうなった以上皆にも知っておいてもらった方がいいかもしれない……一旦皆のところに戻りましょう、そこで話すわ」

ベットの羽花に視線を向ける、どうやら寝てしまったようだ。

その寝顔は先程までの絶望したかのような顔とは打って変わって穏やかだった。それを見て少し安心した2人はゆっくりと医務室を出てベンチへと戻った。

「夏未さん、羽花ちゃんは？」

「だいぶ落ち着いたみたい、今は眠っているわ」

ベンチに戻った夏未に質問した秋が安堵のため息をこぼす。気持ちは皆同じだったように暗かった顔に少しだけ光が戻った。

「それにしても一体どうしたんでしよう？今日の羽花さん、なんだか様子がおかしかったですし……」

「……雷門夏未なら何か知ってるんじゃないか？」

鬼道の言葉で、全員の視線が夏未に集中する。

「流石、鋭いわね……皆、天川財閥という企業を知ってるかしら？」

「日本でも有数の金融企業だな。俺の父の会社とも取引があったはずだ」

「でもそれがなにか……！天川ってまさか……」

「そう、天川さんのご両親の経営していた会社よ」

風丸の疑問に夏未が肯定の言葉で返した。一同からどよめきの声がかかる中、夏未は淡々と続けた。

「でも10年以上前に交通事故で……両親は亡くなってしまったの。当時1歳だった天川

さんを残してね。天川さんは会社の経営を引き継いだ親戚に引き取られたのだけれど……そこで酷い仕打ちを受けた……学校へは通わせてもらえず、隔離された小屋に閉じ込められて、毎日のように暴言を浴びせられ、時には暴力も振るわれていたそうよ」

その事実にとよめきの声がより一層強くなる。

「それじゃあ、天川のあの様子は……」

「原因はわからないけど、恐らくその当時の記憶を思い出してしまったの。フラッシュバック……と言えはわかるかしら」

羽花の様子は尋常ではなかった。あんなことになるまで辛い思いをしたのだろうか、いたたまれない気持ちになる。

「……じゃあ、羽花が俺の家に居候してるのは……」

「生活費を出す代わりに二度と財閥には関わらない、そういう契約だそうよ。でも中学生が一人暮らしなんてできない。だから彼女の従者の方の知り合い、円堂君のお母様の家に住むことになった」

羽花が円堂の家に住んでいることを知らない面々は驚愕した顔で円堂を見つめるが、当の円堂は真剣な表情だ。羽花がなんで自分の家に来ることになったのか円堂は知らなかった。女子中学生が知り合いとはいえ赤の他人の家に住むなんて滅多にない。それとなく聞いたこともあるが、要領を得ない返事で流されてしまった。

「羽花……ずっと悩んでたのか……俺がもっと早く気づいてれば……!」

同じ家に住んでいたのに気づいてやれなかった……そんな悔しさを円堂が口にした。

「円堂、お前のせいじゃない。俺達も気づけなかった、皆気持ちは同じなんだ」

「風丸……でも……」

「とにかく今は試合に集中だ、天川の為に絶対勝とうぜ!」

「染岡……ああ、そうだな!」

彼女の問題を解決する方法はわからない、だがこの試合は羽花の為に絶対勝つ。

チーム全体の気持ちが一つになるのを感じた。

「夏末、羽花についてやってくれ。頼んだぞ」

「ええ、元からそのつもりよ。そっちも頑張ってるね」

主審が後半開始を知らせる笛を鳴らした。木戸川清修は既に準備を終え、それぞれポ

ジションにいる。

「よし皆!羽花の為に絶対勝つんだ!」

「「おう!!!」」



目を覚ますと、俺はベッドの上に横たわっていた。見慣れない場所だが察するに恐らくフットボールフロンティアスタジアムの医務室だろう。

天井近くに取り付けられたテレビを見ると、試合はもう終了間際だった。3対3の同点、だが雷門の勝利は確実だろう。なぜなら今まさにフィールドでは、ペガサスから進化したフェニックスが羽ばたいているのだから。

「……私なんていなくても勝てる…か、」

認めたくない現実、だがそれは紛れもない事実だった。自分は今日の試合足を引つ張っただけ……

「目が覚めたのね、よかった」

扉が開く音がして、夏末が入ってきた。彼女は俺を見るなり安堵の表情を浮かべた。  
「……ごめんなさい、迷惑かけちゃって…」

「いいのよ、仲間だもの。皆心配してたわよ」

そう言つて隣に座る夏末、するといきなり俺の手を握りしめた。その行動に戸惑い、顔を上げると彼女はこちらに寄り添うような、そんな優しい顔をしていた。

「ねえ、教えて。あなたは何を考えているの？何を思っているの？」

「雷門さん……」

「辛いことや苦しいことを一緒に乗り越えるのが仲間よ、私にも一緒に背負わせて」

慈愛に満ちたような目で真つ直ぐこちらを見つめる彼女。その目を見ていると、いつの間にか勝手に口が開いていた。

「…小さい頃からずつと言われてきた……お前は要らない、役立たずだつて。だから怖い……皆にもそう思われるんじゃないかつて……また独りになるんじゃないかつて……強くならなきゃいけない、皆に必要としてもらえるように。だけど……今日の試合、皆の足を引つ張るばかりで全然役に立てなかった……」

そこまで言うと、目から涙が零れてくるのを感じた。体がガタガタ震える。ダメだ……また思い出してしまう。あの頃の記憶、まだ鮮明に覚えてる。

「……!?……え?」

「大丈夫、大丈夫よ。私が、皆がついてるから」

次の瞬間、私は夏末の胸の中にいた。息が止まる程ギュツと抱きしめてくる彼女。気づけば、泣いていた。大粒の涙を流しながら、彼女の胸の中で溜まった感情を爆発させるかのように。悲しみと苦しみと、それと安心。そんな感情がグチャグチャになつて自分でもわからなかった。彼女は何を言うでもなくただ抱きしめてくれた。たまに頭を撫でたりしながら……

## 新たな必殺技を求めて

準決勝の翌日、放課後に俺達は部室であることに頭を悩ませていた。それは

「ハア……」

机に頭をうずめてため息をついている円堂の事についてだった。朝からずっとこの調子だ。いつもは少しやかましいと思う程元気な彼だが今回ばかりはそうもいかないらしい。

なんでそんなに思い詰めているのか聞いたところ、世宇子のシュートを止める自信がないらしい。昨日の試合でゴッドハンドが完璧に破られてたのを気にしているようだ。

「鬼道、雷門で世宇子の力を目の当たりにしてるのはお前だけだ。ゴッドハンドは通用すると思うか？」

「わからない……だが奴らのシュートは武方三兄弟のトライアングルZよりも遥かに強力で恐ろしいのは確かだ」

鬼道はわからない、と言うがそれはもう答えと同じだった。円堂も彼の言葉の意味に気づいたようだ。手元にあつた大介さんの特訓ノートをじつと見つめている。

「おじいさんのノートになにか書いてないんですか？ゴッドハンドよりも強いキーパー



技とか」

「……これだ、マジン・ザ・ハンド。じいちゃんによるとゴツドハンドよりも強い最強のキーパー技を編み出したんだって」

円堂が指さしたページを見ると、相変わらず汚い字が目に入った。どうやら文字と絵で技の解説が書いてあるようだが俺にはまったく理解できなかった。

「……、ポイントって書いてあるんだ」

円堂が示したのは人型の絵の胸の部分、そこは赤いペンで何重にも塗りつぶされていて、読めなくとも重要性は伝わってきた。

「胸……心臓ってことですか？」

「他にはなにか書いてないのか？」

「書いてない……」

室内に重苦しい空気が流れる。と、その時部室の扉が勢いよく開いた。

「羽花さん！ちよつと来てください！」

入ってきたのは音無だった。走ってきたのか息を切らしているがその顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「どうしたんですか？」

「女子用の更衣室が完成したんです！すぐに来て欲しいって夏未さんが！」

彼女の言葉でそういえば作るって言ってたなと思いついていたが色んなことがあつてすっかり忘れていた。

興味本位でついてきた円堂達や練習を一段落させた風丸達も一緒にグラウンドを挟んで部室の反対側の工事現場に向かう。

「来たわね、遅くつてよ」

腕を組んで待つていたのは夏末。彼女の背後には白と青を基調としたドーム型の建物が建つていた。というか……

「大きくないですか？」

その建物は更衣室にしては大きかった、部室の優に5倍程の大きさはありそうだ。なんならこれが部室でも通りそうだ。

「元々の部室が小さすぎたのよ、全国大会決勝進出チームのなんだからこれくらいは当然よ」

まあ使いやすくだろうから大きい分にはいいけど……問題はそこじゃない、隣の男子勢に目を向けるとあからさまに複雑な表情をしていた。

「なんか不公平でやんす」

「俺達もこんな綺麗で大きい部室が使いたいです」

男子勢、特に1年生組から不満の声が漏れる。当然といえば当然だ、今の部室はあま

りに小さくオンボロなのだから。

「あら、文句ならキャプテンに言ってくださいる？新しい部室の話を断つたのは円堂君よ」  
夏末の鋭い正論を突きつけられて彼らはバツが悪そうに黙ってしまった。一方、名指しされた円堂は会話に参加するでもなく大介さんノートをじつと眺めている。余程マジン・ザ・ハンドが気になるのだろうか？

「さ、皆練習に戻りなさい。次はいよいよ決勝戦なのよ」

その後練習が再開された。皆決勝に向けて張り切っているが、いつもと違って空元気な円堂の姿が俺の目からは離れなかった。



練習が終わり、皆が帰路につこうとしている。空は赤く染まっていて、日が落ちるまで秒読みといった感じだ。

「あれ？守君帰らないんですか？」

1人だけ着替えずにノートを見ている円堂に声をかける。結局今日の練習ではマジン・ザ・ハンドのヒントは何も得られなかった。

「ああ、ちよつとイナビカリ修練場で練習しようと思つてさ。先に帰つててくれ」

その様子に少し心配になるが彼なら大丈夫だろうと部室から出て校門に向かう。

「天川、ちよつといいか？ 話があるんだが」

校門を出ようとしたところで豪炎寺に話しかけられた。彼が2人きりで話なんて珍しい。

「どうしたんですか？」

「……俺達のシユートは世宇子に通用すると思うか？」

その問いかけに一瞬目を見開くが、すぐに思考を回す。正直：通用しないと思う。帝国と世宇子の試合結果は10対0だった、大量得点に目が行きがちだがあの帝国を無失点で下している。それはつまり防御力もかなり高いということだ。

それは豪炎寺もわかっているはず。つまりこの質問はただの確認、自分と相手の考えが同じあることの。故に下手に誤魔化さず正直に話すことにした。

「多分：通用しないと思います。少なくとも今のままでは」

「俺も同じ意見だ。そこで提案があるんだが」

真剣な目で俺を見つめてくる彼はそこまで話すと一呼吸置いた。

「俺達で連携必殺技を作らないか？」

「連携必殺技？」

「ああ、円堂はマジン・ザ・ハンドを習得しようとしている。キーパーがシユートを防い

だのなら今度は俺達の出番だろう?」

微笑を浮かべる豪炎寺。まるで円堂がマジン・ザ・ハンドを完成させるのがわかっていような口ぶりだ。その言葉からは100%信頼が感じ取れた。

「でも、必殺技っていつてもどんな?」

「それに関しては俺に考えがある。それを完成させるにはお前の力が必要なんだ」

必要、か…そう言われて断る訳にはいかない。何よりやらない理由も見当たらなかった。だから俺は力強く頷き、こう言った。

「わかりました、やりましょう!」

それから早速河川敷で練習を始めたのだが、河川敷に着くなり彼は突拍子もないことを言い始めた。

「まずお前にはファイアトルネードを習得してもらいたい」

「……!?!ファイアトルネード!?!」



「羽花ちゃん、ケーキあるから食べましょう」

その日の夜、夕飯の後に温子さんがお茶とケーキを用意してくれた。だが、こういう

時に真つ先に飛びついてくる人物の姿が見当たらないのに気づいた。

「あれ？守君は？」

「それがノックしても全然反応がなくて…」

もしかしてまだマジン・ザ・ハンドのことを考えているのだろうか？

「私、守君にケーキ持っていていきますね」

そう言つて自分の分と円堂の分のケーキとお茶をトレイに乗せて2階への階段を登る。彼の部屋の前につき、扉を開けようとしたところで中から声が聞こえてきた。

「じいちゃん…マジン・ザ・ハンドつてなんなんだよ…どうやったらできるんだ…？イナズマイレブンのおじさん達が叶えられなかった夢を俺は…俺達は叶えたいんだ…」

ドアの隙間から見えたのは彼の見たこともないくらい真剣な顔だった。少し入るのを躊躇つたが、ノックして声をかけた。

「守君、入ってもいいですか？」

「羽花？ああ、いいぞ」

許可を得たところで入室すると、彼は座り込んで大介さんの写真と向き合っていた。

「おじいさんと話してたんですか？」

「…ちよつと話したくなつちやつてさ」

「温子さんがケーキ用意してくれましたよ、一緒に食べましょう」

そう言つて床にトレイを置いて彼の隣に腰掛けた。いつもなら目を輝かせて喜ぶんだらうな、と少し思う。

それからしばらく無言の時間が続いた。こういう時は大体円堂が話を振つてくれるのだが、今日はただ黙々とケーキを頬張っている。

「……昨日はごめんなさい。迷惑かけちゃつて……」

「え？ 気にすんなつて！ 誰にでも調子の悪い時はあるさ！」

沈黙に耐えられなくなり昨日のことを謝罪するが、彼はまるで気にしてないようにニカツと笑つた。

それを見て自然に微笑が零れた。まったく…自分も悩んでる癖に人のことはこんなふうに励ますなんて。

「……守君、もし私が……いえ、なんでもないです」

「ん？ そうか？」

もし私が役に立たなくなつたらどうしますか？ そんな言葉が脳裏をよぎつたがすんでのところ飲み込んだ。

その返答を聞くのが怖かつたからだ。だけど彼のことを信用してはいないわけじゃない、むしろ逆だ。彼なら、雷門の皆ならきつと見捨てるようなことはしないだろう。頭の中では分かつてる。わかつてるけど、万が一を考えるとやつぱり怖いんだ……

結局、その質問を投げかけることはできなかつた。



夕日に照らされあかね色に染まる階段を、俺達は登っていく。隣には豪炎寺と鬼道。俺達は鉄塔広場に向けて歩いていった。俺達以外に人気はなく、土を踏んだ際にの足音だけが一つ一つ木霊している。

だからその音ははつきりと聞こえてきた。今や聞き慣れてしまったタイヤを受け止める音が。

「こんなことだろうと思つたよ」

「それでマジン・ザ・ハンドがマスターできるのか？」

広場にいたのはタイヤを縄で背中に巻き付けた円堂。いつも通りタイヤを受け止めて特訓していた。

「豪炎寺、鬼道、羽花！」

「手伝いますよ、皆でやった方がきつと上手いききます」

「ふ、サツカーバカになつてみるか」

そんなわけで俺達は円堂と一緒に特訓をした。木にタイヤを3つ程吊るして、それを



振り子のように揺らす。その合間を縫うように俺達がシュートを放つ。止めるのは至難の業でシュートを撃つ事に円堂は弾き飛ばされてしまう。

1時間が経つ頃には元々ボロボロだった円堂は見ているのも辛いほどに傷ついていた。

「身体がボロボロになるわ！今すぐやめなさい！」

いつの間にいたのか木野と夏未が円堂の元へと駆け寄った。無理もないだろう、それほどまでに今の彼はボロボロなのだから。

「無駄だよ」

「やめろと言われてやめるような男か？」

止めても無駄だと2人は言う。口には出さないが俺も同意見だ。これまで散々彼の諦めの悪さを見てきた。諦めるという言葉がこれ程似合わない人物もそうはいないだろう。

「俺なら大丈夫だ！絶対マジン・ザ・ハンドを完成させるんだ！皆で優勝したいじゃないか！」

そう言うと彼は手を構えた。俺達はお互いの顔を見るとほとんど同時に頷いた。この心意気に答えてやろう、と。

「ファイアトルネード!!」

「ツインブースト!!」

豪炎寺のファイアトルネード、俺と鬼道のツインブーストがそれぞれ円堂に襲いかかる。彼はゴッドハンドの姿勢をとるが間に合わずシュートを顔面にもろに受けてしまった。

「おい円堂!大丈夫か?」

頭を打ったのか意識が朦朧としている彼を急いで雷々軒へと運び、響木監督に氷を貰って冷やした。

「いててて」

「随分と無茶をしたもんだな」

「違うよ、マジン・ザ・ハンドの特訓だ!」

「…お前もついにあれに挑戦するか」

その時扉がガラガラと音を立てて開いた。そして入ってきたのは鬼瓦刑事だった。

「おいおいどうした?お揃いで」

「刑事さん!」

鬼瓦刑事は驚いた顔をしたが、すぐにカウンター席に座った。前も同じところに座っていたので恐らく定位置なのだろう。

「酷い格好だな」

「世宇子に勝つためだ、どうってことないよ」

「威勢がいいのは結構だが、勝つことに執念を燃やしすぎると影山みたいになるぞ」

それから刑事さんは影山の過去を語り出した。父親が影山東吾というプロサッカー選手だったこと、だが円堂のおじいさんである大介さんらの台頭でサッカー生命を追われたこと、それから東吾は失踪、影山の母親も病死してしまったこと、そして自分の家族をめちやくちやにサッカーへの恨みと勝利への執念が膨れ上がったこと。

そして刑事さんの最後の言葉に俺達は戦慄した。

「豪炎寺…お前の妹さんの事故にも影山が関わっている可能性がある」

「「……………!?えー!」」

豪炎寺の妹、豪炎寺夕香は昨年のフットボールフロンティア決勝戦の日に事故にあつたと前に聞いたことがある。その事が原因で豪炎寺が一時サッカーをやめていたことも。だが、それも影山の仕業とは…

隣の豪炎寺を見ると胸元のペンダントをギュツと握りしめていた。

「…許せない!どんな理由があろうとサッカーを汚していいわけが無い!間違ってる

!」

「影山は今どこに?」

「……………わからない」

そして鬼瓦刑事の口からある言葉が出てきた。それが“プロジェクトZ”そして“空” その言葉の意味を考えるが、帝国にいた鬼道を含め、誰もそれを当てることはできなかつた。

## 恐るべき神の力

今日の練習が終わった後、俺は必殺技の特訓の為に豪炎寺と共に河川敷に向かう予定だった。だが彼が少し寄り道をしたと言うので俺もそれに付き合うことにした。学校を出て程なくして着いたのは病院だった。稲妻町総合病院、この町に来てから怪我も病氣もしたことなかったのでお世話にはならなかったが存在は知っていた。

「あ、もしかして妹さんの」

「ああ、特訓の前に顔を見ておきたくてな。悪いな、付き合わせて」

そう言つて病院に入る俺達。受付でお見舞いの手続きを済ませて病室に向かう。病室に入るとベッドでぐつすりと眠っている少女の姿があつた。いや、そう見えるだけで実際は昏睡状態なのだ。隣の豪炎寺の顔も妹の前だからか、なるべく明るく振るまおうとしているがどこか暗い表情だった。

「遅くなつてすまない。今日はチームメイトも一緒なんだ」

「初めまして夕香ちゃん。天川羽花です」

床に膝をついて座り、彼女の手をとつて両手で握りしめた。その小さな手は少し冷たかつた。こんな小さな女の子が事故にあうなんて、よっぽどの恐怖だっただろう。黒幕

である影山への怒りよりも、彼女が不憫でならなくて胸が塞がるような気持ちだった。

「夕香ちゃんの為にも決勝戦、絶対勝たないとすね」

「……………ああ」

夕香ちゃんを見つめながら静かに、だが力強く言葉を交わす。

「……………お………に………い………ち………ちゃん………」

「……!?夕香!!」

俺達は目を見開いた。今、夕香ちゃんが喋ったのだ。消えてしまっような程か細い、弱々しい声だったが確かに。

改めて夕香ちゃんを見つめるが、そこには目を閉じて喋るような気配もない少女が横たわっているだけだった。

「……行こう」

「いいんですか?」

「……………ああ」

背を向けて戸を開ける豪炎寺。彼の目元からは1粒の雫がこぼれ落ちていた。

「ファイアトルネード!!」

俺が空中で蹴り出したボールは炎を纏い、河川敷のゴールに突き刺さった。フィール

ドの外で腕を組んでいた豪炎寺に視線をやると無言で頷いた。

「これでようやく次のステップにいけますね」

「…ファイアトルネードの習得自体にもっと時間がかかると思ってたが…流石だな」  
「目の前にお手本がいますからね。それもとびつきり参考になる人が」

必殺技を習得する上でお手本があるかどうかは重要だ。技の原型が掴めれば後はひたすら練習あるのみ。円堂みたいに技の形から考えなければならぬ時はだいぶ苦労する。

「それで、この後はどうするんですか？」

「今度はお前だけじゃない、俺もシュートを撃つ。同時にな」

「……！つまり2人同時にファイアトルネードを撃つ技…ということですか？」

「ああ、できそうか？」

2人同時に撃つ。言うのは簡単だがこれは難易度的には相当難しいはずだ。そもそも2人同時にシュートを撃つ事自体が難しい。少しでもタイミングがズレれば片方の足が触れた時点でボールが動いてしまう、つまり動きを完璧にシンクロさせないといけない。しかも今回の場合空中で、回転しながらだ。

「かなり難しいそうですね…でもそれで世宇子のゴールを破れるなら、やります！」

「ふ、その意気だ。早速始めるぞ」

正直決勝戦までに完成するかはわからないがやる価値はある。現状ではまだ俺は力不足なのだから…



決勝戦が数日後まで迫り、俺達はより一層練習に励んでいた。円堂はマジン・ザ・ハインド、俺と豪炎寺は新たなシユート技の特訓を続けているが中々上手くない。ただドチームとしての力は格段に上がっているし、俺もフェイとの特訓を続けているのでかなりレベルアップしていると思う。これなら新必殺技がなくても世宇子に勝てるかもしれない。

「みんな〜!」

「おにぎりができました〜!」

「「おお!!」」

聞こえてきた木野と音無の声に、練習中の皆の足が止まった。いないと思つてたらおにぎりを作ってくれたのか。相変わらず気遣いができるマネージャー陣だ。

円堂が我先にと手を伸ばすが、それを夏末がはたいて阻止した。先に手を洗つてきなさいとの事だ。まあごもつともだね。



ちなみに鬼道は既に手を洗ってきていた。さすが鬼道財閥の御曹司、マナーがしつかりしている。

全員が手を洗い終わり、夏末からのチェックを受けてOKを貰うにいつせいにおにぎりに群がった。…特に壁山。

余った分をもらおうと裏で待機していると夏末が何やら他のものと比べて数段大きいおにぎりを持ってきた。

「はいこれ。この前買い物を手伝ってくれたお礼よ。特別手を込めて作ったの」

「わあ、ありがとうござい……」

夏末の厚意を受け取ろうとした時、思い出した。彼女がとてつもなく料理音痴だったことを。バトラーさんに聞いたんだけどこの前はカレーを作っていたはずなのに何故か青い物体が出来上がったそうだ。

これは食べていいものなのだろうか？でも米に塩をかけて握るだけの料理とも言えるか微妙なのがおにぎりだ。さすがにそこまで不味いものができるのだろうか？あるとして塩を付けすぎて塩辛くなるくらいだろう、大丈夫だ。

「いただきます……ん……んぐ!?……は……はらい!!」

「え?お塩付けすぎたのかしら?」

意を決して食べてみたけどなにこれ!?塩辛いとかの次元じゃないんだけど!普通に

唐辛子食べたみたいな辛さだよ！口の周りすごく痛いし……

「どれどれ？あ！夏未さん塩じゃなくて七味唐辛子入れてますよ！」

塩の入れすぎですらないんかい！よく見たらおにぎりの中身所々赤いし……っていうかどう間違えたらそうなるの？

「ごめんなさいね、はいお水」

「あ、ありがとうございます……」

まったく悪気がないのがタチの悪いところだ。これじゃ責めづらくてしょうがない。別に責めるつもりもないが。木野と音無は爆笑してるし……

「よし皆！練習再開だ！」

「「おう!!」」

円堂の号令で練習が再開された。彼はマジン・ザ・ハンドの特訓を始めたがこれがシュート2本を同時に受けるというかなり無茶なものだった。

「ドラゴン……!!」

「トルネード!!」

「ツインブースト!!」

豪炎寺と染岡、鬼道と一之瀬が放ったシュートが円堂に飛んでいくが途中で何かがシュートコースに入ったと思うと眩い光が辺りを包んだ。

「「?!」」

そして見えてきたのはシュートされたはずのボールを2個とも受け止めている髪の長い少年の姿だった。

「ドラゴントルネードとツイーンブーストを止めるなんて!お前、すごいキーパーだな!」  
「僕はキーパーではないよ。我がチームのキーパーならこんなもの指一本で止めてしま  
うだろうね」

片方のボールを指先で回しながら答える少年。

「そのチームってのは世宇子中のことだろうか?アフロデイ!」

鬼道の言葉に全員に衝撃が走った。この人が世宇子中の……

「円堂守君だね?君のことは影山総帥から聞いているよ。改めて自己紹介させてもらおう、世宇子中のアフロデイだ」

円堂の方に向き直り、アフロデイと少年は名乗った。その表情から余裕綽々といった感じが読み取れる。そして影山総帥という発言。やはり世宇子中には影山がいるようだ。

「てめえ!宣戦布告にきやがったな!」

「ふふ、それは違うよ。宣戦布告とは戦うためにするものだ。僕は君達と戦うつもりはない。君達も戦わない方がいい」

「何故だよ？」

「決まっているだろ？……負けるからさ」

染岡の発言を否定するアフロデイ。一見穏やかそうだがその言葉からは挑発の意図な感じ取れた。一同の反応を見た後、彼はこちらに視線を向けてきた。

「君が天川羽花さんか……僕は君に用があつて来たんだ」

アフロデイの言葉の意味がわからず困惑していると、彼は右手をゆつくりとこちらに差し出してきた。

「世字子中に来ないかい？君の力はこんな弱小チームよりも、我が世字子中で使うべきだ」

突然の勧誘に戸惑つたが、すぐに考えをまとめた。答えなんて最初から決まっている。

「残念ですけど、お断りします。私はこのチームが好きですから。それに影山に加担する気もありません」

「……へえ……ふふ、君はもう少し利口な人物だと思つていたがどうやら僕の勘違いだったようだね」

彼は断られたというのに少しも動揺していなかった。それどころか笑みまで浮かべている。

「後悔することになるよ。神の申し出を断ったことを」

「…自分のことを神だなんて、随分自信があるんですね」

「自信？ 違うよ、これは事実だ。君達は絶対に勝てない。だから練習もやめたまえ、神と人の溝は練習で埋まるようなものじゃない」

「この…言わせておけば……。さすがに反論しようとするが、それより先に声を荒らげた人物がいた。」

「うるさい！ 練習が無駄だなんて言わせない！ 練習はおにぎりだ！ 俺達の血となり、肉となるんだ！」

「ん？ ははは、面白いこと言うね。なるほど、練習はおにぎりか」

珍しく激高し、顔を怒りの表情に染めている円堂。そんな彼のことなんて意に返さな  
いと言わんばかりにアフロデイは挑発を続けた。

「ならばゲームをしようじゃないか。そうだね……僕がオフセンスで君達がデイフェンス。一度でもボールを奪うことができれば君達の勝ち。シュートを決めたら僕の勝ちだ」

俺と円堂の2人を指差して嘲笑うかのようにアフロデイは言った。2対1、しかも一度でもボールを奪えばこちらの勝ちなんて明らかにこちらが有利だ。

「……明らかにこっちが有利ですけど？」

「神が人間と対等に戦っても結果は見えているからね。なんならチーム全員でかかってきてもいいんだよ?」

「…ツツ! 結構です! 私達2人で十分ですから! いいですよ? 守君」

「ああ、練習が無駄じゃないって証明してやる!」

どれだけ人をバカにすれば気が済むんだ…。こっちだつて木戸川戦の時より強くなってるんだ。そう簡単にはやられない。

そしてアフロデイがセンターサークル、円堂がゴール前、俺がその中間にそれぞれ立つ。

木野とホイッスルでゲームが始まった。しかしアフロデイは一切動く気配がない。何故かその場でマネキン人形のように身動き一つせず立っている。

「どういうつもりですか?」

「ハンデだよ。僕はここから動かない。さあ、来たまえ」

その心底バカにしたような言動にイラツときてアフロデイ目掛けて突進する。そしてスライディングするが彼は足の上にボールを乗せるとそれを蹴りあげ、自らも飛び上がりあっさりかわされてしまった。

「その程度かい?」

「く……! 今度こそ」

何度もボールを奪う事を試みるもその度に軽くかわされてしまう。しかも本当に彼はその場から一歩も動いていない。生半可なタックルやスライディングは通じない。だったら……

「ワンダートラップ!!」

残像を生み出しながら接近し、一瞬で距離を縮めスライディング。これは決まったと誰もが思った。だが

「遅いね」

その瞬間、彼の姿が消えた。俺は誰もいない空間をスライディングですり抜け、驚きのあまり体勢を崩してしまった。そして勢いのまま地面を転がった。

「ツツツ……!?!」

「ふふ、神と人との力の差を少しは理解してくれたかな?後はそこでおとなしく見ているといい」

アフロディはいつの間にか元の場所に立っていた。そしてその場からシュートを放つ。必殺技ですらないただのシュート、だがそれは赤黒いオーラを纏い円堂に向かっていく。彼はゴッドハンドで対抗するが、それはすぐにひび割れ、ボールは円堂ごとゴールにねじ込まれた。俺はその光景を地面に倒れ伏しながら見ているしかなかった。

## 聖戦の始まり

「はああああああ!!」

炎を足に纏い、俺と豪炎寺が同時に回転しながら飛び上がる。だがタイミングが合わずに空振り、2人揃って雷門中のグラウンドに叩きつけられた。

「ハア……ハア……また失敗……」

既に50回以上は挑戦しているだろうか、いまだに成功する気配は無い。このままじゃダメだ……。脳裏によぎるのはアフロデイの見下すような視線。まさに完敗。手も足も出なかった……。ボールに触れることもかなわずただ遊ばれるだけ……

「……馬鹿に……しやがって……」

思わず悔しきで歯軋りを噛む。今のままじゃ勝てない……。皆の役に立てない……。そんな考えばかりが頭の中で繰り返し再生される。

「……やめだ」

「え？」

そう言つてその場を離れる豪炎寺。俺は理解できずに咄嗟に声をかけた。



「ちよつと待つてください！まだ完成してないのに…」

「今の集中できていないお前と特訓しても時間の無駄だ。何を迷ってるのか知らないが少し頭を冷やせ」

その言葉に何も言い返すことができなかった。豪炎寺の言うことは紛れもない事実なのだから。

その時、響木監督から集合がかかった。全員揃ったのを確認し、監督は口を開いた。

「合宿？」

「ああ、学校に泊まって皆で飯でも作ってな」

「許可は私が取っておきました」

それを聞いて喜ぶ1年生組。だけど俺は納得できなかった。決勝戦はもうすぐなのにそんな合宿なんて遊んでいる場合じゃ…

「待つてください監督。決勝戦は明後日なんですよ？そんな呑気に飯でも作ろうなんて。それまでにマジン・ザ・ハンドを完成させないと…」

「守君の言う通りです！監督も見たでしょう？あのアフロデイの強さを。今は少しでも特訓しないと世宇子には…」

「勝てるのか？」

「……………」

「それは……やってみなくちや……!」

「無理だ!今のお前達では世宇子に勝つこともマジン・ザ・ハンドを完成させることも不可能だ!」

監督は反論する俺と円堂の言葉をバツサリと遮り否定する。そんなことわかってる……今のままでは世宇子に勝てないことくらい……

「確かに一度マジン・ザ・ハンドのことを忘れてしまうのもいいかもしれない」

「俺も賛成だな。アメリカでも言うしき、ゴキブリを取る時以外急ぐなって」

「ゴキブリ?それってノミじゃなかった?」

「あはは、そうとも言うね」

結局俺と円堂以外の満場一致で合宿を行うことが決定した。一旦帰宅し、準備を整えてから集合ということでその場は解散となった。帰り道、俺達は終始無言で一言も話さず帰宅した。



夕方5時、少しずつ光が色褪せていく空を眺めながら俺は歩いていた。向かっている

のは学校ではなく河川敷。結局合宿には行かなかった。そんなことをしていても時間の無駄だと思ったし、何より少しでも特訓しておきたかった。円堂はなんだかんだ言っ  
て合宿に向かったようだ。キャプテンとしての責任か、はたまた珍しく日本人特有の同  
調圧力にでも負けたのか。

河川敷の階段をゆっくりと降りる。そして見えてきたのは、ベンチに腰掛けた緑色の  
髪をした少年の姿。

「やあ、来たね羽花。早速始めようか」

「フェイ……やっぱりここにいたんですね」

フェイはボールを手に携えながら無邪気に笑った。その笑みが今の自分には眩しく  
て思わず顔を逸らしてしまいそうになる。

「……フェイ、特訓の前に一つ教えてください。あなたはいつもここに……いえ、正  
確には私が望んだ時に必ずここにいます。どうしてですか？」

ずっと疑問に思っていたことだ。彼とは別に会う約束をかわしている訳では無い。  
特訓がしたいと思った時、河川敷を訪れると必ず彼はいた。最初は偶然かと思ったが何  
度も続くのでさすがに不審感を抱いた。

「……僕は君とサッカーがしたい。それだけだよ」

「……………！それじゃ答えに……」

「そんなことより早く始めようよ。時間がないんでしょ？」

フエイはそう言うのと俺に背を向けグラウンドの中に歩いていく。これ以上追求しても時間の無駄だと思い、渋々それに続いた。確かに今は時間が無い。この件はまた後日尋ねることにしよう。

「羽花！ だいたい僕の動きに着いこれるようになったじゃないか！」

「…………ちつとも本気を出してないのによく言います…………ね！」

フエイの足元にあるボールに向けて足を伸ばすが紙一重でかわされた。確かに動きには着いていけないこともないが今まで一度として彼が汗をかいているのを見たことがなかった。つまりそれは彼が本気ではないのを物語っている。

「ハア…………ハア…………全然強くなれない…………どうしたら…………」

決勝戦は明後日、特訓できる時間は限られているというのにまったく強くなれない……いや、一応強くなってるのだろうがアフロデイとの差に比べたら微々たるものだ。このままじゃ木戸川戦の時と同じ……皆の足を引っ張るだけで終わってしまう…………

「ねえ羽花。君は今サッカーしてて楽しい？」

「…………？ 今は楽しんでる暇なんて…………」

「僕は楽しいよ。ボールを蹴ってるだけで生きてるって感じがするんだ。だからもつと強くなりたいって思う。サッカーってそういうものだろう？」

フエイの突然の言葉の意味が理解できずに困惑していると、彼はゴール前に立ち俺に視線を向けた。

「今日最後の特訓だ。僕に向けてシュートを撃ってきて。もちろん手加減はなしだよ」

「……さつきからまったく意図が読めないんですけど？」

「いいからほら撃ってみなよ」

彼の考えていることはわからないが、特訓と言われればやらないわけにはいかない。ボールと共に何度も跳躍し、そして最高地点で月を背景にオーバーヘッドキック。

「バウンサーラビット!!」

ボールは地面に落ちると跳躍を繰り返しフエイ目掛けて突き進む。彼はその場から動くことも止めるような動作をすることもなかった。そしてシュートが彼は顔のすぐ横を通り過ぎてゴールに刺さる。彼はその間、まったく動じることもなく顔に微笑を浮かべていた。

「うん、いいシュートだね！これなら決勝戦も大丈夫だ！」

そう言つて彼はその場を立ち去つてしまった。何が大丈夫だと言うのだろうか？今のままでは勝ち目なんてほとんどないのに……それから一人特訓を続けたが、目立った成果が出せるわけでもなく時間ばかりが過ぎていつてしまった。

…そしてあつという間に決勝戦当日がやってきた。

朝、珍しく自分で起きた円堂と共に準備していると温子さんが彼に何かを差し出した。

「これは？」

「おじいちゃんが使っていたグローブよ。決勝戦、一緒に連れて行ってあげて」

「母ちゃん…ああ、もちろんだぜ！」

「いつてらっしゃい2人共！頑張るのよ！」

「おう！」

「いつてきます！」

玄関のドアを開けて決戦の舞台へ向かう。途中聞いた話で円堂はまだマジン・ザ・ハインドを完成できていないらしい。惜しいところまではいったが後一つ何かが足りないようだ。そんな話をしているとフットボールフロンティアスタジアムに到着した。既に皆集まっているようだ。

「皆おはよう！」

「おはようございます」

「あ、キャプテン、羽花さん。これを……」

何故か皆の表現は浮かなかつた。そんな様子に疑問を抱いていると音無が会場入口の方を指さした。

そこには張り紙がしてあり閉鎖と書かれていた。

「どういうことだ？」

「わからないんです。私達が来た時には既にこうなっていて」

そういうえば決勝戦にも関わらず辺りには人の姿がほとんどなかった。全員が困惑を隠せないでいると、夏未の携帯に着信が入った。

「…はいそうです。え？どういうことですか？……でも今更そんな!? ……はい、わかりました」

「どうかしたんですか？」

「大会本部から急遽決勝戦の会場が変わったって」

「変わったってどこへ？」

その時頭上から大きな音が聞こえてきた。見上げるとそこには巨大な建造物が空に浮かんでいた。女神のような彫像が飾られたそれはどこか神々しさを感ぜさせる。まるで神殿のようだ。

「会場ってまさか…」

「そのまさかよ」

恐る恐るその会場、ゼウススタジアムに足を踏み入れる。

「決勝当日になってゼウススタジアムに変更、どういうつもりかしら？」

「……い・影山……」

円堂の言葉に視線を上げると、そこにはフィールドを見下ろす影山の姿があった。彼はこちらに気づいたのか不気味な笑みを浮かべると奥へと引つ込んでしまった。

「円堂、話がある」

「……は、い」

「お前のおじいさん。大介さんの死には影山が関わっているかもしれない」

それを聞いて全員が絶句した。円堂の方に目を向けると拳を握りしめ怒りを抑えるかのように震えている。そんな彼の肩に豪炎寺が手を置いた。彼も妹が影山の策略にあっている。それに気づいたのか円堂と豪炎寺の視線が絡み合う。

「監督……皆……こんなに俺を想ってくれる仲間に出会えたのサッカーのおかげなんだ。影山が憎いなんて気持ちでプレーしたくない！サッカーは一つのボールに熱い気持ちをぶつけ合う最高のスポーツなんだ！だからこの試合は俺達のプレーをする！そして皆で優勝するんだ！サッカーが大好きだから！」

その言葉に皆が頷いた。そして響木監督の号令で試合の準備をするために控え室に向かう。

……そつか……皆サッカーへの純粋な想いでここにいるんだ。私だけだ、自分のためにここに居るのは。皆の役に立ちたいって想いも結局は自分の居場所を失いたくないか



ら…自分本位な考えなんだ…

『さあ40年振りの出場で決勝まで勝ち進んだ雷門中！対するは今大会最も注目されている世宇子イレブんだ！ここまで圧倒的な力を見せつけてきました！雷門中はどう戦うのか！』

「力の差は十分教えてあげたと思っていたが…まだ神に逆らおうとするその勇氣だけは褒めてあげるよ」

「俺は皆を信じてる！俺達は絶対勝つ！」

整列し、握手とコイントス。アフロデイがそんな言葉をかけていたが円堂は力強く返した。

そして両チームがポジションにつき、最終決戦のホイッスルが鳴り響いた。

## 神の裁き

ワールドに試合開始を宣言するホイッスルが鳴り響いた。キックオフは世宇子から。フォワードがバックパスしたボールはアフロデイの元へ。

「…!?動かない?」

「舐めんな!」

豪炎寺と染岡がボールを奪おうとプレスをかけに行くが、アフロデイは雷門中の時と同じく動こうとしなかった。

「君達の力はわかってている、僕には通用しないとね。ヘブンズタイム!!」

その瞬間、信じられないことが起きた。アフロデイが指を鳴らすと同時に彼の姿が消えたのだ。視界からアフロデイを見失い困惑する2人だが、俺は彼らより後ろにいたからわかった。アフロデイが瞬間移動でもしたかのように彼らの背後に回り込んだのを。

そして直後に突風が発生して2人は吹き飛ばされてしまった。

「なに……今の?動きが見えなかった…」

「なんて速さだ」

アフロデイはまるで道でも歩くかのようにゆっくりボールを蹴りながら前進してく

る。そこに鬼道と共に突っ込んでいくが…

「ヘブンズタイム」

また彼が指を鳴らした。それと同時に目の前にいたはずの彼は視界から消えてさつてしまった。

「ツツ!!きやああああ!!」

突然発生した突風に巻き込まれ、抵抗する間もなく宙へと放り出された。そんな状態で受身を取れるはずもなく背中から地面に叩きつけられる。

痛みに悶えていると後方からまたもや突風が風を切る音が聞こえてきた。

彼は既にゴール前に到達していて、今まさに円堂と1対1の状況になっていた。

「来い!全力でお前を止めてみせる!」

「天使の羽ばたきを聞いたことがあるかい?」

アフロデイの背中から美しい真っ白な羽が生えてくる。彼は空中に飛び上がるとボールに白いエネルギーを纏わせ、蹴りを叩き込んだ。

「ゴッドノウズ!!これが神の力!」

「ゴッドハンド!!」

円堂はゴッドハンドで対抗するも、そのシュートに対してはあまりに無力だった。ひび割れた神の手は砕け散り、彼はボールごとゴールへねじ込まれた。

『恐るべきシュート、ゴツドノウズが雷門ゴールに炸裂！世宇子中先制！』

「ゴツドハンドが…」

「やはり通用しないのか……」

ゴツドノウズの強烈さに息を呑む面々。こんなシュートを撃つ相手に勝ち目なんてあるのか、と。

試合再開のホイッスルが鳴り、染岡がドリブルで攻め上がる。だが世宇子中は攻められていてというのにまったく動かない。

「なめやがって…ドラゴン!!」

「トルネード!!」

染岡が蹴り出したボールに豪炎寺が追撃のように蹴りを入れる。すると赤く燃え上がるドラゴンが現れ、世宇子ゴールに襲いかかる。

「ツナミウォール!!」

キーパーが両手を地面に叩きつけるとどこからともなくゴールを覆うように津波が発生し、いとも簡単にドラゴントルネードを弾いてしまった。

『なんと、世宇子キーパーポセイドン！ドラゴントルネードを止めた！最強の守護神ここにあり!』

シュートが止められることは想定していたけどここまで簡単に防がれるなんて……

するとポセイドンはボールを放り投げ、豪炎寺へと渡した。そして指をくいくいと折り曲げ、撃つてこいと言わんばかりに挑発する。

「ボールを渡したことが失敗だと思い知らせてやる」

鬼道が豪炎寺の横に並び、その声をかけた。彼は領くとボールを鬼道に渡し、視線をこちらに向けてくる。この3人つてことは…あれか。

鬼道が指笛を鳴らすと同時にペンギンが出現。それをシュートと撃ちだし、両隣から駆け込んだ俺と豪炎寺がツイインシュートを決める。

「皇帝ペンギン……!!」

「2号!!」

「ツナミウォール!!」

再び現れる波の壁。それに衝突したペンギンはあっけなく消し飛ばされてしまった。ボールは再びポセイドンの手元へ。そして今度はそれを俺の目の前に転がしてきた。

「……だつたらこれで!」

ボールと共に飛び上がり、跳躍を繰り返す。そして月の背景をバックにオーバーヘッドキックで地面に叩きつける。

「バウンサーラビット!!」

「ツナミウォール!!」

跳躍を繰り返すボール、しかしツナミに激突した瞬間威力が削がれ停止してしまった。弾かれたボールは今度は一之瀬の足元へ。彼は後方を確認すると走り出した。その後ろには土門と円堂の姿がある。そしてクロスすることで生み出したエネルギーからフェニックスが形成され、3人は空中で同時にそれを蹴り出す。

「「ザ・フェニックス!!」」

「ギカントウォール!!」

巨大化したポセイドンの拳がシュートを地面に打ちつける。地面がひび割れ、シュートは完全に止められてしまった。

「これじゃウォーミングアップにもならないな」

「俺達の必殺技がどれも通用しない…」

4連続シュートが止められ、俺達の表情が絶望に染る。しかしそれで試合が中断されるわけもなく、ボールは兜のようなものを頭につけたフォワードへと渡った。

「ゴールには近づかせない!」

「ダッシュストーム!!」

彼が発動した必殺技による突風でディフェンス陣が次々と吹き飛ばされていく。

「リフレクトバスター!!」

浮き出した岩にシュートが何度も反射され、その度に威力が増していく。

「ゴッドハンド!!」

円堂は再びゴッドハンド。だがこのシュートもゴッドノウズに負けず強烈だった。一瞬の拮抗の後、ゴッドハンドは碎け散ってしまった。

試合開始わずか数分で2対0、シュートは止められ相手の攻撃は防ぐ術がない。一体どうすれば…

「おい栗松! マックス!」

土門の声に振り返ると栗松と松野が苦しそうに足を抑えていた。まさかさっきのダッシュストームで吹き飛ばされた時に…

ベンチに戻る彼らだが試合続行は不可能のようだ。空いたポジションに交代で半田と影野がそれぞれ入った。

ただどそれで試合の状況がどうにかなるわけもない。そこから始まったのは一方的な蹂躪だった。

「ダッシュストーム!!」

敵の攻撃を止めようとすれば、吹き飛ばされる。

「メガクエイク!!」

点を決めようにも圧倒的な防御の前に為す術もない。

「デイバインアロー!!」

「爆裂パンチ!!」

ヘラというフォワードが放ったシュートに円堂の拳は適わず弾き飛ばされる。また追加点を決められてしまった…

「これ以上やらせない……!」

試合がリスタートされると同時にボールを持ってドリブルで攻め上がる。だが世子子デیفエンスが余裕の表情で待ち構えていた。

「さばきのとっつい!!」

デیفエンスの髪の毛の長い男が天に手を翳したと思うと、巨大な足が落下してきた。間一髪のところまでそれをかわすも、風圧に巻き込まれ俺は地面を転がった。

しかしなんとか体勢を立て直し、痛む身体にムチを入れボールを取り返しにかかる。

「ワンダートラップ!!」

「無駄だ。神には通用しない」

高速のスライディングも通じず吹き飛ばされ、再度地面を転がった。

ボールは前線のアフロディヘ。彼は余裕を隠そうともせず歩いてゴールへ向かっていく。

「ヘブンズタイム」

その神業に全員が倒されてしまった。もはや立ち上がれる者はおらず、皆地面に倒れ



伏している。

「残るは君だけだ」

円堂を指さすと、彼は純白の羽を出現させ舞い上がる。

「ゴツドノウズ!!」

彼が白いエネルギーを纏ったボールを蹴った瞬間、ありつたけの力を振り絞り彼の目の前までジャンプした。そしてほとんど同時のタイミングで蹴りを入れる。

「絶対に……やらせない………！」

「ふふ、その執念だけは認めてあげるよ。だが神の前ではあまりに無力だー」

単純なキック力の差。俺は抵抗することもできず押し出された。途端に襲ってくる吐き出しそうになるほどの痛み。シュートは俺の身体ごと突き進み、円堂を巻き込んでゴールに炸裂し、俺はその場に倒れ込んだ。

4対0、俺の…私の力は世宇子には通じない……私は強くならなきゃいけないのに……皆の役に立つて必要だと思ってもらうために……もう独りには戻りたくないから……

そのために必死に特訓した。雷門に入ってから寝ても醒めてもサッカーばかりだった。強くなるために前世の自分にも頼った。強い自分に……

……でも無理なのかな？結局私みたいな役立たずはどう頑張っても強くなつてなれ

ない。

「お前は不必要な人間だ」

「早く死ねばいいのに……役立たず」

昔のトラウマとも言える記憶が脳裏を過ぎる。でも……否定なんてできない。

だって全部本当のことなんだから……

私は、要らない人間なんだ……

「まだ続けるかい？ いや、続けるに決まってるね。では質問を変えよう。チームメイトが傷ついていく様子をまだ見たいのかい？」

世宇子のシュートを受け続け、地面に倒れる円堂に対しアフロディは満身創痍でうずくまる雷門イレブンに目を向け問いかけた。

自分だけならそれこそ命を失うまで戦い続ける、それほどの決意が彼にはあった。だ

がチームメイトが傷つくのは耐えられない、ここまで来られたのは間違いなく彼らのおかげなのだから。

「何を迷ってる円堂！」

「…豪炎寺!!」

「俺は戦う! そう誓ったんだ!」

チームメイトを思いやるあまり棄権することを考え始めた矢先、豪炎寺が立ち上がった。

「豪炎寺の言う通りだ! 俺達のためにだと言うなら大間違いだ!」

「最後まで諦めないことを教えてくれたのはお前だろ!」

「俺が好きになったお前のサッカーを見せてくれ!」

「円堂! / キャプテン!」

風丸、鬼道、一之瀬。豪炎寺の言葉を皮切りに立ち上がり、円堂に声をかける。諦めるなど。それを聞いて円堂は己を恥じた、仲間を言い訳に諦めようとしていたのは自分自身だと。彼はフラフラの足を奮い立たせ、立ち上がった。その姿にさすがのアフロデイも意外そうな表情を浮かべた。

すると彼はボールをピッチの外へと蹴り出した。ミスではない、意図的にだ。

困惑する雷門イレブンをよそに世宇子イレブンはベンチに戻り、運ばれてきた飲料を

口にする。これこそが彼らの力の源、神のアクアだ。最も周りからはただの水分補給にしか見えないだろう。

そして彼らがピッチに戻り、試合が再開される。

「点を取る、そして勝つ！」

豪炎寺が雄叫びを上げながら突き進む。しかし：

「神には通用しない！」

ディフェンスのディオによって阻まれる。豪炎寺とディオの足がボール越しに激突するが、明らかに神の方が優勢だった。

「まだだ!!」

その時、鬼道と一之瀬が加勢に入った。だがそれでも彼を突破するには至らなかった。

「無駄だ！神には通用しない！メガクエイク!!」

盛り上がった地面によって飛ばされる3人。クリアされたボールはデメテルへ。

「ダツシユストーム!!」

暴風が雷門の選手達をことごとく吹き飛ばす。そしてアフロデイにパス。

「キラースライド!!」

「コイルターン!!」

「ヘブンズタイム!!」

土門と影野が必殺技を仕掛けるも、それよりも早くアフロデイの指が鳴らされ、次に彼らは空を見上げ飛ばされることになった。

「デイバインアロー!!」

「ぐわああああ!!」

ヘラのシユートを間一髪で弾いた円堂。否、正確にはわざと弾かせたのだ。彼を潰すために。ボールは今度はデメテル、そして次にアフロデイ。円堂に対してシユートの嵐とも言わべき弾幕が襲いかかる。しかしそれでも彼の心が折れることはない。だが肉体的方はそうはいかない、ついに身体は悲鳴を上げ、彼は倒れ込んでしまった。

「……限界だね。主審」

これ以上試合を続けることはできないだろうとアフロデイは審判に試合終了を申し立てる。雷門イレブンが誰一人立ち上がっていないのを確認し、主審が試合を終了させようとするが……

「まだだ! まだ試合は終わってない!」

「……! しかし君だけでは……」

「そいつだけじゃない!」

「そうだ! まだまだ戦える!」

円堂が立ち上がり、そして連鎖するように豪炎寺や鬼道、一之瀬達が次々と立ち上がった。そんな彼らの姿を見て、アフロデイは動揺を隠せなかった。

「信じられないという顔をしているな。円堂は何度でも立ち上がる！立ち上がる度に強くなる！お前は円堂の強さには敵わない！」

「鬼道の言う通りだ！俺達は絶対に諦めない！そうだろ！皆！」

「「おお!!」」

鬼道、そして円堂の言葉にチームの闘志が奮い立った。アフロデイは一瞬呆然としたかのような顔になったが、すぐに笑みを取り戻し告げる。

「そうか…しかし彼女は神に逆らう愚かさを既に理解したようだよ」

彼の目線の先には地面に膝をつき、顔を伏せたきりで打ちひしがれる羽花の姿があった。その瞳には一切の光がなく、絶望の色で染まっていた。

「…!? どうした！まだ試合は終わっていないんだぞ！羽花！」

円堂の言葉も今の彼女には届いていなかった。ただひたすらに虚無を見つめるのみだった。

「彼女を責めるのはやめたまえ。神の圧倒的な力を前にしては仕方のないことだ」

言い終わると彼は翼をはためかせ、宙に舞った。ゴッドノウズの体勢だ。

『アフロデイゴッドノウズの体勢！とどめを刺すつもりか！』

「ゴツドノウズ!!」

アフロデイが不気味な笑みでボールを蹴ろうとしたその時、ぴいという笛の音が鳴り響いた。前半終了だ。

「…命拾いしたね。雷門中」

崩れ落ちる円堂にそう言い残し、彼はベンチへと戻っていった。

「…!?神のアクア!」

「ええ、神のアクアが世宇子の力の源よ」

ベンチに戻った雷門イレブンに夏美から衝撃の事実が明かされた。世宇子の強さの秘密は神のアクアによるものだと。

「許せない、サッカーにそんな物を持ち込むなんて!サッカーをどれだけ汚せば気が済むんだ!」

その事実には怒りを露わにしていた。自分達の大好きなサッカーを汚されたことに。

しかしそんな中でも羽花だけはただ地面に座り込み、呆然と地面を眺めていた。そんな羽花が心配になり、円堂が声をかけようとしたその時、彼の視界に赤く燃え盛るなにかが横切ったと思うと、羽花は腹部に襲いかかった熱と衝撃と共に激しく吹き飛ばされた。

## 本当の想い

「がはっ！ゲホッ…ゲホッ…！」

突如襲ってきた激しい熱と衝撃、そして吹き飛ばされた痛みに悶える。それに耐えながら目の前にやってきた人物に視線を向ける。こんなボールを蹴れる人なんて1人しかない。

「…豪炎寺君……なんで……？」

私を襲った衝撃の正体は彼のファイアトルネードだった。突然のことで動揺し抗議しようとするが、彼の鋭い眼光に怯んでしまい何も言えなかった。

「……ふざけるな。まさか諦めたなんて言うんじゃないだろうな？」

「……ッ！……だって……私のプレーは何一つ世子子には通用しない…」

「サッカーは1人でやるものじゃない。たとえお前の力が通じなくても、11人全員で戦う。それがサッカーだ！」

彼の言っていることは正しい。だから私は反論することができなかった。だけども……

「……でも、私は……皆の役に立って……必要としてもらわないと！また独りになっちゃう



！だから私は！皆に必要としてもらえるように特訓して！強くならなきゃいけなかった！……でもダメだった……私の力は結局世宇子には通じない……皆に……必要としてもらえない……

言つてしまった。今まで隠し続けてきた本心を皆の前で……

「……勘違いしているようだが、ここには元よりお前のことを必要だと思つている奴なんて一人もいない」

「……ツツツ！」

私の言葉を聞いて戸惑つた表情をした豪炎寺君。それから目を瞑りなにか考えた後、口を開いた。

「……必要だと思つている奴なんていない、か……そうだよね、こんな役に立たない私なんて必要とされるわけない……」

「……だが、必要ないと思つている奴も一人もいない」

「……え？」

彼の予想外の発言に呆氣に取られる。どうということ？言つてる意味がまるでわからない。

「お前は俺達のことをそんなに信用できないのか？周りをよく見てみる！」

その言葉に顔を上げるといつの間にか皆が私を囲うように集まっていた。その顔に

は優しい笑みが浮かべられていた。

「豪炎寺の言う通りだ、俺達がお前を必要ないなんて思うわけないだろ。お前の調子が悪い時は俺達がフオローする、それが仲間だ！今更何水臭いこと言ってるんだよ」

「風丸君……」

「俺が陸上部に戻るか悩んでた時、残って欲しいって言ってくれただろ？あれ、結構嬉しかったんだぜ」

その言葉の後、染岡君が前に出て口を紡いだ。

「そうだな、俺が点を決められなくて悩んでた時も俺には俺の良さがあるって言ってくれたっけな。たく、他人のことばっか考えてるくせに自分はこれだ。ほんと、めんどくさい奴だぜ」

「染岡君……」

「俺、天川さんともっとサッカーしたいっす！」

「俺もでヤンス！」

「壁山君…栗松君…」

「俺が帝国のスパイだったって知っても受け入れてくれただろ」

「トライペガサスを完成させることができたのは君のおかげだ」

「ふ、お前は雷門の中盤の要だ。いつまでも情けないプレーをされては困る」

「土門君…一之瀬君…鬼道君…」

「マネージャーの仕事、いつも手伝ってくれたじゃない」

「一緒にお出かけできて楽しかったです！」

「木野さん…音無さん…」

彼らの言葉に涙ぐみそうになり唇を噛み締める。だけど、それでも抑えることが出来なくてポタポタと目から雫が落ちてくるのを感じた。

「私はあなたのことを親友だと思ってるわ。お人好しで、真面目で、頑張り屋なあなたのことが好きになったの。だけど、そう思ってるのは私だけだったのかしら？」

「……………?!?…そんなこと……………ない…わたしも……………思ってる!!親友だつて……………おもってるよ!!」

雷門さんの言葉にもう我慢なんてきかなかった。胸を突き上げてくるような感覚で、闇雲に涙が零れてくる。

「羽花！俺さ、羽花が好きだ！羽花とサッカーするのが大好きなんだ！初めて会った時に感じたんだ、こんな凄いやつとプレーできて楽しいって…！必要とか必要ないとか

じゃない！一緒にいるだけでいい！一緒にサッカーするだけで楽しい！それが仲間だろ！だからさ、羽花！サッカーやろうぜ！！」

屈託のない笑顔を見せてくれる守君。そんな彼の姿に決壊したダムのように流れ出てくる涙を抑えるのに精一杯だった。胸の奥が熱くなつて凍った心が溶けていくのを感じる。私はなんて馬鹿だったんだろう……皆は私のことを想っていてくれたのに……私は必要されないとつて勝手に焦つて……皆の声を聴こうともしないで……

「私も……守君が好きだよ！守君と……皆とサッカーするのが楽しくてしょうがないの！でも……また……皆に迷惑をかけるかもしれない……！足を引つ張るかもしれない！それでも……私……ここにいていいの………？」

「当たり前だ!!」

なんとか絞り出した問いに即答してくれる守君。その答えに皆も微笑みで返してくれた。守君が差し伸べてくれた手をゆっくり取る。その瞬間世界が光に包まれた。そうか……そうだったんだ……私は……

独りじゃない!!

審判が笛を鳴らして、後半開始を合図した。それを聞いて、私達はそれぞれポジションに向かう。だけどもあることを思い出して、私は自分のカバンの中を探った。そして手に取ったのは、前に皆で買った物に行った時に貰った白いうさぎのヘアピン。今まで自分に自信が持てなくて、つけるのを躊躇ってた。だけど今なら。ゆっくりとそのヘアピンを前髪につける。

「よく似合ってるわよ」

その声に振り返ると、私を親友と言ってくれた彼女がいた。

「まったく…手のかかる親友だ」と

「…ありがとう」

「お、お礼なんていいわよ………さあ、行ってきなさい羽花！」

相変わらず素直じゃない親友に、思わずクスリと笑う。でもその激励は私にとっては

何よりも勇気を貰えるものだった。だから私も最高の笑顔で答える。

「うん！行つてきます、夏未ちゃん!!」

雷門ボールから始まったボールはすぐに奪われてしまい、ゴール前のアフロディに渡る。彼はすぐに翼を生やして飛び上がった。前半に幾度となく苦しめられた必殺技。だけど不安は全くなかった。守君なら絶対に止めてくれるって信じてるから。

「これは…サッカーを守るための戦いだ!」

気合いを入れるように両手を叩いた守君。すると何かに気づいたように左手を見つめる。そして彼の次の行動は背中を捻るようにして後ろを向くことだった。

「諦めたか！だが今更遅い！」

アフロディはそう言うが守君が諦めるわけない。その時、彼の全身にエネルギーが満ちていくのを感じた。

「ツツツ！ゴツドノウズ！！」

「これが俺の！！マジン・ザ・ハンドだああああ！！」

守君が前を向くと同時に現れた魔神がゴツドノウズとぶつかり合う。目を開けていられないほどのエネルギーの衝突を制したのは……魔神だった。

その奇跡のような出来事に会場に静寂が訪れる。だけど何度確認しても、守君の右手にボールがしっかりと握りしめられていた。

「あれが……ついに……」

「「マジン・ザ・ハンド！！」」

雷が落ちたような衝撃、恐らく皆も同じものを感じただろう。湧き上がる会場を背景に守君がボールを前線に投げつけた。

「行っけええええ！！」

「……どこを狙っている!？」

投げられたボールは遙か上空、世宇子の選手でも届かない高度まで飛び上がった。これは私へのパスだ、守君は私なら取れるって信じてる。

ボールの真下まで走ると、思いつきり踏ん張って跳躍する。そして私は誰も届かないと思われたそのボールを空中で足元に収めた。

その瞬間、目の前が光に包まれた。そこで見たのは以前夢に出てきたあの影だった。

『どうやら気づいたみたいだね』

「うん、必要とかじゃない。皆私と一緒にいたいって思ってくれてる。そういうことだったんだね」

『……ふふ、俺はもういなくても大丈夫みたいだね。君には大切な仲間がたくさんいるんだから』

「……今までありがとう！私頑張るから！」

『ああ、ずっと見守ってるよ』

目を開けた私の视界には黄緑色のオーラが映っていた。それはだんだん私の中に吸い込まれていき、そして全身に熱い感覚が滾ってきた。

「……行くよー！」

地面に着地し、大きく1歩踏み出した。世宇子の選手達がボールを奪おうと立ちはだかってくるけど、今の私を止めることはできない。1人をマルセイユルーレットで抜き去り、1人をエラシコでかわす。

「さばきのてっつい!!」



「メガクエイク!!」

発動される必殺技、だけどそれでも私は止まらない。さばきのてっついで落下してくる巨大な足とメガクエイクで盛り上がる地面を一度の跳躍で飛び越える。

またもや前方に敵の姿が見えてきた。だけどそんなの問題にはならない。すぐにバックパスで鬼道君にボールを渡す。後ろを振り向き、彼のゴーグル越しにアイコンタクトをかわすと彼は上に向けてボールを蹴り上げた。

そこに私と私の隣を走る豪炎寺君が走り込む。一瞬彼の顔を見て微笑むと、無言で頷いてくれた。

「決めるよー豪炎寺君ー」

「おうー」

私達は同時に飛び上がり、炎を纏いながら回転しながらボールの元にたどり着いた。そして同時にシュートを放つと、炎は勢いよく燃え上がった。

「ファイアトルネードダブルドライブ D D!!」

1人で放つファイアトルネードとは比較にならないほどの爆炎を纏いながら、それは世宇子中のゴールを強襲する。

「ツナミウオール!!」

ポセイドンがゴール前に津波を呼び出し防御するが、私達2人……ううん、チーム全

員の想いが詰まったそのボールを止められるはずもなかった。

「「いけえええええええ!!!」」

「:!?なんだ、このパワーは!?うわああああ!!」

高くそびえる津波を突き破り、その先のポセイドンの巨体すら吹き飛ばしてボールはゴールに入った。

『ゴオオオオオオル!!なんだこのシュートは!?豪炎寺と天川が同時に放つ新たな必殺技が鉄壁のポセイドンを打ち破った!!』

「やったね豪炎寺君!それと:~:ありがとう!」

「ふっ」

豪炎寺君とハイタッチをし、お礼を言ったが彼はクールに微笑するのみだった。

「すげえぜ羽花!!豪炎寺!!」

「うわあ!」

急に後ろから抱きついてきた守君に私は倒されてしまった。そして次々と集まって一緒に喜んでくれる皆。私はその暖かさに再び溢れそうな涙をグツと抑えて代わりに言葉を紡いだ。

「みんな……:~:ありがとう!!!」

## 神の意地

ついに世字子からゴールを奪った。私は身体の底から燃え上がるような力を感じながら皆とその喜びを分かちあつた。

「というか天川、その髪どうしたんだ？目の色も変わっているような…」

風丸君の言葉で自分の髪の毛を確認すると、毛先の方が何故か緑色に変色していた。目の色は自分ではわからないから後で鏡で見してみよう。

「さあ？でもなんだか凄い力を感じるの！」

「さあつて……変な奴だな」

変な奴とは失敬な！でも自分に起こっている現象を自らでも理解できてないから何も言えないんだよなあ…なんとというかあの緑色のオーラを身体に吸収した感じ？うん、わからん！

世字子ボールで試合再開。彼らはシュートを止められた上に点を決められたことに動揺しているのか動きがさつきよりも明らかに鈍っていた。

「僕は確かに神の力を手に入れたはずだ！」

私に向かって突っ込んでくるアフロディ。あのヘブンズタイムを使われたら正直止

められる気がしないけど冷静さを欠いているのかその様子はなかった。

「焦りすぎだよ！」

彼の足元から一瞬離れた隙を突いてボールを奪い取る。そしてそのまま一気に追加点を取るべく攻め上がる。

「行かせるな！」

アフロデイの号令でデイフェンスの4人が私の進路を塞いだ。だけどそれは悪手だ、なぜなら今の雷門はまさに覚醒状態。さつきとはまるで別物だから。

「風丸君！」

左サイドを得意のスピードで駆け上がったってきた風丸君にパスを出す。彼の前には坊主頭のミッドフィールダーが1人いるだけだ。

「疾風ダツシュ!!」

文字通り風のような速さで相手を抜き去った。その間にデイフェンスが立ち塞がったけど染岡君にパスすることでそれを回避する。

「へ、天川ばつかにいい顔させらんねえからな」

そう憎まれ口を叩きながらパスを受け取った染岡君は一気にペナルティエリア内に侵入する。

「調子に乗るな！メガクエイク!!」

「グッツ……！取られてたまるかよ！天川！」

盛り上がった地面に飛ばされてしまった染岡君だが、弾かれつつもボールはしっかりとキープしていていた。そしてそれを私の方にバックパス。

「さばきのてっつい!!」

「ストームゾーン!!」

落ちてくる巨大な足を巻き起こした風で消し飛ばす。技を発動したデイフェンスもそれに巻き込まれて吹き飛んだ。

「2人共、力を貸してくれる？」

「おもしれえじゃねえか！」

「ああ、もちろんだ！奴らの鼻を明かしてやろう！」

いつの間にか両隣を走っていた風丸君と染岡君に声をかける。その返答に頷いた私は、ボールを宙に蹴り出した。

私と染岡君は空中跳びだして、回転しながら同時にいかと落としてボールを蹴り落とす。その時に発生したエネルギーを纏いながらボールは落下し、それを風を切りながら助走つけた風丸君が高速で蹴りつけた。

「「ザ・テンペスト!!!」」

螺旋状に黒と水色のエネルギーを纏った旋風が解き放たれる。そのあまりの速度に

反応できなかったポセイドンごと、それはゴールネットを激しく揺らした。その威力の凄まじさにボールはゴールに到達してもしばらく回転し続け、その間ポセイドンを拘束した。

『ゴ、ゴオオオオルツツツ!!また強烈なシュートが決まったあああ!雷門これで2点目!』

「よっしやあ!」

「やったな2人共!」

「うん、凄いよ!咄嗟にあんなシュート撃てるなんて!」

即興で放ったそのシュートの完成度の高さにハイタッチしながら喚起の声を上げる。ベンチの方から勝手に名前を付けるなど文句が聞こえてきた気がするけど無視無視。

「なんだ、何が起こっている……!!」

圧倒的実力差があったはずの相手に2点も取られたことにアフロデイが驚愕の声を漏らす。この状況に理解が追いついていないようだ。

キックオフからアフロデイが攻め込んでくる。高速でパスを繋げながら必死に点を取ろうとするその姿からは前半までの余裕は感じられなかった。

「ゴッドノウズ!!」

ゴール前に到達したアフロデイの渾身のシュート。それに対し守君は背を向け心臓

に気を貯め始める。

「マジン・ザ・ハンド!!」

再び現れた魔神の右手と白いオーラを纏った神々しいシュートが激突する。その凄まじさは付近の地面に亀裂が走るほどだった。

そしてそのぶつかり合いを制したのは魔神。守君の右手にはがっちりボールがキャッチされていた。

「そんな……」

一度ならず二度もシュートを止められたことに落胆するアフロディ。ボールは守君から鬼道君へ。

「イリユージョンボール!!」

必殺技でディフェンスを突破した鬼道君。その隣には一之瀬君が並走している。そして鬼道君がボールを蹴り上げると、飛び上がった一之瀬君がヘディングで落とすと鬼道君がそれをシュートする。

「ツインブースト!!」

「ギョギョのてっつい!!」

シュートコースを塞ぐように現れた巨大な足がツインブーストの威力を相殺し、弾かれたシュートは空中に放り出された。

「だああああ!!」

それにいち早く反応した私はボールに向かって飛び上がった。すると黄緑色に輝く月が出現しボールと重なる。その光は今までに比べて色濃く、そして美しかった。

「ムーンフォースラビットオオ!!」

オーバヘッドキックでその月を蹴り落とす。月はいくつもの星屑へと姿を変えて地面に降り注ぐ。その数と大きさも以前と比較にならない。何度も地面を跳躍した星屑はやがてひとつのシュートとなりポセイドンを襲う。

「ギガントウオール!!……!?ぐああ!!」

巨大化してシュートを阻もうと拳を振るうポセイドンだが、シュートに触れた瞬間そのあまりの威力に振り飛ばされた。

「今のは……ムーンフォースラビットG2と命名させていただきますましょう!」

ベンチで1人興奮する眼鏡君。でも私にはそんな声聞こえていなかった。自分でもこんなに威力が出るとは思わなかったからだ。今までのとは比べ物にならない。

何はともあれこれで4対3。残り2点で勝ち越した。

ホイッスルが鳴り試合再開。アフロデイが单身突っ込んでくる。

「行かせないよ!」

「ヘブンズタイム!!」



私はアフロデイの前に立ち塞がるが彼が指を鳴らした瞬間姿が消えてしまった。ただけどその必殺技は何度も見た。故に私はその後襲ってくる突風を飛び上がり回避した。そしてそのまま空中で何かを振り払うように回転するといくつもの光の粒子が現れてアフロデイを囲った。

「グランドスイーパー!!」

その粒子の一つ一つが大爆発を起こしアフロデイを吹っ飛ばした。そしてボールは着地した私の足元に転がってくる。

「ぐ………まだだ!」

そのままドリブルをしようとするがすぐに追いついてきたアフロデイに進路を蓋がれた。

「何故だ!僕達は確かに人間を超越した神の力を手に入れたはずなのに!何故君達のようなただの人間がここまで食い下がれる!」

「確かにあなた達の力は凄いかもしれない。でも私達は一人で戦ってるんじゃない!チームみんなで力を合わせれば何十倍にも何百倍強くなれるんだ!」

「ツツ………そんなこと、認めてなるものか!!」

「はあああああああ!!」

ボール越しに私とアフロデイの渾身の蹴りがぶつかり合う。数秒の拮抗の後、私はそ

の衝撃に耐えられず弾き飛ばされた。前方を見るとアフロデイも同じ状況のようだ。弾かれたボールを取ろうにもさっきのダメージが残って身体が思うように動かない。

「お願い、みんな！」

「任せろ！」

そのボールを拾ったのはいつの間にかここまで上がってきていた守君だった。彼はとてもキーパーとは思えない豪快なタックルでデイフェンスを突破し鬼道君にパスを出した。そしてそれを受け取った鬼道君がボールを蹴り上げると、そこに落雷が発生。闇と稲妻を纏ったボールに鬼道君、守君、豪炎寺君の3人がそれぞれ蹴りを入れる。

「「イナズマブレイク!!」」

「ギガントウォール!!……………!があああ!!」

巨大化したポセイドンの拳をなぎ払い、稲妻を纏ったシュートがゴールに突き刺さった。ついに同点に追いついたことに歓喜の声を上げる私達。対照的に世宇子中の選手達は膝をつき崩れ落ちていく。

「同点…!?!ありえない……………」

「俺達は負けるのか……………」

考えてみれば当然だ、彼らの力は神のアクアで手に入れた偽物の力。確かにその実力は凄まじいけど、それは日々の努力で手に入れたものじゃない。いざという時に自分を

支えてくれるのは毎日のように辛い特訓を乗り越えてきた積み重ねなんだ。雷門の皆を見ているとそれを強く実感する。

このまま逆転勝ちだ、と守君がみんなに声をかける。けれど私の目には拳を強く握つてわなわなと震えるアフロデイの姿が入ってきた。その目は血走っていてこれまでにない狂気のようなものを感じる。

「……まだ一波乱ありそうだね」

誰にも聞こえないようにそう呟くと、私は自分のポジションに戻っていった。

残り時間が少ない中、アフロデイは屈辱と敗北感に心が押し潰されそうになっていた。自ら最強であると自負していたゴッドノウズは止められ、鉄壁であると思っていたデイフェンスも破られ、遂には同点に追いつかれた。それも自分達の敵ではないと見下

していた雷門にだ。彼らにここまでの力はなかったはずだ、事実前半は自分達が完全に圧倒していた。相手の反撃など寄せ付けず完全なワンサイドゲームだった。だが後半になってからはどうだ、未完成だったはずのマジン・ザ・ハンドが突然成功したことを皮切りに、力の差に打ちのめされていたはずの少女はまるで覚醒とも言えるようにプレーがガラリと変わり、自分達に牙をむいた。他の選手達もまるで別人のように動きがよくなり、気づけば同点だ。

「これが……仲間と共に戦う力だと言うのか……」

そんなもの認めない、認められるわけがない。それを認めてしまったら、神のアクアに頼ってまで力を得た自分達を否定することになる。故に彼は覚悟を決めた。次のプレーに全てを賭けると。

「僕は……負ける訳にはいかないんだ……」

審判の笛で試合が再開される。次の瞬間、フィールドに突風が巻き起こった。ボールを受け取ったアフロディイが目にも止まらぬ速度で加速し、豪炎寺と染岡を抜き去った。突然のことに動揺していた彼らは反応出来ずに突破を許す。そして羽花、鬼道、土門、壁山と次々に物凄いスピードでかわしていき、遂には円堂と1対1になった。

今の彼を突き動かしているのは神のアクアではなく負けるわけにはいかない、負けたくないという純粹な気持ちだった。

そしてアフロディはボールと共に跳躍する。背中には翼が生えているがそれは今までの純白の翼ではなく、黄金に輝く神々しいものだった。彼の周りにはいくつもの雷が降り注ぎ、ボールは巨大な黄金のオーラを纏う。

「ゴッドノウズ・インパクトオオ!!」

アフロディがそれを蹴り込むと、雷と共にエネルギーの塊と化したボールが雷門のゴールに襲いかかった。

## 聖戦・決着

「ゴッドノウズ・インパクトオオオオ!!」

試合再開直後、急加速したアフロデイに私達は全員抜かれてしまった。すれ違いざまに見えたその目には今までにない闘志のようなものが迸っていた。やばい、そう直感した私はすぐさま彼の後を追った。しかしその時には既にシユート体勢に入っていてこれまでゴッドノウズとは比べ物にならない程の強力なシユートが放たれていた。

「マジン・ザ・ハンド!!」

魔神を出現させてその神の一撃に対抗する守君。しかし徐々に魔神の手が後ろに押されている。守君はたまたまず両手を使うもそれは変わらなかった。

「ぐあああああ!!」

必死に破られまいと踏ん張るも、シユートは勢いをさらにましてゴールに強襲する。だけど、彼の頑張りは無駄ではない。そのおかげでフォローが間に合った私は、守君の後ろに立ち背中を両手で力いっぱい押さえた。

「……………!?羽花!!」

「絶対止めるよ!!守君!!」

「へへ、おう!!行くぞ!!」

「はああああああああああああ!!」

その時、私の身体から黄緑色のオーラが放たれた。それは守君の身体に吸い込まれるように入っていく。すると魔神はより色濃く、虹色の輝きを放ちながら巨大化し姿を変えていった。

「グレイト・ザ・ハンドオオオオ!!」

私と守君、2人のありったけの力を込めた右掌がアフロデイ渾身の一撃と衝突する。そのあまりの衝撃に周辺の地面はえぐれ、エネルギーのぶつかり合いで突風が巻き起こり私達は立っているだけでもやつとだった。それでも必死に踏ん張り喉が張り裂けそうになるほどの声をあげる。

「負けてたまるかああああああ!!」

その声に呼応するように魔神の右手がさらに一回り大きくなる。その瞬間大爆発が起こり、辺りに砂埃が巻き起こった。周囲からは激突の結果はわからないだろう。けど私にはわかっていて、守君の両手にガッチリとボールが握られていることを。そして砂煙は徐々に消えていく。

『と、止めたああああ!2人がかりの必殺技でアフロデイのシユートを止めました!!しかし残り時間はロスタイムを残すのみ!このまま延長戦に突入か!』

「行くぞおおー！これがラストチャンスだー！」

守君の手からボールが投げられ、私もそれに追隨して走りだす。時間的にこれが最後の攻撃だ。ボールを足元に収めたのは一之瀬君、だけどすぐに世宇子がスライディングでボールを奪いに来た。間一髪パスでかわしたけどそのプレーを見てわかった、世宇子の目に闘志が戻ってきていることに。さっきのアフロデイのプレーが世宇子全体に力を与えたんだ。

「いいね、そうこなくっちゃー！」

一之瀬君からのパスを受け取った私は思わず笑みを零した。だってサッカーをして一番楽しいのはお互い全力を出し尽くす真剣勝負をしている時なのだから。

ドリブルを開始する私だが、すぐにデイフェンスに阻まれた。さっきよりも対応のスピードが上がってる。向こうもレベルアップしてるってわけね。

「鬼道君ー！」

すかさず鬼道君にパスを出すと、彼はそれをダイレクトで風丸君へ。素早い動きで敵をかわした風丸君は再びボールを私に返した。

「メガクエイク!!」

「ぐつつ…!!」

パスを受け取った瞬間、盛り上がり上がってきた地面に弾き飛ばされた。だけどこのボール



だけは絶対に渡さない。なんとか身体を動かしヘディングでバックパス。

「最後の一秒まで全力で戦う、それが俺達のサッカーだ!!」

そのボールを取ったのは一之瀬君。両隣に守君と土門君が並走し、高速で交差することでエネルギーを増幅させ不死鳥を生み出した。不死鳥は空へ舞い上がり、それを3人が同時に蹴り出す。

「ザ・フェニックス!!」

放たれた不死鳥は燃え盛る炎を撒き散らしながらゴールへ迫る。——————ただでそれで終わりじゃない。そのシュートに私と豪炎寺君、鬼道君が追従する。そして豪炎寺君と鬼道君が飛び上がり、ボールを中心に回転するとそれは輝かしい青白い光を纏った。それを豪炎寺君が左足、鬼道君が右足、そして最後に跳躍した私が下からオーバヘッドでそれぞれ同時に渾身の力で蹴り込む。

「プライムツツ…レジェンドオオ!!」

不死鳥は赤い炎を纏った姿から神々しい姿へと変化すると、世宇子ゴールへと向かっていく。しかしシュートコースの前に一つの影が現れた。あれは…アフロデイ!?

「僕は負けない……! 負けたくないんだ!!」

そう叫んでシュートに向かって飛び上がると、彼の足には黄金のエネルギー、背中には翼が現れた。そのままシュートを蹴り返そうと足をボールにぶつける。

「ゴッドノウズツツ……インパクトオオオ!!」

ぶつかり合いによって生じたエネルギーが大地を揺らし、天を裂く。アフロディはかつて聞いたこともないような悲鳴をあげるが、それでも蹴り返すことを諦めなかった。

「がああああ!!」

「「いけええええええ!!」」

激しいせめぎあい、それでも私達の叫びが届いたのかついにシュートはアフロディを吹き飛ばし、ゴールへと向かった。

「ギカントオオ……ウオール!!」

チームみんなの想いを込めたボールはアフロディを、そしてポセイドンをも吹き飛ばしてゴールへと突き刺さった。そしてそれと同時に審判が試合終了の笛を鳴らす。

『逆転!雷門勝ち越し!そしてここで試合終了!雷門、劇的な大逆転勝利だああ!!』  
「……勝った?」

その事実をすぐには理解できなかった。ただ得点板を確認しても5対4で雷門が勝ってる。それに沸き立つ観客の声援と守君に駆け寄る皆の姿を見てやっとその現実を認識した。

「よかったあ……」

皆と同じように守君のところに行こうとしたけれど、無理をしすぎたのか身体に力が

入らずその場で仰向けに寝転んだ。空を見上げると私達を称えるように色とりどりの紙吹雪がそこら中に舞っていた。

(色々あつたけど、雷門に入つてよかつたな)

守君達には本当に色んなものを貰つた。絶望から救い出してくれた。きつとこんな素敵な仲間にはこれから先一生出会えないと思う。だからこそ私はこのチームでサツカーを全力で楽しみたい。……そう、ここがゴールじゃない。始まりなんだ、私の新しい人生の。

「お疲れ様。それとおめでとう、羽花！」

「夏美ちゃん……うん、ありがとう！」

差し伸べてくれた夏美ちゃんの手を取り、立ち上がる。思えば彼女にも沢山助けてもらったな。今度何かお礼しなくちゃ。料理でも教えてあげようかな……次の犠牲者が出る前に。

「はあ、まったく。見てるこつちがハラハラしちゃったわ」

「えへへ、ご心配おかけしたようで」

呆れた様子でそう言う夏美ちゃん。だけどそれは心配だったって言うのが恥ずかしいから誤魔化してるだけだ。だから私は笑顔で答えた。まったく我が親友ながら可愛い。

「おーい羽花！なにしてるんだ、こっち来いよ！」

「……うん！今行くよ！」

守君に呼ばれて皆の歩んでいく。すると皆が一斉に私を取り囲んだと思うと、次の瞬間には私は空を飛んでいた。

「よし、羽花を胴上げだ！」

「へ!?ちよ、ちよつとま……うわああ！」

いくら私が普段からポンポン飛んでるからって他人に飛ばされるのは怖いんですけど!?夏美ちゃんに涙目で視線を送っても笑って手を振るだけだし。てか今誰か変なこと触ったでしょ!?

そして数分後、やつと解放された私は臓器が身体の中をぐるぐる回る感覚を味わいながら地面に項垂れていた。要するに気持ち悪い。

「はあ、酷い目にあつた……」

「何言ってるんだ、さつきまであんなにフィールドを飛び回っていたじゃないか」

「自分で飛ぶのとは違うの!……なんなら鬼道君も飛んでみる?」

「……遠慮しておこう」

メガネのようにゴーグルをクイと上にあげる動作をする鬼道君。くそう涼しい顔しやがってコノヤロウ!

「でも本当に今日の試合、勝てたのは羽花のおかげだ。ありがとう」  
「守君……お礼を言うのは私の方だよ。みんな、ありがとう！」

私がここまで強くなれたのは間違いなく彼らのおかげだ。私はこれからもこの仲間達とサッカーを続けていく、この最高の仲間達と。だからこの節目にこんな言葉を紡ぐ。

ありがとう、イナズマイレブン!!



### おまけ・閑話

フットボールフロンティア決勝2日後、雷門サッカー部女子部室にて

「え？自己紹介動画を撮る？なんでまたそんな…」

「……次の全校集会で発表する部員募集動画を作りたいから？……そういうのって普通キャプテンの守君を撮るんじゃないの？」

「……私の方が受けがいいから？……意味わかんないけど」

「……って春奈ちゃんカメラ向けないでよ！もう、しょうがないな！髪の毛直すから待ってて……」

「……よし、いいよいつでも準備OK!……え?もうとつくにカメラ回ってる?ちよつと!?なんでそれ言わないの!?今のとこ絶対カットしてよ!夏美ちゃんと秋ちゃんも笑わないの!」

「まったく……こほん、皆さんこんにちは。サッカー部2年の天川羽花です。」

「ポジションはミッドフィールダー。だけどフォワードもディフェンダーも一応はできます。キーパーはさすがに難しいですけど」

「特技はドリブルと、後ジャンプ力には自信があります。こう見えてジャンプ力はチームでもトップレベルなんですよ」

「私達サッカー部は知つての通り少し前までは部員が7人しかいない弱小チームでした。でも、キャプテンの円堂守君を筆頭に血が滲むような努力を重ねて、ついに中学サッカーの全国大会、フットボールフロンティアで優勝しました。」

「私は以前まで自分に自信が持てませんでした。でも、サッカー部に入って皆とサッカーをする内に、段々と自信を持てるようになりました」

「雷門サッカー部はそんな勇気を貰える不思議なところですよ。皆さんと一緒にサッカーできる日を楽しみにしています!ご清聴ありがとうございます!」

「ふう、こんな感じかな……?我ながらいいスピーチだったんじゃない?……え?次はこの紙に書いてある質問に答えればいいの?」

「なになに……趣味、好きな食べ物、嫌いな食べ物……ねえ、これサッカー部に関係なくない？……需要はある？……どういうこと？」

「まあいいや……えつと、趣味は……サッカーかな？……え？サッカー以外？……じゃあ、料理かな？最近始めたんだけどコレが結構楽しいんだよね……始めたきつかけ？友達に壊滅的に料理ができない子がいて、その子に教えてあげるためかな。え？……誰のことかって？さあ？誰だろうね？ふふ」

「次は好きな食べ物……うゝん難しいなあ……唐辛子入りのおにぎり……かな……？……冗談だよ、怒らないで。……肉じゃが、かなあ……温子さんが作ってくれるのすごく美味しいんだよね。で、嫌いな食べ物か……ニンニクとかほうれん草かな……特に深い理由はないけど」

「最後にこれからやりたいこと……この前鬼道君が言ってたんだ。世界にはまだまだ私達の知らないすごいプレイヤーがいるって。私はそんな人達と戦いたい！……つてのはちよつと単純かな？でもそれが今私がやりたいことだよ」

「こんなところかな……春奈ちゃん、一応言っておくけど最初のところはちゃんとカットしておいてよ？」



「こら春奈ちゃん！なんでカットしてないの！……面白そうだったからじゃない！夏美ちゃんも秋ちゃんも笑うなあ!!」



## 脅威の侵略者編

## サッカー部が消えた日

朝、私はカーテンの隙間から刺す朝日で目が覚めた。時計を見ると6時ちょうど。

フットボールフロンティア決勝から1週間が過ぎようとしていた。あれからも私達は毎日特訓を続けている。特に守君はより一層気合いが入っているようだ。前に鬼道君達と話した世界のサッカープレイヤーのことを考えて燃えているのだと思う。

……だけどやっぱり私が起こさないと朝練の時間に起きれないのはどうにかしてほしいよね……

そんなことを考えつつ守君を起こしに行く。もはや日課と言っているいかもしれない。一応ノックして部屋に入ると、やっぱりいつものごとくまだぐっすりおやすみ中だった。

「守君、朝だよ！起きて！」

カーテンを開けつつ声をかけるが起きる気配はない、いつも通りだ。

「守君、朝練するんでしょ！時間無くなっちゃうよ！」

守君は大抵サッカーや朝練という単語を出すと飛び上がるように起きてくる。多分

寝てる間もサッカーのこと考えてるんだろうな。

ところが今日はゆっくりと目を擦りながら怠そうに起きてきた。珍しいこともあるものだ。

「なんだよ羽花、こんな朝早く」

「朝練の時間だよ。早く準備してね」

「朝練？なんのだ？」

今日は特に寝ぼけているようだ。とろんと眠気が残った声で守君はそう答えた。

「なんのつて……サッカーでしょ！寝ぼけてるなら先に顔洗ってきたら？」

「サッカー？羽花、サッカーなんてやってたのか？」

「へ？……サッカー部なんだから当たり前でしょ」

あんまり寝ぼけてるようだからファイアトルネードでもぶち込んでやろうかと冗談混じりに考えていると、守君はキョトンとした様子で口を開いた。

「……うちの学校にサッカー部なんてあったか？」

「は……？何言ってるの？あるもなにも……守君キャプテンでしょ？」

「俺サッカーなんてやったことないぞ？寝ぼけてるのか？」

そう言うのと守君は下に降りていってしまった。…寝ぼけてる？それにしても様子が

変だったし冗談を言ってるようには見えなかった。そもそも守君はそんな冗談を言うような人じゃない。

その後朝食を食べている時にも話をしてみたけど結果は同じだった。それどころか温子さんや広志さんまで守君と同じ反応だった。一番驚いたのが大介さんの話をした時だ。

「じいちゃん？何言ってるんだ、じいちゃんは生きてるぞ？」

生きてる…？大介さんが？……ううん、そんなはずはない。だって毎日守君は仏壇に挨拶してたし、私も1回お墓参りに行ったことがある。だけど仏壇があった場所はクローゼットになっていて、仏壇は跡形もなく消えていた。

「いったいどうなってるの……？」

いくら考えても答えの欠片も浮かんでこなかった。わけもわからないまま、私は1人学校へと向かった。



放課後、夕焼けを浴びながら私は河川敷の堤防に呆然と座っていた。

あの後、学校に行った私を待っていたのは到底理解できないような現象だった。まず

教室に入つて感じた一番の違和感、それは豪炎寺君がいないことだった。いつも遅刻ギリギリに来る彼だけど今日はホームルームが始まっても姿を表さなかった。それどころか皆豪炎寺君がいないことを疑問にも思つていない様子だった。

秋ちゃんに聞いてみたら

「豪炎寺君？そんな人うちのクラスにいないわよ？」

と返つてきた。守君に聞いても答えは同じ。まさかと思つて鬼道君達のクラスをいに行くど鬼道君だけじゃなく土門君と一之瀬君の姿もなかった。

「豪炎寺君達がいなくなつてる……？」

奇妙な現象はそれだけではなかつた。廊下で風丸君を見かけたので声をかけると「誰だ？」と彼は答えた。頭の中がフリーズしてしまつた私は何も言うことができず、そんな私を見て彼は変なものを見たような顔をして行つてしまつた。

それから染岡君やマックス君、壁山君に栗松君達にも声をかけたけど、同じクラスの半田君以外誰も私のことを覚えていなかった。それどころかサッカー部のこともフットボールフロンティアのこともなにもかも。まるで最初からサッカー部なんてなかったかのように皆忘れてしまつていた。

それだけならまだ悪質なドッキリで片付けられたかもしれない。だけどそんな希望はすぐに崩れ去つた。サッカー部の部室や女子部室、イナビカリ修練場も綺麗さっぱり

消え去ってしまったのだ。昨日までは確かにそこにあつたはずなのに。

そしてなにより夏美ちゃんに声をかけた時……

「……誰？ 馴れ馴れしく声をかけないでくれる？」

「私だよ！ 天川羽花！ 私達友達でしょ！ 忘れちゃったの!？」

「あなたのような友人は私にはいなくつてよ。用がないならこれで失礼するわね」

……シヨックだった。私にとっては初めての友達……親友だったのに。それにサッカー部の皆も大事な仲間だ。皆とサッカーをする時間は本当に楽しかった。皆サッカーが大好きで、頑張つて特訓してたのに……

何が起こつているのか理解できず、ただ寂しさや悲しみで涙が滲んでくる。

「サッカー部が……消えた……？」

「ノー。サッカー部は消えていない」

「え？」

突然の返答に振り向くと、紫色の髪に見たことないような服装をした少年が立っていた。

「雷門サッカー部の消去は不完全だ。天川羽花、これよりお前からもサッカーを消去する」

「……………あなたは…誰？」

「私はアルファ。我が使命は雷門サッカー部の消去、残る痕跡は…お前だけだ」

アルファと名乗った少年は無表情に淡々と私の質問に答えた。…サッカーの消去

……………まさか!?

「あなたのせいなの!?!意味わかんないけど、皆がサッカーのことを忘れてるのは!」

「そうだ」

「ツツツ…!?!なんでそんなことを…今すぐ皆を元に戻して!」

全然理解できないけど、こいつが皆からサッカーを……………許せない、皆一生懸命に大好きなサッカーに打ち込んでいたのに…それを奪うなんて……………!

「ノー。我々が行うべきはその逆、サッカー部の完全消去だ」

「……………ツツ…させない!」

「拒否はできない」

『タイムワープモード』

彼が何か薄いものを指先で放り投げたかと思うと、それはサッカーボールの形へと変化していった。そしてアルファがボールに足を置くと音声が流れてボールは赤い光を発し、それを彼がこちらに蹴りこんできた。咄嗟のことに避けきれないと、ボールは私の前で止まり眩い光を放った。

次に目を覚ました時、私はサッカーグラウンドの真ん中にいた。ここは……もしかしてフットボールフロンティアスタジアム!?

見覚えのあるその景色、ついこの前までここで全国一を賭けて戦っていたのだから。「お前がサッカーを失うのに相応しい場所だ。天川羽花、お前には何故かインタラプト修正の影響が見られない。よって少々強引な手段をとらせてもらう。喜べ、ここからはお前の好きなサッカーの時間だ」

突然、アルファの周りに同じ服装をした男女が現れた。人数はアルファを入れてちょうど一人だ。

「あなた達は……サッカープレイヤーなの?」

「そんな次元の低い存在ではない。我々は時間に介入することを許されたルートエージェント。サッカーがこの世から消えていくルートを生み出すのが我らの使命。サッカーは……我々が消去する!」

『ストライクモード』

ボールが今度は黄色の光を放ち、アルファがそれをこっちに蹴りこんでくる。

「そうはさせない!……つつきやあ!」

蹴り返そうとするが凄まじいパワーに弾き飛ばされてしまった。このシュートの威力……もしかしたらあの世宇子以上……

「……………これくらい、なんとでも!」

「そうかな…」

「……………!?!」

いつの間にか囲まれていた私に容赦なく何度もシュートが撃ち込まれる。私はそのシュートの速度と威力に避けることも蹴り返すこともできず、ただサンドバックになるしかなかった。

「うああああ……………!」

「どうだ、感じたか? サッカーの恐ろしさ。サッカーは痛い、辛い、重い、苦痛、邪悪、不必要。そう、サッカーは不必要だ」

「サッカーは……………不必要? ……………うああああ!」

頭の中に色んなものがグチャグチャに流れてきた。サッカーは…不必要? サッカーは…サッカー……………は……………

「サッカーは……………不必要なんかじゃない! 絶望のどん底にいた私を救ってくれた……………大切なものなんだ!」

「……………!?!」

「サッカー部の皆は…私を……………助けてくれた……………手を差し伸べてくれた……………だから……………今度は私が……………皆を助ける!」



「……そうか、ならば！」

アルファのシュートが私の顔面向けて放たれる。避けられない、そう確信した時「サッカーは必要だ！」

目の前をひとつの影が通り過ぎた。それはシュートをカットし、そしてアルファへと蹴り返す。

「サッカーは必要。そうだろ？羽花」

「……フェイ？どうしてここに……」

その人物は私も知る人だった。よく一緒に特訓している私のサッカー仲間、フェイ・ルーンだ。

「……何者だ？」

「僕の名前はフェイ・ルーン。羽花と同じ、サッカーを必要としている者さ。1人をいたぶって楽しい？だったら勝負しようよ」

「勝負？なんの勝負だ？」

フェイが指をパチンと鳴らしたと思うと、彼の背中から紫色のオーラが溢れ出た。それは少しずつ人の形に姿を変え、赤いユニフォームを身にまとった選手となった。ユニフォームには天の字があしらわれている。

「これでどう？」

「…いいだろう」

本当に全然理解が追いつかないんだけど要するに彼らとサッカーで勝負して勝たないと雷門サッカー部は戻ってこないらしい。だったらやってやる！サッカー部を消すなんて絶対させない！

私達がそれぞれポジションにつくと、フィールドの横に赤いキャップを被った男性が現れた。彼は一瞬戸惑ったかと思うと手に持ったマイクを見つめて陽気に実況を始めた。

「ではお願いする」

「おう、任せとけ！」

「選手データは全てこの男にインプットした。実況はサッカーに不可欠だと聞いている。我々はプロトコル・オメガというチーム名で登録した。お前達のチーム名は？」

「そっか、即席のチームだからまだ名前が無いんだ…僕達のチーム名は…よし、アマカワーズだ！」

「あ、アマカワーズ…？」

「天川羽花のチームだからね。ピッタリでしょ！」

「ダサイよフェイ…もつといいチーム名あったでしょ…なんなら別に雷門でもいいし…」

「はいこれ」

「…え？これってキャプテンマーク？」

「これは君のサツカーを守るための戦いだ。だからキャプテンは君に任せる」

そう言つて黄色い布を差し出してくるフェイ。私は一瞬考えて、覚悟を決めてそれを受け取つた。守君達が帰ってくるまではやるしかない。

『さあ、プロトコル・オメガ対アマカワーズの試合開始です！』

F W      フェイ、キモロ

M F      ドリル、マント、羽花、チビット

D F      ストロウ、スマイル、デブーン、ウオーリー

G K      マッチョス

ホイッスルが鳴りプロトコル・オメガのキックオフで試合が始まった。そしてすぐにオレンジ髪の女性がバックパスをしたと思うと、彼らは超高速でパスを回し始めた。その速度は世宇子を遙かに上回つていて私はそれを目で追うことすらできない。

「何……!?この速さ!?!」

「大丈夫、目が慣れてないだけさ。さあ、戦うよ!」

そう言つて飛び出したフェイは目にも止まらぬ速度で飛び上がりパスをカットして

しまった。そして高速でボールと共に跳躍を繰り返しあつという間に敵ゴール前に辿り着いた。

「……………すげー！」

そのままフェイは2回、3回と飛び跳ねて、月を背景にオーバーヘッドキックを叩き込んだ。

「バウンサーラビット!!」

私も使う必殺技、バウンサーラビット。だけどフェイが放つそれは私のとは比べ物にもならない強さでプロトコル・オメガのゴールに迫っていく。

「キーパーコマンド03!!」

『キーパーザノウ、止めたああ!』

しかしその強烈なシュートもキーパーに阻まれてしまった。私はその一連のプレーのレベルの高さに唖然としていた。私とは次元が違う……本当にこんな奴ら相手に戦えるの……?」

『さあ、今度はプロトコル・オメガの攻撃だ!アマカワーズ防げるか!』

ボールを持ったアルファが攻め上がってくる。姿を追うことさえ出来ない速度に私はあつさり抜かれてしまった。

「ダイフェンスだ!」

「「おう!!」」

フェイの合図でデイフェンスの3人がアルファを囲んだ。すると紫色の三角形の物体が現われ彼らを覆った。

「「フラクタルハウス!!」」

囲いの中からハロウインを彷彿とさせる城が現れたと思うと、そこに落雷が落ちる。だけどアルファはそれを飛び上がって強引に突破するとシュート体勢に入った

「シュートコマンド01!!」

強烈な風を纏ってアルファがシュートを放った。対するキーパーのマッチョスは深く息を吸い込んだと思うとシュートを胸の筋肉で受け止めた。

「エクセレントプレス!!」

『止めたあ!なんとという激しい攻防!一進一退とはこのことだ!』

それからは両チーム無得点でボールを奪い合う時間が続いた。そしてその均衡を破ったのプロトコル・オメガだった。

「羽花!」

マントからボールを受け取った私の目の前にアルファが立ちほだかる。

「くっ……アグレッシブ……」

「遅い!」

必殺技で突破しようとするもその暇すらなく肩をぶつけられボールを奪われた。私  
はなすすべなく宙を舞い地面に叩きつけられた。

「そろそろ行く」

「存分にお暴れください」

加速したアルファはディフェンスをなぎ倒すよう突破していき、マツチヨスと1対1  
になった。

「天空の支配者鳳凰!!」

飛び上がったアルファの背中から巨大な人のような何かが飛び出してきた。大き  
な翼を持ったそれは、まさに伝説上の鳳凰そのものだ。

「何……あれ!？」

「化身だよ、人の強い心が形になって現れたものさ」

「化身……そんな力があるなんて……」

「……それだけじゃないよ」

「アームド!!」

私は驚きのあまり動けなかったが、それだけではない。アルファは流れるように化  
身を鎧のように纏ってしまった。

「あれが化身アームド。化身を鎧のように纏うことでより強力な力が出せるんだ」

「化身……アームド……」

化身アームドしたアルファのシユートが放たれる。必殺技も使っていないシユートはそれでもものすごく強烈だ。マッチョスが目を見開いて驚いたその一瞬が命取りとなり、ボールはゴールに突き刺さった。

『ゴオオオル!!先制点はプロトコル・オメガだあ!!』

そのシユートのあまりの強烈さに私は身体が動かなかった。あのシユート……アフロデイのゴッドノウズ・インパクトよりも遥かに……

「フェイ……どうすれば?」

「大丈夫、まもなくだ」

「へ?なにが?」

「来るよ……3……2……1」

空を見上げてカウントダウンを始めたフェイ。するとその視線の先にいきなり空を飛ぶ車?のようなものが現れた。車の窓が開いて中から誰かが手を振っていた。あれは……熊!?

「おお、羽花ちゃん!ごきげんよう!」

……なにこれ、喋る青い熊が空飛ぶ車を運転しながらこっちに手を振ってる……やつぱり夢でも見てるのかな……?」

た。そう思って自分の頬を叩いてみたけど、そこにはヒリヒリとした痛みが残るのみだった。



## 時を越える羽花

「フエイ、首尾よくいつてるか？」

「うくん……ちよつと苦戦中」

前半終了後、突然何も無い空から現れた車から出てきた青い着ぐるみのような熊が当然のようにフエイに話しかける。フエイは頭に手を当ててちよつと困ったようにそう答えた。

「やはり……この大監督、クラーク・ワンダバット様がないとダメみたいだな」

え……？この熊監督なの……？それになんだか声が鬼道君と似てるような……気のせいかな？

「監督……？この熊さんが……？」

「熊さんではない！私はクラーク・ワンダバット！ワンダバと呼んでくれたまえ！よろしく！」

「う……うん。よろしく？」

熊……ワンダバが手を差し出してきたので一応その手を取る。その時、フエイが指を鳴らした。すると私の後ろにいたはずの選手達が一瞬で消えてしまった。

「えええ!?…消えた!？」

「あ、言つてなかったけ? 彼らは僕が出しているデュプリと呼ばれる代行選手さ。彼らは実体がないんだ」

な…なるほど? 戦国伊賀島の選手で分身する必殺技使つてる人がいたけどその一種なのかな? ……ダメだ、意味わかんないことが多すぎて頭がショートしそう…

「それよりワンダバ、頼んでたやつ取つてきてくれた?」

「もちろんだ! このワンダバ様に不可能はない!」

「ホント? 早く見せて見せて!」

私が頭の中で考えを整理している間に何やらあつちでは話が進んでたみたいだ。ワンダバが背中に背負つたりリュックから伸びているおもちゃの銃のようなものを構えて何も無い地面に向かって引き金を引いた。すると銃口からオレンジ色のオーラが飛び出し、地面に着地する。そしてそこに現れたのは…

「恐竜!？」

「ティラノザウルスだよ!」

「よしフェイ! ミキシマックスだ!」

も…もうなにがなんだか…。フェイは恐竜が現れた反対方向の空いたスペースに走り出し、OKと合図を送った。ワンダバが恐竜を出している方とは反対の手に持つて

いた銃をフェイに向けて引き金を引く。そっちからも同じようにオレンジ色のオーラが飛び出し、フェイを包んだ。

「はあああああ!!」

「ミキシマックス、コンプリート!」

数秒経ちオーラが晴れると、フェイの姿が変わっていた。緑色だった髪は薄いピンクに。髪型もツインテール状から後ろで結んでいるように変化している。

「フェイ……?大丈夫?」

「ああ、これがミキシマックスだ!ミキシマックス・ガンによって、僕の個性とテイラノザウルスの個性が合わさったのさ!それがこの姿!」

「そ……そう……?」

もう考えるのやめようかな……無駄な気がしてきた……

「そろそろ試合を……四万十川」

「……………」

フェイが指を鳴らすと再びデュプリ達が現れる。そして両チームポジションについてたところでホイッスルの音が鳴り、試合再開。

ボールはフェイからキモロ、そしてチビットに回り再びフェイに。プロトコル・オメガが複数人でチャージを仕掛けてくるけど、フェイはさっきまでのトリッキーなプレー

とは正反対の力技でディフェンスを全員なぎ倒して突破した。これが……ミキシマツクス…。

「羽花！」

「え…!? 私!？」

突然のパスに動揺するもそれを受け取る。しかしすぐにプロトコル・オメガのディフェンスが目で追えないくらいの超スピードで迫ってくる。

「速すぎる……!? これじゃあ……」

「羽花、集中するんだ！ サッカー部を守るんだろ！ 大丈夫、君ならできるさー！」

…そうだ、私がサッカー部を…皆を守るんだ……。絶対負けられない！

精神を研ぎ澄ませて集中する。そうするとうつすらだけど相手の動きが見えてきた。

「……だー！」

ディフェンスの間を縫って突破する。しかしすぐに別の相手にボールを奪われてしまった。

『ああつと天川ボールを奪われた！ やはりプロトコル・オメガの動きについて行くのは無理なのか!？』

……私は……負けない！

私がジャンプし飛び上がると、背後に紅く光る月が出現する。その月が不気味な赤黒

い光を発し、相手の目を眩ませる。

「ヴァーミリオンドロップ!!」

その瞬間、私の瞳が紅く輝いた。そして急降下しスライディングで相手を弾き飛ばしてボールを奪い取る。

「やった……できた!」

「行かせないよ!」

ボールを奪った私の前にすぐにディフェンス2人が立ち塞がった。やつぱりすごいスピードだ。だけど今度は……見える!

私は加速して相手ディフェンスに一気に詰め寄る。そしてディフェンスとの距離がほとんど0になった瞬間、一気に身を翻してボールと共に回転する。

「ビビッドステップ!!」

その速度に風圧が発生し、ディフェンスを吹き飛ばす。私を通った後には虹色に輝く光の軌跡が残っていた。

『なんと天川、いきなり新必殺技を連発だあ!』

「なにこれ……身体が軽い!」

「すごいじゃん羽花!」

私は一気にゴール前まで到達する。でもシュートコースには既にディフェンスが待

ち構えていた。だけどディフェンスの人数にだつて限りがある。これだけ私に集中していれば他がフリーになるつてわけだ。

「フェイ！」

完全にノーマークのフェイにパスを通す。彼がそれを受け取り、両腕を前にだし構えると同時に背後にティラノザウルスが現れた。バク転したフェイがシュートすると同時に獐猛な恐竜の咆哮が轟き、ボールは牙のようなオーラと共にゴールに突き進む。

「古代の牙!!」

「キーパーコマンド03!!」

相手キーパーのザノウが衝撃波でシュートに対抗するも歯が立たず、ボールはゴールネットに突き刺さった。

『決まったああ!アマカワーズ同点に追いついた!』

「やった!すごいよフェイ!」

「羽花もナイスパスだったよ!」

フェイとハイタッチで喜びを分かち合う。こんな大変な時だけどやっぱりサッカーは楽しいつてことを改めて再認識する。

「……こちらアルファ……それは事実ですか?」

「どうしました?」

「不測の事態だ。一時撤退する」

口元につけたインカムのようなもので誰かから連絡を受けたのか、アルファがグラウンドから出ていくと他のメンバーも後に続いた。

「どうしたアルファ?」

「この試合、中止とする」

審判のおじさんが静止しようとしたけど、どこかへ消えていつてしまった。今さらだけどあの人どこから連れてこられたんだろ?」

「じゃあ棄権ってことで僕らの勝ちだな」

ミキシマックスを解除したフェイが勝ち誇ったように手を腰に置いて言った。アルファ達は何も答えずに突然空に現れたUFOのような物体に吸い込まれるように消えてしまった。

「追い払えた……でいいのかな?」

「今のところはね」

「フェイ……教えて! サッカー部はどうなったの? あいつらは……あなたは……何者なの?」

私の質問を聞いたフェイはじつところこちらを見つめたと思うと、ゆっくり口を開いた。

「……僕らは200年後の未来からやってきた。サッカーを消そうとする者を阻止するた

めに」

「未来……?」

これまでのやり取りで薄々わかつてはいたけどやっぱり面と向かって言われるとまだ信じられない。でも今は信じるしかないか…

「パラレルワールドってわかる?」

「ドラマとかで聞いたことはあるけど…詳しくは…」

「これを見て」

そう言うとフェイは緑色の物体を取り出した。するとそれが光を発して私達の周りをプラネタリウムのようなドーム型のスクリーンが囲い、フェイはそれを使って話し始めた。そこから語られたのはにわかには信じられない話だった。

要約すると、パラレルワールドとは時間のある地点に変化が起きるとそれ以降の世界に違う流れができることを言う。それを利用してプロトコル・オメガは雷門中サッカー部に関する重要な出来事に影響を与えて、雷門中にサッカー部がない世界を作ろうとしている。しかもそれだけじゃなく彼らはサッカーそのものを消そうとしている。それを行っているのがプロトコル・オメガが所属する組織、200年後の世界全体の意思決定機関…『エルドラド』

彼らの目的はサッカーを消すこと、しかしそれには理由がある。200年後の未来で



は恐るべき強さと頭脳を持つ少年達『セカンドステージチルドレン』が戦争を起こしている。彼らは優秀なサッカー選手の遺伝子から生まれていて、その他の人類を古い人間とし淘汰しようとしている。彼らによって世界は危機的状況に陥っており、その打開策として彼らの発生源であるサッカーの消去が提案、実行された。これがエルドラドがサッカーを消そうとする理由。

「エルドラドはセカンドステージチルドレンを恐れている。だからサッカーを消すことで彼らが世界に生まれないようにするつもりなんだ」

「…でも、どんな理由があってもサッカーを消していい権利なんて誰にもないよ…それにサッカーを人を傷つけるのに使うのなんて許せない!」

彼らの言い分もわからないわけじゃない。だけどサッカーが消えることで悲しむ人だってたくさんいる。それにいくら世界を救うためだと言ってもあんなやり方許されていいわけがない。

「そう、サッカーは人を傷つけるための道具じゃない。楽しくて、人にとっても必要なものだ。だから僕らはやってきた。君達を救うために」

「……もしかして、私を特訓してくれたのは…あいつらと戦うため…?」

「それもあるけど、僕は君とサッカーがしたかったんだ。僕にとってもサッカーは楽しくて必要なものだから。僕は羽花と一緒にサッカーを守りたいんだ」

彼の言葉からは本当にサッカーが好きなんだって気持ち伝わってくる。そこまで話したフェイが右手を差し出してくる。私も包み込むようにその手を握った。

「それじゃあ行こうか」

「…え？どこに？」

「まずは雷門中サッカーを取り戻す。羽花の時代から50年以上前、円堂大介が雷門にやってきた日だ」

「それってもしかして…タイムスリップ？」

「そう、雷門からサッカー部が消えたのは円堂守がサッカーに出会わなかったから。奴らは円堂守のサッカーのルーツである円堂大介のインタラプトを修正して、彼からサッカーを奪ったんだ。」

「インタラプト？」

「インタラプトっていうのは歴史に介入できる分岐点みたいなものさ。奴らはそこに介入して、起きた出来事を作り替えているんだ。だからそれを僕らで元に戻す」

「そうか、守君がサッカーを始めたのは大介さんの影響だ。その大介さんがサッカーを奪われたから守君はサッカーに出会わずサッカー部も作らなかった…」

「よし、話は決まったな！乗ってくれ！」

ワンダバに言われて例の飛ぶ車…タイムマシンに乗り込んだ。中はパツと見普通の

バスみたいだ。

「これで本当にタイムスリップできるの？」

「うん、ただしそれには道標…アーティファクトがいる」

「アーティファクト？」

「その時間、その場所にいる人物の強い思いがこもったものじゃないとダメなんだ。それがないとタイムジャンプは失敗する」

「羽花、なにか心当たりない？」

大介さんの思いがこもったもの……あつた！ピッタリなものが。

「大介さんの特訓ノート！あれなら多分大丈夫だと思うよ！」

「それはどこにある？」

「えっと……守君は大晦日に大掃除してる時に物置で見つけたって言うたと思う……」

「ならまずはそれを取りに行こう。円堂守の家に」

私の言葉に2人とも納得してくれて、まずは円堂家に向かうことになった。どうやらこのタイムマシンには時間移動だけじゃなくて、場所を移動できる機能もあるみたいで、そのおかげで一瞬で円堂家についた。

「この中だと思うけど……」

庭にある物置を開けると、中はそこそこ整頓されていた。だけど大介さんのノートは

かなり古いものだ。多分奥の方に眠ってるはず…

「ゴホツゴホツ…奥の方は結構埃っぽいね…」

「本当にここにあるのか？」

「あ、待って…見つけた！」

一番奥のダンボールの中で見つけたのはボロボロのノート、大介さんの特訓ノートだ。それを持って私達は再びタイムマシンに乗り込んだ。

「アーティファクトセット完了！」

「上手く行くといいけど…」

「大丈夫、なんとかなるよきつと！」

「さあ行くぞ…タイムジャンプ！」

タイムマシンは加速したと思うと辺り一面虹色の空間に入った。本当に過去に行くんだ…待ってて皆！必ずサッカー部を取り戻してみせる！

## 意外すぎる助っ人

虹色のトンネルを抜けて、タイムマシンは開けた空間に出た。外に見える景色はレトロな雰囲気の街並みで、ビルなんかは一切なかった。もしかしたら路面電車も走ってるかもしれない。そんな風景を見て本当に過去に来たんだと実感する。

「ここが……昔の雷門中……」

外に出てみると目の前に見覚えのある建物が見えた。半世紀以上も前だというのに校舎の雰囲気は今とそこまで変わらない。

「大介さんはどこにいるのかな？」

「あ！あの人じゃない？」

木の影に隠れて校門の様子を伺っているとフェイが急ぎ足で出てくる人物を指差した。特徴的なオレンジのバンダナ、手に携えたサッカーボール、守君にそっくりだ。間違いない、あの人が大介さん……まだ中学生とはいえ、写真の面影がある。

「フフツ」

「……どうしたの、羽花？」

「ううん、本当に守君にそっくりだなんて思ってた」

見た目はもちろん、サッカーボールを抱えたまま飛び出てくるなんて…サッカーバカなところもそっくりなんだなあ…

走っていく大介さんの後をこっそり追うと、見覚えのある場所に着いた。鉄塔広場だ。すると大介さんは木に括りつけてあったタイヤを使って守君と同じように特訓を始めた。まさか特訓方法まで同じだなんて。

「羽花、円堂守と大介、どっちの顔が好きだ？」

「…え？うくん…大介さんもキリツとしててかっこいいけどやっぱり守君の方が…つて何言わすの！」

「ワンダバ…そういうのはさあ…」

ワンダバにツツコミを入れつつ隠れて様子を見ていると、突然大介さんの近くに青白い光がフラッシュした。そしてその光を突き破って現れたのは…

「プロトコル・オメガ！」

「やっぱり現れたね」

内心現れなければいいって思ってたけどそう上手くいかないよね…とにかく、大介さんを守らないと！

「なんだ？お前達？」

「円堂大介だな？これよりお前からサッカーを消去する」

「消去？何言つてんだ？」

「嫌いになつてもらうということだ。サッカーを」

「は？俺がサッカーを嫌いになる？ないね、それは前に蹴ったボールが後ろに飛ぶくらいありえないことだ！」

アルファの言葉にはてなマークを浮かべた大介さんだったがすぐに真つ向から否定してみせた。さすが大介さんだ。

「……そうか」

『ムーヴモード』

その返答を聞いたアルファが足でサッカーボール……スフィアデバイスを操作する。するとそこから青白い光が放たれ大介さんとプロトコル・オメガを包んだ。

「羽花、僕達も行くこう！」

「……!?!うん！」

私達も急いでその光の中に入っていく。目の前を眩い輝きが覆い、思わず目を瞑る。そして次に目を開けるとそこはどこかのサッカーフィールドだった。

「(ハハ)は……?？」

「君にはこれから我々とサッカーをやってもらおう。試合だ」

「試合?どういうことだ？」

「大介さん！」

どうやって説明しようか考えたかったけどその時間はないみたいだ。私は彼らの前に飛び出して事情を説明した。

「そいつらはサッカーを消そうとしてるんです！」

「えっと……お前は？」

「私、天川羽花ついていいです。ちよつと説明難しいんですけど、私はサッカーを守るために来ました！このままだと大変なことになっちゃうんです！信じてください！」

自分で言っても突拍子もないことだっていうのはわかってる。だけど大介さんはこつちをじつと見つめると、少し考える様子を見せ口元を緩めた。

「わかった。信じるよ」

「え？信じてくれるんですか？」

「ああ、サッカーを守ろうとしてるってことはサッカーが好きなんだろ？サッカー好きに嘘をつける奴はいないさ」

「すごい……考え方まで守君と瓜二つだ。きつとここにるのが守君でも同じことを言うだろう。」

「やってやるよ、試合！サッカーを消させやしない！……でも人数が」

「大丈夫、ここにいるよ」



振り向くとそこにはフェイとデュプリ達、これで試合をするだけの人数は揃った。私達は試合の準備をしてそれぞれポジションにつく。向こうは以前の試合と同じく、こっちはキーパーがマツチヨスから大介さんに。

そして前回と同じく赤キャップのおじさんが実況として現れた。可哀想に……

『うおお!!店の厨房かと思つたらいきなりどこかのサッカー場だあ!!……さあプロトコル・オメガ対アマカワーズ2度目の激突だああ!』

「さあみんな!行くぞ!」

大介さんの号令とほぼ同時にホイッスルが鳴り、試合が始まった。ボールはプロトコル・オメガから。すると彼らはいきなり3人がかりでフェイをマーク。そして超スピードでパスを回す。……いや様子がおかしい……さっきからボールは味方ではなくデュプリ達にぶつかってばかりだ……まさか!?

「奴らはデュプリが遠隔操作だと知って、フェイの視界をさえぎって痛めつけてるんだ!」

ワンダバの言葉通りデュプリ達が次々と倒されていく。どうやらフェイにもダメーシがいつているようだ。苦しそうに呻いている。

「おい待て!サッカーは人を傷つける道具じゃないぞ!狙うならゴールを狙え!」

「……いいだろう、ならば望み通りにしてやる」

そう言うのとアルファがシュートを放った。それは必殺技ではないただのシュートだが、生半可な必殺技より遥かに威力が高かった。対する大介さんは左胸に手を当てた。するとそこに気が集まりだして、大介さんが落雷のように吠えるとそれは魔神に姿を変えていった。あれはまさか……!?

「だああああ！真マジン・ザ・ハンド!!」

魔神の左腕がシュートを阻み、完璧にブロックした。その光景に全員が驚きを隠せないでいた。止めた本人でさえも。

「うおおおおお！なんだ今のパワーー!」

大介さんはボールを持ち上げて喜んでる。その姿に、一瞬守君が重なった。

「大介さん！こっちはです!」

「おう、反撃だ!」

大介さんが蹴り出したボールを受け取り、ドリブルで攻め上がるが身体が異様に軽い。それになんだか胸の奥底から力が湧いてくる。

『速い速い！天川ものすごい加速だあ!』

風を切るような速度でゴールに迫るがディフェンスが立ち塞がった。だけど私はさらに加速して必殺技で一気に抜き去る。

「ビビッドステップ!!…フエイ!」

そうしてフェイにパスを出すと、彼はボールを上蹴り上げた。私がそれに飛びつく  
と、黄緑色の月が出現。ボールと重なり、私はそれをオーバーヘッドキック。

「ムーンフォースラビットG3!!」

降り注ぐ星屑となったボールは地面を幾度なく跳躍し、最終的に一つの強烈なシュー  
トとなった。

「キーパーコマンド03……ぐあああ!」

ザノウが発した衝撃波を消し飛ばしてシュートはゴールに突き刺さった。まずは1  
点だ。

「すごい加速だったよ羽花!」

「えへへ、ありがとう!自分でもここまでできるなんて思ってもみなかった!」

自らの成長を感じて少しはしゃいでしまった。でも油断はできない:彼らの実力は  
きつとこんなものじゃないから。

『さあアマカワーズ優勢で試合再開!プロトコル・オメガが攻め上がる!』

先取点を取られたことで逆に勢いを増したプロトコル・オメガが一気に攻撃してく  
る。

そしてゴール前にボールが上がり、そこにアルファが飛び上がる。

「シュートコマンド01!!」

激しい回転を纏ったシュート。さっきのとは別次元の威力だ。すると大介さんは魔神を呼び出すのではなく、左足をめいっばい上げ、ものすごい力で強く踏み込んだ。そして右手を思いっきり振りかぶると彼の背後に巨大な拳が出現した、それはさながらグーのゴッドハンドのようだ。

「正義の鉄拳!!」

彼が拳を突き出すのと同時にグーのゴッドハンドは回転しながらシュートとぶつかりあつた。その時生じた風圧でフィールドに突風が巻き起こる。私は弾き飛ばされそうになるのを必死にこらえた。そしてそれが収まった時にはシュートは跳ね返され、タツチラインを割りフィールドの外に飛ばされた。

「……なに……今の?」

あんな必殺技見たことがない……マシン・ザ・ハンドよりも圧倒的なパワーを感じた。

私は気付けば私は大介さんの元へ駆け寄っていた。

「できた……よっしゃあ! ついにできたぞ!」

「凄いです大介さん! 今の必殺技は?」

「ああ、究極奥義……正義の鉄拳だ!」

究極奥義……まさかそんな技があるなんて。もしかして大介さんのノートに書いてあるのだろうか? 今度守君に教えてあげないと。

「……!?羽花、あれは?」

そう言うとフェイがフィールドの外に視線をやった。その先には一人のピンク髪の少女が佇んでいた。彼女はフィールドのラインを超えてゆつくりとこちらに近づいてくる。全員の視線が彼女に集中する。

「この戦い、私も加えてもらえませんか?」

私と同じ年くらいだろうか?あの格好は……雷門のジャージ!?それにあのつり目な瞳、髪型、なんだか見覚えがあるような……まさか!?

「……夕香ちゃん?」

思い立った人物の名前を呟くと、彼女は微笑み顔を縦に振った。

「はい、私は豪炎寺修也の妹。豪炎寺夕香です!」

「……怪我はもういいの?それにどうしてここに……」

「話は後で、今はあいつらと戦いましょう」

その時、アルファがこちらに歩いてきて夕香ちゃんを睨みつけた。

「……お前は再修正される」

「さあ?それはどうでしょう」

アルファの視線と夕香ちゃんの視線がぶつかり合う。そしてワンダバによってキモ口と夕香ちゃんの交代が告げられる。キモ口はフェイとハイタッチすると消えてし

まった。

プロトコル・オメガのスローインで試合再開。だけどそれを夕香ちゃんがカットした。そのまま駆け上がっていく。

「ヒートタックル!!」

彼女の前にディフェンスが立ちはだかるが炎を全身に纏った夕香ちゃんは激しいチャージでそれらを弾き飛ばした。

「凄い……あれが夕香ちゃんのサッカー……」

「ああ、想像以上だ」

そのまま彼女はボールを宙に浮かべ、そして自らも爆炎と共に回転した。

「ファイアトルネード!!」

「キーパーコマンド0……ぐおおお!!」

激しい回転を利用した炎のシュートはザノウが必殺技を出す前にゴールに到達。彼を吹き飛ばした。そのままキーパーごとゴールに突き刺さる。その姿はまるで豪炎寺君のようだ。

『ゴオオオル!!豪炎寺夕香の得点でアマカワーズ、プロトコル・オメガを突き放した!!』  
「凄いよ夕香ちゃん!豪炎寺君のシュートにも負けてない!」

「ありがとうございます」

私達はハイタッチをし、微笑みあつた。彼女がここにいる理由はわからないけど、予想外の助っ人の登場に私達は沸き立つのだった。

## 豪炎寺夕香の覚悟

『続け様に得点を重ねたアマカワーズ！なおも攻撃の手を緩めません！』

夕香ちゃんの加入で攻撃力が格段に上がった私達はプロトコル・オメガを圧倒していた。さすがの彼らにも焦りの表情が見え始めているけど、唯一アルファだけは一切表情を崩さず淡々とプレイしている。

「ミキシトランス…ティラノ!!」

ティラノザウルスの力を解放したフェイが力強いドリブルで敵をなぎ払いぐんぐん攻め上がっていく。そのままシュート……

「羽花!」

せずに私にパス。そう、彼は私達をフリーにするための罠だ。受け取った私は夕香ちゃんと並走し、ボールを蹴り上げる。

「行くよ！夕香ちゃん!」

「はい!」

私達は同時に回転しながら飛び上がった。脚には激しく燃える炎が纏われている。そしてボールを…



「ファイアトルネード D D!!」  
ダブルドライブ

左右で同時に蹴った。爆炎が宿ったボールは凄まじい破壊力でプロトコル・オメガ  
 ゴールめがけて突き進む。

「キーパー コマンド 03!!」

衝撃波がシュートの行く手を阻む。だけどそんなものはなんの抵抗にもならずザ  
 ウの顔を直撃しぶつ飛ばす。そのままゴールかと思われたが、私達はゴール前にもう  
 1人いることに気がついた。

『FWのアルファ、ゴール前まで戻っていた!』

「……!? いつの間に……!」

彼はシュートを止めようと最後の壁となり蹴りを放つ。足とボールの間で火花が散  
 り、焦げ臭い匂いが辺りを包んだ。だがそれでもアルファは蹴るのをやめない。しかし  
 抵抗虚しく次第に彼は後退していき、そして彼の足は大きく弾かれた。

『ゴオオオル! アマカワーズ 3 点目! 決めたのは天川と豪炎寺だあ!』

ダメ押し の 3 点目。私と夕香ちゃんは手を取って喜びあった。ベンチの方ではワン  
 ダバが何故かピンク色に変色してはしゃいでるけど無視しておこう。

「……了解。撤退する」

アルファがそう言ったと思うと彼らの頭上に巨大な UFO のようなものが現れた。

彼らはそれに吸い込まれるようにして消えてしまった。

「やった！勝ったんだよね！」

「ああ、円堂大介のサッカーを守ったんだ！」

「何が何だかわからんが……一件落着つてどこか！」

「ありがとう、夕香ちゃん」

「はい！この戦い、私もお手伝いします」

フエイと夕香ちゃんが固い握手を交わした。そして私達は円のように丸くなり座つて、夕香ちゃんの話聞くことにした。

「羽花さん、あなたが知る私は、お兄ちゃんが1年生の時のフットボールフロンティア決勝の日に、応援に向かう最中で事故にあった。だからお兄ちゃんは決勝戦に出られなかった……ということですよね？」

「うん、そう聞いている」

「……あの事故は起きなかつたんです。その結果お兄ちゃんは決勝戦に参加して、木戸川清修は帝国を破り、優勝した」

「へえ……すごいね！」

「だけど、と夕香ちゃんは続ける。

「その後しばらくして、お父さんがお兄ちゃんにサッカーを辞めるように言つたんです。」

医者になるためにドイツに留学しろって…」

「留学…!?なんで?」

「お父さんは元々、お兄ちゃんに医者になつてもらいたかつたんです。お母さんが生きていた時はそこまで強く言うことはなかつたんですけど…お母さんが死んでしまつてからは……」

そういうえば豪炎寺君のお父さんはお医者さんをやつてるって聞いたことがある。

「…でもあの豪炎寺君がそんな簡単にサツカーを辞めるとは…」

「もちろん、お兄ちゃんも最初は反抗してました。でも…やつぱり子供にとつて親の言うことは絶対だから…次第にお兄ちゃんはサツカーから遠ざかつて…ついにはサツカーに関わるものを全て処分してしまつたんです……」

「それは……エルドラドが豪炎寺修也からサツカーを奪うために仕掛けたということだね…でも夕香ちゃん、君はなんでサツカーを?」

「私は……お兄ちゃんがサツカーをしている姿を見るのが一番好きだつたんです。私がサツカーをすれば、お兄ちゃんもサツカーに戻つてきてくれるって…そう思つて…」

夕香ちゃんの表情は暗い。彼女は顔を俯かせたまま続けた。

「でも…お兄ちゃんがサツカーに戻つてくることはありませんでした。そんな時、私の

「前に奴らが現れたんです。私からサッカーを奪おうと」

「そうか！君は新たな時空の中で多くのサッカー少年少女に影響を及ぼしたわけだ。それで狙われた。」

「はい、だけど私がこうやってここに来られたのは、ある人に助けてもらったからなんです。その人は私にこれを渡してきました」

ワンダバの言葉に頷いて肯定した夕香ちゃんは右手につけているブレスレットのようなもの私達に見せてきた。

「それは……タイムブレスレット!？」

「これがあれば時間を自由に移動できるんです。それに身につけている間はインタラプト修正の影響を受けない」

「そのある人っていうのは？」

「彼は支援者Xと名乗りました。君達のようなサッカーを愛する者を支援しているとも」

支援者X……何者なんだろう？悪い人ではなさそうだけど……フェイに視線を向けても首を横に振るだけだった。

「……よく分からないけど、サッカーを守るために戦ってるってことか？だったら俺も協力するぞ！」

「いや、大介さんにはこれから日本にサッカーを広めるっていう大事な仕事があるんだ」  
「大介さんのおかげで私達はサッカーと出会えたんです！大介さんが守君にサッカーを託したから！」

「そうか……わかった！なら俺はサッカーを続けて色んな奴にサッカーの楽しさを教えればいいんだな！任せろ！」

勢い良く立ち上がり拳を手のひらに合わせ大介さんはニカッと笑った。ふふ、やつぱりそつくりだな。

「それじゃあ行こうか、次は豪炎寺修也のインタラプトを元に戻さないと。夕香ちゃんのためにね」

フエイ達が次の戦いに赴くべくタイムマシンに乗り込む、私もその後が続いた。入口の段差を登ろうと足を置いた時、大介さんに声をかけられた。彼はこちらに拳をつきだした。

「羽花、ありがとな！また一緒にサッカーやろうぜ！」

「……はい！」

私達は拳を合わせて頷きあう。一瞬、大介さんに守君が重なったような気がした。  
……ダメだ、まだ戦いは終わってない。こんなところで泣いている場合じゃないんだ……

！

零れそうになった涙を抑えて、私はタイムマシンに乗り込む。

「あれ？大介さんのノートが……」

アーティファクトとしてセットしていた大介さんのノートがみるみる消えていってしまった。

「アーティファクトは歴史が変わってここにあることに都合が悪くなると、本来の時間に戻るんだよ」

「つまり……守君のところに戻ったってこと？」

「そう、わかってきたね」

理屈としてはなんとなくわかってきたけどやっぱりまだ不思議だな。まさか自分が時間を移動することになるなんて。

「さて、それじゃあ次は豪炎寺修也のインタラプト。彼が1年生の時のフットボールフロンティア決勝の日に行こう。夕香ちゃん、アーティファクトになにか心当たりはない？」

「それならこれが……」

夕香ちゃんは胸元のペンダントを手に取った。私はそれに見覚えがあった。豪炎寺君がいつも持っていたものだ。

「それって……」

「私が決勝戦の前にお兄ちゃんにあげたものなんです。お兄ちゃん…サッカーに関するものを処分した後もこれだけは持つてて……」

そっか……やっぱり豪炎寺君も本当はサッカーやりたかつたんだろうな……少なくとも私の知る彼はそういう人だ。

「わかつた…少し借りるよ。ワンダバ、お願い」

「おう、任せとけ」

フエイがそれをセツトすると、緑色のドームがペンダントを包んだ。そして私達はそれぞれ席に腰掛ける。

そこで私の頭の中に一つの疑問が浮かんだ。私達がこれからすべきなのは歴史を元に戻すこと。それはつまり夕香ちゃんが事故に遭って、豪炎寺君が雷門に転校する歴史でことになる。てことは今ここにいる夕香ちゃんは……

「ねえ夕香ちゃん、歴史の改変を元に戻したらあなたは事故に遭うんだよ？もしかしたらもうサッカーは……怖くないの？」

「怖くない……と言ったら嘘になります。だけどそれが正しい歴史なら受け入れます。受け入れて……乗り越えてみせる……それに、私はお兄ちゃんにサッカーを返してあげたい」

「……そっか」

強いな夕香ちゃんは……もし私が彼女の立場ならそんな決断できないかもしれない。だけど、夕香ちゃんが覚悟を決めるなら私が迷ってるわけにはいかない……!

「さあ、着いたぞ! フットボールフロンティア決勝……羽花の時代からちょうど1年前だ!」

タイムマシンから降りると、そこはどこかの道路だった。その道路が伸びる先にはフットボールフロンティアスタジアムが見えている。

「……夕香ちゃんはどこかな?」

「…………ワンダバさん、お願いが」

「うん?なんだ?」

私とフェイが夕香ちゃんを探している間、ワンダバと夕香ちゃんは何かを話していたようだ。内容まで聞こえなかったけど。

「うん……? 羽花! あれ……!」

「え?……あ、夕香ちゃんだ!」

今まさに道路を渡ろうとしているのは、私も見慣れた姿の夕香ちゃんだった。首からメガホンをぶら下げていて、まさに応援に行こうというところだ。

「……トラックが!」

信号が切り替わり横断歩道を渡ろうとした夕香ちゃんの目の前に、信号無視のトラッ



クが突っ込んできた。しかしあわや激突……というところで世界が灰色に包まれトラックは停止した。いや、トラックだけじゃない。私達以外の全ての物の動きが止まっている。

「……!? アルファだ!」

現れたアルファはトラックに向けてスファイアデバイスを蹴り出そうとする。なるほど、それでトラックの軌道を変えて事故を防ごうということか。

「待って! 手を出さないで!」

しかしアルファの前に夕香ちゃんが立ち塞がった。それに続いて私達も前に出る。

「また会ったね」

「……………なるほど、理解した。我々の障害になる者は排除する」

口元のインカムが音を鳴らしたと思うと、彼はデバイスを足を置いた。大介さんの時にも思ったけど、彼の口ぶりからしてまるで私達と初めて会うみたいな反応だ。これもパラレルワールドの影響ってことかな…?

『ムーヴモード』

デバイスから放たれる青白い光に辺りは包まれる。思わず目を閉じて、次に開けた時にはやはりどこかのサッカー場だった。ここは……もしかして木戸川清修……!? 以前豪炎寺君に写真を見せてもらったことがある。そこにそっくりだ、間違いない。

「お前達のサッカーが葬られる場所だ」

「受けて立つさ、そのために来たんだからね」

フェイが指を鳴らしデュプリを作り出す。夕香ちゃんがいるのでキモ口以外の8人だ。フィールドの外には赤キヤップのおじさんが現れる。やっぱり今回も連れてこれれちゃったか…ホント同情する……

『さあ試合が始まった！天川が攻め込んでいく！』

私がボールをキープして攻め上がる。するといきなりアルファが突っ込んできた。

「…実行する」

「く……マントー！」

マントにパスするもそれはカットされてしまった。するとその瞬間、プロトコル・オメガがディフェンス含め一斉に駆け上がってきた。

「……!?いきなり全員攻撃!?!」

試合開始直後の突然のキープを除く全員攻撃に私達は反応が遅れてしまった。その隙にボールはエイナム、レイザ、と流れていき、そして…

「リーダー！」

アルファへと繋がった。

…まずい……フリーでアルファにボールが渡ってしまった。

「天空の支配者鳳凰!!」

彼はボールを持ったまま天空へと駆け上がる。足元には炎が燃え盛り、そして背後には鳳凰が現れる。

「シュートコマンドK O O !!」

爆炎が放たれ私達のゴールを強襲する。対峙するマツチヨスは激しく空気を吸い込むと胸筋でシュートを防ごうとする。

「エクセレントブレスト!!」

しかし一瞬で弾かれ、業火はゴールを貫いた。

『ゴオオオル!!プロトコル・オメガ、いきなりの速攻で先取点をもぎ取った!』

ゴール。まさか初めから全員で攻めてくるなんて……向こうもそれだけ本気つてこ  
とかな…

『さあアマカワーズのキックオフで試合再開です!』

「……!?これは」

なんとプロトコル・オメガはここでポジジョンチェンジ。アルファ以外の全員がディフェンスエリアまで下がっている。

「…そうか! 奴らにはパラレルワールドでの僕らとの戦いがインプットされたんだ! 僕達は攻撃力はあるけど守りは薄い。だから……」

「試合開始早々先取点を取って……ここからは全力でディフェンス……ってことだね」  
なるほど……だから開始早々全員攻撃をしてきたのか。これは結構厳しそうだね。

『アマカワーズ、果敢に攻めるもプロトコル・オメガのディフェンスが崩せない!』

試合が再開し、全力で攻め上がるも私、フェイ、夕香ちゃんは2人がかりでマークされていて動けない。…デュプリに得点力がないのはバレてるってことね……

「アグレッッシブビート!!」

必殺技で敵をかわすもすぐに次がやってくる。

くそ、これじゃキリがない。

「ディフェンスコマンド03!」

相手のディフェンス…メダムが手を地面に置いたかと思うと、私が持っていたボールに紫の電気のようなものがまとわりついた。するとボールは勝手に私の周りを竜巻を起こしながら回転し始め、私はそれに振り飛ばされた。

勢い余って飛んでいったボールはラインを超えてフィールド外の奥へと消えていった。

攻められてはいる。けどどあともう一つ決め手が足りない。何か考えないと………その時

……ボールが勝手にフィールドに戻ってきた。

怪訝に思った私達だがボールを拾おうとする。すると空から影がひとつ、ゆつくりと降りてきた。

その影の正体は——人。腰まで伸びた美しい金色の髪の毛、自信に溢れた瞳、神々しい白いユニフォーム、私はその人物を知っている。

——そう、彼は紛れもない世宇子中のキャプテン。

「……アフロデイ……?」

再び私の前に現れた神は、まるで天使のような美しさで木戸川清修のグラウンドに降り立った。

## 正しい歴史

「あ、アフロデイ?!」

突然の乱入者に私は度肝を抜かれた。

アフロデイ——世宇子中のキャプテンでフットボールフロンティア決勝で雷門と戦った相手だ。彼らは影山の下で神のアクアを使い超人的な力を得ていた。そんな人がどうしてここに……

「……なにしに来たの?」

「もちろん、戦うためさ。君達と——共にね」

「そんなこと……へ?」

「これ以上、エルドラドによる歴史の改変を許すわけにはいかない!」

「……!?!君はエルドラドを知ってるの?」

私は警戒し突き刺すような視線を彼に向ける。だけど彼の返答を聞いた時、思わず間抜けな声が出てしまった。それほど意外な返答だったからだ。

「フェイ君だね?君のことは聞いているよ。天川さんと共にサッカーを守るために戦ってくれているとね」

そう言うとは彼は右手をこちらにかざした。そこには見覚えのあるプレスレットがつけられていた。

「それは……タイムプレスレット!?ということは君も……」

「そう、あそこにいる豪炎寺夕香ちゃんと同じ……支援者Xと名乗る人物に貰ったんだ。これで君達を助けて欲しいとね」

彼は私の方を向いて、ここに來た理由を語りだした。

「君達との戦いで僕は思い知ったんだ。諦めないことの大切さを。人は立ち上がるたびに強くなれる。僕はもう神のアクアに頼るような愚かなことは二度としないと誓った。君達雷門……そしてサッカーが僕に大切なことを教えてくれたんだ。そんな時に君達が戦っていることを知った。僕を信じられなくても無理はない。だけど信じて欲しい。僕もサッカーを守るために戦いたいんだ」

私に頭を下げてくるアフロデイ。あんなにプライドが高かった人がそこまでしてサッカーを守るために……正直、彼らのしたことは許されることではないと思う。でも……そんな彼をも変えたのは守君の、雷門のサッカーだ。だったら答えは決まってる。

「羽花、判断は君に任せるよ」

「………わかった!一緒に戦おう!」

「……!?信じてくれるのかい?」

「あなたの目を見ればわかるよ。本当にサッカーを守りたいって気持ちだ。……って守君なら言うだろうな」

「……ありがとう！」

守君や大介さんに似ちゃったのかな？彼の目を見てると信じてもいい……そんな気がする。私を手を差し出すと彼もそれを握り返してきた。そして試合が再開される。デュプリのチビットが抜けてその位置にアフロデイが入った。

『アマカワーズはなんと世宇子中キャプテンアフロデイがチームに加わった！果たして反撃は見られるのか！』

プロトコル・オメガのスローインで試合が再開された。

でもそれは私の目の前。すぐさまボールを奪おうと跳躍する。

「ヴァーミリオンドロップ!!」

月の発光に目を眩ませた隙にボールを奪い取る。するとそれを見るやアフロデイは空いたスペースは素早く切り込んできた。あの速度……決勝戦の時より速くなってる

……!

「アフロデイー！」

アフロデイにパスが繋がった。パスを受け取った彼は一瞬静止した後、敵ゴール目掛けて駆け上がる。



そして次の瞬間には彼の神業が炸裂した。

「ヘブンズタイム!!」

そこからはまさに一瞬にも満たない間の出来事。彼が指を鳴らしたかと思うと次の瞬間にはディフェンスの背後に移動していた。そして突風が発生、ディフェンスを吹き飛ばした。

……相変わらず強力な技だね。初見じゃ何が起こったかすらわからないだろう。敵だったら脅威だけど味方になるとこんなに頼もしいなんて。

ボールはアフロディイから夕香ちゃんへ。アフロディイが加わって攻撃のバリエーションが増えたことで一人一人のマークが手薄になっている。…チャンスだ。

「ヒートタックル!!……アフロディイさん!」

炎を纏った突進でディフェンスを蹴散らす。そしてボールは再びアフロディイへ。それを受け取った彼はボールを蹴り上げ自らも飛び上がる。その背中には黄金の羽が飛ばれていた。

「真ゴッドノウズ・インパクト!!」

眩い光を放つボールをアフロディイが蹴り落とした。周囲に落雷が発生し、ビリビリと衝撃が伝わってくる。その威力は決勝戦の時の比じゃない。対するザノウは必殺技で食い止めようとするけど全く歯が立たずにボールごとゴールにねじ込まれた。

『ゴオオオル!!アフロデイの強烈なシュートが炸裂!アマカワーズ追いついた!そしてここが前半終了です!』

「これが生まれ変わった僕の力さ」

「凄いよアフロくん!神のアクア無しであんなに強いシュートを撃てるなんて!」

「……………別にどう呼んでくれても構わないけど、せめてデイまで呼んでくれるかな?」

「うんわかった!アフロくん!」

「……………もう好きに呼んでくれ」

そんな風に彼をからかっていると、空からタイムマシンが現れた。出てきたのは当然ワンダバだ。

「ワンダバ、どこ行つてたの?」

「そもそもいなかったんだね…気づかなかった」

「この大監督に対しなんたる言い草!?!……………まあいい、それより夕香ちゃん。頼まれたものを取ってきたぞ」

だつて今までワンダバがろくに指示出してくれなかったし……………やったことといえばベンチで騒いでるだけ。タイムマシンの運転とかしてくるからそつち方面では助かってるんだけど。そんなことより気になるのは…………

「夕香ちゃん、ワンダバになにか頼んでたの?」

「お兄ちゃんのおーラを取ってきてもらっただんです。多分私にとってこれが最後のサッカーだから……お兄ちゃんと一緒に戦いたくて」

「傾合いを見て私が指示を出す。それがミキシマックスの合図だ」

夕香ちゃんと豪炎寺君のミキシマックスか……きつと豪炎寺君もサッカーを守るために戦えて喜んずると思う。

ハーフタイム終了の笛がなった。

それぞれコートを入れ替えてポジションについたところで試合が再開される。

序盤の展開は前半とほとんど変わらなかった。プロトコル・オメガはディフェンスに全ての力を注いでいる。いくらアフロデイがいてもそれを破るのは簡単ではない。私達が攻めあぐねている間に刻一刻と時間は過ぎていく。

「仕上げに入る」

「……ツツ!! ストロウ! スマイル!」

「必殺タクティクス! AX3!」

後半も残り時間僅かというところでアルファが突っ込んできた。それに対処するようフェイがデュプリに指示を出す。プロトコル・オメガのパス回しによって動きを止められてしまった。あれは……必殺タクティクス!? 初めて見た……つてそんなことはどうでもよくて……

「アフロくん！」

「ああ、わかっている！」

アルファのシュートはマッチョスでは止められない。あれを撃たれたら追加点を許してしまおうだろう。だからこそ私達はアマカワーズゴールに向かって走り出した。

「天空の支配者鳳凰!!アームド!!」

「エクセレントブレスト!!」

アームドしたアルファによつて放たれたシュートはマッチョスの必死のセーブをいとも簡単に打ち破りゴールを指す。しかし必殺技で少なからず威力は衰えているはずだ。そこに私とアフロくんが同時に蹴りを加えれば……い

「はあああああ!!」

私達の足がシュートと激突した。必死に踏ん張るも、シュートの勢いは思っていたよりも残っていて私達は徐々に押し込まれてしまっている。

「くっ………負けて………たまるかああああ!!」

アフロくんの咆哮と共に彼の蹴る力が強くなった。これなら……いける!その声に答えるように私も更に力を振り絞る。

ようやく弾かれたボールは真上に飛ぶと私の足元に収まった。

なんとかセーブできた……でももう時間がない。

「羽花、こつちだ！」

「フェイ！任せたよ！」

ゴール前から前線のフェイにロングパス。私とアフロくんはここからじゃ攻撃参加できない。フェイと夕香ちゃんに頑張ってもらえない。

「ミキシトランス…ティラノ!!」

パワフルなドリブルでぐんぐん敵ゴールへ迫っていく。その勢いはまさに熾烈を極めていいる。

「今だ夕香ちゃん！ミキシマックスだ！」

ワンダバが叫んだと思うとフィールドの外に豪炎寺君が現れる。いや、正確に言えば豪炎寺君のオーラだ。そしてワンダバが銃口を夕香ちゃんに向けて発射しオーラを送り込む。

「ぐ………はあああああ！」

夕香ちゃんと豪炎寺君の咆哮が重なる。

彼女を覆っていたオーラが晴れると、そこには髪が豪炎寺君のように白く逆立つように変化した夕香ちゃんの姿があった。

「ミキシマックス……コンプリート！」

夕香ちゃんは自分の手を見つめぎゅっと握りしめると微笑を浮かべた。

「行くよ……お兄ちゃん!!」

そう言つて彼女は走り出す。その背中にはまるで豪炎寺君のような頼もしさがあった。思わず笑みが零れる。あなたの妹は強いね……豪炎寺君!

「夕香ちゃん!」

フエイから夕香ちゃんにボールが渡る。そのまま駆け上がっていくが敵ディフェンスが立ち塞がる。

「羽花さん!」

夕香ちゃんがヒールのバックパスで私にボールを預ける。全力ダツシユでなんとか追いついたけどさっきのブロックと合わせてもう体力が残ってない。でもこのボールだけは渡すわけにはいかない……!

「デコイリリース!!夕香ちゃん、ラストチャンスだよ!」

指を鳴らし分身を作り出し、相手を抜き去る。そして夕香ちゃんにパス。

「決めるよ……お兄ちゃん!」

空中で構えた夕香ちゃんの背中から炎が湧き出てきた。そしてそれはみるみる人の形に……いやあれは……魔神!?

守君や大介さんのはまた違った炎の魔神が出現し、夕香ちゃんを拳で殴るようにして空中に放り投げる。その勢いを利用して回転した夕香ちゃんが炎を纏つてボールを

蹴り出すと、魔神もそれを手助けするようにボールを押し出した。

「爆熱……ストオオオムツツ!!」

これだけ離れていても火傷してしまいそうな程の熱量を伴ったシュートが放たれた。まさに爆熱と言うべきシュートだ。

「キーパーコマンド03!!」

圧倒的な熱量の前に衝撃波など意味は無い。ザノウは燃え盛るボールごとゴールに押し込まれた。ゴール前は煙幕に包まれ、プスプスと焦げ臭い匂いが漂っている。

『ゴオオオール!!豪炎寺夕香の爆熱ストームが決まったああ!ここで試合終了!アマカワーズの勝利だああ!』

「敗北……信じ難い結果だ。……………イエス、撤退する」

撤退命令が出たのか彼らはスフィアデバイスで帰還しようとする。消える瞬間、アルファの口元が歪んだ気がした。だけどそれがなんだったのから私には知る術はない。

次の瞬間には彼らの姿はどこにもなかったから。

「ミッシェンコンプリートだね」

「これで歴史は元に戻ったの？」

「うん、本当の雷門サッカー部を取り戻したはずさ」

「本当の雷門サッカー部……か」

それはつまりお別れを意味している。私達は夕香ちゃんと向き合った。いつの間にか夕方になっていったのか彼女の顔は夕日で赤く染まっていた。

「私の役目はここまでですね……羽花さん、お兄ちゃんをこれからお願いします」

「夕香ちゃん……!!? 身体が……!」

突然、彼女の身体から眩い光が放たれた。キラキラと光るそれは夕香ちゃんの全身を覆うと、彼女の身体が足の方から徐々に光の粒子のようなものになり消えていく。

「正しい時間の流れにインタラプトが修正された。彼女は存在した歴史と共に消滅するんだ」

「……時間みたいですね……。最後にお願ひがあります。もしそっちの私が元気になったら……サッカーを教えてあげてください」

「……うん、必ず」

彼女はそれを聞くと満足そうな顔をして——そして消えてしまった……。

私達はその光が消えていくのを最後まで見届けた。

「……ありがとう、夕香ちゃん……」

「さあ、戻ろうか。君の知るサッカー部が待つてるはずだよ」

「……そうだね」

「大丈夫かい?」



「……うん、ありがとう」

タイムマシンに乗り込み、私達は元の時代に戻った。こうして、時を越える私達の戦いは、一旦幕を閉じた。



「本当に行かなくていいの？アフロくん？」

「ああ、僕がしたことは許されることではないからね」

現代に戻ってきた私は雷門サツカー部が帰ってきているか確認するために雷門中に向かおうとしていた。アフロくんも誘ったんだけどまだ罪悪感が残っているのか断られてしまった。守君達はそんなこと気にしないと思うけどな。

「僕達はここで待つてるよ。もしまだ正しい歴史に戻ってなかったらすぐに飛べるようにね」

フエイとワンダバも残ることになった。まあワンダバは当然だけど。こんなのが突然現れたらみんなびっくりしちゃうから。

「もしまだ戻ってなかったらどうしよう……」

雷門に向かう道中、そんなマイナスな思考が頭をよぎった。プロトコル・オメガは確

かに倒した。だけど万が一のことがあったら………

頬を叩いてそれを否定する。弱気になってちゃダメだ……夕香ちゃんのためにも……

そんなことを考えているといつの間にか雷門に着いていた。

———けど私の視界に入ってきたのは想像を絶するような予想だにしない風景だった。

「……………はっ！」

———そこには跡形もなく破壊された雷門中の姿があった。

## 未来人の次は宇宙人

「なに……………これ……………」

雷門中に着いた私を待ち受けていたのは、崩れ落ち瓦礫の山と化した雷門中の校舎だった。

「一体どうして……………こんなことに……………」

まさかこれもプロトコル・オメガの仕業？ だけど奴らは確かに倒したはずだし……………それに奴らの目的はサッカーの消去、ここまでする必要は無いはずだ。

だったら私達がタイムジャンプして過去を変えてしまった……………？ いや、私達は修正された歴史を戻しただけだ。こんなことになるとは考えにくい。

震える手を抑えて必死に考えるが答えはわからない。

その時、ポケットに入れていた携帯が鳴った。この番号は……………夏美ちゃん……………？

「もしもし？！」

「やっとな繋がった！ 羽花、あなた今どこにいるの？」

「夏美ちゃん……………私のことわかるの？」

「……………どうということ？ 当たり前でしょ！」

よかった、ひとまずサッカー部は元に戻っているようだ。それがわかって胸をおろして安堵していると夏美ちゃんは慌てた様子で続けた。

「とにかく今すぐに傘美野中に来て！」

「傘美野中？隣町の……なんで？」

「説明している暇はないわ。とにかく急いで！みんなもう戦ってるの！」

「戦ってる？誰と？」

「……宇宙人よ」

……はい？……宇宙人？……確かに雷門中の様子を見ても只事でないことはわかるけど……未来人がいたんだから宇宙人がいても不思議じゃない……のかな？でも電話越しにでも夏美ちゃんの慌てぶりは伝わってくるし、そもそもこんな冗談を言うようなキャラでもない。

「とにかく急いで！もう後半が始まるわ！」

「……わかった！すぐに行く！」

携帯をポケットしまうと、私は崩壊した校舎に背を向けて走り出した。もうすぐ後半が始まるって言ってたから今から急げば後半10分くらいには間に合うと思う。……未来人の次は宇宙人か……まったく……次から次へと……。

心の中で愚痴を零しつつ、私は傘美野中まで全速力で向かうのだった。



傘美野中に着いた私が見たのは、地面に倒れ伏す雷門イレブンの姿だった。

「夏美ちゃん！これは……………」

「羽花！来てくれたのね！」

ベンチに座っている夏美ちゃんに駆け寄ると、彼女は私の肩を継るように掴み取った。

「アイツらが……………宇宙人？」

「ええそうよ、エイリア学園のジェミニストーム……………サッカーで勝負を挑んできたの」  
力尽き倒れているみんなとは正反対に、宇宙人は涼しそうな顔をして見下していた。  
スコアボードには20対0と示されている。まさか……………みんながここまでやられるなんて……………」

「天川、すぐに用意をしろ。半田と交代だ」

「はい！」

幸いさつきまでプロトコル・オメガと試合をしていたので準備はできている。ユニフォームに着替えてフィールドに出ようとしたところで

「羽花、本当に大丈夫なの？」

「そうですよ、もし羽花さんまで怪我をしちゃったら……」

夏美ちゃんと春奈ちゃんが心配そうにこちらを見つめてきた。確かにこの惨状を見れば奴らの実力の凄さがわかる。だけど逃げるわけにはいかない。せつかく歴史を元に戻したんだ、こんな奴らの好きにさせてたまるか……！

「大丈夫だよ、私を信じて！」

それだけ言うと、私はフィールドに入った。途中宇宙人の方を一瞥すると、リーダーらしき抹茶ソフトクリームみたいな髪型の人と目が合った。彼は私に向かって不気味に口元を緩ませた。

「羽花、来てくれたんだな！」

「まったく……待ちくたびれたぜ」

「遅くなってごめんね……」

ゴール前で倒れている守君と風丸君に駆け寄ると、2人とも起き上がり笑みを浮かべた。みんな元に戻ってる……だけど今は喜んでる場合じゃない。私がポジションに着くと、雷門のボールで試合が再開された。

豪炎寺君と染岡君が攻め上がるが、すぐにボールを奪われてしまった。確かにすごいスピードだ。みんながこれだけやられるのもわかる。だけどこんなのプロトコル・オメ

ガに比べれば……………

「遅いー!」

奪われたボールをすぐにカットする。そしてそのままドリブルで攻めると、ディフェンスが2人、私の前に立ち塞がった。でもそれも対応できない程じゃない、私は2人との僅かな隙間を縫うように加速し、あっさり抜いてみせた。

「ほう……………少しはやるようだな」

「すげえぜ! 行け、羽花!」

ゴール前にはディフェンス2人とキーパーを残すのみだ。全員余裕な表情を浮かべている。だけどそんなのはすぐに崩れることになる。

「ビビッドステップ!!」

私は一気に加速し、ディフェンスを抜き去る。あまりの動きに翻弄された彼らはバランスを崩して転倒した。私はがら空きとなったペナルティエリアに侵入する。そこでボールと共に跳躍、高度が最高になった瞬間に月を背景にオーバーヘッド。

「バウンサーラビット改!!」

放たれたシュートはトリッキーに何度も地面を跳躍しゴールを目指す。それは今までのものとは比較にならない速度と威力だ。

「……………なに!? おおおお!」

その動きにキーパーは反応したものの手が届くことはなくゴールに突き刺さった。まさか点を決められるとは思っていなかったのか宇宙人達は信じられないものを見たような顔をしている。私は抹茶ソフトを指さして言い放つ。

「私の仲間を傷つけたことを後悔させてあげるから！覚悟してよね！」

ここまでの動きでわかった。彼らの実力はプロトコル・オメガと比べると大きく劣る。だったら3試合を経て大きく成長した私の敵ではないってことだ。

今フィールドで立っているのは私を除いて守君、豪炎寺君、鬼道君の3人だけだ。風丸君、染岡君、壁山君もかろうじて立っているもののもう限界に近いように見える。他のみんなは立ち上がることもできず倒れ伏している。

よくもみんなを……………顔には出てないだろうけどそんな怒りが溢れてくる。

「天川羽花……………地球にはこんな言葉がある。虎を画きて狗に類す。調子に乗るのもここまでだ」

「その言葉、リボンでもつけて返してあげるよ」

抹茶ソフトが眉間に皺を寄せて私を睨んできた。その視線はまるで人でも殺すように鋭いものだった。だけど私は臆せず笑みを浮かべる。

ジェミニストームのキックオフで試合が再開。ピンク髪のミッドフィールダーが上がつてくる。



「ワープドライ……………」

「だから遅いよ……もらった！」

必殺技を繰り出そうとする一瞬の隙を突いてボールをかすめとる。前方を見ると染岡君がフリーだ。だけど彼はもうボロボロで立ち上がってるのも不思議なくらい。無理をさせることはできないと一人で攻める。

「グラビティション!!」

「アグレッツシブビート改!!」

茶色の肌をしたディフェンスが地面に手をつけるとそこを中心に紫のドームのようなものが発生した。

だけどそれも触れなければいい話。鼓動を刻んだドリブルで一気に抜き去る。

そして彼が最終の防衛ライン。

つまりキーパーと1対1だ。

「ムーンフォースラビットG4!!」

ボールを蹴り上げ自らも飛び上がる。そしてボールに重なった黄緑色の月をオーバーヘッドで蹴り落とす。いくつもの星屑が降り注ぎ、それは強烈なシュートとなる。

「ブラック……………ぐああああ!!」

相手キーパーは必殺技を発動しようとするが弾速に対してその動作はあまりに遅

かった。間に合わず彼はボールごとゴールにねじ込まれ、数秒の間ゴールに張り付いた。

試合再開後2分と経たずに2度目のゴール。

順調に得点を重ねてはいるが私は焦っていた。試合時間は多分残り10分もないだろう、今のペースじゃ点差を覆すことはできない。

だから相手もそこまで焦る必要はないのだけど敵の動揺の仕方は尋常じゃなかった。このままなら勝てることくらい小学生でもわかりそうなものだけど…。

「潰せ！なんとしても奴を潰すのだ！」

試合再開直後、まだボールを持ってすらいなのに私には複数人のマークがついた。だけどそんなものは私には意味をなさないとわからないのかな？

彼らの頭上をあつという間に飛び越え私はボールを奪おうとする……いや、やめておこう。

私は自陣ゴールに背を向けて走り出した。

「……血迷ったか。奴では我々のシユートを止めることはできない」

……わかってないのはあなた達の方だよ…。

だつて……今の守君の目にはまさに燃えるような闘志が宿っているのだから。

ゴール前に到達した抹茶ソフトによりシユートが放たれた。対する守君は手のひら

を天にかかげる。そうして現れたら神の手は以前よりも色濃く大きいものだった。  
「つあああああああ！ゴッドハンド改!!」

守君の右手にぶつかつたシュートは徐々に勢いを失い最終的に停止した。

ふふ、やっぱり止めてくれるよね！守君はそういう人だ。

「鬼道！」

ボールは守君から鬼道君へ、しかしすぐにディフェンスに囲まれてしまった。

「イリユージョンボール改!!」

鬼道君がボールをいくつにも見せるトリッキーパーナ技で突破した。その光景に抹茶ソフトはありえないものでも見たかのように驚いている。

「バカな……」

「わかってないようだから教えてあげるよ。雷門を舐めるな！」

「天川、豪炎寺！」

そう言い残して打ち上げられたボールめがけて豪炎寺君と並走する。そして射程圏内に入った瞬間飛び上がり、炎を纏いながら回転。同時にボールを蹴り出す。

「ファイアトルネード D ダブルドライブ D!!」

爆炎を纏ったシュートは敵キーパーを吹き飛ばしゴールに突き刺さった。これで3点目だ。

『ピーーーーー！』

………!?………試合終了?!

……やっぱり時間が足りなかった………!最後はこっちが押してただけに感じる悔しさも大きい。

「ゲームセットだな、地球にはこんな言葉がある。雉も鳴かずに撃たれまい」  
クソ………!私がつと早く着いていれば………!

抹茶ソフトは黒いサッカーボールを持ち出すと飛び上がり傘美野の校舎に蹴りつけた。

………!まさか雷門みたいにも破壊するつもり!?

「させない………!よー」

咄嗟に飛び上がりそのボールを蹴る。………!なにこのボール………重い!?

普通のボールとは思えない程の重量に少し怯んだけど構わずそれを蹴り返す。

弾いたボールは抹茶ソフトの元へと落ちていった。

「………なんのつもりだ?」

「私はまだまだ動けるよ。だったら学校が破壊されるのを黙って見てるわけないでしょ。それにサッカーを破壊の道具にするなんて許せない!」

試合で負けたからって目の前で行われようとしているテロリスト紛いの破壊活動を

止めない理由にはならないからね。少しだけ身体に力を入れて黄緑色のオーラを放出して威嚇する。そのオーラの流れが私の髪をなびかせる。

「羽花の言う通りだ！サッカーは楽しいものだ！なにかを傷つける道具じゃないぞ！」

「……敗者のお前達がどう足掻こうがこの学校の破壊は決定事項だ」

抹茶ソフトが再度ボールを蹴ろうと足を振るう。それを防ごうと彼の前に出ようとしたところで他の宇宙人に囲まれてしまった。まずい……飛ばば抜け出せるだろうけどこの一瞬の隙が命取りだ。間に合わない……………！

「そこまでだ、レーゼー！」

その瞬間、フィールドに青白い光が放たれた。そこには白いフードを深く被った人物が立っている。

「…支援者X……………」

「……………え!？」

支援者Xって……夕香ちゃんやアフロくんタイムブレスレットを渡した……。

なんでそんな人がここに……。まさかエイリア学園の仲間!？」

抹茶ソフト——レーゼは彼を睨みつけると振りかぶっていた足を戻して口を開いた。

「なぜだ？我々は勝利した。破壊は当然のこと」

「エイリア皇帝陛下のご命令だ。黙って従え」

「あの御方が……!? …… ……命拾いしたな、雷門イレブンよ」

小物くさい捨て台詞を吐き捨ててジェミニストームは紫色の光に包まれて消えてしまった。

いや、そつちはどうでもいい。私は支援者Xの方に目をやる。

「支援者X、あなたに聞きたいことが……」

そう言い終わる前に彼は再び青白い光に包まれた。その眩しさに思わず目を細める。そして次に目を開けた時には彼の姿はどこにもなかった。

その時、サイレンの音と共に救急車が到着した。

そうだ……みんな！

私は気持ちを切り替えて動ける人と一緒に倒れているみんなを救急車に運んだ。

結局マックス君、半田君、少林君、影野くん、宍戸君、栗松君の6人は入院することになってしまい、他のみんなも動ける状態ではないので、病院で検査を受けた後それぞれ家で安静にすることになった。

私は守君に肩を貸して帰路についた。

「羽花、ありがとな。お前が来てくれなかったら俺達も入院してたかもしれないぜ」

「……………でも……私がつと早く着いていれば……………マックス君達は入院しないですんだ

かもしれない……」

「気にすんなよ、あいつらだつてわかつてくれるさ。それよりお前のあの動き、凄かったな！昨日とはまるで別人だったぜ！なにがあつたんだ？」

「……………ちよつと未来人から歴史を守つただけだよ」

それを聞いてキョトンとした顔をする守君。そんな彼の顔がおかしくなつて私はふつと息をするように笑うのだった。

## 動き始める物語

「支援者Xがエイリア学園に!？」

ジェミニストームとの試合の翌日、私はタイムマシンに戻ってフェイ達に事情を伝えた。アフロくんは宇宙人が攻めてきたことに驚いていたけど、フェイとワンダバはそっちではなく支援者Xの方に驚愕した。

「宇宙人が攻めてくるなんて……これも歴史改変の影響なのかい?！」

「いや、エイリア学園が来るのは正しい歴史の流れだ」

宇宙人が来るの正しい歴史なんだ……もう今さら驚かないけど。それより問題は支援者Xの方……なのかな。

「実は羽花がいない間に支援者Xについて調べていたんだ」

「なにかわかったの?！」

「いや、支援者Xについてはなにも……だけどその途中でこの時代に時空の乱れを見つけたんだ」

「時空の乱れ?！」

「タイムジャンプの痕跡……足跡みたいなものだ。それがこの場所で観測された」



ワンダバがタイムマシンのスイッチを押すとモニターが現れ、そこに地図が映し出される。

「あれ……島？」

その地図の一点、海に囲まれた小さな島が光っている。どうやらここで時空の乱れを見つけたみたいだ。

「ここは……ゴッドエデン!？」

「アフロくん知ってるの？」

「ああ、影山が所有していた無人島さ。なにかの実験で使う予定だったみたいだけど……」

その前に影山が捕まったってことか……どうせろくなこと考えてなかったんだろうな、フィールドに鉄骨落とすような人だし。

「でも、ここにタイムジャンプの痕跡があったんでしょ？ 私達はこんなところ行ってないし……」

「うん、僕ら以外の誰かかってことだ。それもつい最近にね」

「まさか……プロトコル・オメガ？」

「その可能性は高いと思う」

私達の顔が険しくなった。これはまた一波乱ありそうだね……

「僕とワンダバは今からここに行つて調べてみようと思う。羽花とアフロデイ君はエィリア学園との戦いに備えておいて」

「……わかつた、そつちは任せたまよ」

飛び去るタイムマシンを見送つた後、私とアフロくんは雷門中にむかつた。多分動く皆はもう集まっているはずだ。

しばらくしてサッカー部室の前に到着したけどそこには誰もいなかった。視界に入ってくるのは崩壊した部室だけ。私はいたたまれない気持ちになつて思わず視線を逸らした。私にとつてもこの部室は思い出が詰まつてるから。

「大丈夫かい？」

「……うん、平気だよ」

私を心配して声をかけてくれたアフロくんに精一杯笑顔を作つて答える。どれだけ笑っていたかはわからないけど。

それにしてもアフロくん変わったな……。いや、元に戻つたというのが正解なのかもしれない。多分前までの高飛車な態度は神のアクアの影響なのだろう。それが抜けた彼は優しい人物だった。

と、その時私の携帯が鳴つた。

夏美ちゃんからメールだ。

要約すると皆はイナビカリ修練場の地下にいるから早く来てとのことだった。特訓でもしてるのかな？とにかく私達も行ってみよう。



イナビカリ修練場の中に入ると、今まで見た事のない扉があった。いつの間にこんなものが……

そう思いつつ中に入ると話し声が聞こえてきた。

「ちよつとガツカリですね理事長。監督がいないと何も出来ないお子様の集まりだったとは。彼らは一度エイリア学園に負けているんでしよう？」

「だから勝つんです！一度負けたことは次の勝利に繋がるんです！」

「頼もしいわね。でも10人しかいないあなた達がどうやって戦うつもりなのかしら？」

「11人目ならいますよ」

黒髪ロングの女性の言葉にやや被せるように言うと、彼女はこちらに視線をむける。聞こえてきた会話によると彼女はどうかやら吉良瞳子さんというらしい。響監督に代わる雷門の新監督だとか。

「羽花?! ー人目がいるってどういうことだ?」

「ほら、ここに」

「お前は……アフロデイ!」

「「ええええええ!」」

私は後ろのアフロくんを指差す。

彼の姿を見た皆はそれぞれ驚きの声を漏らす。それほど意外な人物なのだから。

「てめえ! 何しに来やがった!」

「待って染岡君! アフロくんを連れて来たのは私なの!」

「あ、アフロくん……?」

「おい! まさかこいつがー人目って言うんじゃないだろうな!」

怒りのあまり激昂する染岡君。言葉には出てないけど皆も同じ考えなのだろう。鋭くアフロくんを睨みつけている。すると彼は皆にむかって頭を下げた。

「僕が君達にしたことは許されることじゃない、君達が怒るのも最もだ。本当に申し訳なかった。だけど……僕もサツカーを守るために戦いたい。どうか君達のチームに加えてはくれないだろうか」

「皆、アフロくんを信じてあげて。詳しくは言えないけどアフロくんは私を助けてくれ

たの。だから……お願い！」

私も一緒になって懇願すると、守君が1歩前に出た。

「……本気なんだな？」

「ああ」

「わかった、俺は信じるよ。羽花がこれだけ言うんだからさ！」

守君がアフロくんに手を差し伸べる。そして2人の間で固い握手が交わされた。一部のメンバーはまだ疑っているようだけど他ならぬ守君が認めたんだけだ。渋々了承してくれた。

「話はまとまったようね。それではすぐに出発するわよ、奈良でエイリア学園の襲撃があったわ」

「更にエイリア学園は財前総理を連れ去っている」

総理大臣という単語に皆がざわつく。どうやら中学校を襲うだけではないようだ。

「瞳子君、円堂君達をよろしく頼む。情報は随時イナズマキャラバンに転送する」

「イナズマキャラバン？」

警監督に案内されて別の部屋に移動した私達を待っていたのは、青を基調に黄色いイナズママークが施されたバスだった。

ん？これ……なんだか見覚えが

「アフロくん、これって」

「ああ、タイムマシンによく似ているね」

やっぱりそうだね、外見とかそっくりだし。多分ワンダバ辺りがこれを真似て作ったんだろうな。彼そういうノリ好きそうだから。

「これがイナズマキヤラバン、この地下理事長室と繋がる前線基地だ」

「あれは……」

守君が何かに気づいて扉の前に駆け寄った。そこにはサッカー部の看板が立てかけてあった。

「ここは言ってみれば新しい部室。だったらこれが必要だろう」

「……！ありがとうございます！監督！」

ちなみにこのイナズマキヤラバンの運転手は古株さんだ。あの人何気なく色々なしちやうからすごいよね

「お前達ならきつとエイリア学園に勝てる！俺はそう信じているからな！」

「「はい！！」」

「よし行くぞ！皆！」

全員がイナズマキヤラバンに乗り込むと、床がどんどんせり上がっていき、地上への

連絡通路となった。そして勢いよく発車したキャラバンは少し浮き上がると地上へと出て目的地へと進んでいく。向かう先は奈良県、私達の新たな戦いが始まるうとした。



暗闇が支配する部屋にて、レーゼは膝を地面につき頭を垂れている。

そこにコツコツと足音をたて、黒髪をマフラーのように首の周りに巻いた大男が現れた。彼が立ち止まるとそこに白のスポットライトが当てられその全貌が明らかになる。

「無様だな、レーゼよ。まさかエイリア学園の戦士が早々に敗北するとは」

「申し訳ありません……しかし我々は負けた訳では!!」

「あれだけ天川羽花に翻弄されておいてよくもそんな口が聞けるものだな」

「……ツツツ?!?……申し訳………ごいません」

許しを乞うたレーゼの言葉を大男が遮る。それを聞いたレーゼは更に深く頭を下げ、焦燥にかられた表現を浮かべた。

「次また失態を犯した時には……わかつているな」

「はい……もちろんです」

「まあまあデザーム、その辺にしてあげなよ」

その時、部屋に赤い髪の毛の少年が入ってきた。彼はデザームをなだめるように話しかける。

「グラン様!?!」

「天川羽花はセカンドステージチルドレンの候補者だ。セカンドランクのジエミニストームには少々荷が重かったんじゃないのかな?」

さっきの態度とは違ってかわってデザームはレーゼと同じように跪く。その顔には先程までの余裕は感じられない。

「セカンドステージチルドレン……人間の限界を超越する進化した子供達、でしたよね?」

グランが誰もいない空間に話しかける。——否、誰もいなかっただ。そこにはいつの間にか移動したのか白いフードを被った男が立っている。

「ああ、その通りだ」

「そしてその候補者は我々エイリア学園の中にも存在している。なるほど、確かに興味深い話だ。しかしわからない、あなたはなぜそれを知っているのか。なぜ我々に協力するのか」



「……………」

「答えたくないのなら別にいいんですけどね……くれぐれも裏切らないことだ」

それだけ言うとグランの体が光に包まれ消えてしまった。続くようにデザーム、レーゼも同様にその姿を消し、残ったのは支援者Xのみ。

「黄名子、羽花……フェイ………私は………」

その眩きは誰の耳にも届かず、その広い空間に僅かに響くのみだった。



「ワンダバ………これはいつたい」

「明らかに意図的に破壊された跡だ……いやしかしこれは……」

羽花達と別れ、無人島——ゴットエデンへと向かったフェイ達を待ち受けていたのは、荒れ果てた森と干上がった海だった。

その破壊跡は随分と新しく、まだ微かに焦げ臭い匂いが残っている。

「プロトコル・オメガの仕業……いや、奴らがこんなことをするとは考えられないか」

ある可能性を口にするワンダバだが、即座にそれを否定する。プロトコル・オメガが所属するエルドラドは未来の世界の意思決定機関、どちらかと言えば正義の組織だ。目

的の為に手荒な手段を用いることはあれどそれはあくまで世界の為。故にこのような無意味な破壊活動を行うとは到底考えられないのだ。

「プロトコル・オメガじゃないとしたらいったい誰が……！ワンダバ！」

考え込んでいる二人の真正面に白い何かが高速で飛んできた。フェイは即座に反応すると飛び上がりそれを蹴り返す。

「誰だ！」

飛んできたのはサッカーボールだった、蹴り返されたボールは地面にワンバウンドするといつの間にか立っていた少年の手の中に収まった。

「……君は？」

「僕はシユウ、この島に住んでる。君達の方こそ何者だ？なぜこの島に来た？」

シユウと名乗ったやや褐色肌にボブカットの少年はボールを手で持ったまま二人を睨みつけた。

「ワンダバ……ここは無人島じゃなかったの？」

「アフロデイはそう言っていたが……どういうことだ？」

「僕の質問に答えてくれないかな？君達は何をしに来たんだ？」

二人が小声で相談しているとシユウが強い口調で答えを急かした。その様子を見て早く疑いを晴らした方がいいと判断したフェイが口を開いた。

「僕はフェイ、こっちはワンダバだ。僕達はあることを調べたくてこの島に来た。ここでいったい何が起こったの?」

「調べたいこと?信用出来ないね、君達もあいつの仲間じゃないのか?」

「あいつ?もしかしてこの島をめちやくちやにした犯人か!」

ワンダバがそう問うとシユウは少し驚いた顔をした後何かを考え始めた。そして少し経ち結論が出たのか口を開き始める。

「君達が来る少し前、一人の男がこの島にやってきたんだ。あいつはサッカーボールでこの島を破壊し始めた。僕はここを守るために戦ったけど……全く歯が立たなかった」

そう言うときシユウは歯を食いしばり拳を震わせる。その表情は怒りと悔しさで満ちていた。

「そいつの目的は?どんなやつだったの?」

「さあね、目的なんてわからないよ……でも、去り際に名乗っていったよ、——と」

「……………!?まさか、そんなことが……………奴は囚われているはず」

「でも……………だとしたら目的は……………!羽花達が危ない、すぐに戻ろう!」

その名を聞いた二人はすぐに踵を返しタイムマシンに戻ろうとする。しかしそれにシユウが待ったをかけた。

「待ってくれ!君達はどうかやらあいつの仲間じゃないようだね。なら頼みたいことがあ

る」

「頼みたいこと？」

「僕はこの島をめちやくちやにしたあいつが許せない……だから、君達があいつと戦うのなら僕も連れて行ってくれ」

思わぬ助っ人、シユウを引き入れたフェイとワンダバは急いで羽花達がいるであろう雷門中に戻るのだった。

## 総理警護の11人

無事奈良に到着した私達は財前総理の誘拐現場であるシカ公園にやってきた。……  
なんだけど

「中には入れそうもないね」

「ここまで来て門前払いかよ」

現場は事件の操作を行う警察の人達で溢れていた。私達のような一般人が立ち入るのは難しい。さつきから監督が交渉しているけど手こずっているようだ。

「もしもしバトラー？お父様に繋いでくれる？」

「夏美ちゃん、何してるの？」

「何とか入れてもらえないかお父様から頼んでもらうわ」

……いやいやいくら理事長の顔が広いからってさすがに警察は無理でしょ。しかもただの事件ならともかく総理誘拐なんて重大事件なら尚更。



「はい、ありがとうございます理事長」

「ホントに入れちゃった……」

理事長顔広すぎでしょ……警察にまで顔が利くなんて。

パツと公園の中を見渡すと壊れた銅像や橋など目に入った。だけど破壊の跡はあれど宇宙人の手がかりになりそうなものはない。

「よし、手分けして宇宙人の手がかりを探すぞ!」

公園内の搜索を始めるけどそう簡単には見つからない。そもそも警察の捜査ですら大して進展していないのだから証拠なんて残ってないのかもしれないな。

「うーん、なかなか見つからないなあ」

「根気よく探すしかなさそうだね……」

アフロくんと一緒に銅像裏のスペースを搜索するがそこには何もなかった。ここが一番可能性がありそうだと思うんだけどな。

「あ、あったツスー!」

その時、壁山君の声が公園中に響き渡った。声のした方向へ向かうとびしょ濡れの壁山君と眼鏡君、そしてエイリア学園が使っていた紫色のボールがあった。

「お、重い……」

守君がそれを両手で持ち上げるけどあまりの重量に離してしまう。ボールはドスン

という音を立てて地面に落ちる。やっぱり重いよね、少なくとも普通は蹴るようなものじゃない。

「そこまでだ！」

突然の声に振り向くとそこには黒いスーツを身にまとった人達が立っていた。警察……じゃなさそうだけどいったい……。

「今度こそは逃がさんぞ！エイリア学園の宇宙人共め！」

……もしかして私達のことを宇宙人と間違えてる？どこからどう見ても地球人だと思っただけ。

「財前総理をどこにやった！」

「いや……俺達は」

「黙れ！その黒いサッカーボールこそが動かぬ証拠だ！」

「これはそこで拾ったもので……」

「とぼけるな！」

全然話を聞いてくれないよこの人達……確かに総理を誘拐されてピリピリしてるのはわかるけど……。

「あの、警察の方には話を通ってると思うので一度確認してもらっても……」

「我々は総理大臣警護のSPだ！その様な言い訳が通じると思うな！」

なんだか違和感あるな……いくらなんでも話が通じなさすぎだし、喋ってる男性の表情からそこまでの怒りを感じない。

「宇宙人はどこだ！」

そんなことを考えていると黒服の人達の後ろから同じ格好をした少女が出てきた。歳は私達と同じくらいだ。

「動かぬ証拠があるのに認めないなんて、往生際が悪い宇宙人だね」

「だから俺達は宇宙人じゃないって！」

「いいや宇宙人だね」

「宇宙人じゃない！」

「宇宙人だ！」

平行線をたどった守君と少女の口論、先に折れたのは少女の方だった。

「そんなに言うなら証明してもらおうか」



「で、なんでサッカーなのよ？」

「さあ？」



結局何故かサッカーで決着をつけることになった。夏美ちゃんが疑問を声に出すが最もだ。でもやらなきゃこの状況を切り抜けられなさそうだ。

「相手が大人だからって怯むな！フィールドの中では大人も子供も関係ない！」

「体格差があるからなるべくテックニックで勝負しなきゃだね」

作戦会議をする私達だが何故か監督はだんまりだ。私達の実力を見極めようつてことかな？

「あ、ありました！SPフィクサーズ、大のサッカーファンである財前総理のボディガードでもあるサッカーチームです！」

春奈ちゃんが手持ちのノートパソコンで調べたいデータを皆に見せる。なるほど、サッカーで体を鍛えてるってことか。

F W 豪炎寺、染岡

M F 一之瀬、鬼道、羽花、アフロディ

D F 風丸、土門、壁山、目金

G K 円堂

『さあなんとあのアフロディをメンバーに加えた雷門イレブン！対するはSPフィクサーズ！いよいよキックオフです！』

いつの間にか実況を始めている角間君、彼どうやって東京から来たんだろう？さつき

自転車で登場してたけどまさかそれで来た？

なんてことを考えているとホイッスルがなり雷門ボールで試合が始まった。

豪炎寺君と染岡君がパスを繋ぎながら攻め上がる。だけど早々に囲まれてしまった。さすがに総理の護衛をしてるだけあって守備力はかなり高いようだ。

「染岡、アフロデイがフリーだ！」

鬼道君が空いたスペースに走り込んだアフロくんを確認すると染岡君に指示を出す。

「……ちっ、天川！」

だけど染岡君はアフロくんではなく逆サイドにいた私にパスを出した。しかしそのパスはさすがに無理がありあっさりカットされてしまった。

「させるか！」

だけど風丸君がそれをすかさず奪い返す。

しかしすぐに敵デイフェンスが立ち塞がる。

「こっちだ！」

「う……くそ！」

「プロファイルゾーン!!」

ボールを奪われ吹き飛ばされてしまった。

……なんだろう、今のはアフロくんパスを出せばかわせてたはずだ。さっきの染岡

君も……。

もしかして皆まだアフロくんを信用できてない？

そう思い周りを見渡すと皆の目には若干警戒の色が残っていた。

守君はアフロくんを信用して迎え入れようとしてくれている。鬼道君や豪炎寺君はまだ完全に信用してはいないのかもしれないけどエイリア学園との戦いでアフロくんの力が必要になると理解している。だけど他の皆はそうもいかないようだ。

「トカチエフボンバー!!」

そんなことを考えているうちに相手の連携シュートが放たれた。それに対し守君は拳を打ちつける。

「爆裂。パンチ!!」

目にも止まらぬ連続パンチに弾かれたボールは弧を描きながら私の元へ。

……どうすれば皆アフロくんを信用してくれるんだろう?……そうだ!この方法なら。

スライディングで向かってきた相手をジャンプでかわすと私は空中でアフロくんにパスを出す。

「アフロくん!」

「……!?!」

ボールを受け取ったアフロくんが走り出す。

すると彼は敵が立ち塞がったのを確認すると指を鳴らす。

「ヘブンズタイム!!」

そして一瞬のうちに移動し相手を吹き飛ばす。

ボールは再び私に周りにすぐにアフロくんに戻す。そんな風にワンツートを繰り返し相手デイフェンスを突破していく。その速度に相手はまるで追いつけない。そしてあつという間にゴール前に到達した。

「合わせて、アフロくん!」

「ふふ、面白い…やってみよう!」

ペナルティエリアに侵入したタイミングでボールをアフロくんに預け飛び上がる。するとアフロくんも追従するようにヒールでボールを上げると跳躍する。

そうして私のところに来たボールを蹴り上げると次にアフロくん、そして再び私と交互に何度も蹴り上げる。

そして黒いイナズマを纏ったボールを2人同時に蹴りつける。

「ジョーカーレインズ!!」

青白い光と黒いイナズマを纏った弾丸がゴールを襲う。それに対し相手がキーパーは左手を上げたと思うと彼の背後に警察がよく使っているような盾が何枚も現れた。

「セーフタイププロ……ぐわあ！」

「ただどそれは放たれたシュートに対しあまりに無力だった。一瞬の拮抗すらなくボールはゴールネットに突き刺さった。」

『ご、ゴール!!天川とアフロデイが放つ凄まじいシュートが決まったアア!』

「あの二人が一緒にシュートを……」

「神のアクアが無いのにすごい威力だったス……」

「フィールドのあちこちからそんな声が聞こえてくる。どうやら私の作戦は上手くいったようだ。サツカーのことはサツカーで証明するのが一番だからね。これで皆もアフロくんがもう神のアクアに頼るような卑怯者ではないとわかってくれるだろう。」

「ナイスシュート!羽花、アフロデイ!前はいろいろあったけどこのユニフォームを着れば仲間だ!これからも頼むぞアフロデイ!」

「ゴール前の守君からそんな激励の言葉がかけられる。それを聞いたアフロくんは頬を緩ませた。」

「彼には感謝しないとね、僕を認めてくれたこと」

「それが守君だからね、サツカーを通じて誰とでも仲間になっちゃうんだよ」

「そんな会話をしていると染岡君がこちらに歩いてきた。彼はアフロくんの正面に立つとゆつくりと手を差し伸べた。」

「……!!染岡君……」

「勘違いすんじゃないぞ、お前がやったことを許したわけじゃない。ただエイリア学園と戦うためにお前の力が必要だと思っただけだ」

正直にすごいプレーだったって言えばいいのに。素直じゃないんだからまったく…。アフロくんは微笑むと染岡君の手を取った。

よかつた、これでひとまずは認めてもらえたようだ。

キックオフから試合再開、相手の攻撃に対し染岡君が迎え撃つ。

「さあ、来い！宇宙人！」

「俺達は人間だって言ってるんだろうが！」

ボールを持つのはさっきの赤い髪の女の子。大人だらけのチームで唯一私達と同世代、しかも驚くべきことにキャプテンみたいだ。

彼女はヒールリフトでボールを染岡君の頭上に上げると自らも回転しながら飛び上がり染岡君を抜き去った。

「大したことないね、宇宙人！」

「くそ……う、……」

……！今の染岡君の反応、足を抑えていたような……まさか……。

「キラースライド!!」

素早く土門君がリカバーしてボールは風丸君へ、彼は自慢のスピードで左サイドを駆け上がろうとしたけど――

「「ボディシールド!!!」」

「ぐあああ!」

敵のディフェンスで吹き飛ばされた風丸君、……今のもいつもの彼ならかわせたはず。

ボールは相手のFWへ、その前に壁山君が立ち塞がる。

「行かせないっす!」

「合気道!!」

しかし相手の必殺技によってひっくり返されてしまった。……やっぱりあの三人どこか不調だ。実力は完全にこちらが上回っているのに攻めきれないのはこのせいだったのか。

そこで前半終了の笛が鳴った。

ベンチに集まる皆の表情はどこか曇っていた。確かに点数的にはこつちが勝っているけどこうも攻めきれないととなると……。

「皆聞いて!後半の作戦を伝えるわ。風丸君、染岡君、壁山君、あなた達はベンチに下がって!」

「「ええ!」」

「空いたポジションは他の人がカバーして、よろしく」

監督のその指示を皆は飲み込めていなかった。確かに三人は不調だけど全員ベンチに下げるなんて……。三人も少ない状態で戦うなんてハンデもいいところだ。

「ちよつと待つてください!そんなの……。敵に抜かれでもしたら終わりじゃないですか!」

「だったら、抜かれないようにすることね。後半始まるわよ」

「しかし!」

当然抗議の声上がるけど監督はそれを無視してグラウンドへ出るように促した。皆まだ納得いってないみたいだけど渋々それに従った。

「どういうことだ!私達を舐めてるの?」

「……これは作戦だ」

赤髪の子が鬼道君に突つかかるけど彼はそれを無視してポジションについた。

F W 豪炎寺

M F 一之瀬 鬼道 アフロディ

D F 羽花 土門 目金

G K 円堂



壁山君と風丸君が抜けてデイフェンダーが二人になってしまったので私がデイフェンスに下がってスリーバックになった。フォワードは豪炎寺君のワントップだけど彼なら大丈夫だろう。

笛が鳴って後半が始まった。

私達はこれまで以上に攻め上がるけどやっぱり人数が少ないハンデは厳しく中々ゴールを奪えない。それどころかハンデの埋め合わせの為に一人一人の運動量が多くなってしまっている。

「くそーこれで勝てたら漫画だぜ！」

ベンチで染岡君がそんな叫びをあげた。それを聞いた監督はマネージャー陣に指示を出す。

「もう、怪我してるなら言つてよ！」

「だって……言うほどのことじゃないと思つたつス」

「今は一人でも多くの力が必要だ……」

……やっぱり、皆怪我してたから動きが悪かつたのか。だから無理させない為にベンチに。どうやら監督としての力量は確からしい。

「……そういうことだったのか」

それに気づいてから鬼道君のゲームメイクが変わつた。人数的不利を有利にするよ

うな立ち回りで雷門は次第に相手を圧倒していった。

「ザ・タワー!!」

赤髪の子が塔を出現させ私の行く手を阻んだ。それを更に高くジャンプし飛び越えて反対側に着地した。

「な!?!」

そしてボールを蹴り上げ跳躍を繰り返しオーバーヘッド。

「バウンサーラビット改!!」

それは相手のキーパーに技を出す隙を与えずゴールに突き刺さった。だけど私達の勢いはこれだけじゃ収まらない。

「ファイアトルネード!!」

「真ゴッドノウズ・インパクト!!」

「ザ・フェニックス!!」

「イナズマブレイク!!」

結局元の実力差が出る形となって私達は6対0でSPファイクサーズを下したのだ。た。



「あたし達の完敗だよ、さすがは日本一の雷門イレブンだ！」

「いやあそれほどでも………つてええ!!?知ってたの?」

「ああ、どうしてもあんた達の戦いたくてさ………騙してごめんよ」

「戦いたかったて………どうして?」

なんとなく察してたけどやっぱり彼らは私達が宇宙人じゃないって知ってたみたいだ。仮に私達を本当に宇宙人だと思つてたのならサッカーなんて挑まずに問答無用で捕まえるはずだからね。だけど私達と戦う理由がわからず質問する。

「あたしは財前塔子、攫われた財前総理の娘だ」

「「ええ!!?総理大臣の娘え!!」」

「あたしどうしてもパパを助けたいんだ………だから一緒に戦つてくれる強い奴らを探した。ごめんよ試したりして」

「いいさ、気にするなよ」

「ありがとう!あんな達ならエイリア学園に勝てるかも………お願いだ!私と一緒に戦つてくれ!」

「もちろんさ!なあ皆!」

「「おう!!」」

守君と塔子ちゃんが握手をかわした。これで一件落着と思われたその時、パソコンを見ていた春奈ちゃんが突然声をあげた。

「た、大変です!」

「春奈? どうした?」

「……ジエミニストームが倒されたそうです」

「え!? 倒されたって……いったい誰に……」

「それが……」



奈良シカTV、本来ならばまもなくジエミニストームが全国に向けて宣戦布告を行うはずの場所だ。

しかし彼らは全員屋上のフィールドに倒されていた。キャプテンのレーゼだけはかろうじて意識を保っているものの、その他のメンバーはあまりのダメージに意識を失い倒れている。

周囲の高層ビルは崩壊し、所々で火の手が上がっている。その惨状がこの場で起きた出来事の凄まじさを表していた。

「貴様……いつたい………何者だ」

薄れゆく意識の中ではレーゼはフィールド上にただ一人腕を組んで立っている緑の髪に褐色の肌の男に問いかける。

男はそれを聞いてたから笑いを浮かべた。

「くつくつく………そう言うと思つたぜ。お前は誰だなぜこんなことをする？ そう言いたいんだな？ いいだろう教えてやる」

「俺は………ザナーク・アバロニク!! 名もなき小市民だ!!」

## 強襲するジェミニストーム

「……この者は？」

「ザナーク・アバロニク、ムゲン牢獄にS級の危険人物として収監されていた男です」

羽花達の時代より200年後、世界意思決定機関エルドラド本部にて、この顛末を監視する者たちがいた。エルドラドの議長、トウドウ・ヘイキチとその他の議員達だ。彼らとはある事情により、一旦サッカーの消去を中止しているものの監視だけは続いていた。

「おいエルドラドのジジイ共、俺を監視しているんだろう？」

「「?!」」

唐突なザナークのモニター越しの問いかけに彼らの間に緊張が走る。一瞬の静寂の後、ザナークが口を開いた。

「提案だ、お前らが手を焼いてる連中を俺が倒してやる。その代わり俺の罪は帳消しとなる。どうだ？ どうせそっちは手一杯なんだろう？」

「……取引というわけか」

「まあそうなるな」

「なりません！犯罪者からの取引など……！」

「いいだろう、取引に応じる」

「くつくつく……そう言うと思っただぜ」

期待通りの返答に満足したザナークは倒れているレーゼ達の方に振り向いた。

「まずはこいつらに働いてもらうか……さあ、お目覚めの時間だ！かアアアアアア！」

ザナークの口から青白いビームのような光が放出され、それは11個に分かれるとレーゼ達の体へと吸い込まれていく。

すると倒れていたはずのジエミニストームのメンバーがゆっくりと起き上がった。彼らは全員髪の毛が青緑色に変色しておりユニフォームも灰色から青緑色に変わっていた。

「どうだ？凄いやパワ―を感じるか？感じるな？」

「はい、ザナーク様」

「じゃあ雷門とかいう雑魚共は軽く叩き潰せるな？」

「もちろんです。北に近づければ南に遠い、ザナーク様のパワ―を賜った我々が勝利するのは当然のこと」

「……そう言うと思っただぜ」



ジェミニストームが倒された、その知らせを聞いた私達はその現場である奈良シカTVへと向かっていった。

皆の反応はとても信じられないという感じだった。それもそうだろう、今や全国でも最強クラスのチームになった雷門ですら手も足も出なかつた相手だ。他で互角に渡り合えそうなのは世宇子中くらいだけどアフロくんがここにいる以上ありえない。

春奈ちゃんがジェミニストームを倒したというチームの情報を集めてくれているが現状成果はない。

「。パ。パ……」

「塔子、大丈夫か？」

「ああ、ありがとう円堂」

塔子ちゃんはお父さんのことで気が気ではないようだ。ジェミニストームが倒されたことでお父さんも帰ってくるといういいんだけど…。

「うおっっ！」

古株さんのうめき声が聞こえたと思つたらキャラバンは急停止してしまった。

私はその時の衝撃で前に突き出て座席で頭を撃ってしまった。痛みでおでこを抑え





「私達になんの用？」

「なあに……俺の遊び相手になってくれるやつを探してな」

するとザナークの背後に11人の人影が現れた。その人物達に私達は見覚えがあった。

「ジェミニストーム!?!」

そいつらの正体は倒されたはずのジェミニストーム、てことは彼らを倒したのはこのザナークって人なのか。

「お前らに選択肢はない。さあスタンバイしてもらうぜ」

『フィールドメイクモード』

アルファの使用していたものとは色違いの赤いスフィアデバイスによって道路の真ん中にサッカーフィールドが形成された。そしてそれを囲うように紫色のバリアのようなもの張り巡らされている。

「ここからは試合が終わるまで出られない。単純だろ？」

「どど、どうなってるっすか？」

突然現れたフィールドに皆は戸惑っているようだ。まあこんなの見せられたら普通驚くよね。

「……く、監督……」

守君が監督に指示を仰ぐと、彼女は少し考えて無言で頷いた。やるしかないってことね。それにしてもまさかこんなタイミングでエルドラドの刺客が襲ってくるなんて。

「天川、あの男のこと何か知っているのか？」

ベンチで試合の準備をしていると鬼道君が尋ねてきた。今まで歴史改変やエルドラドのことは言っても混乱を招くだけだと思って黙ってたけど、そういうわけにもいかなさそうだ。

「あのザナークって人のことは私も知らないけど……多分あいつを送り込んできたのは200年後の未来のエルドラドっていう組織だよ」

それから私はこれまでの出来事を手短に掻い摘んで皆に話した。できるだけわかりやすくしたつもりだけど理解してくれるかな。

「……つまり、俺達は一度サッカーを奪われてるってことか」

「未来がどうか俺全然わからないぞ」

鬼道君や一之瀬君は理解してくれたみたいだけど守君は話が飲み込めていないのか頭を抱えてしまっている。

「まあとにかく！羽花とアフロデイが俺達のサッカーを守ってくれたんだろ？ありがとう  
な！」

なんかちよつと強引にまとめてきた気がするけどまあいいか。詳しいことは試合の

後にしよう。今はあいつらを倒すことに集中しないと。

「ザナーク様とミキシマックスした我らに歯向かうとは……愚かな奴らだ」

「全員がミキシマックスしてるっていうの!？」

前の時と様子が違うと思っただけでそういうことか……あのザナークって人がどれくらいの実力なのかわからないけど、全員がミキシマックスしてるっていうのはかなり厄介だ。

F W 豪炎寺 染岡

M F 一之瀬 鬼道 羽花 アフロディ

D F 風丸 土門 壁山 塔子

G K 円堂

新メンバーの塔子ちゃんはディフェンスに入ってもらおうようだ。確かSPフィクサーズではミッドフィールダーの位置にいたけどディフェンス能力も高そうだったので適任だろう。

ちなみに実況席には前回同様角間くん、あの人ホントどこにでも現れるよね……

私は相手ベンチの方をちらりと見る、ザナークはどうやら自分で戦わないらしい。自分が出るまでもないか思ってるのか……

豪炎寺君からのキックオフで試合が始まった。ボールは染岡君に渡りパスを回しな

がら攻め上がる。

「一之瀬！」

「アフロデイ!!」

素早いパス回しでボールはアフロくんへ、彼はディフェンスが立ち塞がったのを確認すると指をパチンと鳴らした。

「ヘブンズタイム!!」

世界が静止する。そして次の瞬間私の目に飛び込んできたのは——ボールを奪われるアフロくんの姿だった。

「な!?!」

「ヘブンズタイムが破られた!?!」

私達は何が起こったか理解できず数秒動けないでいた。その間にジェミニストームは以前とは比べ物にならない速度で前進してくる。

「くっつ、皆戻れ！」

鬼道君の声で我に帰った壁山君がボールを持ったレーゼの進路を塞ぐが瞬きするまでに加速したレーゼに抜かれてしまった。

「前とはスピードが……!」

ミキシマックスしてるとはいえこれは予想外だ。11人に力を分け与えてこれなら

ザナーク本人はどれほどの実力を…？

デیفエンス全員が抜かれてしまいゴール前でレーゼと守君の1対1になった。

そして急停止したレーゼが足を振るってボールを回転させる。

「くらえ！アストロブレイク!!」

回転は勢いを増し巨大な紫色のエネルギーを纏った。それをレーゼが蹴り込むと地面を抉りながら突き進む。

「来い！マジン・ザ・ハンド!!」

それに対し守君は魔神を形成し立ち向かうも、シュートの威力に押されてあっさり消滅してしまった。遮るものがなくなったシュートは無常にもゴールに突き刺さる。

『ゴオオオル!!開始早々ジェミニストーム先制です!!』

「なんてパワーなんだ……」

今の守君では相手のシュートは防げない……か。こんなことなら大介さんが使っていた正義の鉄拳のことを教えてあげておけばよかった。実際に使えるかどうかは置いておいて解決策の一つにはなつたはずだ。

また雷門のキックオフで試合再開、豪炎寺君からのパスを受け取った私が駆け上がる。

「グラビティション!!」

「ツッ！アフロくん！」

この技……この前より範囲が広くなってる!? 咄嗟にアフロくんはボールを預けて回避する。パワーアップしてるのは必殺技も同じってことか。

「今度こそ……ヘブンズタイム!!」

再び時を止めようと試みるアフロくん、だけど結果はさつきと同じでボールを奪われてしまった。

ヘブンズタイムが2度も破られるなんて……! それだけ相手が強く……いや、確かに強くなってる。だけどまだプロトコル・オメガの方が実力は上に見える。まさか……アフロくんの動きが鈍くなってる?

ボールはレーゼに回された。そしてシュート。

「爆裂パンチ!!……ぐああ!」

守君の拳はいとも簡単に弾かれゴールネットが揺れる。

これで2失点。早くなんとかしないと皆がもたない……!

そこから終始ジェミニストームのペースで試合は続いた。私は常に複数人でマークにつかれています思うように動けない。そしてボールを奪われてはシュートを撃たれ気づけば5点もの失点を許していた。

「クソっ、このままじゃ円堂がもたないぞ……!」

染岡君が悲痛な声を漏らした。守君は何度も相手のシュートを受けてもうボロボロだ。けどそんなことで相手が遠慮してくれるわけもなく、ボールは無慈悲にもゴール前のレーゼに渡った。

「トドメを刺してやる！アストロブレイク!!」

「やらせない!!」

少しでもシュートの威力を削ごうとエネルギーの塊を蹴り込む、けどさすがに必殺技の威力を完全に殺すことはできず吹き飛ばされた。

「く……ダメか!」

「後は私達に任せろ!」

「塔子ちゃん!」

気づけばゴール前で塔子と壁山君がボールの進路を遮っていた。

「ザ・タワー!!」

「ザ・ウォール!!」

二人が形成した塔と壁がシュートを止めようと立ち塞がる。けどボールの威力の方が遙かに上で瞬く間に二つの必殺技は突破されてしまった。でも威力はかなり削げたはず。

「ナイスディフェンスだ! だああああ! マジン・ザ・ハンド!!」



シュートは魔神の手に激突すると徐々に回転が衰え、守君の手の中に収まった。「ほう、止めたか。1寸の虫にも五分の魂」

ボールは守君から一之瀬君、そして染岡君へ。そしてゴール前に豪炎寺君が上がったのを確認するとシュートを放つ。

「ドラゴン——!!」

「トルネード——!!」

染岡君が蹴りあげた龍を追隨させたシュートを豪炎寺君が炎を纏って蹴り落とす。——だけどシュートはゴールの枠を大きく外れてあらぬ方向へ飛んでいった。

「……豪炎寺君が外した?」

シュートが決まらなかったことより豪炎寺君が外したという事実には皆驚いていた。彼がシュートを外すところのなんて初めて見た。未完成の必殺技ならまだしも何度も撃っているドラゴントルネードを外すなんて……。

「どんまいどんまい!次は決めていこうぜ!」

守君が励ましの声をかけるが豪炎寺君の表情は暗い。相手のキーパーのスローで試合が再開される。そこから再び高速のパス回しでボールはどんどんゴール前まで繋がれていく。が、そこで鬼道君が相手のパスの間を縫うようにカットした。

「……な!」

そのプレーに敵味方共に驚愕するがそんなこと気にもとめないように鬼道君はボールを上げる。

「行け！豪炎寺、天川!!」

そこに走り込むのは私と豪炎寺君、私達は炎を纏って飛び上がると同時にボールに蹴り込んだ。

「フアイアトルネードDD!!」

……なにこの感じ!?!ボールを蹴った瞬間、私は違和感を感じた。豪炎寺君……まさかわざと弱く蹴ってる？

当然シユートはまたゴールの外に飛んでいく。豪炎寺君は着地に失敗して地面に叩きつけられた。

「豪炎寺君……大丈夫?」

「ああ、すまない……」

そこで長いホイッスルが鳴り前半が終了した。

アフロくんの不調、様子がおかしい豪炎寺君。そんな不安を抱えながら私達はベンチに戻っていた。

## 反撃開始

「攻撃パターン？」

「ああ、例えばあのミッドフィールダーが中盤でボールを取った時は一度ディフェンスに下げて体勢を立て直す。左のミッドフィールダーがライン際でボールを取った時は後ろのディフェンダーを通して女のミッドフィールダーに戻す」

ベンチにて鬼道君がさっきのパスカットのカラクリを話してくれた。さすが鬼道君、こんなに早く敵の攻撃パターンを見抜くなんて。

「これならいけるな！」

「奴らの攻撃パターンさえ分かればこっちのもんだ！」

突破口が見えてきてきて皆の顔に光が戻ってきた。だけど約2名、その雰囲気に乗れ切れていない人がいた。豪炎寺君とアフロくんだ。

「アフロくん、具合でも悪いの？」

「…そういうわけではないんだ。ただ…力を出し切れないというか…プロトコル・オメガと戦った時には身体の底から力が湧き上がってくるのを感じた…でも今はそれが無い」

確かにあの時のアフロくんは決勝戦の時とは比べ物にならないほど強くなっていた。……いや、それは私も同じ。本来プロトコル・オメガと私達ではどうしようもないくらい力の差があつたはずだ。

私も初めて戦った時はまったく動きについていけなかった。私もアフロくんもプロトコル・オメガと戦った時はなんらかの原因で強くなっていたってこと？でもそうなると私にはなんの変化もないのはおかしいか…。

そんなことを考えていると空に穴が空いてタイムマシンが勢いよく飛び出してきた。フェイトワンダバだ。

「ごめん羽花、遅くなった!」

「ううん、来てくれたんだね。そっちは大丈夫だったの?」

「ああ、あの時空の乱れはザナークがこの時代にタイムジャンプしてきた時に発生したものだ」

「ということではプロトコル・オメガではなかったんだ。安心……とはいかないね。現に別の敵が現れてるわけだから。」

「ん?」

ふと視線を感じて振り向くと守君達一同がこちらを目を丸くして凝視していた。

「そ、空からバスが飛んできたぞ」

「どうなってるっすか!？」

ああ……まあそういう反応になるよね。簡単に説明していたとはいえ、話に聞くのと実際に見るとじやまったく違うだろうし。

「はじめまして、僕はフェイ・ルーン。そしてこっちは……」

「アマカワーズの大監督、クラーク・ワンダバット様だ!ワンダバと呼んでくれ!」

「クマが喋ってる……」

「誰がクマだ!」

「羽花、この2人が……」

「うん、フェイとワンダバ。私と一緒にサッカーを守ってくれたの」

皆に2人のことを紹介しているとタイムマシンからもう一人褐色肌の少年が降りてきた。……誰だろう?知らない人だ。

「フェイ、この人は?」

「紹介するよ。ゴッドエデンで知り合ったシユウだ」

「よろしく」

話を聞くと彼のいたゴッドエデンはザナークにめちやくちやにされてしまったらしい。で、その仇討ちをしに来たってわけだ。

「あの時の奴か。くく、まあ雑魚が何人集まろうが結果は同じだな」

あっち側のベンチは特に作戦を立てるわけでもなく後半開始を待っていた。その余裕ぶりに少しだけ苛立ってしまふ。

「くううう……」

「守君? どうしたの?」

「だってサツカーを守るためにこんなに仲間が来てくれたんだぜ! 俺、感動した!」

涙を浮かべながら歓喜する守君。その様子を見た皆からも自然と笑みが零れた。

「監督、選手交代をお願いします」

「わかったわ。染岡君、あなたは下がって。まだ怪我が完治していないでしょう?」

「…気づいてたか」

「それから……豪炎寺君、あなたにもベンチに下がってもらいます」

「「ええ!」」

確かに豪炎寺君はどこか様子がおかしいけど……だとしてもエースストライカーを下げるなんて……。

「待ってください! 豪炎寺は雷門のエースストライカーなんですよ! なんて豪炎寺を下げるんですか!」

「今の彼では戦力にならない……それだけのことよ」

「しかし……! 豪炎寺?」

監督の言葉に反論しようとした風丸君の肩に豪炎寺君がそつと手を置いた。そしてゆつくりと顔を横に振る。

「それと、ジェミニストームの弱点を伝えるわ。……スピードよ」

「スピード?…スピードが弱点ってどういうことですか?」

スピードが弱点?彼らのスピードはむしろ長所だと思っただけ…。結局監督がその答えを教えてくれる前に笛が鳴り、後半が始まった。

豪炎寺君と染岡君のポジションにそれぞれフェイとシユウ君が入り試合が再開される。

ボールを持ったフェイは軽やかにジャンプして敵陣に攻め込んでいく。

「やるじゃねえかあいつ!」

一気にゴール前まで到達した彼はそのままシュート体勢に入った。

「バウンサーラビット!!」

地面に何度も跳ねるシュート。それはジェミニストームゴールへと進んでいく。

「ブラックホール!!」

相手のキーパーが腕を前に突き出したかと思うとそこに黒い渦のようなものが発生。フェイのシュートはそれに吸い込まれて威力が完全に消滅してしまった。

「く、決まらないか…」

ボールは前線に送られる。そこから再び高速でパスが回される。しかし前半との違いは攻撃パターンがあることを理解していること。そこを突いて一之瀬君がパスをカットした。

「天川!」

「OK!」

彼からパスを受け取った私は目の前のディフェンダーの頭上に飛び上がりかわした。するとまた別のディフェンダーが猛スピードで突っ込んできた。

「ビビッドステップ!!」

必殺技でかわすと相手は勢いに耐えられずザザつとアスファルトの上を滑った。

ん?今のつて……。

「行かせるか!」

さっきの人にも負けない速度でレーゼが取ろうとしてきた。私はそれに対し身体とボールを少し移動させることで回避した。

「なに!?!」

それに対応できずレーゼは私の横を通り過ぎていく。アスファルトを擦って急ブレーキでもかけたような音が聞こえてきた。

やっぱりそうだ、彼ら自分のスピードを制御できてないんだ。だからさつきみたいに



タイミングを見てボールを動かしてやれば簡単にかわせる。

スピードが弱点っていうのはこういうことだったんだね。多分ザナークとミキシマックスしたことが原因だ。強くなったのはいいけど本人達がその力を扱いきれてない。

鬼道君の方をチラツと見ると彼は頷いた。どうやら気づいたみたいだ。

「鬼道君！」

「皆！ダイレクトのショートパスでボールを繋ぐんだ！行くぞー！」

鬼道君の号令でボールは彼からアフロくん、一之瀬君、私へとどんどん移り変わっていく。絶え間なくボールの位置が変わっていくのでジエミニストームはその動きに着いてこれない。

あつという間にボールは前線のフェイ、そしてシュウ君へ。

「ブラックアツシュ!!」

シュウ君が黒色のオーラを纏ったと思うと、ボールにも同じ現象が起こる。そうして黒い塊と化したボールをシュウ君が蹴りつける。

放たれたシュートが着弾すると同時にゴールが暗黒に包まれた。時間が経つにつれてゆつくりとそれが晴れると、私達の視界に入ったのはゴールに突き刺さったボールだった。

『ゴオオオオル!! シュウの必殺技で雷門が1点を返しました!』

わあお、すごいシュートだ。正直彼の実力に不安があったんだけどとんでもない。さすがフェイが連れてきただけのことはあるね。

「ナイスシュート」

「ああ、ありがとう」

点を決めたというのにシュウ君はクールだった。なんかかっこいいな。

「いいシュートだったぞシュウ! 皆、今度は俺達の番だ! 点とつてこうぜ!」

「「おう!!」」

さあ、ここからが本番だ。試合が再開されレーゼが単身攻めてくる。それに対して私は飛び上がり背後に紅い月を出現させた。そしてそれを不気味に輝かせ、急降下してボールを奪い取る。

「ヴァーミリオンドロップ!!」

スライディングでレーゼを振り飛ばすとそのままフェイにパス。彼はボールを持って飛び上がるとまるで見えない床でもあるかのように空中を何度も飛び跳ねる。

「スカイウオーク!!」

そうして一気にペナルティエリア内に侵入した彼はキーパーと対峙する。

「ミキシトランステイラノ!! 古代の牙!!」

テイラノの力を解放したフエイ。彼の背後に巨大な恐竜が出現し、バク転と共にボールを蹴りつける。恐竜の咆哮が聞こえ、ボールジェミニストームのゴールを強襲する。「ブラックホール!!……うぐあああ!」

黒い渦は恐竜のパワーには適わずキーパーの顔面を弾いてゴールへとねじ込んだ。

「バカな……!?!」

「ふふん、雷門を舐めてるからだよ!」

「く……絶対に許さん!潰す!」

明らかにイラついている様子のレーゼ、しかしベンチからザナークの舌打ちが聞こえてくるとその顔は青白く固まってしまった。見渡すとチーム全員同じ様子だ。額から嫌な汗を流している。そんな状態で巻き返すことなどできるはずもなく、試合はそこから私達のペースで進んでいく。

「イリユージョンボール改!!」

鬼道君がボールを踏みつける。するとボールがいくつつにも分身して相手を惑わす。その隙に突破した鬼道君はこちらを見てアイコンタクトを送ってきた。……なるほどね。私がある場で思いつき飛び上がると彼はボールを上蹴り上げる。空中でそれを受け取った私は地面を見下ろしながら身を翻しボールをオーバーベッドで蹴り落とす。

「ムーンフォースラビットG4!!」

シュートした私の背後には黄緑色の月が現れる。私が蹴り落としたボールはいくつもの星屑となりゴールへと進んでいく。

「ブラックホール!!」

キーパーが黒い渦を発生させるけど星屑はそれに吸い寄せられつつも勢いは失わず彼を吹っ飛ばした。

『ゴオオオル!天川のシュートが炸裂!雷門3点目!』

なおも私達の攻撃は続く、試合再開早々にボールを奪い取り攻め上がる。

「シューウ!」

「ああ!」

アフロくんからシューウ君へのパス、連続して失点していることに同様しているからかジェミニストームの反応が遅れた。彼はその間にぐんぐん進むとペナルティエリア内に侵入する。

そこでシュート体勢に入る。だけどさっきの技とは違い、彼の背後に巨大な斧を持った黒い魔王が現れた。

「暗黒神ダークエクソダス!!」

「化身!」

「なんだあれ!？」

シウウ君が出現させたのはなんと化身だった。初めて化身を見た皆はもちろん、私もアルファ以外の化身使いを初めて見たので驚愕した。

「魔王の斧!!」

だけどそんなことどうでもいいと言わんばかりにシウウ君はシュートに移る。シウウ君がかかと落としてボールを蹴り落とすと魔王がその斧で追撃する。ボールは紫色のオーラと共に地面を抉りながら突き進む。

「ブラック……ぐおおおー!」

そのシュートに対しキーパーは無力だった。あつさり吹き飛ばしゴールネットを揺らす。

これであと1点で同点だ。

「奴らの力が我々を上回るといえるのか? そんなことが……有り得るかアア!!」

試合が再開されるとレーゼが単身突っ込んできた。彼はこれまで以上のスピードで駆け上がってくる。確かに彼らはあまりのスピードに小回りがききにくくなっているけど直線で突っ込んでくるならそんなの関係ない。

「アストロオオブレイクV2!!」

一瞬でゴール前に到達したレーゼがシュートを放つ。さっきよりも強力になったそ

れの前に壁山君と塔子ちゃんが立ち塞がる。

「ザ・タワー!!」

「ザ・ウォール!!」

2人が出現させたのは壁と塔。しかしそれは放たれたシユートを止めるほどの強度は無くしばらくの後粉碎された。

「俺だって……!」

守君はなおも強襲するシユートに対して背を向けてエネルギーを貯めるのではなく、手を前に向ける。すると心臓から気が飛びだし守君の周りを回転して右手に宿る。

「だああああ!マジン・ザ・ハンド改!!」

魔神の右手がシユートと激突する。一瞬で吹き飛ばされてしまった試合開始直後とは違い拮抗している。しかし次第にシユートが押すようになりついには魔神の消えってしまった。

「クソ……!」

「まだまだ!!」

ゴールかと思われたがいつの間にか戻っていた一之瀬君と土門君が左右から同時に蹴りつけた。3つの必殺技で威力が激減していたシユートは徐々に威力を失い弾かれる。

「悪い…2人共」

「へへ、いいってことよ」

弾かれたボールは一之瀬君が拾った。

すると彼はそのまま走り出す。そこに守君と土門君も続いた。ザ・フェニックスの構えだ。

でもあそこは……!?

「ゴール前から撃つつもり!」

「そういうことか……天川、アフロデー! ついてこい!」

そう言つて鬼道君が走り出した。

アフロくんも意図を理解したのかそれに続く。……そういうことね!

私はその意味を察して走り出した時には既に上空に不死鳥が現れていた。

「ザ・フェニックス!!」

3人により押し出された不死鳥はゴール——否、私達に向かつてくる。

「行くぞ!! 皇帝ペンギン——!!」

「2号!!」

シユートチェインだ。鬼道君がペンギンを呼び出し、ちやうど彼の足元に来たシユートをさらに蹴りこみ加速させる。それにペンギンも追従し、炎とペンギンのシユートに

私とアフロくんがダメ押しの一蹴を入れる。

2つのシュートの相乗効果によって凄まじく勢いを増したシュートは、そのままゴールキーパーごとゴールネットを揺さぶった。

『ゴオオオール!!雷門5点目!同点です!』

「いいシュートだったぜ!鬼道、羽花、アフロディ!」

「守君達もナイスシュート!でもいきなりゴール前から撃ってきた時はびっくりしたよ」

「君達なら俺達の意図をわかってくれると信じてたからさ」

同点に追いついたことを喜び合う私達。それとは対極にあっち側のベンチには重苦しい空気が流れていた。

「こんな……ことが……」

「…力を与えてやってもこの程度とは、所詮雑魚は雑魚というわけか」

「お待ちくださいザナーク様!我々はまだ……!」

「まだやれるってか?こんな醜態を晒しておいてよくそんな口が聞けるもんだぜ。………!そうだ、くつくつく……!いいことを思いついたぜ」

ザナークがベンチから立ち上がりライン際まで歩いてくる。そして身構えたかと思うと



「かあああああ!!」

口から緑色のビームのようなものが飛び出してきた。それはジェミニストームのメ  
ンバーへと吸い込まれていく。

「……!?何を!」

「まさか……更に力を送り込んでいるのか!」

ベンチから聞こえてくるワンダバの声に驚愕する。ただでさえ強化されてるのに更に強くなるっていうの?

「ぐ……がアアアアア!!」

そのビームの余波で突風が巻き起こり、私達は飛ばされないようにと踏ん張った。

そして、爆発が起こった。

砂煙が巻き起こり、辺り一面が砂景色に覆われる。突然のことに思わず目を瞑った。そのまましばらく静寂が流れ、数十秒後には砂煙が徐々に晴れ相手のフィールドが見えてきた。

「おい……なんだよアレ」

「あれが……ジェミニストーム?」

「がああああ……あゝあゝあゝ」

そこにいたのは、白目を剥いて獣のように唸るジェミニストームだった。

## 共鳴現象

「が…がアアアあゝあゝあゝ」

ザナークによって更に力を注ぎ込まれたジエミニストーム。彼らは獣のような呻き声をあげて苦しんでいた。

「無茶だ！あんなに大量のオーラを一度に与えたら身体がボロボロになる！」

「こいつらがどうなるうが知ったこつちやねえ！さあお前ら！たつぷり遊んでやりな！」

ザナークの号令でジエミニストームの選手達が一斉に押し寄せてくる。そのスピードはさつきまでの比ではない。まさに猪のごとく突進してくる彼らに誰も反応することができない。

ボールを持っているレーゼにもう一人ミッドフィールダーが追いつく。彼らはボールを同時に宙に蹴り出す。するとボールはワームホールのような空間に到達し、それを二人が同時に蹴り落とした。

「ユニバースブラストオゝオゝオゝ！！」

ワームホールがゴムのように伸び、ボールにまとわりつく。それがシュートとなり雷門ゴールを襲う。

「ザ・タワー!!」

「ザ・ウォール!!」

「マジン・ザ・ハンド改!!」

無抵抗のままやられる訳にはいかないと三人が必殺技を発動させる。でもシュートの威力はさつきまでとは桁違いにパワーアップしていた。塔と壁は一瞬で粉々に吹き飛ばされ、その後ろの魔神の手もあっけなく押し返されてしまった。そのままボールは守君ごとゴールネットを揺らした。

『ゴオオオール!! ジェミニストームが雷門を再び引き離しました!!』

「なんてパワーなんだ……さつきまでとはまるで違う」

「守君……大丈夫?」

「あ、ああ平気だ。ごめん、止めれなくて」

そう言っただけで立ち上がるが彼の足はフラフラだ。もう一度さつきのシュートをくらったら大怪我を負ってしまうかもしれない。守君に負担をかけさせないためにも守りを強化したいところだけど……それじゃあ勝てない。

「鬼道君、どうする?」

「守備の人数を増やさなければあの攻撃は防げない。だがそれでは……」

「点を取る事ができない……か、まさに八方塞がりだね」

前の方で鬼道君がとアフロくんが話し合ってるけどあの様子だとともに改善案は出ないだろう。それでも時間は待つてくれない、すぐに試合再開となった。

私がボールを蹴り、それをフェイが受け取る。とにかく同点に追いつかないと……そう思い走り出そうとしたその時――

「ぐ………ぐアアアアアア、ア、ア、ア、!!」

「……!?!……これは……?」

ジエミニストームの選手達がいきなり雄叫びをあげて苦しみだした。そして一人、二人と倒れていく。彼らの口からは赤い液体が流れ出ていて、水たまりを作っていた。

「反動だよ。あれだけの力を一気に注ぎ込まれたら、当然こうなる」

「でも………これはあまりにも………」

相手は敵だとはいえ、さすがにこの惨状には動揺を隠せないでいた。こんな……サツカーじゃ……

「なにしてる! 敵は動けない、一気に攻めるぞ!」

私の横をシユウ君が通り過ぎて行った。彼はパスをよこせと言わんばかりに視線で

訴えてくる。

「え？だけど……」

「遊びじゃないんだ！敵に同情なんかするな！」

確かにそうだ、これは遊びじゃない。私達に世界の運命がかかっている。……だから、今は戦わなきゃ。

彼の発破に覚悟を決め、ボールを蹴って攻め上がる。相手は全員倒れているので当然私を阻む者は誰もいない。動かない選手達の横を駆け抜け一気にゴールまで辿り着く。そしてシュート、なんてことのない普通のシュートだけどそれは防ぐ者がいなくなったゴールに吸い込まれていった。

そしてネットが揺れる。

……これで同点、だけどこんなに煮え切らない得点は初めてだ。

「ナイスシュート」

「……うん、ありがとう」

モヤモヤを抱えたまま私は自陣まで戻った。ジェミニストームのキックオフで試合再開だけどまだ彼らは倒れたままだ。

「ち、使えねえ奴らだ。役立たずが」

ザナークの舌打ちが聞こえてベンチの方に目を向ける。彼はいつの間にか用意して

いたバイクのような乗り物にまたがると、私達に指さしてきた。

「次会う時は俺様が直々に遊んでやる。楽しみにしておくんだな」

それだけ言うのと彼を乗せたバイクが走り出し穴の中に消えてしまった。程なくしてフィールドとその周りのバリアのようなものも消えていった。

「勝った………つてことでもいいのかな？」

「一応はな……」

得点自体は同点だけど相手が誰一人として動けないのでこの試合は私達の勝利となった。だけどこんな形で勝っても嬉しくない。利用するだけ利用しておいてあっさり切り捨てるなんて……。

その瞬間、突然フィールドに紫色の光が放たれた。そこには長身の男性が立っている。

「無様だなレーゼ。弄ばれた挙句に敗北するとは」

「デ……デザーム………様」

「覚悟はできているな？お前達を追放する」

デザームと呼ばれた男が足元にあった黒いボールをジェミニストーム達に向けて蹴り込んだ。ボールが光を発してフィールドを包み込む。それが収まった時にはジェミ

ニストームの姿はどこにもなかった。

「雷門イレブンよ。私はエイリア学園ファーストランクチーム、イプシロンのキャプテン、デザームだ」

ファーストランクチーム？……エイリア学園にはジェミニストーム以外にもチームがあつたつてこと？それにあの口ぶりから察するに彼はレーゼよりも立場が上……なのかな？

「貴様らは思い知ることになるだろう。エイリア学園の真の恐ろしさを」

そう言い残して彼は消えてしまった。残された私達はただ動揺するだけだった。

「イプシロン……エイリア学園との戦いはまだ終わつてないのか……」

みんなの考えを代弁するように守君が呟いた。形はどうあれジェミニストームを倒してひとまず一件落着つて思つてたところにさらなる敵の出現。

みんな相当堪えてるだろうね。

特にお父さんを誘拐されてる塔子ちゃんは……

そんな不安を抱きつつ、私達はキャラバンの中へと戻つて行つた。



ジェミニストームとの試合の後、私達はキャラバンで一旦奈良シカ公園へと戻っていた。

「それじゃあ改めて自己紹介するね。僕はフェイ・ルーン、200年後の未来から来た。変えられてしまった時間を戻すために」

「そして私がワンダバだ！諸君、困ったことがあつたらいつでもこの大監督！ワンダバ様に言うといい！」

シカ公園の広場で、フェイとワンダバが改めて今回の出来事について解説してくれている。私の説明だけじゃみんな理解しきれないだろうからね。

「それで、結局どういうことなんだよ。未来とかなんとか言われてもイマイチピンとこないんだよな」

そう問いかけたのは染岡君。他のみんなも彼と同じ考えなようで一斉にフェイ達を見つめた。

「それを今から説明するよ。まずは……」

「ほっほっほっ、それはわしが解説しよう」

突然後ろの方から声がした。振り返るとそこには黄色い髪のおじいさんが立っていた。その人はこちらにゆっくりと歩いてくる。

「アルノ博士!?!どうしてここに?」



「エルドラドの手が迫ったものでな。チヨイと逃げてきたのじやよ」

「誰だ？」

「さあ？」

「紹介しよう！この御方こそ多重時間理論の第一人者にして、タイムマシンの開発者！クロスワード・アルノ博士だ！」

テツテレー…みたいな効果音の付きそうな自己紹介にみんな固まっていた。まあ要するにフエイとワンダバを私達の時代に送った人みたいだ。アルノ博士はシカ公園にあった巨大モニターを使って事の顛末を話してくれた。だいたいは前にフエイが私に言ったことと同じだった。未来のエルドラドっていう組織がセカンドステージチルドレンを消すためにサッカーの歴史を変えようとしていることと、パラレルワールドやインタラプトのことだ。

「——という訳じゃ、わかったかな？」

「なるほど…そういうことか」

「何がなんだか…」

「さっぱりっス…」

「つまり私達はエルドラドを倒してサッカーを守ればいいんだよ。ね？フエイ」

「ああ、今はその認識でいてくれれば大丈夫だよ」

鬼道君なんかは割と理解してくれたみたいだけど春奈ちゃんや壁山君の1年生組は全然飲み込めてないようだ。まあしようがないけどね。

「でもアルノ博士、なぜエルドラドはプロトコル・オメガではなく犯罪者のザナークを使っただけでしょう？」

「うむ、実は今エルドラドはセカンドステージチルドレンから攻撃を受けておつてな。その対処にプロトコル・オメガは手一杯なのじゃ。大方、ザナークの罪を帳消しにする代わりに雷門を潰すよう取引でもしたんじゃないだろう」

プロトコル・オメガになんの動きもないのはそういうことだったんだね。それにあのザナークって人は犯罪者だったんだ……。だいぶヤバいのも関わってきたみたいだね。

「アルノ博士、一ついいですか？」

みんながある程度話を理解してきた時、アフロくんがそつと手を挙げてアルノ博士に質問した。

「僕はプロトコル・オメガと戦っている時に身体から湧き出てくる力のようなものを感じました。しかしさっきの試合ではその感じが無かった。この力が一体なんなのか？ あなたならわかるのでは？」

「あ、それ私もありました！ なんだか身体が軽かったというか……」

アルノ博士は私達は二人をじつと見つめると、うむつと頷きモニターに新しい映像を

映した。

「それは恐らくパラレルワールドの共鳴現象じゃ。歴史が変えられた直後は複数のパラレルワールドに複数のアフロデイ君が存在した。その複数のアフロデイ君が共鳴することで力を高めることができたのじゃ。しかし歴史を修復したことでパラレルワールドは消失し、共鳴現象も起きなくなった、という訳じゃな」

なるほど……アフロくんや私がプロトコル・オメガとの試合で急激にパワーアップしたのはそういう……あれ？でもアフロくんの力は元に戻ったけど私は……。

「でも私は共鳴現象が起きなくなっても変化がないです。むしろ最初のプロトコル・オメガとの試合の時よりも更に力が出てくるような……」

「うむ、それはお主のパワーアップがパラレルワールドの共鳴現象とは無関係だからじゃ。羽花ちゃん、お主は何故か歴史変更の影響を受けない。雷門サッカー部が消えた時もお主だけ元の記憶を持っていたようにな。原因はわからないが、要するにお主には歴史変更もパラレルワールドの共鳴現象も意味をなさない訳じゃ」

「……それじゃあ私のあの力はいつたい……」

「それは………わしにもわからん！」

アルノ博士は真剣な顔つきから一転、とぼけた顔になってしまった。その落差に私達は揃ってずっこけた。

「わしは時空の理論には強くてもサツカーはてんで素人。共鳴現象でないのならお主のパワーアップの原因などこれっぽちもわからんよ。見学も終わったことだし、わしはこれで」

いつの間にかアルノ博士の姿は消えていた。ワンダバは忙しい人だからしょうがないとか言ってたけどあの人追われてるだよな？

……それにしても共鳴現象じゃないなら私はいったい……特訓の成果ってわけでもなさそうだし……

「みんな聞いて欲しい。エルドラドやエイリア学園と戦うには今の僕達では力不足だ。だから特訓をもっと力をつけなきゃいけない」

「おお、いいな！エルドラド……とかはよくわかんないけど、イプシロンを倒すためにも特訓だ！いいですね？監督」

「構わないわ。今現在、エイリア学園による襲撃予告は出ていないようだし。それとフェイ君、さっきの話を後でもっと詳しく教えてくれるかしら？」

フェイの提案に守君が食らいつくように答えた。というか瞳子監督ずっとポーカーフェイスを保ったままだったけど、あの様子だと頑張つて理解しようとしてたんだろな。

「だが生半可な特訓では奴らには勝てないだろう。何か特別な方法でない」と

鬼道君がそういうとみんな考え込んでしまった。確かにジエミニストームであれならイプシロンはもつと強いはず。それにいずれまたプロトコル・オメガと戦うなら今よりはるかに強くならないとダメだ。

一同がそれぞれ思考をめぐらせていると、シユウ君が口を開いた。

「それならゴッドエデンを使うといい。僕はあの自然の中で特訓して力をつけたんだ。あそこなら君達の実力を今以上に高めることができる」

「でもいいの？あまり余所者は入れたくないんじゃないや…」

「君達には借りがあるからね。今回は特別さ」

私達の次の行動はゴッドエデンでの特訓に決まった。無人島で特訓か………なんだから面白いことになりそうだね。

## 強さの価値

「豪炎寺君、あなたにはチームを離れてもらいます」

今後の方針も決まったところで、瞳子監督が発したその言葉。それを瞬時に理解できる人はこの場にはいなかった。

「今なんて言ったつスか？ 離れろとかなんとか…」

「監督、どういうことですか？」

「私のチームに豪炎寺君は必要ない。それだけのことよ」

「それじゃ答えに……おい豪炎寺！」

何も言わずに去ってしまった豪炎寺君を守君が追いかける。そこでようやく現実を認識した私は思わず監督に詰め寄った。

「今日の試合でミスをしたからですか？ それにしたっていきなり追い出すなんてやりすぎです！」

「天川の言う通りです！ それに豪炎寺は雷門のエースストライカー、豪炎寺無しではエイリア学園には……！」

「私の使命は地上最強のチームを作ること、そのチームに彼は必要ないわ」

「だからそれじゃあ答えになつてないです！せめて具体的な理由を説明してください！私には豪炎寺君が必要ないなんて思えません！」

「説明する必要はないわ」

強引に話を切られて私達は絶句するしかなかった。染岡君はそれでも監督に食つてかかつたけど監督の答えは変わらず堂々巡りが続いた。そして数十分経つた頃に守君が戻つてきた。

「守君、豪炎寺君は？」

「……行つちまつた」

「お前……なんで止めなかつたんだよ！」

「俺だつて止めたかつたさ。でも、あいつの顔を見てたら……できなかつた」

悔しそうに話す守君の顔を見て、私達は何も言えなくなつてしまった。

「でも、豪炎寺は必ず戻ってくる！俺はそう信じてる！」

それは笑顔にしてはあまりに歪なものだった。守君だつて本当は不安なんだ。新たな敵に今までチームを引つ張つていた相棒とも言えるストライカーの離脱。

だけどキャプテンとしてそれを表に出すわけにはいかない。そんな使命感が彼の中にはあるのだと思う。

チームに不穏な空気が流れる中、誰かの携帯が鳴つた。

塔子ちゃんだ。

「もしもし、スミス?……え!? パパが見つかった!」

◆◆◆◆

時は少し遡り雷門 v s 世字子の決勝戦翌日。

辺り一面の雪景色、その中に佇む学校があった。

北海道、白恋中学。特に秀でた特徴がある訳でもない普通の学校。サッカー部に関してもやっと活動できている程度の弱小チームだ。

だがそんなチームに一人、全国でもトップクラスの实力を持つ選手がいた。

——吹雪士郎——

『ブリザード』 『熊殺し』 『雪原のプリンス』

様々な異名で呼称される彼だがその實力を生で見た者は少ない。それは彼が公式戦に参加しないからであり、故に彼の實力は噂程度で囁かれるものだった。

そんな彼を有する白恋中学サッカー部はその日より一層練習に励んでいた。そのきっかけはフットボールフロンティア決勝、雷門中 v s 世字子中の試合をテレビで見たからだ。サッカープレイヤーならばあの熱戦を見て興奮しない者はいない。



「あ、ごめん吹雪君」

「どんまいどんまい、気にしないでいこうよ」

パスマイスをした荒谷に優しげに声をかける吹雪。噂ばかりが先行して怖いイメージを持たれることもある彼だが本来は物腰柔らかな優しい少年であった。和やかなムードに包まれる中、風を切る音と空気を裂いて飛来する何かを彼は直感的に感じ取った。

冷気を纏ったボール。

自らの頭部めがけて飛んでくるそれを、彼はオーバーヘッドキックで蹴り返した。

それは先程荒谷がフィールド外に飛ばしたボール。

半ば直感で蹴ったので加減ができずにかかなりの威力で蹴り返されたボールは、その先にいる人物によって軽くトラップされ足元に落ちる。

「さすがは吹雪士郎。今のを蹴り返すとはやるじゃないか」

グラウンドの外からパチパチと拍手をしながら少年がボールを蹴りつつ歩いてくる。白髪に赤色のベストのような服を身に纏った少年は遠慮する様子もなくフィールド内へと侵入した。

「君は誰だい？いきなりボールを蹴ってくるなんて関心しないな」

「俺はユウチ。吹雪士郎、俺と勝負しないか？」

ユウチと名乗った少年を吹雪は冷ややかに睨みつける。さっきのボール、自分以外に

飛んできていたら大怪我は免れなかっただろう。しかも蹴った本人はそれを気に止めないでいきなり勝負しようなどと挑発してくる。彼が怒るのも当然だった。

「勝負？何の勝負かな？」

「もちろんサッカーだ。俺とお前でボールを奪い合って先にゴールを決めた方が勝ち、どうだ？」

いきなりボールを蹴り込んでくるような見知らぬ少年からの申し出など受けるはずがない。そもそもこちらにメリットが皆無だ。そう判断した吹雪はその勝負を断ろうとする。が、それに待ったをかける人物がいた。彼の中のもう一人の彼だ。

（なんか面白そうじゃねえか。やろうぜ士郎、あいつなかなか強そうだぜ？）

「……アツヤ」

瞬間、彼がマフラーに触れると周囲を雪風が覆った。彼の姿は豪雪に消え、徐々にそれが晴れていくとガラリーと雰囲気の変わった彼の姿があった。

「いいぜ、その勝負受けてやる」

さつきまでのとろんとした目とは真逆の鋭い眼光でユウチを睨み彼は言った。それを聞いたユウチは満足したように不気味に笑いボールを吹雪に渡した。

「まずはお前の攻撃からだ。始めようか」

「へ、上等だ。後悔すんなよ」

ゴール前に立ったユウチを見据えると、吹雪はセンターサークルからドリブルを開始した。全国クラスの速度から繰り出されるドリブルでぐんぐんゴールに迫っていく。

「……………あの入動かないよ!?!」

「どういうつもりだ……………」

フィールドの外に移動していた白恋イレブンから驚きの声があがる。ユウチは未だに涼しい顔でゴール前に立っていた。

「舐めやがって……………これでもくらいやがれ!」

吹雪がボールを足で掴んで回転をかける。すると冷気がどんどん集中していきボールは氷の塊となり宙に投げられた。

「吹き荒れる……………エターナルブリザード!!」

回転しながら遠心力を利用しボールを蹴りつける。氷塊は吹雪を纏いながらゴールを、そしてゴール前のユウチを狙い迫っていく。

辺りを凍てつかせる程の強力なシュート。その場にいた誰もが決まったと思った。しかしすぐにそれは間違いだったと思ひ知らされる。

ユウチは迫り来る氷塊に一切怯むことなく、少し飛び上がり、軽くトラップでもするかのようにシュートを胸で受け止める。進路を阻まれたエターナルブリザードは完全

に威力を削がれてユウチの足元にこぼれ落ちた。

「な!?!」

「吹雪君のエターナルブリザードが!?!」

「あんなに簡単に……」

その光景に白恋イレブン、そして吹雪本人の口からも驚愕の声が漏れる。一度として止められたことのない技をこうもあっさり止められ、吹雪は動揺を隠せない。

「こんなものか? もっと楽しませてくれよ」

挑発的に笑うユウチ。それに苛立ちを覚えた吹雪だが、すぐに守備のために自陣のゴール前まで戻って行った。そこに到達した頃には、彼は元の雰囲気が変わる前の姿に戻っていた。

身構える吹雪、するとユウチはゴール前からドリブルで進むのではなくシユート体勢に入った。

「……!?!」

ユウチの背後に凍てつく冷気を纏ったような鋭い視線の女王が現れる。フィールドを覆い尽くすような吹雪が吹き荒れ、極寒の冷気がボールに凝縮されていく。それはエターナルブリザードの比ではなかった。

「アイシクルロード!?!」

ゴール前から反対側のゴールへ、大地を凍てつかせながら豪雪の氷塊が突き進む。その超が付く程のロングシュートは全く勢いを衰えさせることなく吹雪を巻き込みながらゴールに突き刺さった。

そのあまりの光景に白恋イレブンは動くことができない。しかし数秒後我に返ったように吹雪の元へと駆け寄った。

「吹雪君！大丈夫!？」

「……ああ……平気だよ、……うう」

チームメイトに支えられなんとか立ち上がった吹雪、辛うじて意識こそ保っているものの身体はボロボロになっていた。

「どうだ？己の無力さを感じてもらえたか？」

吹雪を見下ろしながらユウチがほくそ笑む。怯えながらも睨みつけてくる白恋イレブンの面々を無視し、彼は吹雪にある提案をする。

「俺がお前を強くしてやる。もちろん拒否はしないよな？」

唐突なその提案に一同は困惑の表情を浮かべた。

「君の……目的は……？」

途切れ途切れな吹雪の言葉にユウチは微笑を浮かべながら答えた。

「俺達の未来のためさ」



塔子ちゃんの携帯に入った連絡はお父さん、つまり総理が見つかったというものだった。そのためゴットエデンの前にTMキャラバンで国会議事堂へと向かった。塔子ちゃんは無事にお父さんと再開して、正式に雷門イレブンへと加わった。

ちなみに時間移動はしていないとはいえ初めてのタイムマシンにみんな驚いたり、興味津々に楽しんだり様々だった。そしてたどり着いた先は無人島、だけど島の半分は地面が抉れたり木がなぎ倒されたりめっちゃくちゃになっていた。

「これは……酷いな」

「ザナークの仕業だよ」

TMキャラバンは廃墟のような建物の跡がある場所に降り立った。そこはザナークの被害を回避することができたのか比較的綺麗に残っていた。

「ここは僕にとつても特別な場所だからね。ここだけは必死に守ったんだ」

シユウ君はそう言うのと、大きな木の下にあったお地藏様のようなものを見つめた。

「これは……」

「この島に伝わるサッカーの神様だよ」

確かにそのの頭にはサッカーボールのような球体が乗っていた。私はなんだか可愛く思えてきてその頭を優しく撫でた。

「それじゃあ特訓を始めようか。この島の自然を使えば、君達は格段に強くなれるよ」

シユウ君の指示の元で特訓が始まった。だけどその特訓はきついなんてものじゃなかった。激しい激流をタイヤに乗って下ったり、池に生えている大きな蓮の葉の上を落ちないように飛んでいたり、砂丘を木の板で滑り降りたりだ。

島のあちこちから悲鳴が聞こえてくる。私はそれを聞きながらシユウ君に連れられてみんなとは違う場所に移動していた。

「君はチームの中でも身体能力がずば抜けて高いみたいだからね。特別にここで特訓してもらおうよ」

私達の目の前には高さ100mはありそうな崖がそびえ立っていた。

「……まさか……これ？」

「そう、岩がとび出てる場所があるだろ？そこを使ってジャンプで登ってもらう。手を使ったらダメだよ」

いやこれめっちゃくちゃ高いけど……落ちたら普通に死ぬるんじゃない？

「とにかくやってみるよ。ほらー！」

シユウ君はとび出てる岩を見極めてどんどん登っていく。私はしばらくそれを眺め

ていたけど覚悟を決めて彼に続いた。

「うわあ！たか！」

半分くらい登ったところで下を見たら木々が米粒のように小さく見えた。さすがにここまで高いところまで来たことはないので完全に萎縮してしまった。

「大丈夫！落ち着いて岩の形を見極めれば登りきれよ」

いつの間にか上に到達していたシユウ君が私にアドバイスをくれた。それを聞いて頭の中で右、左とルートを見定めてどンドン登る。そして数分後に遂に頂上にたどり着いた。

「……ハア……死ぬかと思った」

「すごいね、一回目で登りきれるとは思わなかったよ」

「シユウ君は毎日こんな特訓をしてるの？」

「……まあね」

崖から海を見つめる彼の目は酷く寂しそうに思えた。彼をじっと見ていると視線に気づいたのかこちらを振りむいた。

「ねえ、君はなんでサッカーを守ろうと思うの？こんなに大変な思いをしてまで……」

「え？……うくん、色々あるけど……やっぱりサッカーが好きだからかな」

「サッカーが好き……か。やっぱり君は面白いね」



「シユウ君は違うの?」

私がそう聞くとシユウ君は顔をしかめて黙ってしまった。数秒の沈黙の後、再び海を見つめて彼は口を開いた。

「この島では昔からサッカーで全てを決めていたんだ。ある干ばつの年に村を救う為に神への生贄を誰にするか、サッカーで決めることになった。負けた方に属する少女を生贄にする、それがルールだった。片方の少女には兄がいた。彼はどうしても妹を救いたかったんだ。だから対戦相手に自分に有利な戦いをするように約束させた、こつそりお札を渡してね。でも、それは結局バレてしまつて……妹は生贄にされた。彼は妹を守ることができなかつた……勝つ自信と、戦う勇気さえあれば……あんなことは……!」

シユウ君はそこまで話すと歯ぎしりをして拳を握りしめた。その様子には違和感を覚えた。昔話をするように話していたけど……もしかして……。

「その男の人って……シユウ君のこと?」

「……どうしてもそう思うの?」

「なんとなく……シユウ君、悲しそうな顔してたから」

「……この島はサッカーに呪われているんだ、いやもう手遅れだ。サッカーは強くないと何の意味もない。何も守れないんだ……」

「……確かにそれもあるかもしれないけど、サッカーは楽しいものだよ?」

シユウ君の言葉にそう返すけど、彼は海を見つめたまま立ち上がると

「……………楽しくても意味が無い……………強くなければ価値がないんだよ」

そう言ってその場を立ち去っていくシユウ君。私はその背中を見つめながらその場に座っていた。それからしばらく、彼の言葉が頭から離れなかった。

## 究極奥義

夜、私は寝つけないでいた。特訓で疲れているはずなのにいくら目を瞑っても夢の世界に入る事ができない。

さっきのシユウ君の言葉が頭の中で何度も再生されている。

サッカーは強くないと意味が無い……それは別に間違つてないと思う。サッカーをやつて一番の喜びは試合で勝つこと、試合に勝つためには相手よりも強くなければいけない。

だけどサッカーはそれだけじゃない。みんなと練習している時だつてすごく楽しい時間だ。

……でも、今はそんなことを言っている場合じゃない。エイリア学園やエルドラドを倒すためにはもつと強くなければならない。楽しいかどうかは二の次だ。

……結局シユウ君の言う通りなのかもしれないな。

……ダメだ。

このところ色々なことがありすぎて少しナーバスになつてるのかもしれない。私は気分を変えようと女子組の寢床になつているテントを出ることにした。

特に目的地を決めるでもなくフラフラ歩いてみると、廃墟になった塔のような建物を見つけた。なんとなく景色が綺麗そうだと思い登ることにした。

階段を登って屋上が見えてきた。

ただどうやら先客がいるようだ。

屋上では守君が両腕を枕にして寝そべり星を眺めていた。

「羽花？ どうした、眠れないのか？」

「うん、そんなところ。……隣いいかな？」

「ああ、もちろんだ」

それじゃあ失礼して、守君の隣に寝転ぶ。

……綺麗な空だな。至る所にキラキラと光る星々が散りばめられている。街灯や建物の灯りがないので当たり前だけど東京の空とは大違いだ。

「俺さ……」

「うん？」

「ジェミニストームとの試合でマジン・ザ・ハンドが完璧に破られて、少し不安なんだ。この先俺の力が通用するのかって……それを考えてたら、いつの間にかここに來てた」

「……私と同じだね、私も考え事してたらここを見つけた」

守君は話しながらずっと空を見つめていた。その声はいつになく細々としている。

「エイリア学園にマジン・ザ・ハンドは通用しない……こんな時、じいちゃんならもつとすごい技を考えるんだろうな」

「マジン・ザ・ハンドよりすごい技……か」

マジン・ザ・ハンド自体完成度の高い強力な技だからね、それを超えるとなると並大抵の技ではダメだ。……うん？

「……正義の鉄拳」

「え？」

「正義の鉄拳ならもしかして……」

「なんだそれ？」

私は50年前にタイムジャンプした時に見た、正義の鉄拳について説明した。話が進むにつれて、守君はだんだん顔を輝かせて食い入るように聞いていた。

「さすがじいちゃんだ！ そんなすごい技を考えてたなんて！」

「大介さん曰く究極奥義なんだって」

「究極奥義……よし、絶対正義の鉄拳をものにしてやる！ そうと決まれば特訓だ！」

「え？ 今から!？」

守君は勢いよく立ち上がると階段を駆け下りて行ってしまった。今何時だと思ってるんだろう？ いや、サッカーバカに時間制はないってことか。

なんて思っていると階段から守君が顔を覗かせてきた。

「で、正義の鉄拳ってどうやるんだ？」

「……ハア、しようがないな。私も見たただけだからあんまり期待しないでね？」

なんか悩むのも馬鹿らしくなっちゃった。でも確かに守君があの特徴を習得できればこれからの戦いで有効なのは間違いない。しようがない、付き合ってあげますか。



「正義の鉄拳!! ……く、ダメか」

エネルギーを右手に集中させて、それを前に突き出す。その瞬間、拳が形成されるがそれは私の放ったシユートに当たるや否や消え去ってしまった。

やっぱり私のアドバイスだけじゃ無理があるか。

そもそも私だって見ただけなんだから技のモーシヨンなんかは教えられても、具体的にどうやって力を込めるのかなんてさっぱりわからないし。

見た感じはグーのゴッドハンドで熱血パンチや爆裂パンチのように弾き返す技なんだけど……そんな単純なら究極奥義なんて呼ばれないよね。

……そういえば

「大介さんは正義の鉄拳を出す時に足を上げて大きく振りかぶってた……もしかしてそこがポイントなのかも」

「踏み込みが大事ってことか……よし、やってみる！」

守君がゴール前で構えるのを確認して、私はペナルティエリアの側に立つ。いきなりムーンフォースラビットを撃つのは危ないだろうからまずはこの技だね。ボールを打ち上げると私自らも跳躍する。そして空中で叩きつけるようにオーバーヘッドキック。バウンサーラビット改!!」

守君は私が言った通り左足を大きく振り上げ、そして地面に叩きつけた。拳を前に突き出すと、エネルギーの塊で形成された拳が現れる。

「正義の鉄拳!! ……どわぁー！」

拳はシュートをなんとか跳ね返したものの、その瞬間に消滅して守君は後方に大きく弾かれた。

形はできてた、なのに失敗したってことは単純なエネルギー不足。正義の鉄拳を出すためには守君自体の力量が足りてないってことだ。

「やっぱりダメなのか……」

「技の形はできてたけど……やっぱりあの時の大介さんと同じくらいの実力を守君自身が身につけないとダメみたいだね」

でもアルノ博士の話からするとあの時、大介さんはパラレルワールドの共鳴現象によつて本来の実力以上の力を発揮してたわけで、それに素で追いつくのはかなり大変だよね。

「よし、どんどん撃つてきてくれ！ 必ず正義の鉄拳を完成させてやる！」  
「……うん、わかった！ いくよ！」

それから私は守君に何百本とシユートを放った。特訓は夜が明けて朝日が昇るまで続いたけれど、結局正義の鉄拳を完成させることはできなかった。



「ふわああ……眠い……。やっぱり徹夜で特訓はするもんじゃないよね」

次の日、特訓も一段落して私は島でも一番高い木の上で昨日のことを思い出しながら大きくあくびをした。正義の鉄拳は完成までには至らなかった。でもこのまま特訓を重ねていけばきっとできる、そんな確証も得られた。

沈みゆく夕陽を眺めながら比較的大きな枝に座り込み足をぶらぶらさせる。

ちなみになんで木の上なんかにいるかっていうと、今日の特訓は木の上をジャンプでどんどん飛び移っていくというものだったから。



傍から見たらなんの特訓かわからないだろうけどバランス感覚が鍛えられるし割と理にかなってるんだよね。

「そろそろ晩御飯の時間だろうしみんなのところに戻ろうかな……ん？ あれつて……」

ふと下を見ると夏美ちゃんがなにやらカゴのような物を持って歩いてた。こんな森の中でなにしてるんだろう？ 行ってみようかな。

枝から飛び降りて近くにあつた木の上に着地する。そして付近の木に飛び移りながら夏美ちゃんがいた方角へ進んでいく。

「確かこの辺り……あ、いたいた。夏美ちゃん！」

「え？ ひゃあ!？」

夏美ちゃんの横に着地した瞬間、夏美ちゃんの手からカゴがフルスイングされてきた。あつぶな！ 私じゃなかったら顔面強打だよ。

「ちよつと！ あなたどこから降りてきてるのよ！ びっくりしたじゃない！」

「あはは、ごめんごめん。こんな所でなにしてるの？」

「まったく……晩御飯に使うキノコを取ったのよ。ほら」

夏美ちゃんがカゴの中身を見せてきた。わあ、確かに色鮮やかなキノコがたくさん入ってる……うん？ 色鮮やか？

「ねえ……一応聞いておくけどこれ食べられるの？」

「……？ 食べられないキノコがあるの？」

「私もそんなに詳しくないけどこれ多分毒キノコだよね？」

「そんなことないと思うけど……こんなに綺麗なんだから」

いや絶対毒キノコだって！ これとか赤と青のシマシマ模様だよ？ ぼく毒キノコ

ですって自己紹介してるようなものだよ！

……でももしかしたら本当に食べられるキノコなのかも。いくら夏美ちゃんの料理センスが壊滅的だといっても成績は超優秀なんだから毒キノコの見分けくらいつくでしょ。うん、そう信じたい。確かめてみるか……。

カゴの中から適当にキノコを一つ手に取って舐めてみた。……舌がビリビリするんだけど……。しかもなんか気持ち悪いし。

「……夏美ちゃん、今すぐカゴの中身捨ててきて。下手したら死人が出るよこれ」  
「羽花がそう言うなら……せつかくたくさん取ったのに」

あぶないあぶない、エイリア学園と戦う前に毒キノコで全滅したら洒落にならないからね。

半ば強引にカゴの中身を捨てさせて私達はみんなの元へと戻っていった。

そろそろ夏美ちゃんには本格的に料理を教えてあげた方がいいかもしれない。将来

夏美ちゃんの旦那さんになる人の為にも。……中々骨が折れそうだなあ。

「……ねえ羽花」

「ん？」

「羽花は……円堂君のことをどう思っているの？」

まだ見ぬ夏美ちゃんの未来の旦那さんに思いを馳せていると彼女は唐突にそんなことを聞いてきた。あまりに突然だったので数秒フリーズしてしまった。

これは……そういうことだね。私もそこまで鈍くない、夏美ちゃんが聞きたいのは私が守君を異性として好きかどうかでことだ。

これは……どう答えればいいんだろう。守君のことは好き……だけどこれは多分恋愛愛的なそれじゃない。友情とか尊敬に近いと思う。

「守君のことは好きだよ」

「……！」

「でも、この好きは尊敬に近いかな。だから夏美ちゃんが心配してるようなことはないよ」

「べ、別に心配なんてしてないわよ……」

この子可愛いだよ。顔を真っ赤にして照れている彼女を見て思わず抱きしめたくなった。

それにしても薄々気づいてはいたけどやっぱり夏美ちゃんは守君のこと好きなんだね。こんな可愛い子に好かれるなんてうちのキャプテンも隅に置けないね。

なんて考えてたらいつの間にかTMキャラバンの前に到着していた。みんな既に晩御飯の用意を始めている。

「お、羽花、夏美！ どこ行ってたんだ？」

「ちよつとお散歩だよ。ガールズトークをしながらね」

守君はキョトンとした顔をしたけどすぐに誰かに呼ばれてその場を去った。というか夏美ちゃんまだ顔真つ赤だけど守君もよく気づかないよね。

「あんまりグズグズしていると私が取っちゃうかもよ……なんてね」

片目でウインクそう言う守君の後を追った。振り向きざまに口をパクパクさせてる夏美ちゃんが視界に入ってきた。この分だと二人の関係が進展するのはずっと先になりそうだなあ。



ゴッドエデンで特訓を開始してから2週間が経過した。私は毎日シユウ君のしごきとも言えるようなメニューをこなしたおかげでだいぶ力が上がったように思える。他

のみみんなもそれぞれかなりレベルアップしているようだ。特に守君は正義の鉄拳の完成にこそ至らなかつたもののマジン・ザ・ハンドの強化に成功していた。

そして私達はシユウ君に集められて島の中心にあるサッカーグラウンドに集合している。

「君達はこの島でかなりレベルアップした。その成果を見せてもらおうよ」

「ここで試合するってことか？」

「そう、僕のチーム……エンシヤントダークとね」

シユウ君がそう言うや否や、彼の背中から紫色のオーラが流れ出た。それは段々と人の形に変化していく。

「……!?! デュプリを使えるの!?!」

「ふふ、さあ始めようか」

フエイの問いかけをはぐらかすようにシユウ君が笑うと、彼とそのデュプリ達はそれぞれポジションへと移動していった。

『さあ始まります! 雷門 v s エンシヤントダークの一戦! 実況はおなじみ、角馬圭太でお送りします!』

私達もそれぞれポジションについたところでそんな声が聞こえてきた。その方向を見るとどうやって来たのか角馬君が実況を始めていた。というかここ無人島なだけ

ど本当にどうやって来たの？

F W 染岡、フェイ

M F 一之瀬、鬼道、羽花、アフロディ

D F 風丸、壁山、土門、塔子

G K 円堂

雷門ボールから試合開始、フェイからボールを受けた染岡君が突っ込んでいく。

「行くぜ！ 特訓の成果を見せてやる！」

染岡君は監督が豪炎寺君を追い出したことに人一倍腹を立てていた。それを原動力に特訓していたみたいだけど、確かにドリブルのキレが以前と段違いだ。

そんな彼の前にエンシャントダークの選手が立ち塞がる。染岡君はフェイントでかわそうとするけどピツタリ張り付かれて抜けないでいた。

「染岡君、こっちー！」

「おうー！」

染岡君からパスを受け取って攻め上がる。でも相手の選手が誰一人としてボールを奪いに来ない。……どういいうつもり？

「やあ」

「……!? いつの間に!?!」

いつの間に移動したのかシユウ君がいきなり私の目の前に現れた。さつきまで私の後ろにいたはずなのに。

「へえ、特訓の成果出てるじゃないか」

「余裕綽々でそう言われてもね……」

さつきからかわそうとしているのにまるで磁石でもついてるかのようにくっついてきて離れられない。ボールを取ろうと思えば取れるはずなのにただ私の進路を塞ぎ続けている。

「……そろそろかな、カイ！」

「あいよー！」

「……!?!」

いきなりシユウ君が進路を開けてきた。これみよがしにそこを抜けると目の前に緑髪の手立者が立っていた。まさか誘導された!?!

「ストロングタワー!!」

「……!?! きゃあー！」

カイと呼ばれた選手の後背に出現した巨兵が地面を叩きつけた瞬間、私の足元から光の柱が出現して吹き飛ばされてしまった。

「僕達エンシャントダークは相手の動きを見切り、力を奪うことを得意とする。いわば

マイナスの力を持ったチームさ」

私ができ上がってディフェンスに戻ろうとした時には、既にシユウ君とカイは雷門ゴール前まで進行していた。そしてそのままシユート体勢に入った。

「いくよ！ ブラック……アツシユ!!」

暗黒を纏ったボールをシユウ君が蹴りつける。だけどその行く手を壁山君と塔子ちゃんが塞いだ。

「行くよ、壁山!」

「はいっす!」

「ザ・タワーV2!! / ザ・ウォール改!!」

特訓によりパワーアップした塔と壁がシユートをブロックする。しかし塔が破壊され、そして突き破った先にある壁を勢いのままに粉碎し、シユートはなおゴールへ向かう。だけど明らかに威力は弱まっていた。

「ナイスティフェンスだ二人とも!! いくぜ、じいちゃん……正義の鉄拳!!」

守君は拳にエネルギーを溜めて前に突き出した。けどやっぱりダメみたいでエネルギーは分散してシユートが直に彼の拳に直撃した。ボールはなんとか弾かれて風丸君の足元へと転がった。

やっぱりまだ正義の鉄拳を出すにはエネルギーが不足してるか……。それにしても



相手のチームの攻撃速度は凄まじかった。とてもシユウ君以外がデユプリだとは思えない。

それからエンシャントダークのトリッキーな動きに翻弄される時間が続いた。点差こそ0だけどこそのままじゃ失点するのは時間の問題だ。

「ふざけやがって、俺が決めてやる!」

均衡を破ったのは染岡君だった。彼は強引なドリブルで敵のディフェンスを吹き飛ばすとドラゴンクラッシュの体勢に……ボールを上あげた!?

『染岡のこの動き!?! まさか新必殺技か!?!』

染岡君がボールを蹴りあげたと思うと、地面から翼の生えたドラゴンが飛び出してきた。それはドラゴンクラッシュのものと比べて数段大きい、染岡君がシュートすると同時にドラゴンは咆哮を上げてゴールに進む。

「どうだ……!」

しかしゴール手前でドラゴンは消滅してシュートの威力も激減してしまった。どうやら失敗みたいだ。威力の低下したボールではゴールを破ることは叶わずボールはキーパーの手にすっぽり収まった。

「クソ!」

「染岡君、今のは?」

「ああ、新必殺技を考えてただけだよ。上手いかねえな」

そんな会話をしているうちにボールはキーパーから前線に投げられた。今は話してる場合じゃなさそうだな。

「スプリントワープ!!」

ディフェンスが突破されてシウウ君と守君の1対1、シウウ君が魔王を呼び出し、巨大な斧を振りかざす。ボールを空中で撃ち落とすと同時に魔王が斧を振り下ろした。

「暗黒神ダークエクソダス……!!魔王の斧!!」

凄まじい力を持ったシユートがゴールを襲う。未完成の正義の鉄拳では防げないと判断したのか、守君は魔王に対して魔神を呼び出した。

「真マジン・ザ・ハンド!!」

魔神対魔王、その対決を制したのは魔王だった。マジン・ザ・ハンドはシユートに触れた瞬間、まるでガラスが割れるかのように砕け散った。

『マジン・ザ・ハンド敗れる! エンシャントダークが先制です』

「やっぱりマジン・ザ・ハンドじゃ通じないのか……」

守君は震える手を眺めている。

シユートを決めたシウウ君は守君には目もくれずこっち向かって歩いてくる。

「これでわかっただろ? サッカーは強くないと意味がないんだよ」

「……………!?」

すれ違いざまに眩かれたその言葉に、私は反論することができなかつた。

## 闇を晴らすように

前半も残すところあと僅か。

しかしまったく反撃の兆しが見えてこない。

ボール支配率では多分私達の方が上だけど彼らはこちらの動きが全て見えているかのようにシュートギリギリのところまでボールを奪ってきていた。

「俺達が遊ばれてるといふのか……」

突破口を見いだせず鬼道君が苦言を漏らす。

そんな中ボールは私に渡った。

「アグレッシブビート改!!」

一気に加速してディフェンスの間をすり抜ける。よし、これならゴール前まで……。

「ディメンションカット!!」

「しまッッ!?!」

必殺技を使った後のごく僅かな隙を突かれボールを奪われてしまった。

……ダメだ、もつと集中しないと。

「……所詮この程度か」

「この辺にしとくか？」

「ああ……終わらせよう」

シユウ君は飛び上がるとまるでシユートかと思えるほどの速度でパスを出す。

「ザ・ウォール改!!……ぐああ!!」

壁山君が岩壁で止めようとするがそのシユート並のパスを防ぐことはできず吹き飛ばされてしまった。

そしてボールはあっという間にゴール前に。

「これで終わりだ！ブラック……な!？」

「だああああ!!」

あわや2点目というところで守君がペナルティエリアから飛びだしてきた。

少しでもタイミングがズレれば無人のゴールにシユートされて終わりだ。それなのにも関わらず守君はまるでボールしか視界に入っていないのかのように一直線に突き進み、シユウ君が足を振るう直前でボールをラインの外に蹴り出した。

ボールが外に出ると長い笛が鳴った。ちょうど前半終了だ。

「へへ、危ないところだったぜ」

「……なんで君が前に出る？」

「キーパーが前に出ちゃいけないってことはないだろ？ サッカーは自由にやるものだけだ！」

シユウ君に笑いかけると守君はベンチに戻っていった。

戦況は明らかに不利、だけど今の守君のプレーでみんなの目に闘志が戻ったようだ。

うん、これなら後半も戦えそうだ。

そんな頼もしさを感じつつ、私もベンチへと戻った。



豪炎寺は凄い奴だ。いっだってチームの期待を背負い、それに答えてきた。最初こそ反発し認めようとしていなかった染岡も、今では彼に絶大な信頼を置いていた。豪炎寺こそが雷門のエースストライカーだと。

だが監督はどうだ？ 何故豪炎寺をあんなに簡単に追い出せた？

確かにあの試合での彼の様子はどこかおかしかった。あの場で彼を下げるのも納得できない訳ではない。

だがチームから追い出すのは明らかにおかしい。調子が悪い時なんて誰にだってあ

る。それになんの説明もないのはどういうことだ？

大なり小なりチームのメンバーが瞳子監督に対して疑問を抱いている中、最もそれが大きいのは染岡だった。

「豪炎寺君のことが気になるの？」

彼がハーフタイム中に思考を巡らせていると、そんな風にフェイが染岡に声をかけた。

「お前には関係ねえよ」

彼は凶星を突かれぶつきらぼうに突き放すように答えた。だがフェイはお構い無しに続ける。

「彼がチームを去ってしまったのは残念だ、だけど——」

「お前に何がわかるってんだよ!!」

フェイの言葉を遮るように怒鳴りつけた彼は、拳を震わせ俯いた。フェイに当たるのは筋違いなただの八つ当たりだと彼も本心ではわかっていた。

「確かにチームに入ったばかりの僕にはわからないかもしれない。だけど彼がどんな気持ちでチームを去ったか、同じサッカープレイヤーとしてある程度はわかるつもりだ」

「……どんな気持ちで……」

「彼はきつと悔しかったんじゃないかな？ 雷門はいいチームだ。このチームを離れるの

は寂しいし、悔しかったと思う。だからこそ、彼はこのチームに戻ってくるはずだ。必ずね」

「……!?!」

そこまで聞いて染岡もフェイが言わんとしていることに気付いた。豪炎寺はこのまま終わるような奴じゃない。それは自分が一番知っているはずじゃないか。だったら自分の今やるべきことは――。

「豪炎寺が戻ってくるまでチームを守る。あいつが戻ってくる場所を……」

染岡の返答を聞くと、フェイは満足したかのように微笑んだ。そこで笛が鳴り、後半開始が合図される。

染岡は自分のポジションに移動するフェイの背中に「ありがとよ」と誰にも聞こえないように呟くのだった。



後半が始まった。試合の展開は依然エンシャントダークが優勢だけど私達も徐々に相手の動きについていけるようになってきた。それというのも

「ナイスディフェンス風丸！次は取れるぜ！」



「いいぞアフロデイ！もうちよつとだったな！」

守君が絶えず選手に声をかけ続けているおかげだ。例えボールを奪えなくても、シユートが決まらなくても、守君はその都度励まし、鼓舞した。

それに答えるかのようにみんなの動きが良くなつてきている、もちろん私も。

「はあああ！フレイムダンス!!」

一之瀬君が新必殺技でボールを奪った。そのままドリブルするもデイフェンス二人が近づいてきた。彼は身を翻してアフロくんにパスを出す。

しかしこれは相手の選手によってカットされてしまった。

そこに土門君が迫る。彼が足を振るうと地面に亀裂が走った。

「ボルケイノカット!!」

亀裂からマグマの壁が吹き出してボールを弾いた。すかさず土門君は鬼道君へパス。それを鬼道君はダイレクトでフェイに繋いだ。

「ミキシトランステイラノ!!」

テイラノザウルスの力を解放したフェイがデイフェンスを蹴散らし前進する。そして前方を走る染岡君を見据えた。

「染岡君！」

完全にフリーな状態でボールを受け取った染岡君はボールを天空へと打ち上げた。

それに呼応するように地面から手足の生えた翼竜が現れる。

「決めてやる……俺が!!」

染岡君がシュートを放つと同時に翼竜の口から放出されたプレスがシュートの勢いを加速させる。

「キルブリッジ!!」

相手のキーパーが両手からアーチ状のエネルギーが出てきた。それ衝突したシュートと軌道を変えてキーパーの手に誘導された。しかしシュートの威力までは殺しきれていなくてキーパーが弾かれてボールはそのままネットに突き刺さる。

『ゴオオオ!!染岡の新必殺技で雷門が同点に追いついたああ!』

「名付けて……ドラゴンクラッシュを超えた、ワイバーンクラッシュ!!」

「やったじゃないか染岡!」

「凄い必殺技っス!」

みんながはしゃぎながら染岡君の元に駆け寄った。彼はフェイの方に視線を向けるとぐつと親指を立てた。

それを見たフェイも笑顔で返す。

ああそっか、これなんだ……私が守りたかったのは。

仲間と共に支え合って高め合う……失敗したとしても励まして次に繋げる、成功した

らみんなでその喜びを分かち合う……そんなサッカー。

そこには強さなんて関係ない。

ただボールを蹴っているだけで楽しいんだ。

ふふ、当たり前のことなのに忘れちゃってたな。

「シユウ君、私わかったよ」

「……何が？」

「サッカーは強くないと意味が無い……それは別に間違っていないと思う。だけどそれ以上にサッカーは楽しいんだよ」

それを聞いたシユウ君は明らかに苛立った様子で私を睨みつけてきた。そして声を荒らげる。

「例えサッカーが楽しかったとしても……強くなれなければ意味なんて無い！大切な人を守ることをさえできないんだ！」

「……楽しむことと強くなることって別なのかな？」

「……え？」

「シユウ君も見たでしょ？ 私達はサッカーが好きだから、お互いに高め合って強くなってきた。強くなることへの一番の近道は楽しむことだと私は思うな」

「そんな楽観的な考えで強くなんか……」

確かに樂觀的かもしれない。だけど実際雷門が今まで強くなれたのはいつもサッカーが好きで楽しいって気持ちがあったからだ。

「シユウ君は違うの？ サッカーが楽しいって思ったことない？」

「……………!? 僕も…確かに最初はボールを蹴ってるだけで楽しかった……………。もしかしたら心のどこかで望んでいたのかもしれない。何にも縛られず楽しいサッカーをするのを」

「じゃあやろうよ、楽しいサッカー！」

「…でも今さら」

「やろうぜ！」

その声に振り返るといつの間にか守君を先頭にみんなが集まっていた。

「みんな聞いてたの？」

「へへ、まあな」

シユウ君の顔を見るとまだ渋っているようだ。そんな中、カイ君がシユウ君の肩を叩いた。

「やってみるか」

「……………そうだね、楽しもつか。僕達のサッカーを！」

よかった、どうやら届いたみたいだ。ちよつと恥ずかしいセリフだった気もするけ

ど。こういうことをサラツと言える守君の凄さを改めて実感した。

エンシャントダークのキックオフで試合が再開された。シユウ君がボールを持って私に一对一を仕掛けてきた。

お互い一步も譲らない攻防、ふと彼と目が合った。その瞳の中にはさつきまではなかった灯が点っていた。

「さつきのお返しだよ！」

その言葉と同時にボールを奪い取った。

「やるね！」

だけどシユウ君も諦めずに追いかけてくる。そんな彼に気を取られて私はディフェンスが接近してきているのに気づかなかった。

「わー！いつの間に!？」

「お返しのお返しきー！」

私からボールを奪ったのはカイ君だった。彼はシユウ君と並列して攻め上がっている。その前に塔子ちゃんと風丸君が立った。

「あんただけで楽しんでないであたし達も混ぜてよ！」

それを見た二人が飛び上がる。そして空中でクロスしたかと思うとそこに魔法陣のような模様が浮かび上がってきた。

「ブリタニアクロス!!」

魔法陣から赤いバツ印の形のエネルギーが飛び出し塔子ちゃん達を弾いた。そのままグングン上がっていきあつという間にゴール前へ。

「行くぞー！カイー！」

「おうー！」

二人は再び飛び上がると回転しながらそれぞれ黒と白のエネルギーを纏った。そして空中でツインシュートを放つと二人のエネルギーが一体化し強烈なシュートとなった。

「ゼロ……マグナム!!」

そのシュートに対し守君は足を振り上げ拳に力を溜め込む。そのパワーは今までは段違いに強烈なものだった。

「すっげえシュートだ！でも俺だって負けちゃいけないぞ！」

守君が力強く地面を踏みつけ拳を前に突き出す。その衝撃は私のところまではつきりと伝わってきた。そして守君からエネルギーの塊でできた拳が発射される。

「正義の鉄拳!!」

拳とシュートが激突、その風圧でフィールド外周辺の木の葉が一斉に揺れ音を立てた。

「だああああああ!!」

正義の鉄拳とゼロマグナムは完全に拮抗しているかのように譲らぬ勝負を繰り広げる。10秒ほどせめぎ合った後、勝ったのは拳の方だった。

ボールは真上に弾かれ守君はその衝撃で尻もちをついた。

「まだだ!」

ゴール上空で無防備になったボールにシユウ君が食らいつく。でもそれを狙うのは彼だけじゃなかった。

「行くぞ壁山!」

「はいっす!」

土門君と壁山君が同時に飛び上がり、壁山君のお腹を踏み台に土門君がジャンプ。一瞬早くシユウ君より先にボールにたどり着いた。

「鬼道!」

「反撃行くぞ!」

ボールを受け取った鬼道君の号令で一氣にカウンター攻撃を仕掛ける。ボールは私に渡った。しかし警戒されているのかデイフェンスが複数人集まってきた。

「真アグレッシブビート!!」

でも何人いようが関係ない。

一気に抜き去って後はキーパーただ一人のみ。

私がボールを天に向かって上げてとそこに染岡君が飛び込んできた。それを見た私も一緒に飛び上がる。そして二人で同時にボールを地面に叩きつける。

それが地面に着地する寸前、風を切るように加速した風丸が蹴りつけた。

「「ザ・テンペストV2!!」」

螺旋状に黒と水色のオーラを纏ったシュート。その威力は世宇子戦の時の優に数倍の威力はあるはずだ。

「キルブリッジ!!」

キーパーも対抗しようとするけど無駄だと言わんばかりにシュートは彼の抵抗を許さずゴールに進撃する。

決まった……と思ったのも束の間、ゴール前に二人の影が侵入してきた。

「ゼロ——」

「マグナム!!」

その正体はシュウ君とカイ君。二人は左右から同時にボールを蹴りつけた。

「なんとしても止める!」

「ウオオオオオ!!」

二人の雄叫びが重なり合う。そしてシュートの威力は段々と削がれていき、ボールは



弾かれ真上に飛ぶ。

ボールはバーを越えて外に出た。

二人は脱力して地面に倒れる。

そしてここで笛が鳴り試合終了、スコアは同点のままこの試合は幕を閉じた。

## 不穏な動き

「ハアハア……同点……」

試合終了のホイッスルが鳴った瞬間、身体力が抜けてしまつて私はその場に倒れ込んだ。他のみんなも同じように肩で息をしながら地面に膝を着いたり寝転んだりしている。

「……羽花」

「シユウ君……」

シユウ君がフラフラとおぼつかない足取りで私の前にやってきた。

「ごめんね……僕、サッカーは人の価値を測るものだど決めつけてた。でも君達のおかげで気づけたよ。サッカーは楽しいものだって！」

申し訳なさそうな顔をしていたシユウ君の顔が笑顔に変わった。それを見て私も思わず笑みを零した。

「こちらこちそ楽しかったよ！それにシユウ君のおかげで強くなれた！ありがとう！」

私が手を差し出すとシユウ君はそれを固く握りしめた。

「ふふ、やつぱり君は面白いね」

「前もそれ言つてたけど私のどこが面白いのさ」

「わからない、わからないけど面白い」

「もう……わけわかんないよ」

シウウ君が愉快そうに笑う。

まったく、私のどこがそんなに面白いんだか。

そんな他愛もない会話をしていると、瞳子監督がパンパンと手を叩いた。

「次の目的地が決まったわ。北海道の白恋中学よ」

「北海道？」

「そののエースストライカーである吹雪士郎をチームに引き入れると、響木さんから連絡があったわ。準備が整い次第、すぐに出発します」

「もう行つちやうんだね……」

隣のシウウ君からそんな寂しそうな声が聞こえてきた。確かに名残惜しいけど、私達はエイリア学園やエルドラドを倒すためにこの島に来たんだ。立ち止まる訳にはいかない。

「また特訓がしなくなつたらこの島においてよ、君達なら大歓迎だからさ」

「うん！また必ず来るね」

「お前とのサッカー、忘れないぜ！」

みんなそれぞれシユウ君へとお別れの言葉を告げて出発の準備を始めた。すぐに準備は完了して、後はTMキャラバンに乗り込むだけになった。

「これ、出合いの証に受け取って欲しいんだ」

「ミサंगा？」

シユウ君が差し出したのは少し古くなったミサंगा、手に取ってみるとなんだが不思議な温かさを感じた。

「それと、これは選別だ」

シユウ君はそう言うて手をワンダバの方へとかざした。するとシユウ君の手から紫色のオーラが流れ出てワンダバが背負っていたミキシマックスガンに吸い込まれていった。

「うおお!?何をしたんだ!?!」

「そのうちわかるさ。……羽花、君達なら必ずサッカーを守れる。僕は信じてるよ」

「……!?!うん!任せて、絶対サッカーを守ってみせる!」

ガッツポーズを作つて宣言する。そしてシユウ君の顔を一瞬見据えて私はTMキャラバンに乗り込んだ。この島での特訓と楽しいサッカーの記憶を胸にしまつて。

「全員乗つたな? 出発するぞ」

「あれ？古株さんが運転席にいる」

いつもならワンダバがいるはずの席に古株さんが座っていた。不思議に思っついで口に出してしまった。

「ふっふっふ…何を隠そうこのワンダバ様が！彼に操縦方法を伝授したのだ!!」

「いやあイナズマキャラバンがお役御免になってしまったからな。せめてこのTMキャラバンの運転くらいは覚えよう」と

へえ、私達が特訓してる間にそんなことしてたんだ。というか古株さんすごいな。逆にできないことを見つける方が大変そう。

「でもそうなるワンダバはなにをするのさ?」

「あ、確かに。運転係取られたらワンダバニートになっちゃうね」

「誰がニートだ!!私には大監督としての役割があるのだ!今は監督の座を譲っているが、いざとなればこの私が瞳子監督の代わりに——」

「必要ないわ」

「ダバア!!」

あ、死んだ。あんまりショックだったのか魂抜けてセミの抜け殻みたいになってる。さすがに可哀想だからちよつとフォローしてあげようかな。

「でもほら…えつと…あ!ワンダバにはミキシマックスっていう大事な役割があるで

しよー！」

「…おおい!!そうか!!そうだとも!!諸君、この私のミキシマックスガンが必要になった時はいつでも頼るといい!!」

単純すぎるよこのクマ……。

まあ立ち直ったならいいか。

宙に上がっていくキャラバンの窓から改めてゴッドエデンを見下ろした。半壊した森や崖は変わらないのに何故か今日はすごく美しく見える。

「ええ？」

その時、眼下の小さくなったグラウンド。

シユウ君がいた場所が突然光った気がした。目を擦ってもう一度確認すると光は見えなくなっていた。

……気のせいかな？

(ありがとう羽花、楽しかったよ)

その声は誰にも聞こえることなく、無人の島に消えていった。



「研崎君、イプシロンの様子はどうですか？」

「支援者Xのもたらした技術によって、エイリア石による人間の身体能力強化技術は格段に進歩しました。以前の彼らとはまるで別物です」

「そうですか、それは素晴らしい」

紫色に光る石巨大な空間を中心に形成された円形の空間にて怪しげに語り合う二人の男がいた。一人はスーツ姿の秘書風の男、もう一人は和風な着物に身を包んだ男だ。

「イプシロンが強くなればなるほど、彼らを相手に訓練するマスターランクチームの実力も上がっていく。まさに一石二鳥ですね」

「そしてその3人の中で最強の座を求め争う。ふふふ…結構なことです」

「さあお前達、ここへ」

研崎が暗闇の空間に声をかける。するとそこから赤髪の少年と白髪の少年がそれぞれ姿を現した。

「エイリア学園『プロミネンス』キャプテン バーン、お呼びですか？ 父さん」

「同じく『ダイヤモンド』キャプテン ガゼル」

「…グランはどうした？」

その場にいるはずのもう一人がいないうことに気付いた研崎が二人に問いかける。その質問にガゼルが若干バツの悪そうに答えた。

「それが……」

「…また勝手に出かけたのか」

「あんな奴いなくても俺が父さんの望みを叶えるよ」

「いいえ、グランが戻るのを待ちましょう。それまで下がっていなさい」

それを聞いたバーンとガゼルはしぶしぶと踵を返していく。そして誰にも聞かれないうと判断できたところでバーンが声を荒らげた。

「クソ、なんで父さんはグランの奴ばかり鼻屑するんだ！」

「このままでは『ジェネシス』の称号はグランの『ガイア』に渡ってしまうだろう」

「じゃあどうすんだよ！」

「…少し落ち着けバーン。今エイリア学園にとって脅威となり得る戦力は二つだ、わかるか？」

「ああ？…一つは雷門だろ、もう一つは……ジェミニをやったあのザナークとかいう奴か」



「その通りだ、そして彼らはイプシロンの手に余る存在かもしれない」

「ここまで聞いたところでバーンはガゼルの言わんとしていることを理解した。」

「つまり…：そいつらをグランよりも早く仕留めれば」

「ああ、父さんも我々をお認めになってくださるかもしれない」

向き合つてニヤリと笑う二人。

しばらくの沈黙の後、バーンが口を開く。

「で、お前どつちに行くよ」

「そうだな…：ジェミニを一人で倒した男にも興味はあるが…：やはりセカンドステージチルドレンの候補者である天川羽花がいる雷門にするか」

「なんだよお前もか…：まあいい、なら俺はザナークとかいう奴をぶっ潰しに行くぜ。中々やりがいがありそうだしな」

そう言うところとバーンは暗闇の中へと消えていった。その様子を見て短気な奴だ、と零したガゼルもまた目的達成のために動き出した。

## 雪原のプリンス

「うわ、一面真っ白……」

ワープホールを抜けた先に待っていたのはどこまでも白が続く雪原、そこにポツンと小さな学校が建っていた。

あれが白恋中かな？見たところは普通の学校みたいだけど。

サツカーグラウンドもあるし間違いなさそうだ。

…どうでもいいけど雪かきとか大変なんだろうな。

まずはサツカー部を探そうと校門付近にいた生徒に聞いてみたら部室にいるはずと  
のことだったので私達はそこを指指して歩き出した。

「わあく凄いい！本物の雷門中だ！」

「テレビで見たのと同じ！サインちょうだい！」

意外とすぐに見つかった部室を訪ねる。

彼らは最初こそ警戒していたけど私達が雷門中だと気づくとテンションを上げて友好的に接してくれた。

「羽花様に会えるなんて感動……！あの、サイン貰えませんか！」

「う、羽花様……？」

「フィールドを縦横無尽に飛び回る、まさにフィールドの女王！かつこいこい！」

白い帽子を被ったまところちゃんって言ったかな？がキラキラした眼差しを私に向けてくる。

え？私そんな風には呼ばれてるの？かなり恥ずかしいんだけど。ていうか女王ってなに？

「良かったですね羽花様、こんなに喜んでくれるファンがいて……ププ」

「世間の評判と実際の人物像は必ずしも一致しないといういい見本ね」

春奈ちゃんも夏美ちゃんも好き放題言ってくれちゃって……。こんな時は秋ちゃんに頼るのが一番だね。

「ちよつと秋ちゃん二人に何とか言って……秋ちゃん？」

なんか壁を見つめながら小刻みに震えてるんだけど……。あ！今ちよつと笑った！

「だって……ねえ？」

「とりあえずサイン書いてあげたらどう？」

「むう〜」

別に断る理由もないからサインくらい書くけどさ……。

でも初めて書くから色紙に私の名前を書いただけのサインとも呼べるか怪しいものになってしまった。

それをまろちやんに渡すと彼女は大はしやぎで私に感謝の気持ちを伝えてきた。

いいのかなそれで……。

「おいおい、俺達の目的を忘れたのか？」

そんな私を見かねてか風丸君が助け舟を出してくれた。彼は周りがよく見えていてこういう気配りもしてくれるので本当に助かる。

「吹雪士郎君はどこにいるのかしら？」

「ふ、吹雪君？……えっと」

「……う？どうした？」

和やかだった雰囲気が目子監督の口から吹雪士郎という言葉が出た瞬間、緊迫したものに変わってしまった。どうにもただ事ではなさそうだ。

「今は……特訓してると思う。いつもならそろそろ戻ってくると思うんだけど……」

まろちやんがオドオドとそう言った直後、部屋の外からドサツと何かが倒れたような音が聞こえた。

私達はその音に気づいた時には、白恋中サッカー部の面々は既に部屋から飛び出てい

た。

「吹雪君！しっかりして！」

その声に私達も外に出てみると、銀髪の小柄な男の子が息切らして蹲っていた。

この人が吹雪士郎？とても凄いストライカーには見えないけど。

「おいお前、大丈夫か？」

「ごめんね、少し張り切って特訓しすぎちゃって。それより君達は？」

「あ、ああ。俺達は雷門中サッカー部、俺はキャプテンの円堂守だ」

フラフラと壁にもたれかかりながら立ち上がる吹雪君。

私はここに来る前にTMキャラバンで春奈ちゃんが調べてくれた情報を思い出していた。

『熊殺し』 『熊よりでかい』 『ブリザードの吹雪』

そんな噂が流れていたけど、今日の前にいる彼はとてもそんな人だとは思えない。熊より大きくないのは一目瞭然として熊殺しなんて大層なこともできるようには見えな  
いし。

「お前が熊殺しか?！」

私と同じことを思ったようで染岡君が吹雪君に詰め寄った。それはいいんだけども  
うちよつと優しくしてあげなよ…。吹雪君結構疲弊してるみたいだし。

「あはは…、噂を聞いて来た人達は僕を大男だと思っちゃうみたいなんだ。これが本当の吹雪士郎さ」

「へ、こんなになよなよした奴だとは思わなかったぜ」

「おい染岡…：ごめんな、本当はいい奴なんだ」

ぶつきらぼうな染岡君の態度に守君が謝罪する。吹雪君は少し戸惑った顔をしたけどすぐに微笑んだ。

「吹雪君、少し時間いいかしら？」

「…：ええっと」

「私は雷門中サッカー部の監督をしている吉良瞳子よ」

「雷門中サッカー部の…：いいですよ、ですけど少しだけ休ませて欲しいな」

少しの休憩を挟んで、私達は外のグラウンドに移動した。吹雪君と監督、それに守君と春奈ちゃんがかまくらの中で話し合い。他のみんなは交流会ということで雪合戦で遊ぶことになった。

チーム分けは私のチームに風丸君とフェイ、アフロくん、夏美ちゃん、相手の鬼道君、チームに土門君や一之瀬君、塔子ちゃん。それにそれぞれ白恋のメンバーが半分ずつ加わった。

「絶対に勝ちなさい！これは理事長の言葉と思ってもらって構いません！」

「疾風スノーボール!!」

「ツインスノーボール!!」

いつも冷静な鬼道君だけどやっぱり中学生らしいところもあるのでこういう遊びだと意外とはしやぐ。風丸君とかもそうだね。夏美ちゃんは……うん、結構子供っぽいところあるからね。

「クソ、全然当たらないぞ!」

なんて考えながら私は真つ白なスペースを飛び回って雪玉を避け続けた。縦横だけではなく空中も利用したこの回避についていける人はこの中にはいないだろうね。

「ちよこまかちよこまかと……」

「当てられるものなら当ててみて!」

苦言を呈しながら雪玉を投げ続けてくる塔子ちゃんを挑発しながら私はそれをかわし続ける。気づくと相手チーム全員が私に向かって攻撃を仕掛けてきていた。

それでも私に当てるにはまだ届かない。

「あはははは、そんなんじや日が暮れちゃうよ……て、あれ?」

着地する予定の地面を見るといつの間にかそこに雪だるまが置かれていた。空中で避けられるはずもなく私はそれに激突して派手に地面を転がった。

これは……壁山君と目金君が作った雪だるま?でもさつきまでこんなところには

……。

「着地地点さえわかれば動きを止めるのは容易い事だ」

「やっぱり鬼道君の作戦……あ」

気づくと相手チームのみんなが雪玉を大量に抱えて私を囲んでいた。その目はまさに狩りに赴く獣のようには鋭く光っている。

ダラダラと嫌な汗が身体中から流れてきた。

「「「今だ、やれええええ!!」」」

「ちよ、ちよつと待って!!タイム!!タイムだつてばあ!!」

まるでシヨットガンのように飛んでくる雪玉を私は地面をゴロゴロ転がってなんとか避ける。そしてアフロくんのところまで転がったところで体勢を立て直す。

「ぐぬぬ……、こうなったら……アフロくん! やっちゃって!」

「ああ、ヘブンズタイム!!」

アフロくんが指を鳴らして次の瞬間には相手チーム全員に雪玉が直撃して雪合戦は終了した。

もちろん私達の勝利で。

「ふう、手強かったけどなんとか勝てたね」

「……これは少し卑怯なんじゃないかな」



「いいのいいの。ルール違反はしてないしね」

「いやどう考えてもズルだろ！」

すかさずツッコんでくる土門君。

まあ確かに時間止めるのはやりすぎたかも、反省反省。

そこでもかくらの中から守君達が出てきた。どうやら話し合いは終わったみたいだ。



「監督、作戦は？」

「好きにしていよいよ、吹雪君の実力を見るだけだから」

ユニフォームに着替えて試合の準備を完了した私達は試合開始の合図を待っていた。

吹雪君の実力を図るための白恋中との練習試合。思えばこのところエルドラドやエイリア学園との試合ばかりで、楽しめたのはSPフィクサーズとエンシヤントダークの時だけだった。

だからこそ、今回は思いっきり楽しみたい。

「……………」

「…フエイ？どうしたの？」

話に参加せずにある一点をじつと見ていたフェイが気になり声をかける。その視線の先には他の選手とは違い赤ベストを着込んだ少年がいた。

「あんな人さつきまでいたっけ？あの人気がなるの？」

「うん、よくわからないんだけど少し」

確かに只者じゃなさそうだ。

上手く言葉で形容しづらいんだけどなんというか雰囲気が違うというか……。

「天川、フェイ！始まるぞ、ポジションにつけ！」

その言葉で周りももうポジションについているのに気づいて慌てて移動する。その間、相手コートを見ると私は驚愕した。

「吹雪君が……ディフェンスにいる？」

「吹雪はフォワードじゃなかったのか？」

「フォワードだよ。でも今はまだディフェンスなんだ」

……リベロってことかな？ディフェンスのポジションにしながら積極的に前に出て攻撃参加もするプレイヤー。見たことはないけどプロの試合だと結構いるらしい。

でもさつきの口ぶりからしてフォワードであることは間違いなさそうだしリベロではないか……。

『さあ雷門中对白恋中の練習試合！今始まりました！』

角馬君の実況と同時に笛が鳴り試合が始まった。

……彼平然と北海道まで来てるけど気にしたら負けかな？

というか私達ゴッドエデンからここまでワープしてきたから追いつけるはずないと思っただけど……。

実は角馬君つて未来人か宇宙人だったりしない？

私がそんなことを考えているうちに染岡君が猪のように白恋陣内に突っ込んで行った。それを迎え撃つ白恋の選手だけど染岡君のパワーに適わず弾き飛ばされる。

「そういう強引なプレー、嫌いじゃないよ」

一気にゴール前の吹雪君に迫る。

それを彼は流れるような動きで防いだ。

「真アイスグラウンド!!」

スケート選手のように凍った地面を滑った吹雪君が地面を踏みつけるとそこから氷塊が連鎖的に現れあつという間に染岡君を凍てつかせた。

弾かれたボールを吹雪君がイナバウワーのような華麗な動きで奪い取る。

その光景に私は魅入ってしまった。

華麗な動きも凄いけどあのスピード……。

彼が優秀な選手であることは間違いないさそうだ。

『さあ吹雪、パスを出してそのボールを喜多海が受ける。だが風丸あっさり奪い返した』  
ボールを奪った風丸君が染岡君にパス。

シュート体勢に入る染岡君、だけどその前に再び吹雪君が立ち塞がった。

「防げるもんなら防いでみやがれ！」

染岡君がボールを蹴り上げると地面からワイバーンが出現。口にエネルギーを蓄える。

「ワイバーンクラッシュ!!」

染岡君がシュートすると同時にワイバーンが光線を発射。ゴール、そしてそのまま吹雪君に襲いかかる。

しかし彼はその場で回転しシュートに足をぶつけ、軽々とワイバーンクラッシュを止めてしまった。

『な、なんと！吹雪がワイバーンクラッシュをも止めてしまったああ！』

「そうか！吹雪はフォワードじゃなくて凄いディフェンダーだったんだ！」

「クソ、くらいやがれ!!」

シュートを止められた悔しさからか、染岡君がボールを持った吹雪君に突っ込んでいく。走り込んだ勢いのまま、スライディングタックルでボールを奪おうとする。

しかし弾かれたのは染岡君の方だった。

「なに!？」

吹雪君がマフラーに触ったかと思うとその瞬間、彼の周囲をブリザードとも言うべき突風が襲った。

それに吹き飛ばされた染岡君は地面を2回3回と転がる。

突風が晴れた後、視界に入ってきたのは髪が逆立ち目付きが鋭くなった吹雪君の姿だった。

「まったく…：しよぼい奴らだぜ。いいか、よく聞け!!」

「俺がエースストライカー!!吹雪士郎だ!!」

## エースストライカー

「俺がエースストライカー!! 吹雪士郎だ!!」

そう宣言した彼を雷門イレブンの誰もが驚愕の眼差しで見ている。

……雰囲気が変わった?

髪が若干逆立ち目も釣り上がり周囲にブリザードを発生させている。

まるで某漫画の超○イヤ人だなんてくだらないことを思わず考えていると吹雪君は私達に向かって突進してきた。

真つ先にそれを止めようとしたのは一之瀬君、彼は吹雪君の前に立ち塞がるとチャージを仕掛けた。

「お手並み拝見といこうか!」

「へ、……邪魔だアア!」

だけど仕掛けた一之瀬君の方が逆に一発で吹き飛ばされてしまった。

続いて風丸君と鬼道君が左右から同時にスライディングを仕掛ける。それを見た吹雪君はさらに加速し自身の周りにソニックブームを生み出した。結果、風丸君と鬼道君

はボールに触れることなく地面を転がった。

「なんてパワーとスピードだ……だが!!」

今度はアフロくんが止めに入る。

走り出す瞬間、彼が一瞬こちらに視線を向ける。その意図を理解した私はアフロくん  
に続くのではなくその場で時を待つことにした。

相変わらず猪突猛進に突っ込んでくる吹雪君にアフロくんは正面からスライディング  
グを仕掛ける。

しかし吹雪君には通用せずあっさりとお上にかわされてしまった。

「こんなスライディングが通用するか!」

「ああ、通用するなんて思っていないさ」

瞬間、吹雪君は目を見開くことになる。何故ならジャンプしたその先には大量の光の  
玉が浮いていたのだから。

「グランドスローパー!!」

私が手を振るうと同時に光の玉が一斉に大爆発を起こす。

そう、予め私がこの位置に仕掛けておいたのだ。アフロくんの一見無謀なスライディ  
ングもこの地点に吹雪君を誘導するため。

普通に必殺技を使ってもあのスピードで回避されてしまう恐れがあるから。

「——この程度で」

「え？」

「俺を止められるかアア!!」

爆発によつて起こつた雪煙、それを晴らすように再びブリザードが吹き荒れる。その中心にはボールを足元にキープした彼の姿。

爆発は間違いなく命中したはず、まさか耐えきるなんて……

「今度はこつちの番だ、吹き荒れろ!!」

シュート体勢に入つた吹雪君がボールに回転をかけると、そこを中心にブリザードが吹き荒れる。そこに回転しながら跳躍した彼が蹴りを加えると、ボールは氷の塊を纏い発射された。

「エターナルブリザード!!」

そのシュートの威力でフィールドに豪雪が吹き荒れる。

それに対し守君は足を大きく振り上げ、そして地面に打ち付けると拳を前に突き出した。

「正義の鉄拳!!」

回転する拳をシュートに叩きつける守君。

その衝突は数秒の間拮抗した。



しかし段々と拳がシユートの持つ冷気で凍りついていき、やがて飴細工のように粉々に砕け散ってしまった。

『ゴ、ゴオオオオル!! なんと先制したのは白恋中です!!』

……凄いパワーだ。まさか正義の鉄拳をあんなに簡単に……いや、確かにエターナルブリザードのパワーも凄かったけどそれより正義の鉄拳の方になんだか違和感を感じる。大介さんのはもつと凄かったような……

「すっげえ!! 吹雪、お前のシユートどうしても止めたくなつた!!」

「できるもんならやってみな」

倒れた身体を即座に起き上がらせて守君は吹雪君にそう宣言してみせる。それに対して吹雪君は余裕そうに煽る。目線の間には火花でも飛んでもそうなやり取りだ。

「おいアツヤ、一人で楽しんでないで俺にもやらせろ」

「……ユウチ」

ただどその空気は一瞬で凍りついた。一人だけユニフォームではなく赤いベストを着た選手が吹雪君に話しかけると、彼は顔を擧めてユウチ君を見つめる。

……今アツヤって呼んでたよね? 確か吹雪君の下の名前は士郎だったはず、あだ名

か何かかな?

ともあれ私達のキックオフで試合が再開された。ボールはフェイからバックパスで

私に渡される。ちょうどいいや、吹雪君のデイフェンスと勝負してみたかったしね。狙いを定めた私はボールを蹴り出し前進する。だけど――

「――遅いな」

「……は？」

瞬間、私の身体は宙に投げ出された。何が起こったのか理解できないうちに地面に叩きつけられ悶絶する。顔を上げると私を見下ろすユウチ君の姿が視界に入ってきた。

「……こんなもんか？」

「な……!？」

その言葉に反論しようとするが、それより先にユウチ君はドリブルを開始する。その速度に皆は度肝を抜かれた。

「な、なんだあの速さは!？」

皆の動揺ももつともだ。彼は吹雪君や風丸君を遥かに凌駕する速度で攻め上がった。きた。その姿を視認することさえ困難なドリブルに雷門は反応することさえできない。

「……来い!!」

あつという間にゴール前に到達したユウチ君は不気味な笑みを浮かべるとボールを上げる、そして足を2回振るとブリザードが発生する。更に彼の背後で白い虎が咆哮をあげた。

「パンサーブリザード!!」

冷気を纏ったボールをユウチ君がシュートする。それは虎の咆哮と共にゴールへ一直線に伸びていく。その速度と威力は今まで見たどのシュートよりも強力だった。

「正義の鉄拳!!」

シュートと拳が衝突する、だけどさっきのエターナルブリザードより遥かに強いシュート、拮抗すらく拳は弾かれ守君ごとシュートはゴールにねじ込まれた。

「守君!!」

「円堂!!」

倒れて起き上がれない守君に私達が駆け寄る。

……今のシュート、今までのどのシュートよりも強かった。あのユウチ君って人、何者なんだろう?」

「……おかしいぞ」

「ワンダバ?」

「あんな選手は本来白恋にはいないはずだ」

「……!? それって!?!」

本来白恋にいない。未来から来たワンダバが言うってことはつまり歴史改変が起きてるってこと、だよな? さすがにその辺はわかってきたけど、ということはユウチ君

はエルドラドのスパイか何かかってこと？ でもザナークのこともあるから一様には言えないか……ああ！ なんかもやこしくなってきた！

「……………」

なんだか視線を感じるような？ その方向を見るとユウチ君が私の方を鋭い目つきで見っていた。なんだろう？ 私何か——!?

「…………ツツツ!!」

その瞬間、私の頭の中に何かが流れ込んできた。……なに……これ？ 頭が……痛い!?

ものすごい頭痛と流れ込んでくる何か、それらに耐えようとするが無駄だった。すぐに私の目の前は暗くなっていき、そして完全に闇へと落ちていった。



「羽花？ どうしたんだ!？」

突然地面に倒れた羽花に隣にいたワンダバが声をかけるが、彼女からの返答はない。すぐに異変に気づいた雷門の面々が駆け寄ってくる。

「おい羽花！ しっかりしろ！」

円堂が羽花を抱き抱え声をかけるが、やはり返答はなく目を瞑ったままだ。

「……………！ 試合は終わりよ！ 彼女を早く保健室に！」

「……………?!? は、はい！」

いち早く判断し指示を出した瞳子監督の言葉に従い、円堂は羽花を背負って保健室に向かう。試合は中断、全員が心配しそうにその背中を見送り、監督やマネージャー陣、フェイトワンダバと一緒に保健室に向かった。

「羽花様、大丈夫かな……………」

白恋の面々も彼女の安否を案ずるが、吹雪はユウチを睨みつけると静かに問い詰めた。

「……………あれ、お前の仕業だろ？」

「さあ？ なんのことだか……………証拠でもあるのか？」

「てめえ……………！」

「俺の役目はここまでだ。後はせいぜい頑張れ」

背を向け手をヒラヒラさせながらユウチは去っていった。

その背中を吹雪は睨みつけていたが、彼が見えなくなるとふうつとため息をついたと思おうと逆立っていた髪が元に戻り、目つきも緩いものへと戻った。

「ユウチ君……………君は一体……………」

数週間時を共にしてもまったく理解できなかった相手に対し思いを馳せる。だがどれだけ考えても理解できないのは変わらない。

「吹雪君！ 私達も保健室に！」

「……そうだね、彼女が心配だ」

荒谷に声をかけられ、吹雪は白恋イレブンと保健室に向かった。そして到着し中に入ると、ベッドで横になっている羽花を囲むように雷門の面々が立っていた。

「彼女……大丈夫かい？」

「吹雪……ああ、ちよつと倒れただけみたいだ。先生は貧血じゃないかって」

「そう、良かった」

円堂が吹雪を安心させるように言った。それを聞いた吹雪はホツと胸を撫で下ろす。そんな彼にフェイが声をかけた。

「吹雪君、さっきの彼は？」

「彼？ ……ああ、ユウチ君か。彼ならどこかへ行っちゃったよ」

「……そう」

「フェイ、何か気になることでもあるのか？」

「……いや、なんでもないよ」

思い詰めた様子の子のフェイに鬼道が声をかけるが、フェイはなんでもないとだけ答えて

思考を巡らせる。その様子を見て鬼道はそれ以上聞くことはせず、眠る羽花に視線を戻した。

その時だ、部屋に備え付けられていたテレビから彼らにとって聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……………!? これは……………」

春奈がそれに気づき、皆がテレビに視線を向けた。そこに映っているのは破壊されたどこかの学校の校舎と長身の男だった。

『聞け、白恋中サッカー部よ。我々はエイリア学園ファーストランクチーム、イプシロン。私はキャプテンのデザームだ』

「デザーム……………」

『お前達は我々の対戦相手に選ばれた。応じない場合は破壊が待っている。拒否などできない、助かる道は勝利のみだ。時は二日後、それまで楽しみにしているといい』

一方的な宣言を行い、デザームは姿を消した。そしてそれを聞いた部屋の中に静寂が訪れる。

「ここにエイリア学園が来るなんて……………どうしよう吹雪君……………」

「大丈夫さ、あんな奴らに学校を破壊させないよ。僕らでエイリア学園を倒してみせる」

「……………!! ということは……………」

「うん、君達のチームに僕も加えて欲しい」

「吹雪……ああ！ これからよろしくな！」

円堂と吹雪が固い握手を交わす。白恋中にやってきた目的を達成し、一同は笑みを浮かべた。

「それじゃあ早速始めようか」

「始める？ 何をだ？」

「特訓さ、風になるためのね」



## イブシロン

私は2日間目を覚まさなかつたらしい。目を開けたら不安そうにこちらを見つめてくる夏美ちゃんが視界に入ってきて、あまりに心配してくれるものだから逆にこっちが気を使ってしまった。

結局私がなんで倒れてしまったかはわからなかった。白恋中の監督さんが町からお医者さんを呼んでくれたらしいんだけど、身体に特に以上は見つからなかったそうだ。

夏美ちゃんから聞いた話によると、私が倒れている間にイブシロンから襲撃予告があつてそれに向けて皆で吹雪君の元特訓を続けたそうだ。彼もチームに加入してくれる、迎え撃つ準備は万端だ。

——まあ一つ文句があるとするならば。

「私も特訓したかつたなあ……」

そう、私も吹雪君の特訓とやらを体験してみたかつた。フェイの話だとスノボを使うみたいなんだけど、スピードの感覚を掴めるのだとか。なんだか面白そうだしやつてみたかつたと零すと、隣を歩く秋ちゃんが薄く笑いを見せた。

「羽花ちゃん、なんだか円堂君みたい」

「そうかな？ サッカープレイヤーなら誰でもそう思うよ、多分」

朝、目を覚ました私は心配する夏美ちゃんに大丈夫だからと無理やり納得させてテントに戻ってもらった。だって夜通し寝ずに私の看病してたんだよ？ 凄くありがたいけど向こうが身体を壊してしまつたら元も子もない。

ということとで夏美ちゃんを帰して暇だったから散歩でもしようと白恋中の校舎の前を歩いていたらバツタリ秋ちゃんに会つた訳だ。

「……！ あれ、守君？」

「お、羽花！ 目が覚めたのか！ よかった！」

サッカーボールを抱えてどこかへ走つていく守君を見つけて声をかける。私を見るや否や、彼は嬉しそうに駆け寄つてきてくれた、なんだか嬉しいな。

「もう動いて平気なのか？」

「うん、この通りピンピンしてるよ」

「そうか、でもこんな朝早くにどうしたんだ？」

「円堂君こそ、早起きなんて珍しいね」

「いやあ、イブシロンとの試合の事考えてたらいてもたつてもいられなくてさー！」

秋ちゃんが聞くと守君はなんと彼らしい理由を口にした。確かにイブシロン戦は

今日だから少しでも特訓をしたい気持ちにはわかる。

その時、木の影から視線を感じて私はそちらに振り向いた。

「……誰かいるの？」

「まいったな……バレるとは思ってたよ」

木の裏側から出てきたのは赤髪の少年。彼は困ったように頭を掻きながら私達に近づいてきた。

「ごめんね、別に盗み聞きをするつもりはなかったんだ。ただ、君達を一目見ておきたくて……」

「君は？」

「基山ヒロト。君達、フットボールフロンティアで優勝した雷門中サッカー部だろ？」

俺、ファンなんだよね」

「俺は円堂守、よろしくなヒロト」

ヒロトと名乗った少年と握手する守君。雷門中サッカー部のファンだと言うがどうもきな臭いというか怪しいというか……

「そつちは天川羽花さんだよ？ 決勝戦での君のプレー、見事だったよ」

「あ、どうもありがとう」

基山君が私にも握手を求めてきたので、一応返しておく。別にちよつと怪しいだけで

害がある訳でもない。

「そうだ、ヒロトも一緒にやろうぜ！」

「ふふ、ありがたいけど今日は遠慮させてもらうよ。それじゃあね」

そう言つて彼は去つてしまった。結局私達を見ていた目的もわからずじまいで、私と秋ちゃんは今首を捻るのだった。



イブシロンが現れたのはお昼前のことだった。奴らがいつ来てもいいようにグラウンドで準備を整えていると突然赤黒い光がどこからともなく周囲を照らして、気づけばエイリア学園の選手達が私達を見下すように見つめていた。

「デザーム!!」

先頭に立つ長身の男の名前を守君が叫んだ。それを聞くとデザームはニヤリと笑い、こちらに向けて挑発的に話しかけてきた。

「雷門イレブンよ。ジェミニストームを倒したからといい気になるな。我々イブシロンは奴らとは全てにおいて格が違う」

「だからつてお前達の破壊を見過ぎす訳にはいかない！ 勝負だ、イブシロン！」

「……いいだろう、我々エイリア学園の真の恐ろしさを教えてやる」

守君とデザーム、両チームのキャプテンが了承し試合の準備が始まった。瞳子監督がベンチでポジションを書いたボードを見せてくる。

「吹雪君、あなたはディフェンスに下がって」

「ええ!!? でも、エターナルブリザードはどうするんスカ?」

「敵の実力は未知数よ。前半は相手の動きを見極めることに専念なさい。いいわね、吹雪君?」

「はい、任せてください」

壁山君の質問に答えると吹雪君に確認する。確かに相手の力も戦術もわからない以上前半は守りを固めた方がいいのかもしれない。それには吹雪君が適任だ。

FW 染岡、フエイ

MF 一之瀬、鬼道、羽花、アフロディ

DF 風丸、吹雪、壁山、土門

GK 円堂

『さあ始まります! 雷門中VSエイリア学園ファーストランクチームイpsilonの1戦! 実況は私、角馬がお送りします!』

みんながポジションについたところでおなじみ角馬君が実況を始めた。もう彼が実

況することにも慣れたよ、だからいちいち反応するのはよそう。

『イブシロンのキックオフで試合開始！ 攻め上がるのは……ええと……ゼル！ そこからメトロン、ファドラへと華麗なパス回しだ！』

……ちよつと待った！ なんでイブシロンの選手の名前を知ってるのさ!? どこから仕入れてきたのその情報!?

……いけない、今は試合に集中しないと。

ファドラ？ と呼ばれた選手が凄いスピードで攻めてくる。確かにジェミニストーム以上だ、ファーストランクチームの名は伊達じゃないらしい。だけど――

「左だよ！」

「うん！ 真アイスグラント!!」

吹雪君の華麗なプレーに氷漬けにされたファドラからこぼれたボールをアフロくんが取った。そして迫り来るディフェンスを見て指を鳴らす。

「へブンズタイム!!」

時を止めて相手を突破するアフロくんの神業。ジェミニストームには破られてしまったけど特訓のかいあってイブシロン相手でも問題なく通用するようだ。そしてボールはアフロくんから染岡君へ。

彼はそのままボールを蹴りあげると翼の生えた龍を呼び出し、落ちてきたボールを

シユートする。

「ワイバーンクラツシュ!!」

龍の咆哮と共にシユートはデザームに直進していく。それに対し彼は、不敵な笑みを浮かべたままだった。

「ワームホール」

染岡君のシユートはデザームの前で消え去り、そして彼の目の前に落下してきた。シユートを打った染岡君はその光景に目を見開いて驚いている。

「俺のワイバーンクラツシュが!」

「……なんだ、今の感覚は?」

……?

シユートを止められた染岡君が驚くのはわかるけど、何故かデザームも自分の手をまじまじと見つめて不思議そうにしている。なんだろう? 舐めてた相手のシユートが思ったより強くて驚いているのかな?

『ボールはデザームからケイソン、マキユアへ!』

「反撃せよ! 戦術時間2. 5秒!」

『ラジャー!』

デザームから指示を受けたらしいイプシロンが巧みな連携で攻めてくる。なるほど、

確かに身体能力もジェミニストームを遥かに凌いでいるけどイブシロンの本領は計算された連携プレー。そしてその中核を担っているのがあのデザートムってことだね。

「メテオシャワー!!」

「ぐああ……!!」

マキュアが降らせた隕石が一之瀬君を吹き飛ばした。そしてボールはフォワードのゼルへ渡った。

「ガニメデプロトン!! はあ!!」

一見ハンドに見えるけどボールには触れてないからセーフなのかな? とにかくゼルの手から放たれたシュートがビーム状になって雷門のゴールに迫る。それに対して守君は正義の鉄拳の構えを見せる。

「正義の鉄拳!!」

守君の拳は問題なくゼルのシュートを弾き返した。まさか止められると思っていなかったのかゼルは冷や汗をかいている。

私は正義の鉄拳によつて空中に放り出されたボールをジャンプして確保し、地上の様子に目を配る。

「フェイ!」

地上を走るフェイにパスを出す。空中を起点にしたパスにさすがのイブシロンも反



応出来ない。ボールを受け取ったフェイはそのままシュート体勢に入る。

「バウンサーラビット!!」

「ワームホール!!」

兎のごとく地面を跳ねるシュートがデザームを襲うが、これも彼の生み出したワープホールに防がれてしまった。さすがにファーストランクを名乗るチームのキーパーなだけあって実力は相当なものだ。豪炎寺君がいない今、あれを破るのは簡単じゃない。可能性があるのは私のムーンフォースラビットかフェイの古代の牙、もしくは――

「俺にボールを寄越せ!」

「……吹雪君!」

デیفエンスにいたはずの吹雪君が前線に上がってきていた。白恋との試合の時のように雰囲気が変わっている。瞳子監督は吹雪君はデیفエンスに専念するように指示していたはずだけど……この際しようがないね。

「ヴァーミリオンドロップ!!」

「なに!?!」

「吹雪君!」

デザームからボールを受け取っていたメトロンからボールを奪い、前線に駆け上がる吹雪君にパスを出す。彼はボールを受け取ると目にも止まらぬ速さでゴール前まで

迫っていった。

「吹き荒れる！ エターナル……!! ブリザード!!」

荒れ狂う豪雪の弾丸が放たれた。それを見たデザームは一瞬目を見開き、そして防御の姿勢に入った。

「ワームホール!!」

三度ゴール前にワープホールが現れた。だけど今回はシュートは吸い込まれるなく拮抗して、手をかざし気を送っているデザームはジリジリと後ろに押し込まれている。

「いけえええ!!」

吹雪君の掛け声でシュートの勢いが増し、ついには投網を破るようにワープホールを突き破りゴールネットに突き刺さった。

『ゴオオオ!! 吹雪のエターナルブリザードがデザームのワームホールを打ち破った！ 雷門先制です!』

「やったぜ吹雪!」

ゴールを決めた吹雪君の周りに皆が集まる。瞳子監督を見るとやれやれと言った様子で澄ましているけど、まあ点を決めたのだから大丈夫だろう。

「フハハハハハ!!」

「!!? なんだ!」

「デザーム様……?」

皆が得点を決めたことに盛り上がっている中、突如デザームが笑い声を上げた。点を決められたというのに彼は嬉しそうに笑っている。その様子に私達はもちろん、イプシロンの面々も困惑しているようだ。

「いいぞ……! この私のワームホールを破るとは……! 面白い!」

彼はなおも笑い、そして吹雪君を指さした。

「次は止めてみせる! 更に強力なシユートを叩き込んでみる!」

「言ってくれるじゃねエか……!」

そう宣言してデザームはポジションへと戻っていった。あの感じ、まだなにかありそうだね。先制したからといって油断は出来そうにない。

イプシロンのキックオフで試合再開。マキュアがボールを持って攻め上がるけど、すぐに吹雪君がカットした。

「どけ!」

「……!?! マキュアあいつ嫌い!」

吹雪君は一気に駆け上がり、ミッドフィールダーを抜き去ったところでディフェンス三人に囲まれた。あれじゃさすがに前へ進めない。私は吹雪君のフォローをするために動く。

「撃たせろー！」

「!!?」

だけどデザームの声でディフェンスは吹雪君を止めるのをやめ、自ら進路を開けた。その隙を見逃すはずもなく、吹雪君は一気にゴール前へ。

「吹き飛ばせー！ エターナル……!! ブリザード!!」

二度目のエターナルブリザード。しかも威力はさつきより上がっている。これなら二点目も間違いない、誰もがそう確信した。だけどデザームはそのシュートを見てなお笑い、腕を上空に突き出した。

「ドリルスマッシュャー!!」

「!!?」

デザームが出したのはワープホールではなく、巨大なドリル。それを迫り来るエターナルブリザードにぶつけると、けたたましい音と共に衝撃がこちらまで飛んできた。しばらくぶつかり合っていたシュートとドリル、やがてシュートの方が勢いを落とし、弾かれてしまった。

「なに!?!」

エターナルブリザードが止められた!?! シュートを撃った吹雪君だけでなく、誰もがその光景に目を見開いた。あのシュートを止めた……それにあの技、まだあんな奥の手

を隠していたなんて……

「この私にドリルスマツシャーまで使わせるとはな……お前達は最高だ！　だが!!」

デザームがボールを前線に蹴り出した。それはシュートと言われても遜色ない威力でぐんぐんゴール前へと迫っていく。

「しまった!!?　皆戻れ!!」

鬼道くんの号令で皆が戻ろうとするけど、エターナルブリザードが止められた衝撃で一步遅れてしまった。これじゃ間に合わない……!!

『ガイアブレイク!!』

ゼル、メトロン、マキュアの三人が岩でボールをコーティングしそれを同時にシュート。強烈なエネルギーを纏ったシュートは誰にも邪魔されることなく守君へ迫る。

「正義の……!!」

「ダメだ円堂！　間に合わん！」

「ツツ……!!　爆裂パンチ!!」

正義鉄拳を繰り出そうとする守君。しかしシュートの方の速度が上、間に合わないと見るや爆裂パンチに切り替えるけどシュートの威力を殺すことは出来ずにゴールに押し込まれた。

『き、決まっちゃったアア！　イプシロンの強力なシュートが雷門ゴールに突き刺さ

る！』

「そんな……」

エターナルブリザードが止められ同点に追いつかれた。その事実には私達はただそう  
呟くだけだった。

## 化身

「凄いじゃないか皆！ イプシロン相手に負けてないぞ！」

前半が終わってハーフタイム。守君が士気を上げるように声をかけるが皆の表情には雲がかかっていた。点差だけ見れば同点だけど、やっぱりエターナルブリザードが止められたことが頭に残っているのだろう。確かにデザームのドリルスマツシャーという技からは凄い力を感じた、あれを破るのは簡単じゃないと思う。

「円堂の言うことにも一理ある。俺達はイプシロンの動きに対応出来ている、後は攻撃だ」

鬼道君も守君の言葉を肯定した。確かに不意打ち以外ではイプシロンの攻撃は防ぎきれている。キャプテンで司令塔のデザームがキーパーの位置にいることも要因の一つだろう。

「聞いて、後半の作戦を伝えるわ。吹雪君、ディフェンスはもういいわ。後半はフォワードに入って攻め上がりなさい。前半で皆イプシロンの攻撃に慣れてきたでしょう？ 後半は積極的に攻めるのよ」

「……!! 吹雪をディフェンスに配置したのはイプシロンの攻撃に目を慣らすためだったのか……」

瞳子監督の説明に鬼道君は納得した様子で頷いた。吹雪君はシュートも凄いけどディフェンスも相当出来る。だから前半ディフェンスに置いて皆がイプシロンの動きに慣れるまでに点を取られないようにしていたってことね。

ホイッスルが鳴り、後半が始まった。

始めから凄まじい攻防が繰り広げられ、互いに一步も譲らない。そんな中、私にボールが回ってきた。

「ビビッドステップ!!」

「この俺をかわした!?!」

巨漢のディフェンスを必殺技で抜き去った。目の前にはゴールにそびえ立つデザームのみ。ボールを宙に上げ、重なった月をそのままオーバーヘッドで地面に叩きつける。

「ムーンフォースラビットG5!!」

月は光り輝く流星群へと変化し、地面を何度も跳躍してやがて一つの強力なシュートとなった。

「ドリルスマッシュャー!!」



ドリルがそのシュートの行く手を阻む。数秒の拮抗、しかしやがてドリルがシュートの威力を押し殺し、ボールは弾かれてしまった。

「なっ!」

「ハハハ! いいぞ、この感覚! 最高だ!」

自慢じゃないけれど私のムーンフォースラビットは1度たりとも止められたことがなかった。それをデザームは止めてしまった。その事に私は動揺を隠せない。

彼は叫ぶように笑うとボールを手に掲げた。彼だけではなく、いつの間にかイプシロンの選手達にも自然と笑みが移っていた。

ボールはデザームからファドラ、そしてマキユアへとパスが出された。

「次は僕が行く!」

ただどそれをアフロくんがカットした。そのままフェイトのワンツースでディフェンスをかわし、天高く飛び上がる。

「真ゴツドノウズ・インパクト!!」

「ドリルスマッシュャー!!」

強烈な雷を纏ったアフロくんのシュート。だけどこれもドリルスマッシュャーを破るには至らず、ボールはあっけなくデザームの手元へと落ちていく。

「この程度では物足りないぞ! もっと激しく、もっと強く叩き込んでこい!」

一度地面に落としたボールをデザームが弧を描くように蹴り出した。それは前線のフオワードまで一気に到達し、ボールを受け取った三人は岩石を発生させ纏わせる。

『ガイアブレイク!!』

岩を砕くようにシユートを放ち、エネルギーを帯びたシユートがゴールに迫る。

「正義の鉄拳!!」

前半はあのシユートに守君は失点を許してしまった。だけどそれは正義の鉄拳の発動が間に合わなかったからだ。発動さえ出来れば、正義の鉄拳が負けることはない。

「おれにボールを寄越せ！」

「おう！」

前線に飛び出た吹雪君に守君からのパスが通った。立ちほだかるディフェンスをそのスピードで抜き去り、デザームと1対1の状況を作り出す。

「さあ来い！」

「今度こそ吹き飛ばしてやる！」

再び吹雪が舞い起こった。吹雪を利用して回転力を加えたシユートを、吹雪君がゴールに叩き込む。

「エターナルブリザード!!」

「ドリルスマッシュャー!!」

だけどこれもデザームには通用せず、弾かれたボールは宙を舞った。今度はイプシロンのカウンターだ。ファドラがボールを持って攻め上がってくる。

「ハアアア！ フレイムダンス!!」

だけどこれは一之瀬君の必殺技によって阻まれる。ボールは一之瀬君から風丸君へ渡りる。

「疾風ダツシュ!!」

風のごとし速さでデیفエンスを抜き去り、風丸君はフェイにパスを出した。ボールを受け取ったフェイは身体に力を込めると、全身にオーラを纏った。

「ミキシトランス……テイラノ!!」

古代の恐竜の力を加えたフェイは強引なドリブルで最終ラインを突破、そのままシュート体勢に入った。

「古代の牙!!」

テイラノサウルスの咆哮と同時に強烈なシュートが放たれた。このシュートは私達が撃てるシュート技の中で最強と言っても過言ではない。これならもしかしてデザームのデیفエンスも……

「ドリルスマツシャーV2!!」

「進化した!!?」

「ただど私達の期待は打ち砕かれ、進化したデザームの技によってフェイのシユートは弾かれてしまった。」

「フハハハハ！ いいぞいいぞ！ この血が滾るような感覚！ ギリギリの戦いでこそ、私の魂は熱く燃えたぎるのだ！」

「なんて奴……!?!」

まさかミキシマックスのシユートまでもが止められてしまうとは。本格的にやばくなってきた。あれ以上に強力なシユートを撃てる人は今の雷門にいないし、かといって新しい必殺技を試している時間もない。

そこからは一進一退の攻防が続いた。総合的な実力では雷門はイプシロンを上回ってはいたけど、デザームの鉄壁の守りを打ち崩すことが出来ずに試合は膠着状態にもつれこんだ。

「ガニメデプロトン……ハアアア!!」

「正義の鉄拳!!」

イプシロンの強烈なシユートを守君はことごとく跳ね返す。

「皇帝ペンギン……!!」

『2号!!』

「ドリルスマツシャーV2!!」

「ただどこちらのシュートもデザームには通用しない。両チームのキーパーの守りをオフェンス陣は崩せない。」

「どうする？ もう残り時間は少ないよ」

「わかっている……だがあのデザームから点を取るのは至難の業だ……」

「フェイの言葉に鬼道君ですらお手上げといった様子だった。それもそうだが、今問題なのは単純なシュート力不足。戦術面でどう頑張ったところで変わらないのだから。」

「……!! あれなら……」

「そこで私は一つのアイデアを思いついた。出来るかどうかはわからないし、失敗するの可能性の方が高いだろう。だけど、やるしかない。」

「ねエフェイ！ 私にも化身って出せるかな……!?!」

「……化身?!」

「アルファやシウウ君が使っていた力、化身。あれならデザームからもゴールを奪えるかもしれない。」

「……出来ないことはないかもしれないけど……可能性は低いと思う。化身は元々君達の時代よりも未来の技術だ。それを使いこなすには相当な訓練が必要になる。付け焼き刃で出来る程簡単な力じゃないんだよ」

「……そう上手くはいかないってことだね」

フエイの返答に私は落胆する。だけど悩んでいる時間はない。どちらにしても今のままじゃ点は取れない。だったらやるだけやってみるだけだ。

『さあファドラのスローインで試合再開！ おっと！ 土門いきなりのパスカットだ！』

土門君がスローインをカットしてボールは鬼道君へ。彼はボールを地面に打ち付け、いくつもの分身を作り出す。

「イリユージョンボール改!!」

複数のボールで敵を惑わせ、抜き去った。そしてボールは私に回ってくる。

「やってみせる！ サッカーを守るためにも！ ハアアアア!!」

「……!? あれは……!?」

その時、身体中から力が湧き上がってくるのを感じた。全身にエネルギーを巡らせ続けているため少しでも気を抜けば倒れてしまいそうだ。だけど諦めない、その一心で湧き上がる力を一気に解放する。

「宵月の巫女フィン!!」

限界を超えた力を無理やり引き出した反動か、視界から色が奪われていく。だけど今はそんなことに気にして居る場合じゃない。感覚を研ぎ澄ませ！ 目の前のボールに全ての神経を集中しろ！

「だアアアアア!!」

渾身の力を込めてボールを蹴り込む。だけど私はその瞬間、視界がぐにやりと曲がる感覚を覚えて地面に膝をついた。失敗だ、化身を発動することは出来てもそれを維持する実力がまだ私にはなかった。

それでもシュートはかなりの威力でゴールに突き進んでいく。そこらのキーパーなら容易に吹き飛ばすであろうそのシュートを見て、デザームは笑った。

「フハハハハ！　なんだそれは!!　面白い、受けて立とう！　ドリルスマツシャーV2!!」

私のシュートとデザームのドリルが衝突する。私の放ったシュートはかなりの威力だ。だけどボールに全力を込めることが出来ず、結局ムーンフォースラビットとさほど変わらない程度の力となってしまった。それではデザームを突破することなど出来ない。

ボールはドリルに弾かれて、デザームの手の上に収まった。

「大丈夫、羽花!!」

「平気、だけどまだ私には早かったみたい」

「化身を出せただけでもすごいよ！　後はその力をコントロール出来るようにするだけ

さー！」

フエイはそう言つて励ましてくれるけど化身も通用しないんじゃないやもう打つ手が……。私が考えている間にデザームのパントキックでボールは前線のゼルへ。そしてゼルからメトロンに渡つた。

「行かせるかよ！ ボルケイノカット!!」

土門君が足を振るうと文字通り地面から火が吹きメトロンを弾いた。ボールはそのままラインを割つて外へ。イプシロンのスローインから試合再開だ。

「うおおお！ これは!!?」

その時だ、ベンチからワンダバの叫び声が響いてきた。彼は何やらミキシマックス・ガンを見て興奮している。身体がピンクに染まるという謎の機能が発動していることからしても明らかだ。

「そうかあの時！ よし、羽花！ ミキシマックスだ！」

「え!? 私!? ていうか誰と!」

「迷っている時間はない！ 行くぞ！」

ワンダバが誰もいないところに向かつて引き金を引くと、そこに突如として人影が現れた。あれは……。シユウ君!? どうしてシユウ君が? そんな疑問を抱く暇もなく、ワンダバは私に向かつてもう一つの引き金を引いてきた。

「ぐ……はああああ……!!!」



「ミキシマックスコンプリート!!」

ものすごい力が流れてくるのを感じて、私は思わず叫んだ。そしてミキシマックスで起こった煙が晴れると、視界の先に驚愕するみんなの姿が入ってきた。

「すごい……力がみなぎってくる」

「なんだ……何が起きた!?!」

私は姿が変わっているはずだけど、鏡なんてないから確認のしようがない。ただ一つだけ言えるのは、私はシユウ君の力を得てとんでもなくパワーアップしているということだ。

「シユウ君……力を借りるよ!」

イプシロンのスローインで試合が再開された。メトロンが投げたボールがマキユアに到達するよりも速く、私はその軌道上に身を投げ出した。

「……速い!?!」

スローインをカットし、私は一直線にゴールへ進んでいく。自分でびっくりする程の速度にイプシロンのディフェンス陣は全く反応出来ていなかった。あつという間にゴール前へたどり着き、私は全身に力を込める。

「暗黒神……ダークエクソダス!!」

シユウ君の化身、ダークエクソダスを発動しゴールを狙い定める。今度はシユウ君の

力を得ているからかコントロール出来ていた。

「魔王の斧!!」

暗黒のオーラを纏うボールをかかと落として蹴り落とす。ダークエクソダスが追撃と言わんばかりに斧を振り下ろし、凄まじいパワーが込められたボールはデザームを強襲するように突き進んでいく。

「ドリルスマッシュV3!!」

デザームが更に進化したドリルを生み出し、このシユートに対抗しようとする。けどドミキシマックスと化身の同時使用を相手にするには力不足だったようだ。数秒拮抗した後、ドリルは粉々に砕け散りシユートはゴールに突き刺さった。

## 菜花黄名子

闇に包まれたシュートがゴールに突き刺さり、その数秒後に試合終了を告げる長いホイッスルがフィールドに鳴り響いた。

得点板に目をやれば、2-1で私達雷門の勝利。私は数秒間放心状態だったけれど、段々と実感が湧いてきて両手をあげて喜ぼうとした。

「すげえぜ羽花!!」

「うわああ?!」

だけどその直前にいつの間にか走ってきた守君に後ろから抱きつかれてそのまま前に転倒してしまった。私の上に覆い被さる守君を払い除けて、私は声を荒らげる。

「重いつてば!! もう、嬉しいのはわかるけどいちいち抱きついてこないでよね!!」

「ごめんごめん。でも凄かったぜ、さっきのシュート!! 俺の所までビリビリ気迫が伝わってきた!!」

「……私だけの力じゃないよ。シユウ君が力を貸してくれたから」

今だに力がみなぎってくるのを実感して、私は自分の手のひらを見つめた。勝てたの

は間違いなくシユウ君のおかげだ。私だけではデザームの守りを破ることは出来なかった。確かに嬉しいことではあるけど、悔しさも少しだけ胸に残っている。

「フフフフフ……ハハハハハ!!」

「!!?」

私達が勝利の喜びを囁み締めている中、突然デザームが叫ぶように笑い出した。皆が困惑の表情を浮かべていると、彼は私と守君の方に指差し、そして宣言してきた。

「素晴らしい!!」ここまで楽しめるとは正直思っていなかったぞ!! 天川羽花!! 次に合間見えた時は貴様のシユート、必ず止めてみせる!! その時には我らの真の力を見せてやろう!!」

それだけ一方的にまくし立てると、デザームを中心にイプシロンのメンバーを現れた時と同じように黒い光が包み、消えてしまった。

「なんか……デザームって守君に似てるね」

「ええ!? 俺はあんなに身長高くないぞ……」

「見た目の話じゃなくってさ、なんというか……雰囲気だ」

デザームの様子を見てみると、思わずそんなことを口にした。彼らのしていることは許せないけど、少なくともデザームはさっきの試合でサッカーを楽しんでいた。そこに宇宙人と地球人はないのかもしれない。シユウ君達と分かり合えたように、いつかエイ

リア学園……それにエルドラドとも……

そんなことを考えていると、吹雪くんが私の前に歩いてきた。

「……次は負けねえからな」

「……え？」

シユートを撃つ時と同じように鋭い眼光を向けてくる彼に、私は戸惑って間抜けな声を出してしまった。

「ううん、なんでもないよ。さっきの君のシユート、凄かったね」

「あ、うん……ありがとう」

と思ったら彼の雰囲気はいつもの穏やかなものに戻り、私にそんな言葉をかけるとベ  
ンチに戻っていった。……なんだったんだらう？ 試合中に雰囲気が変わるのは白恋  
との練習試合やさっきの試合でもわかっていたけど、試合の外でもあんな感じになるん  
だ。

「どうしたんだ？ 吹雪……」

「……さあ？」

私と守君はお互いに顔を見合わせて、首を傾げるしかなかった。



「着いたぞ、稲妻町だ！」

古株さんの声で皆が一斉にTMキャラバンから顔を出した。眼下には見慣れた街の風景が広がっていて、帰ってきたんだと実感させてくれる。

「なんだか……久しぶりに帰ってきた気がするっス」

「無理もないさ、この短期間であれだけ濃い体験をしたんだからね」

壁山君の言葉に一之瀬君が同意した。声には出さなかったけど、皆同じ気持ちだろう。

イプシロンを倒した私達は、一度稲妻町へと戻ることになった。デザームの発言から考えてイプシロンがまた現れるのは確かだし、口ぶりからしてまだ本気を出していないかったようだ。負け惜しみとも思えない、次試合する時も必ず勝てるようにレベルアップしないと。

キャラバンは雷門中ではなく、河川敷に着陸した。まだ雷門中は瓦礫だらけだろうし、となれば練習するなら河川敷のグラウンドが一番だと思う。

「ん？ あれは……」

キャラバンから降りると、守君が河川敷のグラウンドに目をやった。そこには3人の男女がいて、どうやらサッカーをしているようだった。

「あの2人、雷門のジャージを着てないか？」

「……あ、本当だ！」

風丸君の言う通り、その男女のうち2人は見慣れた雷門中のジャージを着ていた。その中の灰色の髪をした少年が、ボールと共に飛び上がった。

「ダークトルネード!!」

あのシュート、ファイアトルネードに似てる……!? それもかなりの威力だ。回転を加えて放たれたシュートは黒い炎を纏い、ゴールへと迫っていく。するとその前に、雷門のジャージを着た女の子が立ちはだかった。

「もちもち黄粉餅!!」

「……へ？」

なんとその女の子はどこからか巨大な黄粉餅を出現させて、シュートを止めてしまった。可愛らしい見た目ののに、あのシュートを止めるなんて、かなりの強さの技みたいだ。

「すっげえ!! おおい杉森!!」

「……!! おお、円堂!!」

守君がグラウンドの外で攻防を眺めていた長身の少年の方に声をかけた。杉森、という名前には聞き覚えがある。確か私が雷門に転校する前にフットボールフロンティア

の地区予選で戦った御影専農のキャプテンだったはずだ。

「帰ってきてたのか!？」

「ああ、今から雷門中に戻るところなんだ!! ……その2人は?」

「こいつは闇野カゲト、皆シャドウって呼んでる……そして」

「ちいっす!! うち、菜花黄名子!! よろしくお願いするやんね!! 円堂キャプテン!!」

杉森君が灰色の髪の少年、闇野君ことシャドウを紹介して茶髪の女の子を紹介しようとした瞬間、それを遮るように少女は菜花黄名子と名乗った。ず……随分元気な子だなあ……うん? 円堂キャプテン?

「キャプテンってどういうことだ? それに雷門のジャージを……」

「2人とも雷門の転校生だそうだ」

『転校生!?!』

杉森君の言葉に一同から驚きの声が上がった。話を聞くところによると、2人ともエイリア学園が最初に雷門に現れた日に転校してきたらしい。だけど私達はその直後に旅立ってしまったので、すれ違いになってしまったそうだ。そこで声をかけたのが杉森君、彼は対エイリア学園のバックアップチームなるものを設立していて、そこにシャドウ君と菜花さんをスカウトしたらしい。



それを聞いた守君は涙ながらに歓喜していた。確かにサッカーを好きな仲間が集まって私達をサポートしてくれていたなんて、そんなに嬉しい話はないよね。

「俺のシュートはまだ未完成だ、エイリア学園には通用しない。完成したその時、チームに加えてもらいたい」

「その代わり、うちがチームに入るやんね!!　うちこう見えて結構器用だから、どのポジションでも役に立てると思うやんね!!」

「シャドウ……菜花……ありがとう!!　いいですよね、監督!!」

「ええ、菜花さんの守備力はさつき見せてもらったし、エイリア学園相手でも不足はないわ」

シャドウ君はまだ実力を磨きたいということで残り、菜花さんがチームに加わった。監督が二つ返事で許可したことからも彼女の實力はかなり高い。エイリア学園との戦いでも活躍してくれるはずだ。

「よろしくね、菜花さん」

「そんな固くならなくても、黄名子でいいやんね。うちも羽花つて呼ぶから」

「うん……それじゃあよろしく、黄名子ちゃん」

随分フレンドリーな子だな……まあ私初対面の人だとちよつと緊張しちゃうから向こうから来てくれるのは嬉しいけど。

見れば黄名子ちゃんは既に私の前からいなくなっていて雷門の皆に挨拶をしていた。私もあれくらいのコミュカが欲しいな、なんてくだらないことを考えているとフェイトとワンダバの話が耳に入ってきた。

「菜花黄名子……またタイムパラドックスが起こってる……」

「うゝむ……エルドドラドが仕掛けた罠という可能性もありえるな」

「どういうこと？」

「菜花黄名子なんて人物は本来この時代には存在しないんだ。少なくとも、僕達がこの時代に来る前に調べた限りでは……」

「アルノ博士に調べてもらおう必要があるらうそうだ」

どうやら黄名子ちゃんは本来この時代にはいない人物らしい。誰かに意図的に送られたのか、エルドドラドの歴史改変の影響なのかはわからないけど、今はアルノ博士の連絡待ちだそうだ。

私達の中に不穏な空気が流れ始めたその時、河川敷グラウンドの中心に青白い光が発光した。

「これは……まさか……!!」

鬼道君がとある可能性を考えて、まさかと口にする。多分皆も同じことを考えてたのだろう、身構えて警戒していた。いい加減に覚えたよ、これはエイリア学園の……!!

「私はエイリア学園マスターランクチーム、ダイヤモンドダストのガゼル」  
「マスターランクチーム!？」

現れたのは銀色の髪をした男。彼は髪を掻き分ける仕草をすると冷徹な視線をこちらに向け、淡々と話しかけてくる。

「雷門イレブン、君達はイプシロンを倒した。その実力を讃え、我々ダイヤモンドダストがお前達の相手をしてやろう。日時は1週間後、我々は京都の漫遊寺中学を破壊する。阻止したくば私達を倒すことだ」

ガゼルと名乗った男は一方的に要件を告げると再び光の中へと消えていった。時間になればほんの1分にも満たない出来事だ。だけど私達は動揺を隠しきれず、言葉を失っていた。

「マスターランク……イプシロンよりも上のチームがいたのか」  
「イプシロンを倒せば終わりじゃなかったツスカ……」

周囲から驚きと落胆の声が聞こえてくる。まあそれも当然だよな、こうなってくるとあのダイヤモンドダストってチームを倒したとしても更に上のチームが出てきても不思議じゃない。この戦いは一体いつになったら終わるんだろう？

「どうした皆！ おれ達はあのイプシロンにだって勝てたじゃないか！ ダイヤモンドダストにだって絶対勝てるさ！ そのためにも特訓だ！」

「守君……!!」

「ああ、やってやるぜ!!」

「ただどいつもものように守君が皆を鼓舞し、チームに活気が戻ってきた。こういう時、守君は本当に頼もしいんだよね。」

「各自準備を整えたら漫遊寺中に向かうわ。2時間後に雷門中に集合よ」

『はい!!』

そして各々が準備を整えてキャラバンに乗り込んだ。私は守君と一緒に家に帰り、軽い身支度と温子さんに挨拶だけして後は河川敷で特訓をしていた。本当は雷門中のグラウンドを使ったかったんだけど、まだ瓦礫の撤去が済んでいないみたいだからしょうがない。

「だから!! ここは雷門だ!! お前もうちのチームに入ったんなら少しは合わせろ!!」

「そう言われても……僕ずっとああやってたし。それにそういう汗臭いのは苦手だなあ……」

「誰が臭いって!! 誰が!!」

後ろの席で吹雪君と染岡君が口論していた。出発前に彼らも特訓をしていたらしいんだけど、吹雪君のプレースタイルが染岡君は気に食わないらしい。吹雪君を主体として周りがサポートする白恋とチームプレーの雷門だと反りが合わないのも当然なのか

もしれない。

「はあ……少しは静かにして欲しいわ」

「あはは……まあ元気なのはいいことだし……多分」

私の隣に座っている夏美ちゃんがため息混じりに文句を言った。黄名子ちゃんの加入で改めて席の組み合わせをクジ引きで決めただけ……どうやら失敗だったみたいだ。

「まあまあ、染岡も吹雪も落ち着くやんね。喧嘩するほど仲がいいっていうし、仲良しの証拠やんね！」

「へ、こんな奴と仲良くするなんて死んでも御免だ」

「僕は別に仲良くしてもいいけどなあ」

黄名子ちゃん凄いな……あの剣幕の染岡君の間に入れるのは守君か鬼道君だけだと思ってた。それでも一応は収まったみたいだから良かった。これから一緒にチームでプレーするのは不安しかないけど。

「ねえ、羽花。今から行く漫遊寺って学校はやっぱりサッカー強いのか？」

「うーん、私も噂程度でしか知らないけど……一部では帝国に匹敵するって言われてるらしいよ。公式戦を殆どしないからあくまで噂らしいけど」

「漫遊寺のことなら俺も知っている。帝国を優勝校とするならば、漫遊寺が裏の優勝校

と言う者もいるくらいだ」

「へえ、すごく強いチームなんだね」

前の席から身を乗り出して聞いてきたフェイの問いに、私とフェイの隣に座っている鬼道君が答えた。漫遊寺のことを調べたことはあるけど、公式戦をやらないから正直よく分からないんだよね。強いってことは確かだけど、鬼道君も本当のところはわからないらしい。

「さあ、出発するわよ。全員座りなさい」

と、そんな話をしている間に全員が揃ったらしくTMキャラバンが空へと飛び立った。私達は新たな敵との戦いに若干緊張しながらも、漫遊寺中へと向かうのだった。